
地に戻りし守護神

柚季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地に戻りし守護神

【Nコード】

N5069S

【作者名】

柚季

【あらすじ】

再びカイトはThe Worldに降り立った。
自分が知っていた世界と異なることに戸惑いを覚えながら、カイトはグリーマ・レーヴ大聖堂へ向かう。

その先の新たな出会いにも気付かずに…。

誤字脱字があったら言って下さい。あと、柚季は無印彙編です。

帰還

赤い服を身に纏い、薄緑の髪と目を持った双剣士。The Worldの人々は彼のことをこう呼んだ。

“蒼炎の守護神”と…！。

――

サーバー。水の都マク・アヌ。初心者向けのタウンには、初心者PCから熟練PCまで様々な人が溢れ返っている。

そんな中、一際赤い色彩を放った少年が魔法陣へ手を付けていた。

「『隠されし 禁断の 聖域』へ」

少年がいなくなった広場に、六人のパーティーがやって来る。少年を追いかけるように彼らも広場から消えた。

真っ赤な服を来た薄緑の髪の少年―カイトは、音のない世界で大聖堂の扉を開いた。

古びて、あちこちが綻びた大聖堂の中をまっすぐに歩き、今はない崇めるべき女神像の存在を祭壇の上に思い描き膝を付く。

祈るように目をつむっていたカイトはふと顔を上げて立ち上がる。

照れ臭そうに笑いながら大聖堂を見渡して言う。

「…ただいま」

カイトがそう言うと、大聖堂に光が差し込んだような気がした。

「ただいま、アウラ」

彼女が自分の帰還を喜んでくれるなら、それ以上嬉しいことはない。The World。このゲームにカイトが求めていることの中でも、アウラと呼ばれる女神の喜びは最たるものだ。

彼女が安全であること。

彼女が幸せであること。

それはかつて、“波”と戦ってからカイトが望んだことだ。彼女を守れなかったからこんどこそは。

彼女が苦しそうだったから次こそは。

ああ……。だが、それはなんと傲慢な望みなのだろう。カイトは自身の心に眉を寄せた。

この世界とアウラを守りたい。本心からくる願いはカイトの強さの源だ。しかし、同時にわがままな感情だった。

なぜならカイトはきつと許せない。もしもアウラがカイトを拒否したならば。もしもアウラを守るのがカイト以外ならば。カイトはその事実を許せない。彼女がそれを望んだだと、理解して、笑っていることはできると思う。

だが、納得はできない。ゲームを嫌煙してしまうかもしれない。

傷付くのは、恐い。

「……君を守るのは僕だけじゃない。仲間の力も必要だ。でも、君に必要とされるのは……」

その先を言うのは止めた。僕だけだよね？なんて、傲慢で自身を過剰評価しているだけだ。

カイトは自らを戒める。

確かに本を受け取ったのも腕輪を持ったのも自分だ。しかし、それはヤスヒコーオルカを犠牲したもので、誇るべきものでもなんでもない。

クビアを倒したのも自分だ。だがそれはブラックローズの協力あってこそ。そもそも自分が腕輪を持たなければクビアなんて生まれなかった。

それでは“八相”は？“波”は？確かに倒したのは自分かもしれない。だがそれは同時にミアを殺してしまったことも意味する。最後の“波”だってエルクが庇ってくれなきゃ死んでいた。しかも、ど

うしようもなかったとは言え飛び出して来たアウラを自分は切ってしまったのに。

全てが自分のせいなのに、身勝手に仲間を巻き込んで、傷付けて、こんな自分が英雄と呼ばれる資格も、アウラを守る資格もあるものか。

カイトの自嘲を込めた笑いがその場に響く。こんな最低な奴は戻って来るべきではなかったと理性が叫ぶ。それでもこの世界や仲間やアウラを守りたいと思うのは本心だろうと欲求が喚く。

「それでも僕は、君を守るよ」

君が僕を必要としなくなるその日まで。

「おいおい、こいつ独り言してるよ（笑）」

「え、ダンジョンここだけ？」

「いかにもな初心者向け……f^| ^;」

驚いて振り向いた先には六人のPC。あまり人がこない場所なので警戒を持って見詰めれば彼らは唐突にカイトにこう言った。

「なんか言い残すことある？」

「……はい？」

なにを言っているんだこのPC。まるで遺言を聞いているようではないか。カイトはそこまで考えてすぐに理解した。

「……PK？」

「そつのとーりー！」

PK、つまりプレイヤーキラーは一般PCを殺す行為をするPCのことだ。なんでも殺人をリアルとする勇気がないからゲームでするバカ。らしい。相棒のブラックローズが言っていたことを記憶から引っ張り出してカイトは首を傾げた。

だって意味がわからない。なにが楽しくてそんなことをするんだ。珍獣を見る気分で目の前のパーティーを見詰めた。

「……えっと、なんでこんなことを？」

もつと深刻そうに尋ねれば、場の緊迫感も上がっただろうに、カイトの顔はなんとも間抜けだ。

「はぁ？楽しいからにきまってんだろ」

「せいぜいもがいて逃げて足掻いて楽しませろよ！」

カイトは困ってしまった。なんだかこの世界を、引いては一般PCを守るうとしたカイトが、PKとは言えPCと戦えば、これは本末転倒と言うやつではないだろうか？

もちろん、あるとき“波”と戦ったカイトにとっては未帰還者こそが本命で、一般PCはその付属に過ぎなかったけれど。

ここで彼らを倒したら、仲間は何んと言うだろう。仕方ないと受け入れてくれるだろうか？

「みんな優しいからなあ」

命を狙う敵が目の前にいると言うのにのんびりとした声で呟くカイトに六人は苛立ったように怒鳴った。

「良いから言い残すことなんか言え！」

「……じゃあ、一言だけ」

困ったようにカイトは首を傾げた。

「……ごめんね？」

その言葉に彼らが疑問をぶつける前にカイトは使い慣れた双剣を抜いて言った。

「ウルカヌス・ファ！」

ごめんね。とカイトは微笑むばかりだ。それでもカイトは攻撃の手を休めない。

先頭にいた斧を持つ重剣士の懷に飛び込み切り付ける。

「夢幻双武！」

初期から使えて、ずっと使い続けた技だった。もつと強い技もあるのになんとなく残っていた技。

「なにしてんだよ！」

後ろから剣士が切り掛かって来る。重剣士を踏み台にして前方へ跳んで避ければ鎌を持ったPCが待ち構えていた。

嵌められた。と思った瞬間には切られていて、右腕に激痛が走る。すぐに入り口に跳んで逃げ、回復をする前にアイテムを取り出した。快速のタリスマン。これが切れる前に戦いを終わらせてみせる。

負けるわけにはいかない。なにがあっても、ここで負けてはいけないのだ。そう思った瞬間に、カイトは目の前のPCに苛立ちを覚えた。

何故よりによってここなのだろう。『隠されし 禁断の 聖域』の大聖堂。

こんなに神聖な場所で、こんなに醜い戦いをして、恥ずかしくないのか。

「オリップス」

HPを確認して素早く魔法を使う。そしてカイトは敵に突っ込んで行った。無謀な行動に見えるだろう。悪あがきだと彼らが笑う。

カイトを初期PCだと油断する彼らに負ける気はない。相手のレベルを確認すれば、一番レベルが高いPCはカイトよりもハレベル高かった。ならば一番に狙うべきなのはレベルが高い剣士の彼だ。おそらくはリーダーだろう。先程戦ってカイトは確信していた。

すなわち、彼はバルムンクよりも弱い、と。

背中から攻撃して避けられたとき、バルムンクならば追撃の手を緩めない。仲間と挟撃して確実にしとめるはずだ。

いたぶるのが好きだからわざとかもしれないが、冗談めかしに戦っているのならば付け入る隙は充分にある。

「やあ……っ！」

敵に呪文使いがいないのは幸いだ。中距離の斧や鎌に気を付ければ、攻撃して来る敵は近くににいるのだから。

再び返って来たThe Worldにカイトは不安がいつぱいだった。

増えた職業。知らないギルド。連絡の着かない仲間達。そんな中、変わらないものを見て安心したかった。そして安心した矢先に、P

Kとか言う理解しがたい敵が襲い掛かって来た。

ここは懐かしい大聖堂。アウラが見ているかもしれない。その二つが揃っていれば、カイトはどんな逆境に陥っても落ち着いていられる。

「…君で最後だ」

ほら、大丈夫だ。と微笑みながら、カイトは双剣を持った右手を最後の一人に向けた。

「化け物！チートかよ！」

「そんなんじゃない。ただ、君達は油断していたから…」

「ああ…。わかったぞ！お前、トライエッジだろ！？」

頼むから専門用語を使わないでくれ。カイトは切実にそう願った。そうやって願うから、ブラックローズにいつまでも『初心者』と言われる由縁なのかもしれない。

「…いつ……！」

痛みに反射的に身を引かせる。見れば、先程まで双剣を持っていたはずの敵が鎌を持っている。

カイトは目を見開いた。新しいThe Worldに少しも慣れていないカイトは、職業もろくに確認せずログインした。

だから目の前で武器を変更する敵を見て混乱する。

気後れしてしまったカイトに敵は攻撃を休めない。避けるばかりのカイトと、武器を持ち替えながらぶつかって来る敵。

そんな攻防戦が続くとき、突然に『それ』は起こった。

グリーマ・レーヴ大聖堂に、光が満ち溢れたのだ。

再誕

溢れる光に誘われるように二人は振り向いた。

輝いているのは祭壇の上。二人の視線がそこに釘付けになる。

『……………カイト……………』

呼びかけにカイトは息を呑んだ。

「……………アウラ……………」

ふらふらと祭壇に近寄れば、光からなにかが飛び出して来る。それは恐ろしい速さでカイトの横を通り過ぎ、呆然としているPCに飛び掛かった。

「うわああ!!」

「…な、なにを……………!?!」

一撃で相手を沈めたそれは、カイトに背中を向けている。

真っ赤な背中。見慣れない、でもよく知っている背中。カイトは動くことも出来ずに眩く。

「……………僕?」

赤い服。薄緑の髪。両手には双剣。振り向いたその顔にも、カイトと同じ三角形の模様が両頬に描かれていた。

つぎはぎだらけの双剣士のことを問いただすために再び祭壇に目を向ければ、そこには白い少女の姿。カイトは双剣士のことも忘れて祭壇に駆け寄って少女を見上げる。

「アウラ!」

「…カイト。本を持つ人」

「……………え……………」

カイトの傍までやって来たアウラはカイトの右手を掴んだ。

「…ごめんなさい。NPCを造って……」

「あ、そっか、アウラが造ったんだ。…………アウラ」

呼びかけに視線を合わせるアウラに、カイトは頭を下げた。

「ごめん！…あれから全然会いに来れなくて…」

「……カイト。また、私を守って、くれますか？」

アウラの問いにカイトはにっこりと微笑んだ。

「もちろんだよ。この世界と君を、僕は全力で守る」

ならば、とアウラは再びカイトの右手を掴んだ。

「なに、アウラ？」

「本を持つ人、カイト。あなたにもう一度、腕輪を授けます」

「アウラ！？」

カイトの服に描かれている模様が輝く。この模様も、鮮烈な赤も、腕輪を手にしたときに得たものだ。だからこそ、本当に腕輪が渡されることをカイトは悟った。

「…だめだ！クビアが…！また…、また生まれてしまう…！！」

『……お願い、カイト……』

「アウラ…！！」

空気に溶けた女神と同時に大聖堂の光は消えた。呆然と祭壇を見詰め続け、虚無感を抱きながらカイトのNPCの存在を思い出して振り返る。

「…な、なにを！？」

カイトのNPCから放たれる青い光はカイトが慣れ親しんだものだった。

（…デ、データドレイン！？）

六人のPCの内五人、カイトのNPCが薙ぎ倒したPC以外は完全に死んではいない。ゲームオーバーの状態まで相手を追い詰めてはPK行為と同じだと思ったからだ。

ゲーム常識に疎く、異常事態には素晴らしい対処を行えるくせに常

に初心者街道まっしぐらな彼はもちろん、PKK、すなわちPKキラなるものを知らない。

「ちょ、ちよつと、待ったあ！」

なんてことをするんだ、とカイトはNPCを押さえ付ける。きょとり、とカイトのNPCが瞬きをした。

「な、なんてことをしようとしてるんだ！一般PCにデータトレインだなんて…。というかデータドレインできるんだ!？」

「…じゃ* #な」

「文字化けしててよくわからないけど、邪魔するなって言いたいんでしょ？邪魔するよ！」

君がいつたいなにをしたいか、いつも僕には全然わからないよアラ！と混乱した頭で叫ぶ。

NPCは地に伏した五人と死んでしまつて半透明の姿をとっている一人のPCを指差しながら言った。

「§&…」

「なに言ってるかわからないよ」

カイトは珍しく顔をしかめた。

「君は誰？アウラとの関係は？アウラ行っちゃったけど良いの？」

質問をぶつけるカイトに戸惑ったのかNPCは首を傾げるばかりだ。それを見てカイトも落ち着きを取り戻そうと大きく息を吸った。

落ち着け。目の前にいるカイトだつて混乱しているかもしれないだろ。とカイトは自身に言い聞かせ、NPCに笑いかけた。

「ごめん、混乱してて…。とりあえず、外に出よう」

カイトのNPCは訝しげな表情を見せながらも頷いた。さつさと外に出ようと背を向けたカイトのNPCを引き止めるようにカイトが声を上げた。

「…あ！」

いつたいなんだと振り向けば、カイトは困つたように笑っていた。

「……この人達、どうしようか……？」

「……バ」

「……今バカって言ったでしょ……」

口を尖らせるカイトにNPCは肩を竦めるだけだった。

「……うーん。別に死んではいけないし……。あ、リグゼイムでもかけて行けば良いんだ！」

名案とばかりに手を打つカイトはとても親切な少年だった。

「あ、そうだな君……、呼び難いな。君、名前は？」

「&ト」

「あ、そう言えば、トライエツジって呼ばれたんだけど、まさか君のこと？」

正確に言えば違うのだが、否定するのも面倒だったのかNPCは至極適当に頷いた。それを見てカイトが嬉しそうにはにかむ。

「なら、トラって呼んで良い？」

「&%@しろ」

「うん。それでトラ、君リプタイン使える？」

僕使えないんだ。と言うカイトにトラと名付けられたNPCは首を横に振る。

「な¥\$？」

「三人にシュビレイかけちゃったからさ」

回復してやる必要がそもそもあるのか。トラはまずそこを疑問に思った。

一人回復すれば後は大丈夫だと気付いたカイトは自分の間抜けさに苦笑した。

「リグゼイム」

それを見届けて、トラは今度こそ背を向けて大聖堂の外に出た。

「待ってよ、トラ！」

慌ててトラを追いかけたカイトは、しかし入り口で足を止めて祭壇を振り返った。

「……君は僕が守るから」

静寂の中の誓い。アウラに届いているかもわからないけれど、この言葉で女神が安心するならばカイトは何度でも言おう。

「僕が君を守るから」と。

「……とは言ったものの」

水の都マク・アヌに戻って来たカイトは路地裏で水の流れを見詰めながらため息を吐いた。

隣にはトラ。カイトの隣に行儀良く座っている。

「…ブラックローズとミストラルは忙しいから今日は無理って返信来たし。ヤスヒコは今日バイトだし。バルムンクは…」
メールを開いて再びため息を吐いた。

『from バルムンク

Re: 今日The Worldに久々に行きます。

久しぶりだな、カイト。今までどうしていた？俺はCC社でイベントの企画をしている。せっかく戻って来たのだから、ぜひ参加してくれ。

今日はどうするんだ？お前のことだ。まずは一人で散策でもしたいのだから、誘えとは言わない。

だが、俺はいつでも大丈夫だ。なにかあったら連絡してくれて構わない。会える日を楽しみにしている』

カイトはThe Worldをプレイするにあたって、かつての仲間にもそのことを伝えるために一斉メールをしていた。これはその返信だ。いたって普通の、気軽に誘っても問題なさそうなメール。では、何故カイトはバルムンクを呼ばないのか。

「…イベントの企画って忙しいし…。優しいバルムンクらしいメールだけど、バルムンクって努力とか人に見せないから」
ぶつぶつと呟くカイトにトラは視線をやる。

「@う #？」

「僕一人じゃどうしようもないし…。こういうときに頼りになるワイズマンなんて、メールの返信がないもんなあ…」

返信が返ってこない仲間は多い。もっと酷いのはアドレスが変わってしまった仲間だ。

アドレスが変わってしまった仲間は結構いて、そのうち誰一人としてアドレス変更のメールをカイトにしてくれなかったのが地味に痛い。

「……あ」

カイトは立ち上がった。気付いたのだ。こういう緊急自体に慣れていて、メールの返信がなろうとある特定の場所にいるPCを。

「行こう、トラ！」

「… #？」

「どこにだって？そんなの決まってるよ！」

カイトはトラの手を取って走り出した。

「ネットスラムさ！」

闇の女王ヘルバ。それがカイトが思い出した人物だ。

再誕（後書き）

トライエッジを出して私はなにをするつもりなのか…。
自分でもよくわかってなかったりするよ！どうしようかな！？

復活

ネットスラム。一般PC達が行き来するサーバーを表とするならば、ここはThe Worldの裏の顔だ。

ゴミ溜めのような場所をカイトは慣れた様子で歩いて行く。

「×き？」

「ん？なにしに來たか？えつとね、まあ、待っていよう」

少しも答えになっていない。トラは座り込んでしまったカイトに歩み寄る。

「い*% る +、わか#§」

「言っていることがわかるのが不思議？…んー。まあ、慣れてるし」

「…¶#？」

「…ずいぶん前アウラがね、よくメールをくれたんだ。でもスケイスにデータトレインされたせいなのか、モルガナのせいなのか、メールは全部文字化けしてて…。解読に必死になった時期があったんだよ」

トラは首を傾げる。自分が造られた時点でアウラは全てを管理していた。自分が生まれる前のことはよくわからない。

「だから、アウラが文字化けしてないメールをくれたときは、嬉しかったなあ」

本当に嬉しそうにカイトは笑う。

「…れし%の？」

「…え、そりゃあ嬉しいよ。だって」

「文字化けがなくなったってことは、ぼうやにメールをするとき障害がなくなったことを示すものだったから。そして彼女の安全はThe Worldの安全と同義。そうでしょう？」

突然割り込んで來た女性の声にトラは咄嗟に剣を抜いたが、それをカイトが手で制したために動きを止めた。カイトが真後ろに立っている存在を振り向く。

「久しぶり、ヘルバ。相変わらず後ろを取るのが上手だね」

「久しぶりねぼうや。会えて嬉しいわ」

「…メールの返信くれなかったくせに……」

「あら、わざとじゃないのよ」

「どういうこと?と目で問えば、ヘルバはいつもながらの笑みを絶やさずに口を開いた。

「ぼうやに返信できるかわからなくて」

「なにそれ。できるに決まっているじゃないか」

「変だとは思ったはずよ。仲間から一切のメールが来ないこと」

「……それは、僕がThe Worldを離れたから……」

「それでも、一切の連絡が来ないことが不思議だったでしょう?」

「……まあ。オルカには連絡来て僕には来ないとかあったし……」

あの時のことを思い出すとまだ胸が痛い。

「ぼうやにはメールが届かないようにされていたのよ。ぼうや宛のメールはまったく無関係のプレイヤーに届いていた。アウラがそうさせた」

まさか、と目を見開けば、ヘルバはトラに視線を移した。

「…NPCね。三葬騎士の一人、蒼炎のカイト」

「トラを知っているの?」

「というかヘルバの言葉の意味がまったく理解できず、カイトはきょとんと瞬きをした。

「……ぼうや。あなた本当になにも知らないのね」

「ご、ごめんなさい……」

「…良いわ。かい摘まんで話してあげる。ぼうやがいなかった間、The Worldでなにが起こったか」

その言葉を待っていた!とばかりにカイトは目を輝かせた。

「クビアが現れてしまったのよ」

過程をすっ飛ばしていきなり結論に行ったような説明にトラは思わず脱力してしまった。

「クビアが!?!」

「…そう。でもそれは腕輪が現れたからじゃない。クビアは対の存在。ぼうや、覚えているかしら？過去に腕輪と同じ能力を秘めた存在を」

「…まさか、“波”？」

「正確」

「…“八相”が生きていたってこと？」

「あら、不思議じゃないわ。エルクのためにミアを探したじゃない」
ヘルバの言葉にカイトは苦笑した。そういえば、昔はそんなこともした。

「…ダンジョンの敵が強すぎて酷い目にあつたことは覚えてる……」

「とにかく、一般PCが“波”の力を使えるようになった。エルクがその筆頭よ」

「エルク、まさかマハを？」

「ええ。エルクは“誘惑の恋人”とともにある。そして、“波”を宿した八人のPCの対にクビアが生まれた」

「…なんか、よくわからないことがいっぱいあるんだけど」

なにが疑問なのかわからないよ。とカイトは疲れたように息を吐いた。

「これだけは覚えておきなさい、ぼうや。“八相”を秘めた能力は“憑神”と呼ばれている。そして、“憑神”を持った八人は能力ともに健在よ。腕輪と反応しないとも限らないわ。気を付けなさい」
「わかった。それとトラのことなんだけど…」

「彼がどうしたの？」

すまなさそうに目を伏せたカイトはトラを見ながら言う。

「…僕、今春休みに入ったし、休みの間はできるだけThe Worldにいるつもりだけど、やっぱりずっといるわけにはいかないじゃない？」

「そうね」

「僕がいない間、トラが心配で…。ヘルバ、トラを匿ってくれない？」

「彼がこのネットスラムで構わないと言うなら、いつでも入れるようにしておくけど？」

カイトは少し悩んだ。一時期ログアウトできないために路上で寝ていた経験があるカイト自身ならば別に良い。慣れているし、ゲームだからと割り切れる。

しかし、この場合の当事者はトラであり、勝手に決めるわけにはいかないだろう。

「…べ　¥　わ&#

「…え、構わないって、でもトラ…」

トラはNPCで、この世界が現在のようなものだろう。それなのにこんなゴミ溜めのような場所にいて本当に良いのだろうか。

「&

「…わかった。すぐに休める場所作るからね！僕、多分CC社にも顔きくし！だから、それまでここで我慢してね！」

ヘルバは微笑した。データに休む必要なんてあつてないようなものだろう。それなのにカイトはまるで生きているかのようにNPCを扱う。

ずいぶんThe Worldを離れていたが、性格は少しも変わっていないらしい。

ヘルバはそれを見て安心する。これならば、かつての仲間もすぐに帰って来るだろう。

「ぼうや、私からのプレゼントよ」

「え、なに？」

「アドレスを変更した仲間のメンバーアドレス」

「ありがとう、ヘルバ！！」

すぐに貰ったアドレス宛にメール作成をする。

「一斉メールにして仲間を全員呼び出さない。いちいち説明するのも面倒でしょう」

「うん、わかってる。えーと、レイチエルとぴろしとなつめと三太郎さんと、あ、月長石もアドレス変えたんだ。エルクとガルデニア

と兎丸とワイズマンと司に昴。楚良にも送るね。バルムンクは忙しそうだからなしか？後ブラックローズとミストラルとオルカもダメで…。あ、マローーを入れ忘れてるや。それに寺島さん、と。…こんなものかな？」

計十四人にメールを送る。メールがカイトに届くことと、今からネットスラムで集合する誘いを書いてメールを送れば、返事はすぐに返って来た。

「わわ…！あ、なつめとレイチエルと兎丸と…、とにかくみんな今すぐ来てくれるって！」

言うが早いかネットスラムの到るところで金色の輪が現れる。PCが来たのだ。

「久しぶりやな！」

一番に来たのはレイチエルだった。それを引き金にやって来たPCが次々と口を開く。

「カイトさん！」

「久しぶりだね、なつめ」

「よお、くたばったのかと思ってたぜ」

「酷いよ、マローー」

「……………」

「月長石も久しぶり」

「今度アイテム探しに付き合え」

「もちろんだよ、ガルデニア」

「息災だったか、カイト？」

「うん。三十郎さんも元気そうだね」

「…あれ？今日はまだブラックローズとか来てないのか？」

「忙しいから今日は無理だって言われたんだ、兎丸」

「久しぶりだな友よ！元気そうだなによりだ！」

「…え、まさか、ぴろし！？」

「その通り！以前使っていたPCは顔に傷がついてしまったのだ！ああ！我輩の美しい顔に傷がつくとはまさに悲劇！しかし今はぴろ

し3として…」

「邪魔」

「あ、司！昂！」

「お久しぶりです、カイト」

「うん。…あ、楚良は一緒に来なかったの？」

「知らない。僕、昂と来たし」

「…楚良さんは、おそらくゲーム自体を止めてしまわれたのだと…」

「……そっか。残念だな」

「お久しぶりですわ」

「久しぶり寺島さん」

「ちょ、カイトー！この子誰やー！？」

レイチエルがトラを指差して叫ぶ。

「あ、その子トラって言うんだ！」

「…ぬわぁんと！トライエッジではないかぁ！？」

「うるせーよ！！」

騒ぐひろしをマローが蹴り飛ばした。それを見てみんなと一緒に笑いながらカイトは周りを見渡して受信ボックスを確認した。

（……エルクとワイズマンからの返信、来ないな…）

その事実に一抹の寂しさを覚えて、それでもカイトは今感じる幸福に微笑んだ。

何故だか無性に泣きたくなった。

ヘルバは仲間に囲まれるカイトを見て意味深に笑う。

「……これからなにがあるかはわからないけど、とりあえず」

中心にいるのは鮮烈な赤。ヘルバはカイトから視線を外して空を見上げる。

「hackers、復活ね」

珍しく感情を表に出したヘルバは、酷く嬉しそうだった……！。

再会（前書き）

書いてて気付いたけど、柚季のヤロウ、カオスゲートのことばかりばり魔法陣って書いてますね。遅いですねすみません。無意識でしたすみません。

いつそのことこのまま貫き通そうと思います。苦情が来たら直します。物ぐさですみません、ごめんなさい。石投げないで！

再会

「こ、の、バカァー!!」

「ごめん、ごめん、ごめんなさい!」

ネットスラムで仲間との再会を果たして数日。カイトはトラと一緒にレベル上げに勤しんでいた。

腕輪を手にしたためだろうか、レベルはPKと戦った日から変わっていないが、パラメータが異常だ。攻撃力や防御力やらが全て最高レベルに到達していた。

しかし、このままではバランスも悪いし、レベルだけ見れば高いわけでもないのだからまたPKに襲われる可能性もある。

ウイルスバグが繁殖しているわけでもないのに、カイトは至って平和にゲームを楽しみつつレベル上げをしているわけだ。
では冒頭部分はいったいなんなのか。

今日もトラとレベル上げをした後に、仲間からの依頼をしようと思っていたカイトは、トラとともに、さあ行こう。と魔法陣まで行くとして、そして魔法陣の前に立っている四人の人影を遠目に確認した。

その四人は目立つ姿をしていて、あまりに見覚えのある人影だった。一人は二股に別れた長い帽子を被っている。

もう一人は遠目からでもはっきりとわかる緑色。

もう一人は純白の翼を背負っている。

残りの一人は黒い肌の露出が激しく、大剣を背負っていた。

「あれ? ブラックローズとバルムンクとオルカとミストラルだ」
言いながらカイトは魔法陣に歩み寄る。そして四人に声をかけた。
「久しぶり! みんな今日はどうしたの?」

カイトを見てなにも言わない四人に、カイトはにこにこ嬉しそう

だ。

久しぶりに仲間に会えた喜びが先立った。

不意にブラックローズが剣を抜く。え、と思った矢先、凄まじい音を立てて石で出来た地面に剣が突き刺さった。

「……ブ、ブラック、ローズ……？」

「こ、の、バカー……！」

唐突に怒鳴られた言葉にカイトはなににも理解しないまま反射的に謝った。

そして、冒頭に到る。

「な、なに！？僕なにかした！？」

「なにかしたあ？あんたねえ！！」

「……え、あ、え？」

肩に手を置かれて振り向けばにつこりと笑っているバルムンク。かつて彼がこんなに笑ったことがあっただろうか、とカイトは思った。

「……カイト……」

「……な、なになかな？」

そう尋ねれば、バルムンクは笑みを引つ込め、秀麗な顔を僅かにしかめた。

「……カイト、俺は……」

「……う、うん」

「なにかあれば連絡しろと言っただろう！？」

「……え、だって忙しそうだったじゃないか！」

「連絡して大丈夫だと書いただろう！？せめてネットスラムに集合することくらい教えてくれても良いだろう！！」

「だいたいあんた、異常事態に会って私に連絡しないってどういうこと！？」

「忙しいからその日はパスだって言っただのブラックローズだろ！」

「ときと場合によるっつーの……！」

「……ヘルバから聞いたぞ。PKに会っただと」

「だから最近はPKも多いから気を付けろって言ったのに!!」二人から詰め寄られてカイトは呆れた顔でその様子を眺めているオルカとミストラルに助けを求めた。

「見てないで助けてよー」

しかし二人は素っ気ない返事を返す。

「今回はお前が悪い。絞られて来い」

「弁解の余地なし」(――)「

「うわぁぁん、トラー!!」

ついにトラの後ろに隠れたカイトは、いつそ代わりに怒られてくれないだろうかと、はた迷惑なことを考えた。しかしすぐに喧騒が止んだことに気が付き、恐る恐る顔を出す。

「…これが、カイトのNPCか」

「ヘルバはトラとか言ってたわよね?」

「アウラが造ったんだろ」

「もはや愛だね(――;)」

「なんの話し!?!」

四人が口々にする言葉に飛び出してしまったカイトをトラはなんとも言えない表情で見る。

「…あ* xられ か、」

「愛で造られたかトラが疑問に持ったじゃないか!」

「あれ、カイト文字化けしてんのにわかるのか?」

オルカの言葉にカイトは嬉しそうに胸を張った。

「伊達にリーダーやってないからね(笑)」

「ただの苦労性じゃん」

冷めた目でブラックローズが呟く。その言葉にカイトは少しばかり落ち込んだようだった。

「カイトとトラくんは今からどこ行くのー??」

ミストラルの言葉にトラが体を震わせる。総毛立ったような彼は抗議するように口を開いた。

「ラ#ん %ぶ#！」

「ミストラル、トラがくん付けで呼ばれるの嫌だつて」

「ええ〜ガ（。；）ン、わかったあ…」

「トラに僕のレベル上げを手伝って貰っているんだ。だから今日も適度なところでレベル上げるつもり」

カイトは無自覚だが、実際トラが手伝うことはあまりない。ろくに魔法が使えないトラに対してカイトは攻撃魔法を使いまくるからだ。その上本来の人格のためか回復や補助魔法も使える装備にしているため、カイトは臨機応変に戦い方を変えられる。まさに『万能』なカイトをチートと呼ぶことは、あながち間違いでもないだろう。

「みんなも行く？剣士や呪文使いがいると僕らも安心だしさ」

その言葉に四人はきょとんと瞬きをした。次いで笑い出す。

「え、なに？」

「…カイト、お前職業の確認をしてないだろう？」

「う…。なんでわかったの？」

「あのなあカイト、剣士つてのは古いんだよ。剣士の職業は斬刀士に改名されたんだ」

「そうなの！？」

「ちなみに私は呪癒士」

「名前変わってないの双剣士くらいじゃない？」

思い出したようにカイトは手を合わせた。

「それならさ、武器を何種類も変えられる職業ってなにかな？」

バルムンクとオルカが顔を見合わせて、同時に声を出した。

「錬装士じゃないか？」

「…なにそれ？」

「……おい、初心者」

ブラックローズの言葉に言い返したかったが、そんなことをすれば倍で返ってくるのが常なのでカイトは黙っておいた。

「自由に武器を変えられる職業でな、装備できる武器の幅はゲームを進めることで広がって行くんだ」

「最大三つの武器が装備可能だ。四ポイント与えられて、双剣なら一ポイント、鎌ならば三ポイントと、与えられたポイントを越えなければ組み合わせはPCの自由だ」

「面白そうな職業だね」

もうちよつとよく考えれば良かったな。と呟くカイトにブラックロ―ズが肩を竦める。

「良いのよ、あんたはそれで」

「そうかな？」

「でもでもー、カイトは双剣止めて錬装士すると思ってたー」
ミストラルの言葉にカイトは戸惑う。

「なんで？これは僕の大切なPCだ」

「そうだけだお…。錬装士も双剣使えるし、前は双剣士は魔法中心だったけど、今回は斬刀士とあんまり変わらないよ？」

「え…？でも僕、ウルカヌスとか使ってるよ？」

場が不思議な沈黙で包まれた。

しかし、初期PCだからと言って別に特別扱いされるわけでもなく、使える技や魔法は限られてしまった、はずだ。

「……アウラね」

いち早く立ち直ったブラックローズは呟く。

「…あ、あー。そうだな」

「なるほど、アウラか」

「……愛、だねえ」

「ちよつと、わけわかんないこと全部アウラのせいにするの止めてくれる!？」

仲間の言葉にカイトが顔をしかめる。それを軽く流しながらブラックローズが大剣を背負い直した。

「ほら、さっさと行くよ」

「……え」

「そーだな。久々簡単ところで頼むぜ」

「あ、私マンドラゴラ欲しい」

「平原か。『萌えさかる 孤高の 野原』はどうだ？」

魔法陣にゆつたりとした足どりで近づく四人をカイトは引き止めた。

「……付き合ってくれるの？」

間抜けな顔をさらしているカイトに四人は異口同音に言い放つ。

「当然！」

四人の様子を見て、カイトは初めて、自分がThe Worldに帰ってこれたことを実感した。

『夕暮竜を求むるもの永久に返らず』

黄昏の碑文の一節に、そんな言葉があった。同じように、もう戻らないのだとカイトは思っていたし、帰ってくるべきではなかったと、自らを戒めもした。

しかし、この一瞬があまりにも愛おしい。

カイトはトラと四人のもとに歩き出す。

間違っているかもしれない。だけどそれを気付かせてくれる仲間がいるから。

罪を犯しているかもしれない。でも守りたいと言う想いに偽りはないと信じてくれる仲間がいるから。

だからカイトは真っ直ぐに先頭を歩こう。大切な仲間が安心して歩けるように。大好きな仲間を阻むものを少しでも減らせるように。外敵から仲間を守る壁になろう。

この命さえ惜しくはない。そう思わせてくれる信頼できる仲間の存在が、酷く誇らしかった。

観桜

それは突然の誘いだっただ。バルムンクからのメールだ。

『from バルムンク

無題

『花咲きし 幻想の 大地』に来て欲しい。他の仲間も誘ってある。トラも一緒に構わない』

「…なんだろ、このエリアワード？」

初めて見るエリアワードに首を傾げつつ、カイトはトラと顔を見合わせる。

とりあえず行ってみよう。と、お互いの目が語っていた。

呼び出されたエリアには人が溢れていて、カイトとトラは立ち止まった。

いったい何事だ。

「…トラ、どうしよう?」

「し」

「…知るかって……」

にべもない返事に苦笑すれば不意に一迅の風が吹いた。

「…あれ?」

視線に横切ったものを反射的に掴もうとすればそれはひらりと逃げて行く。

残念…、と思ったその瞬間、トラが人間の反射神経を超越した速さでそれを掴み取った。

「……………」

「…ほ¥」

くれるらしい。トラが握った手を開く。薄桃色の花びらがしわくち

やになつていた。

握ったためにこうなつたことは明白なのに、トラはしわがなかったはずの花びらを不思議そうに見ていた。

「…桜だね」

「…トラ？」

「日本の花で、春に咲くんだ」

だが何故そんなものがここにあるのか。

「カイト、こっちだ！」

声の主を人混みの中から探せば、異質な雰囲気を放っている翼を持つ斬刀士、バルムンクが駆け寄つて来た。

「遅かつたな。みんなもう来ているぞ」

「うん。…あのさバルムンク、これイベントがなにか？」

「…説明してなかったか？」

「うん」

「俺がイベント企画している話しはしただろう？」

「…もしかしてこれ？」

舞い散る桜の花びらを見てバルムンクが笑う。

「ああ。リアルではまだ桜が咲いていないところもあるだろう？—足先に花見をするイベントだ」

「すごいね。外人の人も喜ぶよ！」

「サプライズもあるから楽しみにしておけ」

聞き返す前に目的地についてしまった。中心の一等大きな桜の下に、hackersがビニールシートを敷いて騒いでいる。

所狭しと敷かれた色とりどりのシートを避けて三人はなんとか仲間のいるシートに辿り着いた。

「遅い！」

ブラックローズの鋭い叱責が飛ぶ。

「う、ごめん」

何故すぐに謝ってしまうのか、トラはカイトの低姿勢な態度に顔しかめる。

「ほらカイト！飲め飲め！！」

カイトを引き寄せた三十郎が酒を持って豪快に笑う。酔っているのか顔が赤い。

「お酒！？ネットなのに！？」

「バルムンクがわざわざ作ったらしいで。アイテムとしての使用価値はなしのくせして金がかかるんや。ちなみにバカ売れ、一瓶二百G。良い商売やな」

「でもプレイヤー本人は酔えないだろ！？なんで三十郎さんこんなになってんの！？」

レイチエルがちびちびと酒に口を付けながら再び説明してくれる。

「アホ。顔が赤くなったり、文字表示がおかしくなったらPCが酔ったんやって思うやろ。ようは気分の問題なんやから、その質問は不粋やで」

なんだか諭されたような気がした。

「カイトさん、食べ物もありますよ！」

なつめに言われてカイトはシートの上に腰を下ろす。トラが不思議なものを見るように五色おにぎりを持っていた。

「食べないの？」

「……なん？」

「おにぎり。食事は僕らに必要なけど、花見だしね」

バルムンクも面白い企画を考えるものだとかイトは感心した。

満開の桜を見上げれば、月長石が枝に腰掛けていた。手を振れば彼は降りて来る。

「月長石は食べないの？」

「問題ない」

いつものように一言であるものの、珍しくすぐに返って来た返事にカイトは瞬きをした。

「お酒は？」

「必要ない」

「そっか」

「……カイト……」

もしかしたら初めてかもしれない名前での呼びかけに、カイトは月長石の言葉の続きを待った。

「…桜は、美しい」

「うん」

「日本の宝だ」

「うん」

「…女性も、美しい」

「…うん？」

「日本の宝だ」

「…そ、そうだ、ね？」

「もはや国宝」

「…月長石？」

「ミストラルは母親の鏡」

「月長石！？実はすっかり酔ってるよね！？」

顔が隠れているからわかり難いが、彼がこんなに饒舌なのは酔っている以外考えられなかった。

傍にいたガルデニアが無表情で月長石に視線を移した。

「案ずるな、カイト。こいつは酔っている」

「それがわかってるから困ってるんだろ！」

まったく、と溜め息を吐けば肩を叩かれる。振り向けばオル力だった。

「賑やかだな」

「そうだね。オル力はお酒飲んだ？」

「いや。どうせ新入生が来たら歓迎会で嫌でも飲むんだ。今飲む必要ないだろ？」

「そっか。そうだよな。なら僕も良いや」

「だろ？」

穏やかに笑い合う。穏やかな空気に包まれて、カイトはそっと目を閉じた。

「…そういえばさ」

「なんだ？」

「よくこんな良い場所取れたよね」

何気なくオルカに笑いかければ不自然に視線を逸らされた。

「…オルカ？」

「あ、ああ、それな…」

「うん」

「レイチエルと兎丸の提案なんだぜ？」

「うん」

「…その、企画者本人がいるんだから、それを使わない手はないって言っ…」

「…まさか、エリアが公開する前に場所取りしたの！？」
その通り、と言いはしなかったが頷いた。

「さ、最低だヤスヒコ！ずるしたな卑怯者！お前がそんな奴だったと思わなかった！！」

「だから俺の提案じゃないって言ってるだろ！？」

「公平じゃないだろ！一生懸命早くから来ていた人に謝れ！」

「なんで俺なんだよ！説教なら提案者のレイチエルと兎丸が悪乗りしたバルムンクにしる！」

「バルムンクはこのイベントの企画者だろ！一番頑張った彼だけは当然の権利だ」

「頭固いぞカイト。それとあれ、良いのか？」

「頭固いつてなん…。なにが？」

オルカが指差す方向に言われるがままに目を向ける。慌てて立ち上がったカイトはすぐにその方向に向かった。

「こ、こら、トラー！そんなもの飲んじゃいけません！」

司と昴に渡された酒と食べ物を取りあえず口にしようとするトラをカイトは必死に止めている。

オルカはその様子を見て苦笑した。

「オルカ」

「お？…よー、相棒」

先程までカイトが座っていた場所にバルムンクが座った。

「楽しんでるか？」

「ああ。こういうイベントなら大歓迎だ」

「そうか。安心した」

「それよりあれ見てみるよ」

示された先にはカイト。彼がトラからお酒を取り上げているところだった。

「いつから子持ちになったのかね、カイトの奴は？」

「……トラがカイトの子か。母親は誰だ？」

「……本気にすんな」

お酒をぶん取ったカイトはわざとらしく怒った顔のまま司と昴に向き合った。

「ダメだよ！本当に酔っちゃうかもしれないんだから」

「ふふ…。すみません、カイト」

くすくすて上品に笑いながら昴は謝る。カイトが本気で怒っていないことを知っているからだろう、司もこれみよがしに肩を竦めた。

「やってみなくちゃわからないよ」

「せめて口先だけでも謝ろうよ」

「…ああ、でもちょうど良かったです。話したいことがありましたから」

昴は穏やかな表情を一変して悲しげに笑みを作る。音のない悲しみが、騒がしい周囲から彼らを切り離れた。

「…どうかしたの？」

「…カイト、まずは持っている武器の確認をして下さい。どうせ自分の装備しか確認していないのでしょうか？」

まさに凶星だった。ゲームを再開するに当たって、自分の装備品が

ゲームを止める直前と変わらないことを確認したら、武器を変える必要もないからと持っている武器の確認はしていないのだ。

そんなに自分はわかりやすいのだろうか？とカイトはいささか不安を抱きながらアイテムを開く。

「……あれ？」

一番下に『最後の裏切り』の文字があつた。装備していない双剣の中で一番強いものは『天上天下唯我独尊』のはずだ。

いや、それ以前に気になるのは、カイトがこれを手に入れられるわけがないということだ。

「……どうということ？」

珍しく硬い声のカイトにトラは首を傾げた。昂が小さく溜め息を吐く。

「やはり、知らなかったんですね」

「どうということ？だってこれは……楚良の武器だ！」

「そう。彼の武器です」

「止めるまでずっと装備してたなら、僕が持っているわけない。それに、楚良からこれを受け取った覚えもないよ」

「はい。ですが、彼は最後の最後に、貴方に自分の武器を託したのです。存在してはいけないことを悟った楚良は、それでも自分のことを残したかった」

「死んだみたいに言わないでくれる！？」

「The Worldに彼はいない。それは事実です。カイト、貴方はそれを受け入れなければいけない。彼に思いを託されたものとして」

カイトは口をつぐんだ。昂は薄く微笑む。

「ですが、安心して下さい。本当の彼は生きています。楚良というPCの存在は確かにこの世界から消えてしまいました。だけど楚良の心はカイトがいる限り生き続け、プレイヤーはこの世界を新たなPCで駆けていることでしょう」

「……わかった。『最後の裏切り』使わせてもらつよ」

昴は自分が装備している斧を取り出す。

「ですからカイト、私の覚悟も受け取って下さい」

『出逢いは神の御業』をカイトの手に押し付ける。カイトは困惑した。

「…覚悟って？」

「安心しなよ。僕らはまだ・hackersで活躍する。ここに僕ほどの魔導士がいる？」

ヘルバ。とはカイトは言わなかった。みんなが頼りになる仲間なのだから。一様に誰が強い。と言うのは嫌だったのと、そう言って機嫌を損ねるのが面倒だったからだ。

「なら、やっぱりこれは受け取れないよ」

「武器は他にもあるから大丈夫です。私の覚悟はこれしかない。受け取って下さい、カイト」

「昴がそうするなら僕も。あげるよ」

『クソみたいな世界』を押し付けられる。カイトは急に不安に包まれた。

「……あのさ」二人は真剣にカイトの言葉に耳を傾ける。

「……ありがとう。大切にするよ」

「はい」

「好きにすれば」

二人は微笑み合った。安心した様子の司と昴に、カイトは胸の痛みを無視して笑いかけた。

カイトは胸の痛みに眉を寄せた。トラを交えて花見を続けている。

（……聞けなかった）

『二人は、楚良みたいに消えないよね？』

まるで形見のように残された『最後の裏切り』。続くように渡された『出逢いは神の御業』と『クソみたいな世界』。

二人も楚良のように消えてしまうつもりなのかと聞きたくて、それ

でいて恐いから聞けなかった。
大丈夫だとカイトは必死に言い聞かせる。言い続ければ、それが本当になることだけを信じて。

「…わけわかんないイベントしてんな」

ネット上で偽物の桜見てなにが楽しいんだか、と呟きながら黒い錬装士は辺りを見渡す。溢れんばかりの人ごみの中、探すのは仲間だ。「しかし、こんだけ人がいて見つけれんのか？」

一抹の不安を抱きながら錬装士は人を掻き分けて歩きだした。

そんな彼の視界に突然飛び込んで来たのは鮮烈な赤。

有り得ない。そう言い聞かせながらも錬装士は思わずそちらに視線を向ける。

向けて、しまった。

「……っ!？」

一際目立つ真っ赤な姿。錬装士は走り出した。中心にある大きな桜の下にいる存在だけを目指して。

(……トライエッジ!?)

異様な雰囲気を纏っているからだろうか。彼が一心に目指している存在が、振り向いた。

遭遇（前書き）

長くなつてしまいました…。
読み難いかも。すみません！

遭遇

「トラさん、こちらはいかがですか？」

「……」

昴はトラのことが気にいったのか様々な食べ物差し出した。渡されるものを次々に口にして行くトラは、構われることが嫌なのか若干顔を歪めている。

それを微笑ましい気持ちで眺めるカイトは、実は隣で機嫌を降下させている人物に冷や汗をかいていた。

「……酷い。昴…、僕のこと忘れて……」

司だ。常日頃から戦うとき叫ぶ言葉は呪文ではなく「僕に構うな！」である彼は言葉とは裏腹に放置されるのを嫌う。

ただしそれは昴に関してだけだけでも。

昴に早くトラを構うのを止めて欲しいと切に願いながらカイトはふと視線を感じた。

「……どうかしたわけ？」

いつもより半音低いような気がしてならない司の声に顔を引き攣らせてカイトはすぐに首を横に振った。

「……うつん、なんでも」

ない。と続ける前にカイトは視線の主を見つけようと振り返った。不自然に途切れた言葉に司も後ろを確認してみる。しかし、いるのはPCと桜ばかりでめばしいものはなにもないように思われた。

「……ちよつと？」

司が声をかけともカイトはなにも答えない。早くも面倒になった司は彼を放置しておくことに決めた。

ここには味方が集まっている。なにかあっても対処は可能だと、司は先程より周囲を気にしながら卵焼きを頬張った。

振り向いて、カイトの視界に飛び込んで来たのは黒い影だった。他

にもPCは多くいるのに、カイトは自分と彼を阻むものを全て通り越して彼を見ていた。

影はこちらへ人を掻き分けてやって来る。振り向いた途端に絡み合った視線ははずせずに、カイトはただじつと彼がここに来るのを待っている。

否、待っているわけではない。動けなくなってしまっただけだ。知り合いでもないPCを見て、なにかを感じたカイトは、動けなくなってしまっただけだ。

なにかを感じて、と言うのも語弊がある。なにかなんて曖昧なものではない。彼を見て、カイトは自分に沸き上がる明確な感情を理解していた。

すなわちそれは『恐怖』と『懐かしさ』。

徐々に埋まって行くカイトと影の距離。カイトは無意識の内に右腕にあるであろう見えない腕輪を撫でた。

緊張が高まる。何故だかわからないが、脳裏に思い出されたのは、スケイスにデータドレインされてセバメントになったアウラだった。

「……おい、お前!!」

影がカイトの肩を掴む。それだけで、hackersがどんちゃん騒ぎを止めて静まり返った。

敵と戦っているときにこそ、こういう連携をして欲しいものだとかイトは個性派揃いの仲間に思った。

「……えっと」

「ちよつとあんた誰よ？」

カイトが言葉に迷っている内にブラックローズが黒い錬装士を睨みつけた。

しかし錬装士も押されてはいない。ブラックローズを無視してカイトに話しかけたのだ。なんと度胸がある行動なのか。

「……なんでお前がここにいるんだよ？」

「……え、えっと。誘われたから……?」

「なんであんたが弱気になってるんだっつーの!？」

「うわ、ごめん!!」

「……喋れるのか？」

錬装士が呆然と呟く。彼がなにを言っているのかいまいち理解できなかった。

「…悪い、人違いだった。俺はハセヲ。お前は？」

「僕はカイト。仲間のブラッククロスと…。みんな紹介すべきかな？」

「いらないでしょ。一辺に覚えられやしないわ」

「なあカイト」

オルカの声にカイトは振り向いた。オルカは上を指差しながら言う。
「人違いってあいつとじゃないか？」

示されるままに上を向くと、さっきまで昴と食事に勤しんでいたはずのトラの姿があった。

大きな枝にいつ登ったのかは知らないが、心底嫌そうな顔をしていることはわかった。

「どうかしたの、トラ？」

「トライエツジー!!」

ハセヲがまた怒鳴る。トラは更に上へ登ってしまった。ハセヲはそれを追いかけようとしたのか木の幹に手をかけるが、それはカイトと昴に阻まれる。

「なんだよ!？」

「……えつと」

「…あ、すみません。つい…」

困ったような顔をする昴を退けようとハセヲが彼女を軽く押した。そんな彼に絶対零度の声がかかる。

「……ちよつと君」

ハセヲは凄まじい殺気を感じてとっさにそこから飛びのいた。

彼がいた場所だけが器用に剋り取られていたことは追記すべきことだろう。

「……な、な…」

真つ青になったハセヲの前に、昴を庇うように進み出たのは言わずもがな、司だ。

この平和なイベントでなんてことを。カイトは頭を抱えた。

「……昴に酷いことしたら許さない」

酷いことされそうなのは俺だろ、とハセヲは思った。

一歩間違えばPKになりかねないと言うのに、あくまでもカイトは冷静だった。

冷静に、焦った声を出す。

「昴、たいへんだ！司が君を守るためにPKを……！」

「え！？……つ、司！私は大丈夫です！お願いします、PKなんてしないで下さい！……貴方に、傷ついて欲しくないんです」

「……昴」

なにもわかってない昴はカイトの言葉を鵜呑みにして司を必死で止める。

暴走して誰の言葉も届かない状態の司は、それでも昴の声は届くので、カイトは彼が暴走した場合は昴に任せっ切りにしていた。

慣れた、もしくは諦めた、とも言つう。

「……カイト、お前……」

「うん、オルカ？」

「お前、性格悪くなつたよな……」

「え、うそ！？」

言いながらいまだ話し合っている司と昴を迂回して、カイトは座り込んでいるハセヲに手を差し延べた。

「……」

正確に言えば、差し延べようとした。

（……え……。え！？）

混乱しているカイトを見上げてハセヲが首を傾げる。カイトは差し延べようとした手をふるふると震わせてハセヲを指差した。ただし、差したのはハセヲの頭ではなく地面についた手だ。

「……あ？」

ハセヲがカイトに指差された通りに視線を下げる。すぐに顔を上げて、二人はお互いを見ながら盛大に顔を引き攣らせた。

(……骨!? 骨なの!?)

ハセヲの手の傍に生えた、骨の手。

一瞬ハセヲが装備しているアクセサリーかとも思ったが、明らかに地面から生えている。

「……あ、俺仲間探してるんだった」

「現実逃避止めようよ!」

カイトを無視してハセヲは立ち上がる。しかし、いつの間にかハセヲの手を骨が掴んでいたらしい、彼はよろめいた。

「……こ、の、放せ!!」

力まかせに手を引けば、引っこ抜かれて現れたのは骸骨。宙に出て来た表示を見てカイトは息を呑んだ。

『ガイコツ兵 L V ・ 7 8 』

「……地味に高い……」

「……カイト!!」

ブラッククロースの声に急いで振り向くと、そこには地面から現れたであろう骸骨の大群。

「どうすんだよ、おい!?!」

マローが骸骨の攻撃を防ぐ。周囲を見ればあちこちで敵が出て来て混乱していることが確認できた。

先程まで楽しかったはずの花見がただの危険地帯に早変わりしてしまったことに顔をしかめ、カイトは魔法を放った。

「ギバククルズ!」

「はあ? あんたなににして……」

弱い魔法だと言うのに半分ものHPが減ったのを確認して、すぐに切り付けば骸骨はあっさりと死んだ。

「マロー、敵の攻撃力は高い!?!」

「ああ？…ぼちぼちな。Lv・78にしては高いが、俺は平気だぜ」

「わかった。ミストラル、補助魔法は敵に効く！？」

「ほいほーい。…シユビレイ！」

色が変わった骸骨を見てミストラルは笑った。

「バツチリ！（＾Ｏ＾）／」

それに笑い返してカイトは更に指示を飛ばす。

「レイチエル、三十郎さんと兎丸起こして！」

「うちがやるん！？」

レイチエルの抗議の声を無視してカイトは更に指示を飛ばす。

「二人か三人で一組になって。戦うよ！」

待つてましたと全員が返事をする。

「魔導士と魔癒士はわかつていると思うけど、範囲の広い魔法は使わないで！攻撃力は高いけど防御力は低いから弱い魔法でも十分効くから！桜を傷付けないようにね！」

「…データなのに…」

司は文句を言いながらも微笑していた。

「敵の駆除よりも交戦できてないPCの救助を優先して！良いね！？」

それぞれの返事を返して散って行く仲間を見届けてからカイトも襲い掛かる敵を切った。

とにかく数が多いので無傷ではいられないと覚悟するが、目の前の骸骨が一掃された。

「無事か！？」

「ハセヲくん！？」

「手伝うぜ！」

「君も襲われてるんだけどね！？」

言いながら二人は背中合わせになった。

ハセヲが大きく鎌を振るう。振った直後にできる隙をカイトが埋める。初めて会ったはずなのに二人は異常なほど息が合った。

「……うわ！」

「ハセヲくん！」

PCが紫色に染まる。毒だ。悪態を吐きながらハセヲはアイテムを取り出そうとした。

「リプタイン」

「……お？」

「大丈夫？」

「…あ、ああ。サンキュ」

「気をつけて。状態異常まであるみたい」

「わかってる。…カイト！！」

カイトの後ろには剣を振りかぶった敵。慌てて武器を変更しようとするが間に合わないだろう。この一撃で彼が死ぬわけではないことはわかってるが、自分が状態異常になったから彼に隙ができてしまったと思うと罪悪感を感じてしまう。

「…トラ！？」

凄まじいー凄まじいもなにも重量に従っただけではあるがー速さで降りて来たトラが骸骨を踏み潰した。

責めるような目で見たものはカイトを通り越した先にいるハセヲだ。

「…む＊」

言葉が通じなかったハセヲは怪訝な顔をしたが、通じてしまったカイトはハセヲから視線を逸らした。

『…無能』

何故トラがそんなことを言ったのかはわからないが、知らぬが仏とはよく言ったもので、カイトはトラの言葉をハセヲに教えることはないだろう。

「ほら、睨み合ってる暇はないよ！」

「…チッ、トライエッジ、てめえ後で覚えてろ！」

「まね」

敵は後少した。

「……お、終わった…」

終いには面倒になって捨て身で戦ったためHPが半分くらい減っていた。

「…じ、地味に、強かったじゃねーか……」

息を上げているハセヲは骸骨がはい出て来たためにすっかり耕された地面に寝転んだ。

「……#ら…」

「どうかしたの？」

「さく@、えれ …」言われてカイトは周囲を見渡した。確かに桜は倒れている。激しい戦闘のためだろう。無傷は、どうやっても無理だった。

「…バラムンクに言えば直してもらえるよ。それに無事な木の方が多いしね」

こくりと頷くトラの頭を帽子越しに撫でる。ハセヲが勢いを付けて起き上がった。

「……ずいぶん丸くなったな、トライエッジ」

「……うる §」

「…そういえば、ハセヲくんはどうしてトラを探してたの？」

「……あー……」

髪に付いた土を払いハセヲが口ごもる。

「…えーと、条件反射、みたいな…？」

「…なにそれ？」

「そいつを追いかけてた時期があったんだよ！悪いか!？」

「責めてないよー」

実はもつと詳しく聞きたいところではあったがハセヲが恐いので止めておく。

「しっかし、なんだったんだろうなさっきの敵」

「イレギュラーじゃないかな？」

「…そうなのか…？」

半信半疑と言った表情でハセヲは答える。

「カイト！」

「ハセヲ！？」

呼びかけに二人は顔を上げる。撃剣士と呪癒士がお互いの顔をまじまじと見ていた。

「ブラックローズ」

「アトリ！？」

ハセヲが立ち上がりアトリと呼んだ少女に歩み寄った。

「お疲れ、ブラックローズ」

「あっちにみんな集まってるよ。呼ぶ？」

「ん、いいや。僕が行くよ。行こう、トラ」

トラとブラックローズとともに歩き出そうとしたカイトをハセヲは慌てて引き止める。

「あ、カイト！」

「なに、ハセヲくん？」

「……なんか、微妙だな。ハセヲで良いから」

「……う、うん」

「……」

黙ってしまったハセヲの言葉をカイトはじっと待っている。

「……あ、あのさ」

「うん」

「……ありがとな」

きょとした表情をしたカイトは言葉を理解してにっこりと笑んだ。

「こちらこそ、助けてくれてありがとう」

『紳士淑女の皆様』

返事をしようとしたハセヲの声は放送によって掻き消された。聞き慣れた声にブラックローズの頬が引き攣る。

『本日もThe Worldをプレイしていただいております。』
「ざいます。本日のイベントはいかがでしたか？」

「…あれ、バルムンク？」

カイトが声を上げる。マイクを持って話しているのは見慣れた純白の斬刀士。どう見たって蒼天のバルムンクだ。

『本日のイベントの景品はCC社から贈呈させていただきます。た
お、ポイントが一番高いパーティーに贈呈させていただきますが、
ポイントの計算は桜を守れたか、と、骸骨兵を倒した数から決ま
ります』

その言葉に、ハセヲとブラックローズがぴたりと動きを止めた。
彼が言った言葉を考えると、つまりあの骸骨はイレギュラーでもバ
グでもなんでもなくて。

『勝者は、双剣士カイト率いるチーム・hackers!』

イベントでこんな危険なことをしたバルムンクに苦笑すれば、彼は
カイトを手招きする。

素直に舞台上がってバルムンクと並んだ。

「カイト達が勝つと思っていたが、まさか本当に勝つとはな」

「いや、偶然じゃないかな。…バルムンク」

「なんだ？」

「どうしてこんな危ないことを？イベントってこんなものなの？」

「…ああ、危険だとは思ったが、必要でな」

言っている意味がわからずカイトはじとりとバルムンクを睨む。一
般PCを危険に晒してなにが必要なのか。

バルムンクは悪戯っぽく笑った。

「桜の下には死体がいるんだろう？」

その言葉にぶちりと切れた音がしたのは気のせいだったのだろうか。
『ふざけんなぁー!!』

ブラックローズとハセヲが同時に怒鳴って石を投げる。バルムンク
はそれを避けながら戸惑った悲鳴を上げた。

「な、なんだ!？」

「なんつーことしたのよあんたはあ!？」

「怪我したら遊びじゃねえんだよ!!」

こうして、バルムンクが企画したイベント、『花見♪桜の下には死体がいる♪』は、幕を閉じたのである。

兄弟

トラはじつとそれを待っていた。

The Worldの裏の世界。表の世界は綺麗な分、それに比例して増えたゴミを溜めた場所、ネットスラム。

トラはそんなゴミ溜めの中で、膝を抱えてその時が来るのを待っていた。

転送を表わす金の輪が現れて、トラは身じろいだ。

早く早くとそこから人が出て来るのを身を揺すりながら待つ。きつと彼だ。そう思う。トラは無意識に期待しているのだ。

「…トラ！」

現れたのは赤い双剣士。トライエッジのオリジナルで、女神アウラを護る騎士だ。

クビアの駆除を目的に作ったトラを、わざわざ彼と同じ姿にしたのだ。女神は相当彼のが好きなのだとトラは思う。

「…ごめんね、トラ！寂しかったよね？最近寝る時間を勉強とゲームに費やしてたから寝不足で…。昼間は一日一回でも外に出ないと引きこもりになった気分になるから散歩もするし。とにかく、こんなところで一人は嫌だよね！？みんなに今度相談するから！」

『寂しかった』トラにはその感情がよくわからない。感情、と言ったものがそもそもよくわかっていないのだ。

トラは首を横に振る。カイトはそれを見て、安心するわけでもなく、もつと心配そうな顔をした。

「…我慢してない？もつとわがまま言っただけなんだよ？」
なにを心配しているのかトラはわからない。

この現状でトラは充分に満足しているのに。カイトを待っている間

だって、カイトは謝る必要などないのだ。人間には食事や睡眠が必要で、摂取しなければ人間は死んでしまうらしい。待っている間、喪失感があっても、寂しくはない。それよりも、カイトが死んでしまうことの方がずっと嫌だ。

そう、トラは寂しくはない。待つ時間が長ければ長いほどに、カイトと一緒にいられなかった時になにがあったか話してくれるからだ。だから少しも寂しくなかった。

「今日はどこへ行く？二人で散歩でもする？それとも仲間を誰か呼ぼうか？レアアイテム探しても良いよ？」

「……さ ぼ？」

知らない単語だった。カイトは慈しみに満ちた笑みを浮かべる。

「じゃあ今日は散歩してみようか。初めてみたいだし」

こくりと頷けば、カイトはトラの手を取った。

「行こう。良いエリアを知ってるんだ！」

走っているカイトの背中。自分と同じはずなのに、全然違うそれを見て、トラは首を竦めて口許を隠した。

幸せなとき、それを隠したくて緩む頬を隠すようにしている。それは自分一人が感じるひっそりとした幸福を独り占めたいがためだ。トラが待っていると、その分を埋めるようにカイトは一緒に出かけてくれる。それが楽しみだからだろうか。トラはやはり寂しいとは思えないのだ。

「ここだよ。『幸福なる 荒野の 湧き水』！」

堅い土に緑の草花。そのままカイトに手を引かれると、青々とした泉が姿を現した。

優しい風に吹かれて、カイトは穏やかに目を細める。

「あ！モウダメロン！」

岩場の影から見つけたのはぴょんぴょんと跳ねる悲観したような顔のスイカ。それを持ち上げると、カイトは「見ててね」と言って悪戯っぽく笑った。

ぼんぽんとリフティングを開始する。モウダメロンは浮かぶたびに自己主張を怠らなかった。

「う#い？」

「ほんとに？ありがとう」

サッカー好きなんだ。とカイトは言った。

「トラ、パス！」

「！？」

モウダメロンがトラの足元に転がり、止まったと思えば再び自分から跳ね出した。

「あはは！トラ、今度サッカー教えて上げる。みんなでやろうね」

次の約束が嬉しくて、トラはまた口許を隠した。

カイトは帽子取って近くの岩に置いてから、自分も違う岩に座った。ぼんぽんと自分の隣を叩く。座れということなのだろう。トラは同じように帽子を取って、カイトの帽子と並べてから座った。

「気持ち良いね」

「…… が、さ？？」

「うん、これが散歩。ゆっくり、好きなところに行って、好きなものを見るんだ」

「…@#*&のか」

「そんなものだよ」

カイトは素足になって泉に足を浸けた。おお、と感嘆の声が上がる。「足までちゃんと作られてるんだね」

パシヤと水が跳ねる。こうやって裸足になれるとは思ってもみなかったカイトは、改めてThe Worldの素晴らしさを実感した。「トラもやってみなよ。冷たくて気持ち良いよ」

言われてトラは戸惑った。そんなことをやろうと考えたことがない

からだ。

ゲームの世界でわざわざ水遊びをしようなどと奇特なことを思い付くのは彼くらいだろう。

トラは恐々と靴を脱ぐ。素足は継ぎ接ぎが多く、自分がいかに急ぎで作られたかを痛感する。

「…× た」

「うん、冷たい。でも、それを感じられるって凄いやね」

「§イト」

初めての呼びかけに、カイトは瞬きをした。トラが怪訝な顔で見詰めてくるので慌てて謝る。

「ご、ごめんね。名前で呼ばれるの初めてだから…」

そうだろうか？そう言えばそんな気がする。トラは首を傾げてから頷いた。

もしかしたら今までは、あまり名前を呼びたくなかったのかもしれない。

彼はカイト。蒼炎の騎士カイト。トラのオリジナル。

それを考えるのは、アウラに作られた自分を否定するようで嫌だった。自分は“カイト”ではない。“カイト”にはなれない。

目の前のカイトを認めたくなかったのかもしれない。自身を否定したくなかったから。

「あ、トラ！」

突然カイトは足をばたつかせるのを止めた。跳ねる水飛沫がなくなつて、トラは少し残念に思つた。

「ほら見て」

引き寄せられてともに覗いたのは水面だ。

薄緑の髪と、三角の模様が両頬にある二人が映つた水面を見てカイトは微笑む。

普段はお互いの顔しか見ないからわからないが、こうやって二人並

んで見ると違いが顕著に現れた。

やはり自分達は違う存在なのだと思うとトラは安心する。

別に“カイト”になる必要はないのだと言われている気がして。

「が#」

「そりゃあ違うよ。僕とトラは別人だもの」

その言葉がどれだけトラを安心させているか、カイトはきっと知らないのだろう。

自分達は違う。そう思うとトラは誇らしくなった。

自分は“カイト”ではないけれど、誰よりもカイトに似ている。カイトに似ているのだ。何故だかそれが酷く嬉しかった。

だけどカイトはどうなのか。トラは浮かんで来た疑問に不安になった。

『トラはカイトに似ている』。それはつまり、逆を言えば『カイトはトラに似ている』と言うことだ。

トラは再び水面に映る自分達を見る。継ぎ接ぎだらけの自分と、綺麗なカイト。

人はトラを見ると遠巻きにする。気味が悪そうにトラを見詰める。

「ねえ、僕達……」

カイトもそうなのだろうか。こんな気持ち悪い奴と同じは嫌だと思っただろうか。

そう思うとトラは突然カイトの声を聞きたくなくなった。

言葉の続きが恐ろしい。カイトに否定されるのが怖い。

顔が歪む。隠さなくては、と思ったが、嬉しくもないのに首を竦めたくはなかった。

「兄弟みたいだね」

トラが顔を上げるが、カイトは今だ水面を覗いていた。

「……き¥だ？」

「うん。なんか嬉しいな」

はにかむカイトの言葉が意外でトラは驚いた。

トラは今度こそ首を竦め、どうしようもなく緩む顔を隠す。

「ごめんね、嫌だった？」

とんでもない。とトラは思ったが、それを口にはしなかった。

喋るのはあまり好きではない。文字化けしてしまうから嫌だ。

言いたいことを理解してもらえないのは辛くて、表現できないのは悔しくて。

「あり& ㍿」

「…うん？なにが？」

でもカイトは違う。

言いたいことは全て汲み取ってくれる。

それでも少し悔しく思うのは、汲み取ってもらわなければ礼の一つも通じないからだろう。

「兄弟欲しかったんだ。ブラックローズは弟さんを助けるために戦ったんだ」

「…との@め？」

「…うん。大切な人を助けるため」

切なそうなカイトは、アウラのために戦ったのだろうか。トラは自分が生まれる前のことを想像する。

カイトはズボンで膝まで捲り上げ泉の中心まで歩いて行った。

「トラ」

呼びかけに顔を上げる。カイトがこちらを睨いた瞳で見ている。

「兄弟になるうか、トラ」言われた意味がわからずに、トラは首を傾げる。カイトは微笑むばかりで、質問を許してくれなかった。

「司と昴の覚悟はまだ意味が僕にはわからない。でも、僕は僕なりの覚悟を決めたから」

いつもならトラの意思を汲んだカイトは、トラが質問するのをじっと待ってくれるのに。

カイトは尋ねることを拒絶するように微笑んでいる。

「だから、兄弟になろう」

なにが、だからなのか。どんな覚悟なのか。トラにはわからなかった。戸惑うトラに、カイトは空気を一掃するように楽しそうに笑った。

「だから僕のこと“お兄ちゃん”って呼んで良いよ」
「@%か!!」

反射的に怒鳴り返せばカイトはわざとらしく肩を落とす。

「えー…。懂れてたのに」

酷いや、トラ。と呟くカイトをトラは無視した。兄になると言うのなら、もう少し強くなってもらわなくては。性格的な意味で。

トラが思いつにカイトは謝る数が多過ぎ。

「ど て、 まえ に ん …?」

「え、僕が兄でしょ。先に生まれたし」

カイトが笑う。先程の拒絶するような笑みはどこかへ消えていて、なんだか上手くごまかされたような気がする。

突然水をかけられた。トラが驚いていると笑い声が響いた。

「あっははは！トラびしょ濡れじゃないか！どうしたのさ？」

「おま った??!」

「避ければ良かったのに」まだ笑っているカイトを見てトラは立ち上がった。このまま負けているつもりはない。トラもズボンを捲き走り出す。

「うわ!…やったな!？」

「やり£# た ……!？」

「油断した？」

それから二人はしばらく水を掛け合っていた。まるで本当の兄弟のように。

カイトの“覚悟”の意味がトラには最後までわからなかった。
最後の最後までわからなかった。

休息（前書き）

読まなくても良い話し（笑）

あと、システムとかいろいろ妄想してしまいました。

休息

「……ホーム？」

「そつ。休む場所探してたから、ちょうど良いと思って」

「……て、なに？」

「……おい、初心者」

ブラックローズの冷やかな言葉にカイトは口を閉じた。別に言い返しても良いのだが、そんなことをすれば倍で返って来るのが常なので止めておく。

「では初心者諸君に我輩がじきじきに教えてしんぜよう!!」

「私は初心者じゃない!!」

突然割って入って来たぴろしはブラックローズの言葉を華麗に無視して語り出す。

「ホームとは、The Worldを更に現実に近付けようと作られたもので、金を払うことによって家を借りるシステムのことなのだ! PCは借りた家の内装を自由にでき、メンバーアドレスを知っているPCを招くこともできるぞ!」

「…そう高々と語るあんたはホーム持つてんの？」

ぴろしは胸を張った。

「ホームを借りるにはタウンに一定の金を納めなくてはいけない。

そして私は貧乏だ!!」

「威張るところじゃないっつーの!!」

ぴろしを弄りだしたブラックローズを尻目に今度は昴が言った。

「名案です! トラさんも、いつまでもこんな場所では辛いものですもの。そんな昴を見て司が少しばかり顔を歪めていた。どうしたんだとカイトが尋ねる前にレイチエルが声を発する。

「でもどないすん? ホームってめっちゃ高いんやろ?」

商売人らしい質問だった。ガルデニアが答えた。

「一人が多額を払うのではなく、全員で少しずつ払うのはどうだ？ 私達はある程度の稼ぎもあるしな」

「なつめ、もつとPKK頑張ります！」

二人の言葉にカイトは悩む。いくらかは知らないが、ある程度ならばカイト一人で賄えるだろう。

ゲームを再開した当初こそアイテムを買い揃えていたが、ある程度揃うとトレード以外使わなくなってしまった。

言い方は悪いが金が余って仕方ない。

「別にホームがあるからってレアアイテムが手に入り易くなるわけじゃないし、The Worldで金が有り余ってるぜえ！みたいな奴が自慢で買っようなもんだしな」

ニユーク兎丸が寄って来て話に加わる。

「よお、なんの話した？」

「マロー！」

黒い鎧を着た斬刀士がやって来た。カイトが話しのあらましを説明をすると、表情は見えないが嘆息する。

「代表でもお前の名義で買っつてことは俺達は誰でも入ることができるわけだ」

「そうなるね」

「…狭いとか思い付かないのか、お前はよ」

「…あ。そっか」

一人が寝泊まりを開始すると、おそらく芋づる式に全員が泊まり出すだろう。確かに狭い。

「えー…。みんなのこと考え出したら男女で分けるから最低でも二つは必要になるじゃん。そのへんは自重しなきゃ（・・・）」

ミストラルの言葉にマローが言い返す。

「不公平だ。男の方が数が多いだろうが。大体ゲームで男女もねえよ」

「気分の問題だよ」

睨み合うマローとミストラル。見方を変えれば恐持ての男が呪癒士を恐喝しているようだ。

「とりあえずは、みんなが休む場所じゃなくてトラが暮らす場所にしたいな」

カイトの言葉にそれぞれが頷く。どのタウンにするかを話し合っていると、翼を持った斬刀士と身体を緑に染めた斬刀士がやって来る。「遅れてすまない」

「お、全員集合か」

「バルムンク、オルカ!」

「みんな集まってどうした?オペレーション・テトラポッドでもするつもりか?」

「……相棒、それ、笑えないぞ……」

がつくりと肩を落とすオルカにバルムンクはすまないと小さく呟いた。

「ホームのことで話してんのよ」

ひろしを構い終わったブラックローズが傍に寄って来た。怪訝な顔するフィアナの末裔に話しの流れをかい摘まんで言えば、二人は顔を見合わせた。

「それなら良い場所があるぞ」

「ああ。ま、タウンが指定されるけどな」

「どういうこと?」

「以前、依頼の報酬でホームを貰ったんだ」

「こいつ持ち主のくせに全然使ってないからな」

「俺はいらないと言ったのにオルカが押し付けて来てな……」

「だって俺もいらないし」

「ホームがあるんだね!」

喜ぶカイトに二人は頷いた。「トラ!」とカイトは隅でヘルバと並んで立っているトラに駆け寄る。

嬉しそうに話しているカイトを尻目にブラックローズとマーローは渋い顔だ。マーローの顔は兜で隠れているので、あくまでも雰囲気だが。

「…ちよつとあんたら」

「どうかしたか？」

「てめえのホームじゃ入れる奴著しく減るだろうが」

「そうだな」

さも当然とバルムンクが頷く。ブラックローズが顔をしかめた。

「それこそ不公平じゃない」

「俺はむやみにメンバーアドレスを教えない。諦めろ」

「教えるってことでしょうが!!」

その話を聞きながらトラは首を横に振った。

「トラ？」

「じ&@ きめ」

「自分でって……。バルムンクのは嫌ってこと？」

「う」

バルムンクが嫌いなわけではなく、ただあまり知らないから好きじゃないだけだ。

「じゃあ、今日一日は一緒にタウンを回って決めようか？」

頷いてトラは首を竦めた。こうやってトラの意見を尊重してくれるカイトがトラは好きだ。

きつと今まで誰にも甘やかされなかった反動だろう。

バルムンクと言い合っているブラックローズとマーローを窺めカイトはトラと出かけることにした。

「どこに行く？ サーバー？ サーバー？ サーバー？ サーバー？ プチグソ育てられる方が良い？」

勢い良く飛び出る言葉に口を開閉する。

様々な選択肢からトラが選んだタウンは、カイトが知らない場所だった。

「…うわああ!!」

カイトは活気溢れる町並みに感嘆の声を上げる。町の中心には闘技場。

闘志溢れる闘争都市、ルミナ・クロス。

初めてやって来たタウンにカイトはトラを振り返った。

「凄く活気があって楽しそう!!…あ、トラ、あそこはなに？魔物と戦うの？」

「がう。＃％£う　　ㄗㄗかう」

「え？PC同士で？…それ、PKとは違うの？」

「むさべう　ㄗㄗ＃％のと、@よ*¥　　うだろ」

「無作法と競技か…。でも傷付けることには変わりないだろ？」

納得ができないとカイトは首を捻る。そもそもお人よしのカイトには似合わない場所だとトラは思った。

「**はや\$」

「止めるって、どうして？」

身を隠し易い場所だと思っ て来てみたが、思いの他騒がしい。それにカイトは楽しそうな場所だと言ったが、ここは乱暴者の集まりだ。もちろんカイトや・hackersが負けることはないだろうが、街を歩けば絡まれること間違いなさそうである。

「¥・あ」

「マク・アヌ？…プチグソ育てられないよ？」

カイトの言葉にトラが返事をする前にまったくの第三者が割って入って来た。

「…カイト？」

「え…。ハセヲ！」

「……と、トライエッジ」

嫌そうな顔をするハセヲに、嫌な顔をしたいのは自分だとトラは唸った。

「どうしたんだ？ルミナ・クロスで闘うのか？」

「ううん。ホームを探しに来たんだ」

「……ホーム？」

花見イベントが初対面で、今日が二度目ではあるが、ハセヲはカイトが無欲な青年だと思っていた。

ホームを欲しがるのは大抵自分のパーティーに自慢したいがため、ハセヲの中にあるカイトは印象とは合っていない。

「トラの休む場所が欲しいんだ」

「……ああ、なるほど」

合点が行く。ハセヲはトラを見て呆れたように溜息を吐いた。

「トライエッジならグリーンマ・レーヴ大聖堂か亜空間にでも住まわせろよ……」

その意見には不本意ながらトラも同意したい。別にこだわりもないのだからそんな扱いで良いのだ。

しかし、カイトはその言葉に少しばかり怒ったようだった。

「だめだよ！もつとちゃんと休める場所じゃなくちゃ」

「……お前、よくお人よしって言われないか？」

「……なんでわかるの？」

なんともあほらしいやり取りにハセヲはまた息を吐いた。

ここまでのお人よしは周囲にいなかったため接し方がわからないと言うのが正直なところだ。

「はや？%、イト」

「あ、そうだね。……ハセヲ、僕達もう行くよ」

「え、闘技見て行かないのか？俺出るぜ」

「ほんとに！？凄い！頑張つてねハセヲ。今日は残念だけど、また今度見に来るよ。あ、これ僕のメンバーアドレス」

「おう。連絡するからさ、今度はお前も出場しろよ」

「…うーん。それはちょっと…」

「も　　くか　　じゃ　　」

「なんだよトライエッジ」

睨み合う二人にカイトは首を傾げた。

仲が悪いのではと危ぶんではいたのだが、睨み合う二人から険悪な空気は感じない。

「いー、カイト」

「あ、うん。連絡してねハセヲ！」

「ああ」

「それと、これからもトラと仲良くしてね！」

「ああ。……………あ？」

ハセヲが聞き返そうとしたとき、二人はすでに走り去った後だった。脳裏に茶目つ気たつぷりのカイトの笑みが浮かぶ。

これはしてやられた。

「仲良く、ねえ……………」

もしかして、トライエッジとの言い合いがあまり嫌いではなく、だけど今更笑って会話なんて気恥ずかしくてできないだけだと彼は気付いたのだろうか。

きっとカイトがそんな心情を聞いた日には、「不器用だね」と言っ
て仕方なさそうに笑うのだろう。

「…と、やべっ！」

ハセヲは時間を確認して走り出す。人と約束していたのを思い出したのだ。

（エンデュランスは遅刻にうるさそうだしな）

彼の機嫌を損ねると後々面倒だ。とハセヲは仲間の斬刀士を思い出
し、苦笑する。

「…久しぶりだね、“死の恐怖” スケイス」

「な!？」

振り向いてもそこには声の主はいない。否、特定できないと言った方が正しい。

このタウンは人が多過ぎる。言葉をかけられる前に向かいにいたPを思い出そうにも、それにしたって大勢過ぎる。

「……くそっ！」

あんな言葉をかけられて、なにもできない自分が悔しかった。

辺りを見渡すハセヲを、建物の上から見下ろす影があった。

「さよなら“死の恐怖”」

諦めたのかハセヲは歩き出した。人ごみに消えて行く彼を追いかけるつもりはなく、興味も失せて影は偽りの空を見上げた。

もはや世界は女神のものとなってしまった。取り返すのは困難だろう。

おそらく彼女はかつての駒、“八相”に手を出すはずだと様子を見に来たのだが、どうやらなんの影響もないらしい。

“死の恐怖”の前に“誘惑の恋人”の様子も見て来たが、“誘惑の恋人”もPCに平然と寄り添っていた。

まだなにもされていないだろう。影はなにかを思い出すかのよう

に目を閉じた。
次の瞬間影の姿がその場から消えた。ぱちぱちとした電子音と、データーの残留である文字だけが留まったその場に、影が消える前に呟いた言葉が微かに残った。

『……………早く会いたいよ、カイト……………』

暴走

ことの発端は司だった。なにをしたのか。

街中で魔法をぶっ放したのである。

「リーダーとして聞くけど司、君はなにをしたかったのさ？」

「…僕は悪くない」

場所は名義はカイトだが、実質的にトラの所有物であるホーム。司の無然とした態度にカイトは今日ログインしてから何度目かの溜息を吐いた。

「大体なにがあったのさ？僕は状況がわからない！」

「…あの、カイト……、司は私のために……」

おずおずと喋り出した昴の話ではこうだ。

司と昴はタウンを二人で回っていた。そのときはまだ平和だった。しかし、昴を紅衣の騎士団の団長と知っていたPCが、偶然にも同じタウンにいたのがいけなかった。

そのPCはしつこく昴に迫り、メンバーアドレスを尋ねて来た。写真だけでもせめて、と言って来る相手に、とうとう我慢しきれなくなった司が魔法を使った。

「…ちょっと待とう」

「なにさ？」

「なんで、昴の写真を求めている〃敵、みたいな扱いになるのさ！」

「なるよ、どう湾曲したってなる」

「湾曲しまくったらそうなったんだろ！湾曲しなかったらなにも起こらなかっただろ！？」

むう、と膨れる司にカイトは困り果てた。おそらく手加減はしただろうからそのPCも死んではないだろう。だがしかし、司は・hacker'sの中でも一、二を争う魔導士だ。出会った当初こそLv・1だったが、それこそ最初から装備が最強だったため強い魔法が使えた。今は『クソみたいな世界』をカイトが預かっているため最強ではないだろうが代わりにLv・99だ。

どっちがましなのか全然わからない、とカイトはまた溜息を吐いた。「タウンはちよつと壊れたけど、そのPCは死んでないんだろ？謝りに……」

「知らない」

「……うん？」

「そのPCが死んでないかは知らない。さっさとそこから離れたから」

「………含みに、使った魔法は……？」

「ランセオル・ファ」

「普通に死亡フラグじゃないか！！」

手加減したと信じていたのに、と嘆くカイトに司はあくまでもケロツとしていた。

「なんで昴に迷惑かけた奴に手加減しなくちゃいけないの？」

「……そんな写真くらいで」

「写真だって危ないよ。どんなふうに悪用されるかわかったもんじやない。それに鬱陶しかったんだ」

「鬱陶しいって……」

「楚良くらい」

「………」

本人が聞いたら怒るだろう言葉を、しかしカイトは否定しなかった。ここで楚良のために言っておくがカイトは別に彼のことが嫌いでは

なかった。鬱陶しいと思ってもいないし、メールのやり取りも頻繁にしていた。語尾も個性的だし、一緒にいて楽しい。

なにより、彼が抱えていた闇を知っているから。だから少しも嫌じやなかったし、むしろ明るく振る舞える彼を尊敬した。

だけど彼の喋り方が鬱陶しいと思う人もいるだろうことはわかっていたので、沈黙を守ることにする。

「とにかく！どんな理由があろうとタウンで魔法を使うなんて間違ってる！」

「昂にかかる迷惑はどうなるのさ。我慢しろとでも言うつもり？」

「少なくとも、攻撃以外の対応はあったはずだよ」

普段温厚なカイトは誰かが傷付くと怒る。ましてや関係のない人も被害が出るような今回の事件だと。

「ない。避けて無視しても追って来たからやったんだ。僕は間違っていない」

しかしやはりお人よしはお人よしのままで、ここまで言われると「……しょうがないかな」と思ってしまう。

基本的にカイトは押されると弱い。だからこそブラックローズのような強気な女性がサブリーダーをやっているのだ。

「……わかった。仕方なかったんだね」

「うん」

「でもタウンを一部破壊したのも事実だし、復興作業はみんなで手伝う。良いね？」

さつきからリョースから苦情メールが殺到している。このままじゃ、そのPCを削除すると言いつ出すのも時間の問題だ。

ならばとカイトは復興作業の約束を取り付けた。ことはなかなか重大だ。なぜなら司はタウンで魔法を使ったとき、近くのアイテム屋まで被害を及ぼせたのだから。

「さあ、みんなに集合をかけてCC社の手伝いだ！アイテム屋さんが使えないなんて他のPCに迷惑だからね。司、リョースの嫌味くらい覚悟しておいてね」

言いながらカイトは部屋を出る。向かう場所は サーバー、遺跡都市リア・ファイルだ。

緊急収集がかかったものだから何事かと思えば、とブラックローズは頭を抱えた。

「なんなのよ、これは!？」

「いや、だって…」

「だってじゃない!この程度の被害だったらCC社がすぐに直すでしょうが!」

「あ、ううん。違うんだよ、ブラックローズ」

「なにが」

「別にプログラムの修正しろってわけじゃなくてさ、ある放浪AIの捕獲を頼まれてね」

「…どういうこと?」

「うん、瓦礫の撤去は手伝わってもらっけど、道やお店の修正はCC社がやるんだって。で、お詫びの代わりに放浪AIを捕まえろって言われたんだ」

ブラックローズは不快さに顔をしかめた。自分の手に負えないことは全部カイトに押し付けて、あいつら恥ずかしくかいわけ!?

姉気質からだろう、のほんとしているカイトを守らなければという義務感がブラックローズにはあった。もちろん、戦闘面では遠く及ばないけれど。

「だから今日の収集は、瓦礫の撤去もあるけど、連れて行く人を決めたいからってのが大きいかな」

「…カイト」

「なに?」

「…私は、連れて行きなさいよ」

疑問形ではないその言葉にカイトは安心した。大きく頷いて答える。「もちろん!…気になるのは、CC社が僕らに任せたって言うこと

「なんだけど」

「そーね。 “ 八相 ” くらい覚悟しといた方が良いかもね」
ブラックローズの冗談にカイトは小さく笑った。

「それより、精鋭部隊作るには人いないのね？」

特に気になるのはバルムンクとオルカの不在だ。いつものように遅れているだけだろうか。

カイトが苦笑した。

「ああ、それなら謝罪組だね」

「…なにそれ」

「バルムンクは管理者に関わっている人だからCC社全般。オルカ、なつめ、ガルデニアの有名人には一般の人のお見舞いと謝罪に、それぞれ行ってもらってるよ」

かく言うカイトも先程まで謝罪に行っていた。ブラックローズは口を引き攣らせる。

「…どういう選抜したわけ？」

「有名人ならすぐに許してもらえかなと思って。ほら、なつめもいつの間にか有名人だし、ガルデニアのファンクラブは健在だし、オルカは今も昔も人気高いでしょ？」

確かにその通りだが、考え方があざとい。司を謝りに行かせなかったことを考えると、世渡りのやり方を覚えたのだろう。

「…あんたも考えるようになったわね」

「それどういう意味？」

「…「@ト」」

「ん、どうしたの？」

ブラックローズが口を開く前に発せられた声にカイトは振り返った。トラだ。あまり話したことのないカイトそっくりのつぎはぎだらけな彼がブラックローズは苦手だった。

苦手と言うよりも会話を成立させることができるかが不安なのだ。外国人に話しかけられて困るのと同じ原理である。

「もしかして・hackers!？」

その言葉を全力で否定したい衝動にかられたブラックローズはそれでもなんとか声がした方を振り向いた。

ああ、どこの世界に瓦礫の撤去に勤しむ英雄がいるだろうか。

振り向いた先にいたのは短髪でオッドアイの女性PC。重槍士だ。

「うわあ、本物？サブリーダーのブラックローズ？感激だなあ!!」

「…あ、あの」

「あ、ごめんなさい。つい…」

はつの悪そうな顔をして女性は声を抑えた。しかし、すぐにカイトを見付けて目を光らせる。

「カイト!? “蒼炎のカイト” 本人!？」

カイトはブラックローズと視線を絡ませた。誰？と声を出さずに尋ねれば、ブラックローズは首を横に振って答えた。

「“黄昏事件”の当事者に会える日が来るなんて!」

“黄昏事件”ってなんだろう。カイトは首を軽く傾げた。それが伝わったのかブラックローズが苛立ったような顔をしてカイトに囁く。

「あれ!“波”と戦ったやつよ、他にないでしょ!？」

「…ああ!あれそんな名前付けられたんだ!」

どこまでもマイペースなカイトに一体後どれだけの心労がかけられるのか想像して、ブラックローズは顔を引き攣らせた。

「懂れなんだよ、黄昏の騎士団って」

「あ、ありがとうございます…」

不意にカイトの頭に浮かんだのは放浪AIのことだ。いつだって被害を受けている一般PCの方が状況を理解している。

「あの、最近NPCとかの噂とか、バグの被害とかありませんか？」

「…バグ被害?…そうだなあ」

「なんでも良いんです。入れないエリアワードがあるとか」

「…あ、それなら。最近入れないエリアが多発してるらしいよ」

エリアワードは知らないけど、と言う女性にカイトは笑顔になった。

喜ぶことではないが、対処方を考えられるのはやはり嬉しい。

「後、NPCってバグだって聞いたな」

「……え」

「もしかしたら、原因はNPCなのかもね」

言いたいことだけ言っただけで青年のような口調の女性は去ってしまった。

「……カイト」

ブラックローズが躊躇いがちに声をかけて来る。それにカイトは笑ってみせた。

「大丈夫！トラはアウラから預かった大切な子だもの。チートでもバグでもないよ」

「……そうね」

カイトの笑顔に釣られたようにブラックローズも微笑んだ。

「みんな撤去作業終わった？……お疲れ様！今日は解散ー！」

その言葉にそれぞれの声で応えて彼らは散り散りになった。

「おいおい、ほんとにこれだけのために呼ばれたのか？」

三十郎が呆れまじりに尋ねて来る。

「うん、ごめんね。お詫びに今度日本刀探しに付き合うよ。いくつ

か目星付けてるし。いるでしょ？」

「…………欲しい」

「うん」

こうやって機嫌を直して行かなければ。カイトは気合いを入れるために頬を叩いた。

「カイト！」

一度ホームに戻るためカイトとトラはマク・アヌに行こうとしたところを引き止められる。ブラックローズだ。

「なに？」

「あんた……、一人で行かないでね」

そんな言葉が来ると思わなかったのだろう、カイトが目をしばたたかせた。

不安だった。一人で行ってしまうような気がしたのだ。不安を振り払いたくて思わず尋ねる。

しかしカイトはブラックローズが望んだ答えを口にしなかった。

ただ優しく曖昧に、微笑んでいた。

発覚

『従順なる 荒野の すずり虫』のエリアがおかしいと言うBBSでの書き込みを見てカイトはさっそく行ってみることにした。が、

「…えっと…」

トラは黙ってカイトの服を掴んでいた。だからカイトは困っているのだ。

いざ行こうとなったとき、カイトが選んだメンバーはブラックローズとバルムンクだ。無難で大抵のことに対処できるパーティーで、仲間は全員納得していた。

トラ以外が、と言い変えることは可能であり、いつでも一緒にいてくれたカイトが自分を連れて行ってくれないことが不満らしい。

「幼稚だねえ」

「幼稚やなあ」

兎丸とレイチエルのにべもない言葉をかけられてもトラはカイトの服を放さない。

「…あの、トラ」

「…れて@け」

「なんて？」

「連れて行けって…」

カイトの答えにミストラルが大きく溜息を吐いた。今から危険地帯の調査に行くと言うのにどうしてこんなに騒がしいのか。

「トラ、ここは素直にカイト達待つてよーね」

「……」

ミストラルが窘めるように言うがトラは答えなかった。その様子を見ていたバルムンクは難しい顔をしている。

「カイト、いつそ振り払って行かないか？」

「そっというわけにも…」

「しかし、このままでは出発できないぞ」

「そうよ。保護者ならなんとかしてよ」

遂にブラックローズまでもがそう言い出すしまつ。カイトは再びトラを見る。

振り払えない理由の大半は、カイトが“兄”になると宣言してしまったからだ。

実際の兄弟がどんなものか知らないが、“兄”としては“弟”をできるだけ甘やかしたかったし、願いを叶えてあげたかった。

「じゃあ、こうするのはどうだ？」

「オルカ」

「もう一つパーティーを組むんだ。まあ、一人でも二人でも構わないが、それで同じエリアに行く。探索も一緒にして、ダンジョンはカイト達が行って来る。これならこいつも良いだろう？」

「名案だオルカ！…じゃあ、オルカとトラとミストラルで組んで。

リーダーはオルカ、頼める？」

「任せとけ！」

「行こうか、トラ」

言いながら手を差し延べると、トラは掴んでいた手を放し、その手を握った。

「『従順なる 荒野の すすり虫』へ」

行き着いた場所にとくに異常は見られなかった。宙に文字が浮いているわけでもなく、フィールドがひび割れているわけでもなく、どこからともなくばちばちとした電子音が聞こえるわけでもない。

「…まずは敵と戦つとみよう」

「フィールドの魔法陣を全て開くのね」

ブラックローズの言葉に頷く。エリアLv・94なので、油断はで

きない。

カイトとオルカが魔法陣に向かって走り出す。それに呼応するように光る魔法陣から現れたのは宙を飛ぶカボチャの化け物だ。

「ランセオル・ルフ」

ミストラルが魔法を放つ。他の五人は敵を切り付けた。

「ブラックローズ、バルムンクに気付けソーダ！」

「またあいつランクレイにかかったわけ！？」

言ってブラックローズはバルムンクに気付けソーダを投げ付ける。

「…す、すまない」

「終わったぞお」

オルカが出て来た宝箱を開きながら言った。

「至ってふつーな敵だねえ。問題ないんじゃない？」

「いや…。まだ安心できないよ。ダンジョンの中にウィルスバグがいるかもしれない」

「そうね。今までもダンジョンの奥にすることが多かったし」

「とりあえず、フィールドにいる敵を全滅させようか」

カイトの言葉に全員頷いてそれぞれ会話をしながら歩き出す。

それに続こうとしたトラをカイトが引き止めた。

「…なん？」

「トラ、データドレインは僕がするから、トラはしないでね」

「& して？」

トラは顔をしかめた。バグ、AIDA、それらを駆除するのがトラの役目だ。それをするなどということなのか、わけがわからない。

「僕はデータドレインを使い続けると身体に異常が出る。トラがどうなるかわからないから」

「デー？ らもん まない」

「データだからこそ問題があるんだ。トラの場合はこの世界で活動することに支障が出るから」

それならばカイトの方がずっと問題のようにトラには思われた。も

し未帰還者にでもなったら彼はどうするつもりだろう。

「ただ、申し訳ないんだけど、僕の力が及ばない事態になってしまったときは力を貸して欲しい」

トラの心配をよそにカイトは言葉を続けた。五人を追いかけるべくカイトは歩き出す。

言われなくとも、もとよりそのつもりだったトラはカイトの背中に向かつて頷いた。

「残るはダンジョンのみか……」

石造りのダンジョンの前でバルムンクが呟いた。

「よし、行くよ！」

ブラックローズが大剣を背負い直した。カイトと会ったばかりの彼女ならば、きつともつと怯えて、それをひた隠しにしたことだろう。しかし今の彼女は楽しげだ。

「いってらっしゃい」

「俺達は待つてるからな」

「……ト」

「行つて来るね、トラ」

物言いたげなトラにカイトはなにか言つてやりたかったが、なにを言えばわからなかったので笑みで押し止めた。

奥に行つてしまふ三つの影を三人は見送る。

「行つちゃダメだよ、トラ」

「……？」

「行きたいって顔に書いてあるゾ／＼、ハ、ハ、ハ」

「ごめんな、俺達は止めるためにいるからさ」

そう、オルカの言う通りだ。わざわざパーティーを組んだ理由は他にもないトラが勝手な行動をしないように止めるためだ。

だからトラはカイトを追いかけることはできない。追おうとすれば

オルカとミストラルが止めようとするだろう。
トラはその場に膝を抱えて座る。そんな様子を見てオルカとミストラルは顔を見合わせて苦笑した。

暗いダンジョンの中を三人は進んで行く。また階段を下ってカイトは足を止める。

「バルムンク」

「ああ」

バルムンクが妖精のオーブを使う。マップを確認してからカイトは先頭を歩き出した。

「一番下だから、二人とも気をつけて。ステータス大丈夫？」

「問題ない」

「平気だよ！」

「…行こう！」

奥へ奥へ進んで行く。敵を倒して、宝箱を開いて。

「フアラリプス。行くよ、二人とも！」

「ああ」

「まっかせて！」

頼もしい仲間に微笑んで、カイトは一步踏み出した。

部屋に入ると同時に金色の魔法陣が開く。

予想していなかったわけではない。しかし、それを見てカイトは身体を強張らせずにはいられなかった。

「……ウィルスバグ……！」

PCだと言つのに背中にびっしりと汗をかいている気がする。コントローラーを握る手が震える。

「…どんぴしゃってわけね」

「まさか、再び戦う日が来ようとは……」

見ればブラックローズとバルムンクも顔を引き攣らせて敵を睨んでいる。

身体の所々が緑色に輝いている敵を見てカイトは息苦しさを感じた。「プロテクトを解くよ！補助は僕がする！攻撃開始！」

ブラックローズとバルムンクが左右に走り出す。二人が挟撃するとき、カイトは魔法を放つ。

「ウルカヌス・ファ！」

「こんのお！！」

「くらえ、我が正義の剣を！！」

攻撃を弾かれる。振るわれた腕にブラックローズの身体が吹き飛ばされた。

「ブラックローズ！」

「：よくも、やってくれたわね！」

「大丈夫か！？」

「平気。行くわよ！」

大剣を振り払う。今度こそ剣が突き刺さった。

「私の攻撃力なめんじゃないわよ！」

「疾風荒神剣！」

「『吊り男のタロット』！」

画面上に現れたプロテクト解除の文字を見てカイトは反射的に腕を掲げた。

「ドレインハート！」

ようやく見れた敵の姿に三人は笑い合った。

『ムーガーディアン Lv.95』

「HPが減るなら敵じゃないわ！」

「行けるぞ、カイト！」

「うん、全員攻撃に集中！」

不謹慎にも笑い合つと三人は敵を切り捨てた。

ようやく敵を倒してアイテム神像にたどり着く。宝箱を確認してからカイトは口を開いた。

「バルムンク、精霊のオカリナ使ってくれる？」

「わかった」

敵を倒したと言うのに、その喜びはすでない。三人は浮かない顔でダンジョンを出た。

再びあの悲劇が繰り返されると言う予感、確信に変わってしまったからだ。

入口で待っていたオルカとミストラルは三人の顔を見て全てを理解した。ただ一人トラだけが、みんなの表情の理由を理解できなかった。

当然だ。彼はバグを削除するために生み出された。そのトラがいるのに、バグがないわけはないか。いるのが当然だと思っているトラには彼らの気持ちは理解できないだろう。

「…会いたいよ、アウラ」

カイトの呟きに反応して、隣にいたトラが顔を上げる。次いで首を傾げた彼にカイトは優しく微笑みかけた。

発覚（後書き）

戦闘場面なんて書けないよー！！

誰か！誰か書き方を柚季に教えて下さいー！！

友人（前書き）

自分の語学力の限界が来た。

もとからない？知ってます

友人

「hackersは今まで通り、ウイルスバグの駆除に専念しよう。なにか異常があったらすぐに僕に連絡して。後、情報交換を定期的にしたいから、できるだけネットスラムに集まるようにして欲しい。みんなにもリアルがあるから、強制はしないし、抜けても構わない。未帰還者になる恐れもある。よく考えて、答えを出して」

カイトがこれを言ったのは三日前。言うだけ言ってすぐにログアウトしたカイトには大量のメールが届いた。

「バカ」やら「アホ」やら「間抜け」、「なめるな」、「バカにするのも大概にしろ」。様々な罵倒が書かれたメールには、みな一様にカイトへの協力の了承が書いてあった。

自分はなんて失礼なことを言ってしまったんだろう。自分の失言に今さら気付いてカイトは頭を抱えた。

仲間を疑ったわけではない。ただ、大切な仲間だからこそ危険から身を引いて欲しいと思ったのは確かだ。しかし、今まで散々危険に晒して来たのだから今さらと言われればそれまでだ。

そもそもずっと苦楽をともして来た仲間に対して抜けると言うことが酷だ。

襲い掛かる罵倒の言葉に言い返すこともできやしない。「バカにするのも大概にしろ」と言われたところで「おっしゃる通りで」としか言えない。

「……あれ？」

大量のメールに反省するのを終了して、BBSを確認しておくことにした。

覗いて見ればそこには頼み事からただの呟きから様々。その中でもカイトの目に留まったのは挑戦状だ。

それはカイト宛のものではない。

「……死の恐怖……？」

それはPKから“死の恐怖”に宛てられたものだ。その“死の恐怖”とやらは、どうやらPKKのことらしいが、カイトはそのPCのことを知らない。

しかし、残念ながら二つ名であろうそれに覚えがあった。

(…スケイス？……て、まさかねえ)

あはは、と一人で笑った後、カイトは大きな溜息を吐いた。まさかとは思うが、行くしかあるまい。

指定された日時を確認して、カイトはやはり溜息を吐いたのだった。

『隠されし 禁断の 聖域』に今カイトはいる。

もちろんPKが“死の恐怖”に指定した場所ではない。ここを指定したとき、カイトはそれを全力を持って阻止するだろう。そのためならば、武力行使も厭わない。

「アウラ……」

女神に会いたくてカイトは来た。たった一人で、誰にも告げずに。

早く会いたいよ、アウラ。何故また僕に腕輪を渡したの？

今度の敵は一体なに？

またこの世界が危険に晒されているの？

君は、どんな目的で動いているの？

僕は、なにをすれば良い？

様々な疑問が渦巻く。意思を汲み取れもしないなんて、自分はなん

て不甲斐ないんだろう。カイトは悔しくて顔を俯かせた。

「…あ、そうだ。今日はね、“死の恐怖”って言うPKKに会いに行くんだ」

BBBを見たときのように空笑いを響かせてすぐにカイトは笑みを引っ込めた。

「…ごめん、笑い事じゃないよね。あいつだったら大変だ」

スケイス、思えば“波”で一番痛手を負わされて、苦戦を強いられたのはあいつかもしれない。

無知だったと言うのもあるだろう。しかしそれだけではない。

あの“波”は特別だった。

たった一人でカイトは祈りを捧げる。崇めるべき女神がいなくとも、彼は祈りを捧げて誓いを立てる。

ヘルバは『“八相”は選ばれた人に憑神と言う能力として寄り添っている』と説明してくれた。

しかし、だからといって“波”が大人しくなったと言うわけではないはずだとカイトは思う。

例えば突然感じるどこか懐かしい感情。

例えば不意に気付く知っている殺気。

PCではないと確信はある。きっと憑神を持ったPCとカイトはすれ違ふなりしているのだろう。そして、そのPCではなく、そのPCの憑神がカイトに殺意を抱いているのだろう。

あまりにも早急に考え過ぎだろうか？しかし用心に越したものはない。

「アウラ」

返事はない。聞こえているのかすらわからない。だがカイトはこの

一見独り言に見える行為に満足していた。この行為を気に入っていた。

「きつとスケイスは僕のことを覚えてる。きつとスケイスは僕を殺す瞬間を待っている。…スケイスは…」

カイトは右手を見つめた。そこに腕輪は見えない。

「スケイスは、腕輪の加護を受けた僕に“死の恐怖”を見せるだろう」

それでもカイトは負けるつもりはない。負けるわけにはいかない。

「…と、そろそろ時間だ。行つて来るね」

『……カイト……』

扉に手をかけ、カイトはすぐに振り返った。そこには誰もいない。

しかし、

「……行つて来ます」

そこには僅かに気配があるようで、こうやって微かにでも繋がりを感知られることが、酷く幸福だ。

至つてなんの問題もない平原で、カイトは大勢のPCに囲まれていた。

なにを思つたのか“死の恐怖”に挑戦状をたたき付けたPK達は、“偶然にも”このエリアに来たカイトを袋だたきにすることにしたらしい。

なんとも面倒なことだ。これなら仲間を誘えば良かったかな、とカイトは考えてから首を横に振る。

本物のスケイスかもわからないと言つのに仲間の手を煩わせるわけ

にはいかない。

“死の恐怖”と呼ばれるPKKが憑神かどうかを確認に來ただけなのだから一人で大丈夫だ。

「行くぜ！」

切り掛かって来る武器を避ける。

（呪紋使い…、違った、魔導士だっけ？…が、四人と、銃持つてるよくわかんない三人と、錬装士が二人。これが面倒だな）

斬刀士とかはまずは良いからあの九人を倒さなければ。とカイトは攻撃を避けながら考える。

魔法を使う暇はない。アイテムをもっと持って来るんだったと少しばかり後悔した。

HPには余裕がある。少しくらい捨て身で戦っても構わないだろう。魔導士に向かってカイトは走り出す。受ける攻撃はとにかく無視して反撃に集中した。

「火炎独楽」

カイトが強いのか敵が弱いのか思いの外一人目はあっさりと倒れた。今回は頭数が多いから以前のように手加減はできない。

切り掛かって来た斬刀士の懐に入り込み、襟首を掴んで近くにいた魔導士に向かって投げる。

後ろにいた錬装士の攻撃を避けるために地面に両手を着き、でんぐり返しの要領でその場から逃げた。しゃがんだ状態のまま足払いをすれば、錬装士は見事に地面を倒れ込んだ。

可哀相だとは思いつつ、起き上がる前に剣を刺してHPを奪い取る。
「…このっ…！！！」

「なめんな！！」

斬刀士と撃剣士がカイトを挟んで向かって来る。避けても良かったが、それではちが開かないのでカイトは立ち上がるだけに留めた。左右から向かって来る二人がそれぞれ剣を振りかぶったその瞬間、

二人が剣を振り下ろすよりも早く二人に手を伸ばす。

腰を落とし掴んだ襟首を勢いのまま引き寄せれば、ゴッソーン！と良い音がして斬刀士と撃剣士が地面に倒れた。

鎌闘士が振り下ろした鎌を双剣で受け止める。ぎりぎりとお互いに力を込めていたが、カイトは後ろに足を滑らして力を抜く。

突然支えていた力がなくなって前によろめいた鎌闘士の腹に膝を叩き込んだ。

（……後、何人だよ？）

倒せる自信はあまりなかった。倒した奴は仲間によって回復される。堂々巡りの中、負けるつもりはないが勝つこともできないだろう。

「……おいっ！」

敵の一人がある方向を指差していた。そこには無惨な姿で倒れた魔導士や銃戦士。

そして、双剣を持った黒い錬装士。

「…………ハセヲ……？」

カイトが呆然と呟くと、ハセヲは小さく溜息を吐いた。

「……やっぱりカイトか」

トライエッジはそんな赤くねえからな。と言いながら、ハセヲは斬刀士を蹴り飛ばした。

「……な、なにす……！？」

ハセヲは斬刀士を容赦なく切り捨て、カイトよりもずっと手際よく、それこそ回復させる暇も与えずに彼らを叩きのめした。

「……BBS見なかったのかよ？」

「……え、いや」

「たく、怪我ないか？癒しの水やるよ」

「あ、ありがとう」

「バカな奴。PKに手加減なんていらないうての」

「…そんなことないと思うよ。……あの、ハセヲ」

「でも強いんだな、カイト。なあ、もうギルド入ってるか？そうじやないなら俺とPKKでも…」

「ハセヲ」

ハセヲが口をつぐむ。カイトはそつと目を伏せて、しかしすぐに視線を合わせた。

「君が“死の恐怖”…？」

「……だったら？」

ハセヲの言葉にカイトは泣きそうになった。確信してしまったのだ。

「……カイト？」

カイトはじりじりとハセヲから距離を取る。

「あのね、ハセヲ」

「…あ、ああ」

「僕は、守護者だから」

「…守護者……？」

「…君と、戦わなくちゃ」

武器を構えたカイトを見て、ハセヲはぎょつとしたようだった。

「…おいおい、なんの話だよ？」

「…スケイス」

ハセヲの後ろに紅い影が見える気がしてカイトは何度も頭を振った。

「…なん、で、知って…」

「僕を殺したいだろ、スケイス？」

返事になっていないカイトの言葉に、ハセヲが総毛立つ。どくどくと脈打つ音が聞こえる。

「…なんだ……!？」

カイトは双剣を構えたままだ。自分の身体の異変にハセヲは着いて行けなかった。

(…憑神覚醒!?!なんで!?)

紅い十字。紅い影。見覚えのあるものが、戸惑うハセヲの傍にある。

(…僕は知っていた)

ぎゅっと剣を握る。

ハセヲがスケイスだと、無意識のうちに感じてはいた。

(…知っていて、なにもしなかった)

友達になれたと思ったから。でも、ハセヲと友人になれたからと言って、スケイスと和解したわけではない。

それを表すかのごとく、ハセヲの意思に反してスケイスは戦う準備を整えた。だからカイトも、戦う準備をして待っている。

そこにハセヲをただ一人残して、戦いの火蓋は切って落とされた。

憧憬

『スケイスは僕を覚えてる。スケイスは僕を殺す瞬間を待っている。スケイスは腕輪の加護を受けた僕に、死の恐怖を見せるだろう』

それはただの殴り合いだった。技も魔法もアイテムも使わないで、ただお互いの武器を奮うだけ。

血は流れない。しかし互いのHPは確かに減っていて、互いに攻撃力が高いので戦いは野蛮だが凄まじいものだった。

真っ赤な十字が翳される。カイトは感覚的にそれがデータドレインだと気付いて、右手を同じように翳す。

ばちばちと電子音が鳴る。データドレインが反発しあった音にカイトとハセヲは思わず目をつむった。

「…な!？」

目を開いたときにカイトが平然と立っていることにハセヲは驚いたようだった。しかし、ハセヲを無視して勝手に彼の身体は動いている。だからカイトも口を開くことはできなかった。

十字架と双剣がぶつかり合って火花が散った。

敵と戦うのとはまったく違うような気がするの、きっと“倒す”ためではなく“殺す”ために戦っているからだ。

ざらざらとしたカイトの眼光を目にしたハセヲは裏切られたような表情をしていた。

おそらく彼も、カイトのことを“友人”だと思っていたのだろう。カイトと同じように。

十字架、つまりそれを持ったハセヲを弾いてカイトは距離を取った。考えていることは同じで、スケイスも距離を取ろうとしたのだらう。よろめくこともなく後ろに数歩、跳ぶように下がった。

カイトも思った。“友人”になれたと。仲良くしたかった。

トラが自主的に口を開くのはカイトとハセヲにだけだ。言葉が通じないことを理解してなおトラはハセヲになにかを告げようとする。だからなおさら仲良くしたかった。“友人”になれたつもりでいた。しかし所詮、つもりは自己満足でしかなく、カイトはいかなる理由があろうともハセヲと、正確に言えばスケイスと戦わなければいけない。

例えそれが、自分の友だろうと、仲間の友だろうと。

何故ならカイトは女神の騎士で、スケイスは女神の敵だから。

「……ごめんね、ハセヲ」

「……なんで……」

可哀相なハセヲ。なにも知らないのに僕に襲われて。戦う気なんてないのに身体を操られて。

「なんで泣きそうな顔してんだよ!？」

驚愕でカイトは動きを一瞬止めた。その一瞬が命取りだと理解していたのに。

（『泣きそう』だって?）

そんなわけない。自分と“波”との戦いは宿命で、一人倒すことに守るべき女神の安全が保障される。喜ぶべきことだ。

困惑するカイトの身体に衝撃が走る。身体が吹っ飛ばされたのだ。

「カイトッ!！」

君が吹っ飛ばしたんだよ。とカイトは苦笑した。

ちらりと自分のHPを確認すれば、赤くなっではないものの、残り少ない。早く決着を付けなければ。

たった一人でスケイスに立ち向かう愚かな自分を叱る仲間達の姿が容易に想像できてカイトは口元に笑みを浮かべた。

微笑みの意味がわからなかったのだろう、ハセヲの眉間の皺が深くなった。

カイトは走り出し、迎え撃つスケイスを飛び越えて後ろから彼を切り付けた。

よろめく身体を蹴り飛ばし、仰向けになったハセヲが起き上がる前に馬乗りになり喉元に双剣を突き付ける。

「動かないで」

「……なんだよ。なにが起こってるのか、全然わかんねえよ……！」

「……うん、ごめんね」

ここで初めてハセヲの瞳に怒りが映った。

「わかったような顔してんなよ！なんで俺に近づいた！？お前は何者だよ！？」

「……僕は……」

悲しげな瞳は笑みを作ろうとして失敗した。

「君の敵だ」

ごめんなさい、ごめんなさい。貴方を傷付けてしまった。なにも知らない貴方を殺そうとしている。

最低な男だと罵っても構わない。いっそ責めてくれた方がいい。誰の目から見ても加害者は僕だから。

「……さよなら」

左手の剣はそのままに右手を放して翳せば、蒼く輝くその腕輪の存在に気付いたハセヲの顔が歪む。

僕を怨んで良い。憎んで良い。君には権利がある。

『友達になろーよ』

「……ッ!？」

データドレインをしようとして失敗した。聞こえた声に動きを止める。

『しゅばばば!』

『楽勝だみょん』

『ばびゅ!どーん!』

『ですが安心して下さい。本当の彼は生きています』

『プレイヤーはこの世界を新たなPCで駆けていることでしょう』
昂の言葉が思い出される。かたかたと腕が震えた。

まさか。まさか、まさか!そんなわけない!幻聴だ!スケイスが聞かせたまやかに決まっている!

でも、本当に本人だったらどうするの?

「……楚良……」

小さな呟きはハセヲに聞こえただろうか。

カイトは戦わなければならない。

例えそれが、自分の友であろうと。仲間の友であろうと。

……ならば仲間は?仲間さえ、戦わなければならない?

「…………ごめん」

その言葉に、今度こそハセヲは消えることを覚悟した。しかし、そ

の衝撃はいつまで経っても来ない上に身体を押さえていた体重が消えたので、恐る恐る目を開けばカイトが立ち上がっていた。

「……お、おい！」

「…君には、僕を殺す権利がある。僕はそれだけのことをした」
去ろうとしたカイトを引き止めれば、返事こそ返さなかったものの、カイトは足を止めた。

「……どうして俺を殺さない？」

ハセヲの疑問は最もだ。彼からすれば、カイトは突然戦いを止めたようにしか見えないだろう。

当然だ。ハセヲはカイトの心を読めはしない。

「……おい！」

なにも答えずに去ろうとしたカイトをハセヲは止める。

「……友達だからだよ」その言葉の真意を尋ねる前にカイトは口グアウトしてしまった。

「……なんなんだよ」

『友達だからだよ』

何故今さらそんなことを言うんだ。俺の憑神とお前は一体どんな関係がある。

『勇者カイト』

いろんな話を聞いたが、聞き流していた自分に舌打ちしてハセヲもその場から去った。

マク・アヌのホームに行くと部屋には膝を抱えているトラと、何故か昴と司がいた。

「こんにちは、カイト」

「……なにしてたの」

HP 凄く減ってる。と言う司に苦笑を返してカイトはその場に腰を降ろした。トラが寄って来る。

「…昂」

「なんででしょう」

「…楚良の新しいPC知ってる？」

「いいえ。何故ですか？」

なんとなく。と言ってカイトはトラにもたれ掛かり瞳を閉じた。

『友達になろーよ』

『……どうして俺を殺さない？』

喪失感を覚えてカイトはコントローラーを手放した。動かなくなつたカイトをトラが心配そうに見詰めているが、微笑みかける余裕もない。

「……少し、眠るよ」

言って目を閉じようとしたカイトを妨げるものがあつた。

それは突然大きな音を立てて扉を開き入って来た。槍を持った隊長とおぼしきオッドアイの女性PCが高飛車に宣言する。

「我々は“碧衣の騎士団”！不正NPCを静粛するものである！！」

疲労感と眠気が一気に消え去った。

罪悪

突然入って来た“碧衣の騎士団”に四人は戸惑いを隠せなかった。

「…どうやって入って来たの？ここはトラのホームだ」

「私達がCC社のものだからです」

右目に逆三角の入れ墨をした女性が淡々と答える。

「我々はThe Worldの秩序維持のために存在している」

槍の矛先をこちらに向けてオッドアイのPCは笑った。

「そのNPCをこちらに渡して貰おうか」

それを聞いてカイトは反射的にトラを背に庇った。しかし、オッドアイのPCはあくまでも冷たい瞳で昴と司を見ている。

「どこのハッカーが紛れ込ませたのか知らないが、データのクズを消すのが私の仕事だ」

言って槍が昴に狙いを定められる。しかし、昴を貫くはずだった槍は途中で止められた。

カイトが双剣で止めたのだ。

「…邪魔するつもりか？」

「仲間が消されるのを黙って見てろって？」

訪問はもつと元気なときにして欲しかったと思いつつ、カイトは言った。

「どういふつもりか知らないけど、削除かどうかはもつといろんな確認を行ってからにしてくれる？」

「確認だと？」

“碧衣の騎士団”と名乗った女性は鼻で笑う。

「すでに苦情が出ている。先日タウンで攻撃をされたとな」

心当たりがあつてカイトはそつと目を逸らした。

「それとも、君も一緒に削除されたいのか？」

「出会いは神の御業。別れは人の仕業。全ては決まっていたことなのです」

昴の声。カイトは突然後ろに引かれた。カイトと交代するかのよう
に前へ出た昴が耳元で囁く。

「トラを連れてネットスラムへ」

「なにを……!？」

昴が斧を装備した。

「元“紅衣の騎士団”団長昴、お相手します」

「ふん、なにが団長昴だ。NPC風情が」

なんの話をしているのかカイトにはわからない。

ただ司が先日起こした騒動が原因だとなんとなく気付いた。

「行きなよ」

今まで黙っていた司が言う。

「司!」

「言っただろう? 覚悟はすでにできている」

杖を手にした司は昴の隣に並ぶ。

「カイト、トラと仲良くしてあげて下さい」

「さっさとそれ連れて行けば? 一緒にいたら消されかねないよ」

苦渋の決断だった。一緒に戦った仲間で、どちらが大切なんて言え
るものではなかったのだ。

「……トラ、一人で行ける?」

「カ@ト」

「置いてなんて行けないよ。僕はみんなのリーダーだから」

仲間を守るのが責務。誓ったのだ。壁になると。守ってみせると。

それがカイトにできる、支えてくれる仲間へのせめてもの恩返し。

「……僕に構うな!」

カイトがトラの手を引いてその場を避ける。司の魔法は二人に向け
られていて、咄嗟にカイトが反応しなかったら怪我をしていたこと
だろう。

「良いから行きなよ、邪魔だ! 君がしないといけないことはそれを

連れて行くこと！」

「カイト、どうかこの世界をお願いします」

二人が本気なのだと理解してしまった。トラはいまいち状況がわかっていないようだ。

カイトはホームの窓を開いてそこからトラを連れて飛び出す。

「逃がすか！」

「させません」

斧がまっすぐに相手に向かう。オッドアイのPCは舌打ちしてからにやりと笑う。

「…まあ、良い。どうせどこにいてもすぐに見つけられる」

「それはどうかな」

「……なに？」

「CC社は自らの権力を過信してしまうくらいがあるようだね」

あー、やだやだ。と言う司を睨みつけるが本人は気にもしない。

「…戦う前に、お名前を」昂の言葉に一瞬眉をしかめた女性は次いでにやりと笑う。

「神威。“碧衣の騎士団”隊長神威だ」

もう良いだろう。神威は槍を昂に向ける。それを避けて昂は斧を握り直した。

「僕に構うな！！」

「『愚者のタロット』！」

近くでは司と右目に逆三角がある女性PCが睨み合う。

「…邪魔」

「神威さんの邪魔はさせないわ」

数が圧倒的に違い過ぎる。万が一にも勝てる見込みはない。昂は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

今から大変な戦いが起こると言うのに手伝うことはできそうにない。カイトになんの恩返しもできないまま、昂は運命を受け入れるのだ。覚悟はした。恐怖はない。しかし罪悪感が燻っている。

「……っ！？」

「消えろ、出来損ないのクスデーター！！」

槍が昴の胸を貫いた。

「…昴っ！！」

「アンゾット！」

魔法は迷いなく司に命中する。しかし司は昴を守るように立ちはだかった。

「僕に構うなあー！！」

最後の悪あがき。司は昴を守るために魔法を放つ。

「……っ、かさ…」

「昴！」

小さな羽を背中に生やした女性の姿がぶれている。データが徐々に分解されているのだ。

「…い、やだ！嫌だ、嫌だよ昴！！」

「ならば後を追うが良い」

貫かれた胸を見て司は薄く微笑んだ。戦いなんてどうでも良い。彼女がいない世界に司の生きる意味はないから。

「すば…、る」

お互いに手を伸ばす。霞む姿で二人は苦しそうに、しかしとても幸せそうに笑いあった。冷めた目でそれを眺めていた神威は隣で決まり悪そうにしていた女性に話しかける。

「マギ」

「は、はい！」

「まだ生き残っているあのバグを探せ。“黄昏の騎士団”と繋がっているはずだ」

「はい！」

手を繋いでいた二人の姿はもうどこにもない。神威は“碧衣の騎士団”を撤収させた。

カイトは突然振り向いた。声が聞こえたような気がしたが、気のせいだろうか。

「？イト？」

「あ、なんでもない。トラ、みんなのところに先に行ってくれる？僕ヘルバに用事があるから」

しばらく迷うようなそぶりを見せた後にトラは頷いた。その背が見えなくなるまで微笑して見送ったカイトはすぐに笑みを消して呟いた。

「説明してくれる、ヘルバ？」

「私が答えられることなら全て」

カイトが後ろにいたヘルバに歩み寄る。

「なんで教えてくれなかったの」

「必要ないと思ったからよ」

「必要ない！？なんで！？知ってたら守れたかもしれないだろ！昂も司も、楚良だって！！」

「いいえ、守れないわ。彼らは覚悟していたの。AIはいつか消える運命」

「でもあんな風に消える必要ないだろ！？知っていれば、僕が戦って三人を先に逃がして……」

「今のぼうやの状態でなにかできた？自分のためにリーダーを見殺しにしろと？それでアカウントを奪われて腕輪も失われて、この世界がどうなったと思う？」

「……それは……」

「ぼうやは仲間のためなら自分がどうなっても構わないだろうけど、残された仲間にとっては大損害よ。自分がいなくなったときの被害を考えなさい」

「……でも、それは彼らがNPCだと教えなかった理由にはならな

い」

「それもよ。彼らと話していれば気付けたこと。知らなかったことはぼうや自身の責任だわ」

カイトは耳を塞ぎたくて、しかしできなかった。今話しかから逃げるのは最低な行為だ。

「…わかってるんだ。昴と司は最善の行動をしたって。自分の命よりも僕を、引いては世界を優先したって。でも…！」

「そうね。ぼうやが万全の状態であればもしかしたら守れたかもね」
しかしカイトは万全とは程遠く、あの場にいれば足を引っ張っていたことは間違いない。

「全てはぼうやが引き起こしたこと。違う？」

スケイスの確認を誰にも言わずに行ったこと。

応援も呼ばずに交戦したこと。

仲間を信用しなかったわけではなく、自分を過信していたわけでもなく、なにかを守ることに必死だった。

そして、必死になった結果がこれだ。

「…ヘルバ、気になっていることがあるんだ」

「なに？」

「楚良は……、ハセヲ？」

「……その通りよ」

ただし、とヘルバは続ける。

「貴方が知っている楚良はNPC。ハセヲとは同じであって違う」

「…うん。僕は一度本物の楚良と会ったよ」

一言そう言ってカイトは哀しさをはっきりと表情に出した。

「…二人は、逃げ切れたかな？」

「……昴も司もぼうやの傍にいますでしょう」

「…うん、そうだね」

受け取った想いと覚悟。絶対に無駄にはするものか。

「でもね、ヘルバ」

画面が滲む。PCは涙を流せない。けれどリアルの自分は涙できてしまうのだ。

「僕はこんな覚悟いらなかったよ」

笑い合える未来のための覚悟ではなかった。守らせてさえくれない覚悟だった。

カイトが望む未来とは、相反する覚悟だった。

カイトはアイテムから『クソみたいな世界』と『出逢いは神の御業』を取り出す。

これが現実ならば二つを遺骨の代わりにでも埋めただろうが、ここはそうではない。

「ヘルバ、この二つを誰にも触れることのできない場所へ」

いつかまたカイトがゲームから離れてしまったときも、再びThe Worldが変わってしまったときも、しっかりと残っているように。

「……どうか安らかに」

二人が再び生まれる日が来るように。繋いだ手は放さないまま二人一緒にいられるように。

手を繋いだ二人が笑っていられるように。

この世界から羽ばたいたと言っのなら、どうかその先で幸福を。

コントローラーを投げ捨てて、カメラを頭から乱暴に取る。

ログアウトもしていないのでカイトはそこに突っ立っているだろう。しかしそんなこと気にはできなかった。

「……つく、うう……！」

ベッドに身体を放り出し、枕に顔を押し付ける。涙は止まってくれ

なかった。

ああ、僕は君達が僕に与えてくれたものを同じだけ返すことができませんでしたか？

僕は君達にいったいなにを与えることができましたか？

悲壮（前書き）

やっぱり読まなくて良い話し（笑）

話しを進める速さが亀なみで、最近泣けてきた柚季です。

悲壮

あれから再びカイトがネットスラムに戻ると身体の傷は全て癒えていた。

きつとヘルバが治してくれたのだろう。有り難いことだ。

「…カ@*」

「トラ、心配かけてごめん」

カイトの言葉にトラはふるふると首を横に振った。

「?@ト、どう　あ　二人は　まい　だ?」

「……トラ」

「あ　つ　　?　　うし　殺して#　　〒　?敵だメう?」

「やめて、トラー!」

怒鳴られたことに驚いてトラはぱちぱちと瞬きをしている。カイトだって驚いているのだ。自分の口を押さえて気まずそうな顔をした。「…ごめん。だけどトラ、間違えたらダメだ。僕ら・hacker sはこの世界と一般PCを守るためにいる。敵だとは言え戦うのは本末転倒だ」

「…わ　つ　」

「トラ、司と昴のこと好きだった?」

「……わ?ら　」

「でも、他のみんなより仲良くしてたでしょ?」

「……たぶ　」

「なら、もうそんなこと言わないでね」

拒否を許さない口調にたじろいたようにトラは頷いた。

カイトはトラの手を引いて仲間のもとに歩き出した。

見抜かれたかと思った。カイトはほつと息を吐く。

見抜かれたかと思った。戦うべきだ。仇を取らなければ。そんなこ

とを思ったことを。

深層心理の最も単純な部分でカイトは叫ぶ。

『殺してやりたい!』

その声が聞こえてしまったのかと思った。しかしトラはなんにも考えていなかっただろう。害を成すものは敵。敵は排除。それだけだ。だからこそ簡単に尋ねることができる。

『カイト、どうしてあの二人はいないんだ?』

『あいつらのせいか? どうして殺してしまわない? 敵だろう?』

悪魔の囁きとはこんなことを言うのかもしれない。しかしカイトはこの声に耳を傾けてはいけないのだ。

殺してやりたい。でも全てはカイトが招いた災厄で。

仇を討ちたい。でも二人は少しも後悔なんてしてなくて。

迷惑かけるのが恐い。でも逃げ出すことは不可能で。

いつそ殺して欲しい。でも守ってもらった命だから。

背負わなければならない重責を全て棄てて、“カイト”と言う存在を消してしまえたならば、きっと現実に生きるカイトは自由だ。でもやっぱりそれはできない。

「カイト!」

バルムンクが駆けて来る。カイトとトラは立ち止まった。

「大丈夫か? 神威と交戦したと聞いた」

「神威?」

「“碧衣の騎士団”の隊長だ。オッドアイが特徴の」

カイトはあつと声を上げた。そういえばバルムンクは管理者側の仕事をしているのだった。

「バルムンク! “碧衣の騎士団”について教えて! できればみんなが集まった場所で……その、職務に問題が、なければ……」

良いんだけど。と尻すぼみになって行くカイトにバルムンクは小さ

く笑った。

「もちろんだ。交戦したことはもう広がっているからみんな集合している。ついでだ、着くまでになにがあったか詳細を説明してくれるか？」

「……う、うん……」

歯切れの悪いカイトにバルムンクは怪訝そうな顔をした。さあ、怒られるぞ。カイトは腹を括っておいた。

「……カイト」

「……な、なんでしよう？」

「貴様……こんなに浅はかだったか？」

「……た、たぶん……」

「というかバカじゃないのか？」

「おっしやる通りで……」

バルムンクは怒っている。とても静かに、けれど確かに。言うなれば爆発寸前、嵐の前の静けさと言ったところか。

「……なあ、カイト？」

「……うん……？」

「俺達はそんなに頼りにならないか？」

「え……？」

「頼りにならないかと聞いている……！」

とうとう怒鳴ったバルムンクにカイトの肩が跳ねた。

「どうして俺達に頼ろうとしない？ どうすればお前が頼れる存在になれる！？ 何故日頃から仲間だと言うくせになにも話してくれないんだ……？」

「……バルムンク」

「どれだけ強くなればお前は頼りにしてくれる？ フィアナの末裔と呼ばれる俺やオルカでもダメなのか！？ なにが足りないんだ……！」

「違う！ 頼りにしてるよ……！」

「していない！ していると言うのなら何故なにも言ってくれなかった

！？スケイスと交戦して負傷だと？俺達を侮辱しているのか！！」

「違うんだ！もう充分頼っているんだ！これ以上だと甘えてしまう！！」

「いつそそちらの方がずっと良い！！」

なんでも一人でやろうとした結果がこれか。

その言葉をカイトは甘んじて受け止めた。バルムンクが息を呑む。

「……すまない。言い過ぎた……」

「……僕こそ、本当にごめん」

「……カイト、お前は俺達を仲間だと言うが、本当にそう思っているのか？仲間は支え合うものだろう」

「思ってるよ！だから守りたいんだ！」

大切な仲間だから頼りにし、また頼りにされたい、協力しあうバルムンク。

大切な仲間だからこそ守らなければと一人で戦い、孤独を選ぶカイト。

どちらが正しいかなんて明白で、それでもカイトは戦うのだ。

「……お前の気持ちがわからないわけじゃない。ただ」

「わかってる。一人でがんばろうとして最悪の状況を招いた僕はバカだ。でもどこまで頼れば良いのかわからないんだ」

「カイト……」

「行こうバルムンク。こっちから戦いを吹っかけるつもりはないけど、“碧衣の騎士団”の対応策は考えた方が良いから」

気丈に立ち振る舞うカイトにバルムンクはなにも言えなかった。二人は確かに信頼し合っている仲間だが、二人が持つ友への定義が違い過ぎた。

支え合いたいバルムンクと、守りたいカイト。

揃っているからこそ取れているバランスはこうやって争っていても健在だ。

「まず“碧衣の騎士団”の説明だな。管理者側の組織だから苦情があればどこでも侵入することを許されている。隊長は神威。オッドアイが特徴の女性型PCだ」

バルムンクの説明をみんなが真剣な表情で聞いている。

「武器は槍。本人は放浪AIを憎んでいる。だからNPCを消す躊躇いはないぞ」

「たぶん今狙われてるのはトラかな」

カイトの補足説明にバルムンクが溜息を吐いた。

「あいつはAIを消すためなら犠牲は厭わないぞ。トラをカイトが庇えばカイトもアカウントが奪われる」

「うわ、無茶苦茶ね…」

ブラックローズがげっそりと言う。

「今回彼らが動いた原因は司が街中で魔法を使ったからだ。まったく、あいつも無茶苦茶な奴だった…」

「えー。なつめ達ちゃんと謝りに行っただじゃないですか。あのときは許してくれたのに…」

「本性なんてそんなもんやん。上辺だけでも取り繕えたんやから拍手もんや」

「でもでも、嘘はいけないですよ」

「誰も良いとは思ってないが、悪いのはこちらだしな」
ガルデニアの言葉になつめが俯いた。

「とにかく、みんな警戒を怠るな。相手は管理者。普通のタウンやエリアだとすぐに見つかるぞ」

「hackersで名前が明かされてるのはブラックローズと僕だけだから大丈夫だとは思っけど…。みんな気をつけて」

みんなに迷惑をかけていたい自分はなにをしたかったのかとカイトが暗い思考に沈みかけたとき、月長石が帽子越しにわしゃわしゃ

とカイトを撫でた。

「わ！…月長石？」

「……………」

相変わらず寡黙な彼はなにも言わないが劣るような気配が伝わって来てカイトは彼の優しさを痛感した。

「…ありがとう、月長石」

「……………ああ」

慰めに泣きそうになりながらカイトは微笑んだ。

「カイト」

ブラックローズが声をかけて来た。

「…ブラックローズ……………」

「ちよつと良い？」

「…うん」

なにを言われるのかは想像できた。いつだってカイトと痛みを分かち合い、間違ったカイトを正してくれた彼女はいつかのようにカイトを叱ってくれるのだろう。

「……ちよつと、あんたは付いて来ないでくれる？」

「…メンド」

一緒に行こうとしたトラが足を止める。

「絶対に付いて来るんじゃないわよ！！」

「あはは…。ごめんねトラ、すぐに戻るから」

そう言われると従うしかない。行ってしまう二人の背中を見ると苛立ちを感じて、トラは原因を作ったブラックローズにべえつと舌を出しておいた。

「…お前、そんなもんどこで覚えた」

一切の反論を許さないブラックローズにそんな恐ろしいことはできない。兎丸は珍しく顔を引き攣らせていた。

誰もいないことを確認してブラックローズは足を止めた。それに合

わせてカイトも立ち止まる。

「…わかってたの」

「ブラックローズ？」

「いくら私が言っただって、あんたは一人で行こうとするって」

「……ごめん」

「クビアと戦ったときもそう。私ずっとカオスゲートの前に立ってたしね」

「…ああ、最初の……」

思い当たる節があった。

「今回のこと実は詳しくは説明してもらってないんだ。ただ、スケイスと交戦して負傷しているときに司と昴が襲われたとしか」

「……うん」

「あんたは凄い。スケイスと一人で戦って生きて返って来た」

カイトはその言葉に返事は返さなかった。全ては自分のせいで起こったのに、いつたいなにが凄いのか。

「でも、あんたは一度でも一人で“波”と戦った？一人で勝てた？」

「一度もないよ、そんなの無理だ」

「あんたは一人で勝てる力を持っているかもしれない。でもそれは一人を選ぶ理由にはならないわ」

「わかってる……」

「でもそれで良いと思うの」

「…え？」

あっけらかんと言いつつブラックローズにカイトは首を傾げた。

「守りたいから戦う。あんたはそれで良い。むしろあんたをフォロ―できなかったあたし達の落ち度だわ」

「そ、そんなこと……」

「あるの。でもカイト」

「うん」

「あんたがあたし達を守りたいように、あたし達もあんたを守りたいって思ってること、忘れないでね」

その言葉に初めてなにかを気付かせられた気がした。

先の戦いでカイトは仲間にも多大な迷惑をかけた。だからこそ今度こそ思っていたのだ。

でも、もしかしたらみんな同じ思いだったのかもしれない。

戦いに参加できなかったオルカも。子育てがあつたミストラルも。他のみんなももしかしたら。

バルムンクだつて同じ思いがあるかもしれない。

自分の愚かさを再認識したのはいつたい何回目だろう。カイトは大きな溜息を吐いて顔を上げた。清々しい表情だつた。

「うん。ありがとうブラックローズ」

「感謝してるなら次は知らせることね」

「うん。ならさっそく頼みたいことがあるんだけど、良い？」

「まっかせなさい！カイト、あたしはなんだと思う？」

質問の意味がわからなくて答えられないでいると、ブラックローズは微笑みながら言った。

「あたしはあんたの相棒よ」

輪廻（前書き）

どうしても出したいキャラクターが二人いました。

一人はトラです。そんなもう一人は今回から出せました。

知ってる人は知ってると思いますが、好き嫌いはわかれると思います。

輪廻

現実での時間は夜中。仮眠を取ったカイトは再びThe Worldへログインした。

ネットスラムに降り立てば寝静まった世界に音はない。いつもは起きているトラも最近は“睡眠”と言う行為が気に入ったようで、現実が夜、つまりはみんながログアウトしてしまう時間帯には寝ているらしい。

データがどうやって、と疑問はあるが本人が面白がっているので良しとする。

「カイト」

声に振り向けばそこにはブラックローズがいつもの姿で立っていた。

「ブラックローズ」

「まったく、どうしてこんな夜中に…」

「ごめん。昼間だとトラが付いて来ちゃうから…」

「わかってる。ほんとに、あんたの危険に晒したくないの鬱陶しいこと…」

「鬱陶しいって酷いな」

苦笑するカイトにブラックローズはじとりとした目を向ける。

「それで？あんたはどこに行こうっての？」

「前、ブラックローズと二人で行ったところに」

ブラックローズは眉を寄せた。思いつかないわけではなく、多過ぎてどれかわからないのだ。

「こんな時間になにをしている」

カオスゲートに手を伸ばした二人がびくりと動きを止める。周囲を恐る恐る見渡せば、影から姿を現した翼ある斬刀士、白銀に輝くPCバルムンク。

「バルムンク!？」

「な、なんであんだ!？」

「なんではこちらの台詞だ!カイトのことだからもしやとカオスゲートを張っていたが、まさか本当に来るとはな!？」

あっさりと行動が予測できるのはカイトが単純なのか、それともバルムンクの頭が良いのか。

おそろく両方だ。

「ブラックローズ、お前も共犯か?知っていながら黙っているとは!」
「なによ、文句ある?」

「あるに決まっている!二人に増えれば良いと言う話じゃないだろう!」

睨み合う二人の間にカイトが入る。気付けばカイトの役割はそんなものだ。

「...まあまあ。バルムンクも一緒に行く?」

「当たり前だ!なんのために見張っていたと思っている!」

「...何気にストーリーカーじゃん」

ブラックローズの言葉を引き金に二人はまた睨み合う。これは仲が良いと言って良いのだろうか。たぶん。

カイトは笑いながらカオスゲートに手を伸ばした。

「.....で、結局どこに行くつもり?」

「カイト、こんな街中にいたら危険だぞ」

水の都マク・アヌ。ブラックローズはそこから二人きりで行ったエリアを思い出そうとした。

「...もしかして、『隠されし 禁断の 聖域』?」

「はずれ。もっと後から行った場所だよ」

言いながらアイテムを確認したカイトはカオスゲートに近づいた。

「…なくなつてなきや良いけど……」

言つてカオスゲートに入れたエリアワードはこうだった。

『輪廻する 煉獄の 祭壇』

どこかで聞いたエリアワードだが、数多あるそれらの中からそのエリアワードがなにかを思い出すことがブラックローズにはできなかった。

「…二人とも、凄い危険な場所だから注意して」

「…サーバーなのにか？なにがあるんだ？」

カイトがウイルスコアを入れている様子を見てブラックローズはますます顔を歪めている。思い出せないことに苛立ちを感じているのだろう。

そして、カイトがウイルスコアを全て入れたとき、ブラックローズの脳裏でキーワードが全て繋がった。

『マク・アヌ』『危険』『ウイルスコア』そして、カイトと『二人』で行ったエリア。

「…あ、ああああ!!」

突然のブラックローズの奇声と、それに驚いてバルムンクが振り返ったのと、カイトが腕輪を発動してカオスゲートを通るのは、ほとんど同時だったと言える。

そこは不気味な場所だった。他には絶対に有り得ないエリア。暗い闇の中、枝のように張り巡らされた道。それ以外にはなにもない場所だった。

そこに、ブラックローズは奇声を上げた体勢で、バルムンクは振り

返った状態で、そこに来た。

「……………」

このエリアに行けるかも怪しかったのに、この状態のまま残っていると云うのならやはりカイトが心配した通りなのだろう。

「…カイト!!」

「わ、な、なにブラックローズ?」

「あんたねえ、なんでこんな重要なことさっさと云わないのよ!？」

「いや、僕も半信半疑で」

「どういうことだ?」

バルムンクが尋ねるとブラックローズは矛先をカイトからバルムンクへと移した。

「あいつよ、クビア!ここは腕輪を壊した場所!!」

「……………はあっ!？」

珍しくバルムンクは間抜けな声を上げた。また怒られる予感がしてカイトはこの二人から離れるか本気で悩む。何故最近怒られてばかりなのだろう、いや自分のせいだけでも。

『カイトツ!!』

二人が同時に怒鳴るのを聞いてカイトは首を竦める。ほら来たぞ、と二人を振り返った。

「…なに?」

「なにじゃないわよ、バカ!!」

「そうだ!だからみんなに話した方が良いと……カイト!!」

おそらくカイトでなければそれを避けるのは不可能だっただろう。

バルムンクの警告の声と、視界に微かに入った白い刃に反応した身体はとっさにその場でしゃがんだ。

頭上で白い刃が横切った。その恐ろしい勢いにカイトの血の気が引く。

どれだけHPが減るか知らないが、あの勢いだと間違いなくカイトの首と身体は真っ二つだっただろう。

「貴様!!」

バルムンクが切り掛かると入れ代わるようにカイトはそこから退く。そして後ろを振り返り敵の姿を確認して眉をしかめた。

「……………PC……?」

真つ黒な髪と琥珀色の瞳。黒い服と対照的に首に巻くストールは白だ。姿はカイトと同じ双剣士の職業だが、その手に持つのは白い鎌。鎌闘士だろう。

「…PKかな?」

「バカ。こんな所に来るわけないでしょうが。さっき入れるようになったばつかなのに」

「でも僕らの後にゲートを通ったのかもしれないよ?」

「なら今まで黙ってるのおかしいでしょ!PKって総じてやかましいんだから」

それは偏見だとカイトは思ったが黙っておいた。

鎌は大振りのはずなのに、黒い少年のPCは柄を使って上手くバルムンクの攻撃を防いでいる。

さつと身を引いてバルムンクから距離を取った少年はにやにやと笑いながらこれみよがしに溜息を吐いた。

「…まったく、好戦的なのは嫌だなあ。こつちの話しを聞こうともしない」

どう考えても先に攻撃を仕掛けて来たのは少年である。

「…あの、君は……?」

「人に名前を尋ねるときはまず自分から名乗ったらどう!?」

「ええ!?!えつと、カイトです……」

「なんであつさり答えてんのよ、あんたはあ!?!」

「ええ!?!」

その様子を見て少年はくすくすと笑う。

「…あの、それで君は?」

「何故そんなに下手に出ているんだ!?!」

「ダメ出し!?!」

とうとう堪えきれなくなつた少年は腹を抱えて笑い出した。なにが

そんなにおかしいのかカイトにはわからない。

「…く、ふふ…。知ってるよ。蒼炎のカイト、会いたかったもの」
「え？」

「カイト、僕が君を知らないはずがないんだ。君が僕を知っているように」

「……人違いじゃ」

「ないよ。間違えるなんて有り得ない」

きっぱりとした口調で少年は言った。再び鎌を持って少年はこちらにそれを向ける。

「忘れるなんて酷いや。…いや、わからないだけか」

「どういうこと？君は誰？」

「知りたいなら僕に勝てば良い！」

垂直に振り下ろされた鎌を避けてカイトも武器を取った。

攻撃を受け止めたその瞬間、カイトは何故か身体中が脈打つような画面上の全ての色が反転したような、そんな感覚に陥った。

目を見開いたカイトを見て少年はうつそりと笑う。ぶつかり合った武器を弾いてすぐさま後ろに身体を引かせた。

「……二人とも、武器を持って」

「カイト！？」

「あんた、PKでも倒すの嫌なんじゃ…」

「PKなんかじゃない」

少年は笑っている。その姿は逆に不気味だ。

「彼……いや、あいつは、腕輪の」

「違うよ、カイト。君の、だ。カイトの、だよ」

訂正の言葉にカイトが顔を歪める。

「僕がいるから復活したとでも言うつもりか？」

「その通りだけど、それが？」

「ちよつとどういうことよ！？」

説明！と怒鳴るブラックローズにカイトは苦々しく呟いた。

「あいつは腕輪の…、僕の対。クビアだよ」

変化（前書き）

なんか長くなりました。

というか誰か柚季に文字の書き方を教えて下さい。

変化

「クビア!？」

「なんだと!？」

ブラックローズとバルムンクの声を無視してカイトは少年の姿をしたクビアに飛び掛かった。それを難無く受け止めてクビアは笑う。

「無駄だよカイト。わかってるだろ？腕輪がある限り僕は死なない！」

「…なら、暫く動けなくなるまで切り刻む！」

「…あつははは！最高だ！！僕そいうの大好き」

カイトがクビアの懷に潜り込む。しかしクビアは一切の動揺を見せず、鎌の柄を刃の付け根に素早く持ち替えた。

「……………」

カイトの双剣がクビアの喉元に押し当てられる。それと同時にクビアの鎌がカイトの襟足にかかっていた。

ただ静寂が辺りを支配する。先に動けば殺される。しかし動かなければそれも死を意味するのだ。

「…なんで首を裂かないの？」

「…そっちこそ。どうして喉を潰さない？」

動けば相手の死と同時に自らの命を奪われる。どうしようもない状態に二人は同時に後ろへ下がった。

「…ああ、その二人もそのままじゃ寂しいよね。プレゼントあげる」

けらけらと笑うクビアが腕を振るうとバルムンクとブラックローズの近くに浮遊体が二つ現れた。

「クビアコア!？」

カイトが慌てて二人の援護に向かおうとするとクビアがそれを邪魔した。

「ダメだよ。カイトは僕」

「どけ!!」

カイトが剣を構えた。

「…カイトの援護に向かいたいが」

「さつさと倒すしかないみたいね」

魔法の援護がないのが辛いが弱音は吐いてられない。

「カイト! あんたはそっちに専念してなさい!」

「でも」

「俺達が負けると? …心外だな」

二人の言葉に、カイトは躊躇いがちに頷いて、クビアと向き合った。

「もう一人じゃないんだね、カイト」

「……見たの?」

「君とスケイスの戦いを? 見たよ。君の仲間とやらに見せたいくらい壮絶な戦いだっただ」

思い返せば、あのときの自分はおかしかったのだと思う。あんなふうに戦いを仕掛けることなんてなかったと言っのに。

「ダメじゃないか、カイト。孤独を選ぶなら最後まで孤独じゃなくちゃ」

「お前には関係ない!」

「まあ、そうだね。…んー、でもさ、あのときの君の方が強いよ」

「…それはないよ。あのときの僕は僕じゃなかった。殺すためだけに戦う僕を、僕は認めない」

「それでもあれは君だった。スケイスへの怨みを募らせた君だ!」
鎌の柄がカイトの頭に直撃した。刃ばかりに気を取られて柄が武器になるなんて考えてもいなかった自分が恨めしい。

顔を手で軽く拭ってカイトはまたクビアに飛び掛かった。

「怨んでいるんだろう、カイト? 友を奪い、仲間を傷付け、守るべ

きものに手をかけたスケイスを！！」

カイトの足がクビアの鳩尾に入る。咳込みながら数歩後ろに下がったクビアを見てカイトは目を伏せた。

「…そうかもしれない。僕はスケイスを恨んでる。僕はスケイスを殺す瞬間を待っている。僕は“死の恐怖”に腕輪の加護を見せつける。…でも」

クビアが鎌を持ち直した。

「僕はお前も倒したいんだよ、クビア」

友を奪おうとしたのはお前も同じだ。

仲間を傷付けたのはお前も同じだ。

アウラを僕から引き離そうとしたのも、やり方は違えど同じだろう。

「僕はね、みんなに安全な世界が良いんだ。アウラが笑っていられる世界が良いんだ。だから」

あは、とクビアが笑いをこぼす。

「変わったねカイト。凄く良い方に。安心したよ」

「アウラの害になる異分子は、僕が排除する」

再び互いの武器が交じり合う。もう迷いはなかった。

「…でも、僕は倒せない。前は君が多大な犠牲を払ったけど、今回は無理だよ」

「どういう意味？」

「君は腕輪を壊したことを後悔したはずだ。そして今回は、まだ腕輪をバグデータ以外に使ってないだろ？アウラがどんな意図で渡したのか理解できていない君は腕輪を破壊できない」

くすくす笑うクビアを睨んでいれば横槍が飛んで来た。

クビアとカイトの間に振り下ろされた大剣。

「カイトから離れなさいよ！」

「あれ？もう倒しちゃった？」

ひよいひよいと後ろに下がるクビアをブラックローズが追いかける。

「無論だろう」

クビアの後ろからバルムンクが襲い掛かる。ブラックローズの大剣とバルムンクの剣が同時にクビアを切り付けた。

「…うそ！？」

「なっ…！？」

しかし切り付けた先にクビアの姿はなく、二人の間にあるのは白い棒。鎌の柄だ。

見上げれば刃の峰にクビアは立っている。彼はブラックローズを見ながら言った。

「オルメアンゾット」

「…きやあ！？」

「その職業は君にピッタリだ。一方に特化したためにもう一方はとてつもなく脆い。まるで君の心を映したみたいに。虚勢を張る君は、とても滑稽だよ」

「ファリプス！」

クビアが止めを刺すよりも早くカイトがブラックローズの回復をした。

「邪魔しないでよ」

不満を隠そうともしないでクビアは言った。

「貴様！」

ブラックローズが体制を立て直す時間を稼ぐためにバルムンクが剣を抜く。

「知ってるかい、ファイナの末裔？正義なんてこの世界には存在しない。あるのは幾千もの悪ばかりだと」

「なんの話した！」

「憧憬も友情も愛も、この世界では悪意に変わる。それなのに君は正義を語る。カイトを敵視していたときでさえ、君は自分を正義と信じて疑わなかった。そんなただの愚者じゃないか」

「…黙れ！！」

バルムンクとブラックローズがクビアに向かって行く。言葉に翻弄

された二人を見てカイトは改めてクビアの恐ろしさを知った。

一度勝ったから勝てると過信していたことを否めない。なんとかな
らと思っていた自分を殴りたい。

「ライネツク・ルフ」

闇が沸き上がった。カイトは自分が呆然と戦いを見ていたことをよ
うやく自覚して慌てる。急いで補助魔法を使わなければと構えると、
クビアが言った。

「…君が一人でないと強くなれないと言うのなら」

鎌を持っていない方の手を倒れたブラックローズに翳す。

「与えようか、カイト？」

それはきつと二人を、仲間をみんな未帰還者にしようと言う言葉だ
ったのだろう。

だからカイトは、魔法を使う構えを解いたのだ。

「……許さない……！」

クビアが笑う。カイトは、彼を倒すために走り出した。がんと音が
がする。カイトの左手にある双剣とクビアの鎌がぶつかる音だ。余
った右手を伸ばして首を狙えば身体が器用に反らされた。

「炎上独楽」

さすがのクビアも顔を歪めた。しかしそれはほんの一瞬で、鎌をな
ぎいてカイトの腕を切り付ける。

「カイト、君は変わった。敵を殺すことに容赦がなくて、敵を殺す
ための犠牲は厭わない。とても素敵だよ」

でも、とクビアは区切った。

「自己犠牲は鬱陶しい」

「……悪いけど、他に犠牲にできるもの、持ち合わせてないんだ」
敵にいくら辛辣なことを言われても構わないカイトは、平然と言
い返した。

「僕から言わせてもらえれば、君は持ち物が多過ぎる。犠牲にでき
るもの？どこにでもあるじゃないか！」

例えばこいつら。と言った先には倒れたバルムンクとブラックローズ。

「…バカにしてるのか」

「まさか！僕は本気だよ。仲間にあんな姿を見せるのが怖いならば、こいつらを切り捨ててしまえば良い。そうすれば君は強くなれる！」

クビアはカイトから離れると、近くにいたバルムンクを見下ろした。

「……っ、やめろ！！」

「だから僕が君を助けてあげるよ！！」

鎌を振り上げる。カイトは駆け出したが、振り下ろす方が速いだろ
う。

がんっ！と大きな音がした。

「……なっ……！？」

クビアの目が驚愕に見開かれる。後ろでなにが刺さる音がして、視線だけをそちらにやれば、クビアが持っていた鎌が地面に刺さっている。

その鎌を“拾ってあげる”手があった。

「…さっすがね、バルムンク。コントロールバッチリ」

ブラックローズが笑った。剣の切っ先をクビアに向けたバルムンク
もにやりと笑った。

「伊達にフィアナの末裔はやってないのだな」

「……ふうん。いつ回復したわけ？」

「世の中アイテムって便利なものがあってね、HPが少なくなったら使うのはゲームの常識よ」

「さっさと回復して、倒れているふりをしていただけだ」

「……なるほどね……」

クビアはくすりと笑う。それを見てブラックローズはあくまでも勝

ち気に笑い返す。

「カイト、今だ！」

バルムンクの鋭い声にクビアは二人から視線を外して背後を見た。

「……いない？」

背後を取って奇襲をかけてくると思ったが、そこにカイトの姿はない。しかし、クビアのすぐ後ろで声がした。

「三爪炎痕」

振り向く余裕はなく、視線をやるのが精一杯だ。背後の足元でしゃがんでいたカイトが持っている双剣が三つ又に別れる。

クビアは誰にも気付かれないように、そっと笑った。

「……バルムンクとブラックローズに気を逸らしてもらっている間に、僕は君の隙を伺っていた。卑怯だとは思うけど、正面から倒せる自信は残念ながらなかったから」

電子音を放ち倒れているクビアにカイトは語りかける。

「なにも言わなくても通じ合える、一緒に戦える仲間は弱くなんかない。僕よりずっと強いんだ。僕はたくさんものを持っているかもしれない。でも、僕が犠牲にできる持ち物なんて、そのたくさんの中だけで僕だけだ」

カイトは後ろにいる仲間を振り返って微笑む。二人はそれを見て駆け寄った。

「カイト！」

「大事ないか？」

「僕より二人の方が心配だよ。とくにブラックローズは魔法受けたし」

「平気よ、平気。倒れてたのも演技だしね」

「クビアが復活する前に帰った方が……」

バルムンクが息を呑んで剣を抜いた。正面にいたカイトは驚いて後

ろに数歩下がる。

「ふー……。今のは効いたよ」

振り向くことが恐かったが、それでもカイトは振り向かなければならなかった。

クビアは起き上がり服の汚れを払って自分の傷を見て顔をしかめた。
「ファリプス」

傷がみるみるうちに塞がって、カイト達が動かないことも気にせず
に歩み寄る。

「合格だよ、カイト」

「……………へ……」

邪気のない笑みに間抜けな声がこぼれた。クビアが笑いながら続けた。

「うん、合格。最後のは充分に通用する。凄いね！」
なにがだ、と聞けるものはいなかった。

「ま、彼女も一応は一度倒した相手だしね、心配はいらなかったかな？」

「……………あ、あの」

「これなら行けるかもね。いやー、良かった」

「あのさ！」
まだなにかを喋るつもりだったクビアが怪訝そうに口を閉じる。

今だ武器を下ろさない後ろの二人を尻目にカイトは尋ねた。

「…なんの話し？」

「…はあ？」

「いや、だって僕達、さつきまで戦ってたよ、ね？」

そんな力一杯『こいつ大丈夫？』って顔をしなくても良いじゃないか。とカイトは思った。

暫く黒い髪の跳ねた部分を揺らしながらなにかを考えていたクビア

はぽんと手を打った。

「…そっか。説明してなかったね」

「なにを？」

「僕は君達の味方だよ」

カイトは身体を反転させて二人と顔を見合わせた。

『……………はあ！？』

三人は声を合わせる。知恵熱がでそうくらい頭が痛かった。

「詳細は後。ここは普通のPCは入って来ないけど、やっぱり特例はいるから」

とりあえず簡潔に話すね、とクビアは言った。

「カイト、君は僕やスケイスより先に思い出さなければならぬものがあつた」

「…う、うん」

「彼女がいなければ全て丸く収まったはずだ」

「…ちょ、ちよっと！」

「なに？」

「彼女って誰よ？」

ブラッククローズの問いにクビアは不快をあらわにした。時間がないと言っただろうと言い返そうとした矢先、ふと思いついてカイトに尋ねる。

「…もしかして、気付いてない？」

「え、なにが？」

「……………まあ、君達は人間だからね。仕方ないか」

カイトがなにかを言う前に、クビアは真剣さが滲み出た声で言葉を紡いだ。

つまりね、と前置きを置く。

「モルガナ・モード・ゴンの復活だ」

反逆（前書き）

ツイッターで更新の宣言してたほうが良いんですね？

柚季はチキンな上機械音痴なので後押しがないとやる勇気がありません。

今回は説明チックかつ、文章を纏めようとして長くなってしまいました。しかもわけのわかんない理屈です。

……苦情覚悟はしました。……たぶん。

反逆

「…さて、どこから話せば良いのやら」

ネットスラムにクビアを連れて帰ると、当然のようにヘルバが待っていた。曰く、『私が知らないことなんてないのよ』。

このときばかりはカイトも、後ろで『魔女め…』と呟いたバルムンクに激しく同意したかった。

「全部わかってないからなあ…。そうだクビア、君が味方になった理由を教えてよ」

「その証拠もだ。先程まで敵だった相手を信用できるわけないだろう」

自分が座るのに居心地が良さそうな場所を探しながらクビアは返事を返した。

「最もな言い分だね、ファイナの末裔。ただし僕には所有している物が無い。せいぜい命と知識だけさ。前者を与えることは僕の死を意味するから不可能。だけど後者を与えても君は納得しないだろう」わざわざゴミが溜まっている場所に入り込み、その中心に座ってクビアは笑った。手近にあった物を掴んで見てはその辺りに投げ捨てている。

「だけど僕は納得しないと理解した上で僕の知識を与えよう。言葉なんて人間が作り出した曖昧なものに頼ってみるのも悪くない」

「…貴様と言葉遊びをしたいわけじゃない」

「お、落ち着いてよバルムンク。ここで喧嘩しても始まらないよ」

「しかし…」

「カイトの言う通りだな」

割り込んで来た声はオルカのもので、そちらに視線をやれば斬刀士がやって来るところだった。

「オルカ！」

「よう、カイト。電話しても出ないと思ったら朝からゲームか」

「え、電話？うわ、気付かなかった。ごめん。というか朝って、今何時？」

「五時。まだ日は昇ってないぜ」

「うそ！？やだ、そんなにゲームしてたの？肌荒れるわ……」

「ブラックローズもそういうの気にするんだ」

「……………おい」

低い声を出して怒りを表したブラックローズを見てカイトは慌てて話題を変えた。

「で、電話ってなんか用事？」

「いや、もうすぐ休みも明けるし課題の見直しをしたいと思ってな」

「あ、そうだね。ゲームに入り浸りは後少ししかできないんだっけ

……」

わかった、とカイトは頷いた。

「時間は後々……」

「ちよつとカイト！さっさと話し進めてくれる！？私寝たいの！！」

「えっと……、わかった」

「おいおい、夜通しここにいたのか？なにしてたんだ？」

「そうだ、オルカ！俺の話を聞いてくれ！！」

バルムンクが詰め寄る。オルカが驚いて彼を窘めた。

その様子をつまらなそうに見守っていたクビアは再び辺りにあるものを物色し始めた。

「ねー、これあんたの？」

真つ二つに折れた棒を両手にそれぞれ持ってクビアは会話に加わっていないヘルバに話し掛けた。

「ここにあるものは全て私のものと言って良いけれど、好きに使って良いわよ」

どうせ誰かが持って行ってもゴミはその倍以上の速さで増えるのだから。と言えばクビアはくすりと笑った。

「ゴミ？これが？どう見たって宝の山じゃないか。人間はバカだね」

言いながらクビアは棒の切れ目を合わせて繋げた。次の瞬間には、まるで最初からそうだったように一本の姿になった棒を持ちながらクビアはまた辺りを物色する。

「…人間はあなたみたいに一瞬でものを直せないの」

「違うね、やろうとしないだけだ。一瞬でだって？楽にやったように見えただろうさ、あんた達バカな人間には」

直すためには膨大の量のデータを処理して、足りない分のデータを補い、さらに補修したデータをゲーム、つまりはThe Worldに読み込ませなければならぬ。

これをクビアはたった一人で、一瞬にして行ったのだ。それはクビアからしても決して簡単な作業ではなかった。やっていることは同じで、使う労力も同じ。

一見簡単に見えるからと言って、少しも苦勞していないと思われるのは心外である。

ヘルバは肩を竦めた。

「悪かったわ。頭ではわかっていても、あまりにも何気なくやってみせるから」

「なら褒めたら？自分の弁解する前に、さ」

「…ずいぶんカイトと態度が違うのね」

「そりゃあ当然だよ」

新たになにかを見つけたクビアが棒にそれをくつつけた。

「カイトは僕の特別だ。カイトが腕輪を手に入れたから僕が生まれただ。カイトは僕が初めて戦った相手だ。そしてカイトは」

話しが一段落着いたのかカイト達はこちらにやって来る。クビアは言葉を止めてにこやかに彼らを迎えた。

「なんか俺がいない間にまた変なことになってんな…」

「あはは…。ごめんクビア、こいつは気にしなくて良いから」

「それ酷くないか!？」

「ああ、フィアナの末裔の片割れだよね？僕はクビア。よろしく」

「オルカだ、よろしくな。…へえ、こいつがクビアか。あんまり危なそうじゃないな」

「騙されるな、オルカ！」

バルムンクが警告を発する。オルカは苦笑に止めた。

「さて、じゃあ話すね。…なにからだっけ？」

「クビアが僕達の仲間になろうと思った理由」

ああ、そうだった。とクビアはゴミの中に座り直した。

「僕は反存在。別に女神のように役割があって生まれたわけじゃない。強いて言うのであれば、僕の対を消すことが役割だ」

くるり、と手の内で棒が回った。

「でも、いくつもの生と死を繰り返して僕は学んだ。…いや、きつと最初から気付いていたんだろう。実行に移せなかっただけで」

「…なにを？」

「母、モルガナ・モード・ゴンが間違っていることをさ」

クビアは溜息を吐いた。

「マハがそれに気付いたように、僕もそれを知った。だから僕はモルガナを倒す決意をしたんだ」

「待て」

バルムンクの冷たい声。彼は鋭い視線をクビアに向けた。

「最初からそれに気付いていたと言ったな。ならば何故最初から行動を起こさなかった？」

「反逆できないようにプログラムを組み込むなんて常識だろ？」

クビアがわざとらしく肩を竦めた。

「僕がこの世界に生まれたのはこれで三度目。腕輪の対が一度目、あのかの僕は人間らしく言えば赤子同然。憑神の対が二度目、あのかの僕は本能ができた。そして三度目の今、自我が生まれた」
指を三本立てて説明した。

「自我が生まれた僕は独立した。だから僕はここにいるんだ。母に反逆するために」

「……クビア」

カイトの劣るような顔にクビアは微笑む。

「ま、そんなこと言ったって、ようは気に入らない相手を潰そうとしているだけだ。同情はいらないよ」

まだなにか言いたそうなカイトを見て、クビアは話しを変えた。

「と、ここまでが僕がここに來た理由。本題はこれから」

ぐるりと周囲を見渡す。真剣な表情を見てクビアも笑みを引つめた。

「彼女の復活を感じた僕が一番危惧したのは“波”だ。世界が女神のものになった以上、彼女はそれを奪いに来る。そして、その手駒が“波”」

「ちよつと待つてくれる？」

ヘルバの言葉の続きを待つ。

「あなたは何故彼女が復活すると？彼女はもういない。完全にね」

「完全なんて、人間が勝手に作った制限でしょ？」

クビアは微笑みを取り戻した。

「AIをなめないで欲しいな。確かに“波”は製作者ハロルドが自ら作り出したAIだ。だからこそモルガナからの独立が可能だった。だけどさ、僕はどうか？」

「どうって？」

カイトが首を傾げた。

「良いかい、カイト。僕は正確に言えば腕輪ができたから対として作られたわけじゃない。偶然対になったから、一緒に消滅しなくちゃいけないただけだ」

やはりよくわからなかったカイトはますます困惑するばかりだ。

「先の戦いで、女神は彼女に抵抗するために腕輪を作った。偶然その頃、彼女も女神を消すために同じ能力を持った僕を作った。同じ能力ってことは、同じデータから作ったってことだ」

ようやく理解したカイトは顔を上げる。

「つまり、元を正せば同じってこと？」

「そういうこと。片方が消えれば元のデータは損傷する。損傷したデータだと生き残っているもう片方のデータも姿を保てない」

根底で繋がっていると言われてとても不思議な感覚を覚えたカイトは思わず右手を見た。

「今言った通り、僕はハロルドではなく彼女に作られた。そして、彼女の死は、僕の死を意味している」

なるほどね、とヘルバが頷いた。

「逆を言えば、あなたが生まれたことが彼女の生を表しているってことかしら」

「その通り。考えてみれば不思議じゃない。“波”は彼女の手駒だったし、知らないうちに因子が紛れていた可能性は大いにある。そして彼女はほんの一部でも生きていれば充分に再生可能だ」

「わかったわ」

「それなら話しを元に戻そう。僕が“波”を危険視していたのは、彼女がかつての駒に呼びかけると思ったからさ」

「…つまり、“八相”がまたモルガナの手先になってしまುತ್ತてこと？」

「うん。“波”が再び敵になるのは脅威だ。だからこそ僕は憑神の動向を見張っていた。幸い彼らは一力所に固まっていたからとても楽だったよ」

その話を聞いてカイトはハセヲを思い出した。

「わざと名前呼んで反応を見たりしたけど、今のところ異常はない」

「クビア、憑神を持ったPCはどうなるの…？」

カイトの言葉にクビアは暫く悩んだ。

「“波”がいなくなって普通のPCに戻るだけだと思うけど、最悪“波”に取り込まれるんじゃない？」

まるでどうでも良いかのような口調だった。至って平然とした、興味のないような口調だった。

「そんな！」

「…あ、いや、最悪の場合だよ？どうなるかなんてわからない。こ

んな事態は初めてだし、マハのように“波”が取り憑いているPCに少しでも愛情を感じているのであれば、“波”もPCを傷付けなように、細心の注意を払うさ」

それは取り繕うような言い方ではあったが、今のカイトにはそれに縋る他なかった。

「…マハ。ミアのことね」

ブラックローズの言葉にカイトは頷く。

「うん。ミアはエルクと再会したんだ。ミアは他の全部を忘れても、エルクのことは覚えていたよ…」

「僕が知っているのはこれだけ。彼女の復活と“波”が暴走していないことだけだ。質問は？」

「貴様がこちら側にいる確実な証明が欲しい。……悪いとは思うが、こればかりは仕方ない」

「バルムンク！」

「よせ、カイト。バルムンクが正しい」

バルムンクの言葉を咎めようとしたカイトをオルカが止める。隣にいたブラックローズも顔を俯かせた。

「…そうよね。一番危険だった敵が突然味方になったら、裏切られないか心配よね…」

「ブラックローズまで…」

その様子を見ていたクビアはふむ、となにかを考えるそぶりを見せた。

「…わかった。僕の唯一の持ち物はこの鎌だ。これを預けておくよ。そして誓いを立てよう。誓いを破るほど、僕は愚かじゃないからね」
鎌をバルムンクに押し付ける。それを受け取り、彼は言った。

「その誓いとやらはみなの前でもらう。手間が省けて良いのである」

「合理的なのは好きだよ。あ、僕あっちに行って来て良い？」

質問は形ばかりでクビアは返事も聞かずにひよいひよいと行ってしまった。途中ゴミの物色も忘れない。

「私、落ちるね」

「あ、ブラックローズ…」

「ごめん。ちょっと考える時間欲しい。眠たいし」

「うん。付き合ってくれてありがとう。お休み」

ブラックローズの姿が消えるとバルムンクも口を開く。

「俺も落ちる。カイト、あいつをすぐに信用してやれなくて悪かったな」

「ううん。僕の方こそごめん」

そして彼の姿も消えた。ヘルバもいつの間にか姿をくらましていて、残っているのはカイトとオルカの二人だけだ。

「お前は寝なくて平気か？」

「うん、寝溜めしたから」

でもちよつと疲れた。と言ったカイトの肩にオルカが手を置いた。

「行つてやれよ」

「え？」

「バカ。何年お前の親友してると思ってる。あいつを追いかけたいつて顔に書いてあるぞ」

カイトは思わず両手で顔を覆って、すぐに走り出した。オルカがそれを見送る。

「ヤスヒコ！」

「おー？」

「…お前は最高の、親友だ！！」

なにかを答える前にカイトは足早に去ってしまった。一人残されたオルカは苦笑する。

「…だからヤスヒコじゃないっての」

慈愛に満ちたその笑みに、誇らしさが見え隠れしていた。

和解

カイトはゴミの中でうずくまる黒い少年を見つけて声をかけた。

「クビア！」

「…カイト」

クビアはまだ壊れたデータを漁っていて、なにをしているのか眺めていると持っていた棒に刃を繋げてみせた。

カイトは目を見張って、すぐに拍手をする。

「凄い！どうやったの？」

「…簡単だよ、こんなの」

照れ臭いのか少し頬を赤らめた彼は先程ヘルバに言ったことと真逆のことを言った。

「…鎌を作ってるの？」

「うん。持っていたのは渡しちゃったから」

それを聞いてカイトは顔を陰らせる。

「…クビア」

「どうかした？」

「僕はクビアを信じてるから」

その言葉にクビアは動きを止めた。ゴミ漁り、もとい部品集めを止めてカイトを見る。

「…僕はあいつらが言った言葉を気にしてないよ。当然だ、僕も同じことをするよ」

「…でも」

「カイトは優しすぎる！ちょっとは疑いなよ。僕が裏切ったらどうする気？僕だけじゃない、他の奴らの場合だってそうだ！」

その言葉にカイトから躊躇いの感情が消えた。さっきまでクビアの言葉に同意すまいか迷っていたのと打って変わって、優しく穏やかに微笑んでいる。

「大丈夫だよ」

ゲームの世界で温もりは通じるのかわからないけれど、少しでも通じれば良いと願いながらクビアの手を握った。

「信じてたのに。……って言う人はバカだ。その人がなにをしても、どこにいても、誰と歩もうとも、ずっと大切に思える。その人の行動で傷付くなんて有り得ない。それが信じ続けるって意味だ。多くの人はその言葉を誤解している」

カイトの瞳を覗き込めば、そこにはただ凪いた感情があるばかりでクビアは僅かな恐怖すら感じた。

「他の奴らだつて裏切るかもしれない。そう言ったね。でもね、僕は仲間を信じてる。それ以前に、みんなが裏切った場合のことを考えることこそが、僕の仲間への裏切りだ」

狂気とさえクビアは思った。

「僕はクビアを信じてる。だからなにがあっても裏切りはない。だからクビアは思ったままに行動して良いんだよ」

「……バカだね、君は」

「よく言われる」

カイトは笑う。クビアは笑い返す自信がなくなったので再び落ちているものを物色することでそれを隠した。

「でもカイト、人間は弱い。実際裏切りはある。信じているのは辛くないの？ 傷付く可能性が上がるんだよ？」

「……うん、傷付くのは怖い」

「なら、どうして君は信じるなんて言うのさ？」

「……信じられない自分が許せないからだよ」

クビアが顔を上げた。カイトはその場に腰を下ろして足を伸ばす。

「許せないんだ。誰かを疑う自分も、誰かを信じられない自分も。だから僕は人を信じるって決めたんだ」

もう決めた。愚直なまでに人を信じることを。潔癖なまでの素直さで。清純なまでの潔さで。無知なまでの強さで。

守ること。信じること。そうして業を背負って行くことを、決めて

しまったから。

クビアは理解ができないと首を横に振る。

「カイト、やっぱり僕らは対なんだ」

柄の先にも小さな刃を付けてクビアはそれを置いた。

「人は疑わなければならぬ。人を信じてはならない。そうしなければ痛い目を見るのは僕だ。疑わないことも信じることも、している僕を僕は許せない。それは甘さだからだ」

でも僕は、とクビアは続けた。握られた手に力を込めれば、それは握り返される。

「……でも僕は？」

「……秘密」

「えー。教えてよ」

「いつかね」

クビアはそう言うのと横に置いた鎌を持つて立ち上がる。片手は握られたままだったのでカイトもつられて立ち上がった。

「完成したよ」

「本当？ 凄いよクビア！」

見せてもらった鎌は大きな刃を付けたものだ。両端にも刺が付いていて、切るだけではなく突くことにも殺傷能力を持ったものだ。「完全に僕のオリジナル。名前はとうしうか？」

「あ、そっか。自分で考えるんだ。名前ないもんね」

「うーん……。武器ってどんな名前が付くものなの？」

アイテムを覗いたカイトは持っているものを読み上げる。

「え、ああ、そうだなあ……。『天上天下唯我独尊』、『二人は一緒、楚良の双剣』。あ、『双剣クロ口』がある。売ったと思ってたのに。それに……。『最後の裏切り』……」

「へえ、名前ってなんでも良いんだ？」

「……うん。好きな言葉で良いと思う」

一緒に考えると目で訴えて来るクビアにカイトは神妙な顔で頷いた。

暫く二人は黙って悩んだ。

「僕ら是对だから、それらしい名前を付けたいかな」

クビアが何故そこまで“対”にこだわるのかカイトにはよくわからなかったが、その言葉に頷いて提案をする。

「お互いに単語を一つ言い合って、上手く繋げるのはどう?」

「うん、わかった」

二人はまた暫く悩んだ。

「……対象?」

「反逆…?」

クビアとカイトは呟いて顔を見合わせた。カイトは呟かれた言葉を繋ぐように言った。

「対象の反逆者、はどう?」

「うーん…。対象なる反逆者、かな?」

「あ、うん。それ良い!決まりだ」

クビアは出来上がった鎌に手を翳す。その手をゆつくりと横に移動させると、追いかけるように鎌の色が黒くなって行く。

「カイトのカラーは赤だから、青の方が良い?」

「ううん。クビアには黒が似合うから」

「じゃあグラデーションにしようつと」

再び手を翳して色を変える。黒と青のグラデーションになった。

慣らすように手で何度か握ったり、手の内で回した。

「…うん。大丈夫」

「良かった」

「カイト」

クビアが笑ったのでカイトも微笑み返した。

「君が信じてくれるなら、僕は君を支えるよ」

「クビア…」

不覚にも感動してしまった。もらった感動に同じだけのものを返し

たくて、カイトはどうすれば良いのかわからなくなってしまった。

「%イト」

「…え、トラ!？」

このときカイトはトラに駆け寄ってしまった。トラの目に、振り向いて駆け寄るカイトの影に隠れていたクビアの姿が映ってしまったのだ。

「わざわざここまで探しに来てくれたの?ありが……!？」

たんつと大地を蹴る音がして、目の前にいたはずのトラの姿が消えた。

振り向けば、トラはクビアに切り掛かっているではないか。

「な、なにを…!？」

「削? える」

「初めまして、カイトのコピー。いきなり攻撃とはご挨拶だね!」蹴り飛ばせばトラの身体は後ろに着地した。クビアの蹴りの威力を落とすために咄嗟に身体を引かせたのだ。

「…やるじゃん」

称賛を送ったクビアは伸ばしていた足を元に戻す。トラが再び双剣を構えた。クビアは今度こそ本気で反撃にかかるだろう。

カイトは意味もないのに肺いっぱい空気を溜める。溜めた息を吐き出してカイトは怒鳴った。

「こらあーっ!！」

「やつほー(^o^) / ……で、なにしてるの?」

「やあ、ミストラル」

やって来たミストラルが見たものはトラと見知らぬ少年がカイトの前で正座された姿だ。首を傾げているとカイトは胸を張って答えた。
「喧嘩両成敗だから」

「……よくわかんないなあ。この子誰？」

「クビア。今日から仲間になったんだ」

「そうなの？……ミストラルだよ、よろしく（o^_^）b」

「喧嘩両成敗とか言ってるけど、僕はなにもしないからね！」

「まだ反省してないの、クビア」

「だってなにもしてない！」

確かにカイトから見ても悪いのはトラである。しかし、だからと言って大切な“弟”に反撃したことは確かで、交戦しようとしたことを無視することはできなかった。

ミストラルがうんうんと頷く。

「ま、確かに両方叱った方が後腐れなくて良いもんねー」

「でしょ？……さて、二人とも、なにか言うことは？」

「だから僕は悪くないってば！」

「……カイ？」

「なに？」

伊達にリーダーはやっていないのだと痛感しながらトラは素直に頭を下げた。

「……ごんなさ」

「よろしい」

本音を言えばものすごく悔しいのだが、とにかくお許しが出たのでトラは立ち上がった。

「クビアはまだダメ」

一緒に立ち上がろうとしたクビアは止められる。不満よりも驚愕が大きく現れた表情で尋ねた。

「なんで!？」

「一言、ごめんなさいって言うだけで良いんだよ、クビア」

「ごめんなさいって謝る言葉でしょ？僕は悪くないのに、どうして謝らなくちゃいけないのさ」

「ああ、そう。残念だなあ……」

「……なにその含みのある言い方は」

「別にー？」

言ってカイトはミストラルを振り返った。

「ところでミストラル」

「ん？」

「クビアの説明まだだったよね？」

その問いにミストラルは首を傾げた後に正座しているクビアに視線をやって、またカイトに戻す。心なしに苦笑した様子で頷いた。

「…うん！」

説明をしても、ミストラルが怒った様子はなかった。それを疑問に思いつつ、カイトはクビアに向き直る。

「それではまだ謝るつもりがないクビアさん」

妙に畏まった言い方をするカイトに眉を寄せてクビアは返事をした。

「…なに？」

「堂々巡りだから僕は君に呪いをかけた」

「……呪いいい？魔法も使わないで？というかステータス異常になつてないし」

「うん。でもかけた」

はつと鼻先で笑いクビアは嘲るように口を開く。

「どうぞ？…言つとくけど僕、あんまり信じてないから」

「それは個人の自由だから。さあ、もう立って良いよ」

「……………良いの？」

不信感を募らせながらもクビアはようやく解放されたばかりに立ち上がった。

「うわあああああつ！！」

クビアが叫びながらぶつ倒れた。地面に転がる彼を見てトラが腰を抜かした。カイトを見る目に恐怖が混じっているのは気のせいだろ

うか。

「い、痛い、痛い！カイト、痛い！助けてよ！？」

「…呪いだから」

クビアは足の痛みに必死でカイトが目をそらしたことに気が付かなかった。

「ごめん、ごめんってば！だから呪い解いてよ！？」

「時間が経てば治るから」

ミストラルはつつい笑ってしまった。クビアにしてもトラにしても、正座を長時間すれば痺れると言っことを知らなかつのだろう。当然だ。彼らはデータなのだから。

「酷い…！！」

「な、@ し #だ…？」「さーね！二人とももう喧嘩はしないように！」

カイトが逃げるようにその場を去ったので、ミストラルもそれに続くことにした。

それきりクビアとトラが暴力的な喧嘩をしなくなったとかそうじゃないとか。

契約（前書き）

ここで重要なお知らせがあります。

実は柚季の馬鹿、hack / G・U・なるものを、

やっていない！！

笑い事ではないですね、すみません。だから柚季はエンデュランスとかアトリとか、出したくても出せないんですよー！！

キャラクターの設定とかは一応理解しています。いやー、便利ですね！ウィキペディア！！

と、言うわけで、口調とか全然わからないので誰がご親切な方が教えてくれないかなー、なんて…。ダメ？…ですよねー。

契約

「…ミストラルは怒らないの？」

「ん？」

遠くで「うわーん！」と言っているクビアの声が聞こえる。トラはその近くで謎の呪いに怯えていることだろう。

「悪戯のこと？気付いていたのに黙ってたんだから共犯だよ」

ただの自然現象であるが、カイトの時間稼ぎに手を貸したのも事実だ。もしかして痛覚あるんじゃないか、とカイトが思ったことは正解だったわけだが、

「そうじゃなくて」

カイトは首を横に振った。

「…ブラックローズやバルムンクみたいに、怒らないのになって」

うなだれるカイトを見てミストラルはあっさりと言った。

「悪いことした自覚あるんでしょ？」

「……うん」

「ならいーのっ！」

ミストラルは笑った。

「ブラックローズもバルムンクも、カイトに怒ってるんじゃないよ？なにもできなかった自分がもどかしくて、そのイライラをカイトにぶつけちゃっただけ」

「……うん」

「その気持ちをカイトはしっかり受け止めて、次に生かせた。それで良いと思う」

この人はやっぱり母親なんだとカイトは改めて思った。

「ミストラルは優しいね」

「いっぱい怒られた後は、誰かが元気づけてあげなくちゃだもん！ずーっと反省を続けるんじゃないかって、前向きにならなくちゃ！」

いつだって天真爛漫な彼女は、能天気のようにいろんなものを見て

いる。

「いつかね、支えてくれる人に申し訳ないって気持ちはなくなるよ。傍にるのが当たり前になって、むしろ傍にいないと『なんでいないの!?!』ってなるからさ」

だからカイトにもそんな日が早く来たら良いとミストラルは望むのだ。

「あはは…。ありがとう」

「三人…、オルカを入れて四人。まだまだ若いんだから、一度や二度の失敗なんて気にしちゃダメ!」

頷けば目の前にいる少女の姿をした母親は顔を綻ばせた。

「わかったなら、少しの間ログアウトしておいで?」

「…え、でも」

「春休みがもうすぐ終わるから今の内に?…でもねー、ゲームのやり過ぎは身体に悪いよ。大学生は休みが多いし、時間はあるよ。肝心の敵がいらないんだから、今の内に休んでこい」

「はい」

なんだか素直に頷けてしまうのは、ミストラルが母親ゆえだろうか。カイトはログアウトすることを決めた。

「オススメはあ、ログアウトしたらお風呂に入って歯磨きして、それでゆつくり寝よう。起きたら夜中だろうけど食事をして散歩。夜のお散歩はなにかをじっくり考えられるから。最近怒られてばかりで疲れてるでしょ?心身ともに休めることが肝心だよ」

にこにこしながらミストラルは手を振った。

考えてみれば最近疲労が溜まるが多かった。それはミストラルが言うように怒られるばかりが原因ではないし、彼女もそれに気付けていたがあえて言わなかつたのだらう。その優しさが今は有り難かった。

コントローラーとカメラを置いてパソコンの電源を落とす。

湯を張るのが面倒だったのでシャワーだけ浴びればその時点で“力

イト”は眠気に襲われてふらふらしてしまった。

タオルケットも被らずにベッドに身を投げ出すと、そのまま意識を手放した。

(…昂、司……。ごめん、今だけ…、休ま、せて…)

「カイトは？」

やって来たバルムンクが周囲を見渡した。その場にいるのはミストラルとオルカとトラ、そしてクビアだ。

「一緒じゃないのか？」

バルムンクがまた尋ねる。ミストラルとオルカが顔を見合わせた。

「今はいないぜ」

「戦士の休息中」

なんだそれは、と笑いながらバルムンクは彼らに歩み寄った。

「休んでいるなら良かった。いろんなことがあったからな」

言いながらバルムンクはクビアを睨んだ。

「……なに」

「貴様がいなかったらもつと楽だったろうにと思ってな」

「そういうあんたこそ、カイトを叱ってばっかで支えられなかったくせに」

「……なんだと」

険悪な雰囲気の中、今にも武器を取り出しそうとした二人にミストラルの呑気な声がかかった。

「喧嘩するとまたカイトに呪いかけられるぞ」

「…！？」

「呪い？」

面白いくらい動かなくなったクビアを不審そうに見れば、オルカとミストラルは笑うばかりだ。

それらを遠くで眺めていたヘルバはこっそりと口角を上げた。

もつと険悪でギスギスした空気になると思っていたが杞憂だったらしい。

目覚めた部屋は真っ暗で、夜になっているんだと気付く。“カイト”はごしごしと目を擦りながら身体を起き上がらせた。

「……………散歩」

そつだ散歩だ。起きたら散歩をすれば良いとすすめられたのだった。顔を洗い身支度を軽く整えてから“カイト”は外に出た。

涼しげな風が身体を通る。電灯が暗い道を照らしていたが、わざと明かりがない道を選んだ。

今は何時だろうか？誰もいない道で考えてみるがすぐに放棄した。それよりも考えなくてはならないことがあった。

真っ暗な道で立ち止まる。

きつとクビアはこんな暗闇で生まれた。闇をそのまま映したようなその姿は、輝く女神とは対照的だ。

そして司と昴が消えた先だ。

別に二人が消えた先が樂園だとか、そんなふうに考えたことはなかった。そんなふうに思える程“カイト”は幼くない。

いなくなつた過去よりも、生きている現在を見るべきだとわかつていたのだ。それでも振り返らずにはいられないのだけど。

“カイト”は歩き出した。ついでだからなにか買物でもしておこう。

「あれ？」

明るい大通りに出ると、横断歩道で“カイト”は首を傾げた。

目の前で車やバイクが走って行く。そんな中、突然明かりが消えたのだ。周囲を見渡せば、コンビニやスーパー、信号に家からもれた光、全てが消えていた。

不思議に思いながら前を見ると車の急停止した音が響いた。

「……え？」

明かりはない。車から人が出て来た。車同士がぶつかる交通事故だ。駆け出そうとすると、人が降りたはずの車が動いたので思わず立ち止まる。後ろから来た車が勢い余ってぶつかったのだろう。そうやって事故は連鎖して行く。

運転手同士の怒鳴り合い、怪我をした人の叫び声や泣き声。歩行者の悲鳴。それを見て、何故か足が動かなかった。

「……っ！」

“カイト”は喧騒を背に走り出した。今日はもうゲームはしないと考えていたがそんなことは言っていられなくなった。

携帯電話を開き仲間へ一斉メールを送る。

（…あの時と同じだ）

カイトが腕輪を使い続けたために起こった横浜の停電。しかし今回はまだあの時程腕輪を使っていない。それはつまり、彼女がなにかしらの影響を与えて来たと考えて間違いないだろう。

家の鍵を乱暴に取り出し扉を開く。脱ぎ捨てた靴を揃えもせずにパソコンの電源を入れた。

「……許さない、モルガナ・モード・ゴン…！」

お前とは、クビアと違い和解できそうもない。

怪我人が出た。しかも身近で、だ。もしかしたら死人だって出たかもしれない。

これは彼女からの挑戦状だ。そう決めた。

仲間を集めて、対策を考え、力を溜めなければ。そしてそれには、クビアの協力が必要不可欠だ。もう気に入らないだのなんだの言わ

せている余裕はない。

「…行くよ、“カイト”」

ネットで生きるもう一人の僕。

突然次々と現れた仲間バルムンクは目を丸くした。オルカと顔を見合わせる。

「どうしたのだろう？」

「…さあ？」

「あれ？カイト来てないのか？」

近寄って来た兎丸がきよときよとネットスラムを見渡す。相変わらず奇抜なデザインをしたPCだと思いながら二人は首を横に振った。

「……いや」

「というかなんだ？集合かったのか？」

「ああ。急遽ネットスラムへ、と」

現れたガルデニアが頷く。オルカがメールの確認をした。

「…あ。本当だな」

「なー、あの子誰なん？」

レイチエルがゴミを漁るクビアを指し示した。毎度のことながらその問いにバルムンクは苦い顔をする。

「…クビアだ」

「新しい仲間だと」

「へー。ちよつと話してくるな！」

「俺も俺も！」

レイチエルと兎丸がクビアに近寄った。黒い少年が至極面倒そうな顔で顔を上げる。

「…なんか嫌がってませんか？」

なつめが不安そうに尋ねると、バルムンクが憮然とした表情で答え

た。

「問題ない。カイト以外には常にあんなものだ」

「……みんな!!」

聞き慣れた声に一齐に振り向けば、やって来たカイトは一瞬気圧されたように足を止めたがすぐに気を取り直したように口を開く。

「みんな集まってくれてありがとう。バルムンク、クビアに誓いを立てると言っていたよね？」

「……ああ。そうだが」

「本当はもっと時間を取って、みんなに事情を説明してからと思っていたんだけど……」

「現実でも影響が出たんだろ、カイト？」

「……クビア」

なにもかもわかっていたような顔でクビアは笑う。

「君は正しい。急がなくちゃいけない」

「うん。だからクビア、誓って。みんなのために」

「そして君のために」

クビアが武器を取り出した。ヘルバやミストラル、ブラックローズが仲間へ事情を説明している。バルムンクはカイトに向かって頷いた。

鎌を地面と平行に持ち、クビアは膝を着いた。

「カイト、君は僕の始まりだ。君が腕輪を手にして僕は作られた。

君は武器を手にして僕と戦った。君は破壊を腕輪に与えて僕を壊した。全てに置いて僕の初めてである君に誓う」

クビアは膝を着いたまま顔を上げた。

「君が仲間を信じて、彼らを守ると言うのなら、僕が君を守ろう」
立ち上がる。カイトが目を丸くしていた。

「僕、反存在クビアは、守護者カイトを守り抜くことをここに誓おう」

ずっとな疑問だった。女神を守り、世界を守り、仲間を守り、

“弟”すら守るカイトを、誰が守っているのかと。

女神の加護が？仲間の支えが？そんなの嘘だ。特定の事態にしか反応しない女神の加護も、結局カイトに頼り切る仲間の支えも、肝心なところでカイトを守ってはいないのだとクビアは思う。

「クビア…」

双剣を取り出してクビアの鎌と交えたカイトは口の動きだけで言葉を伝えて来た。

『ありがとう』

きつと本当に守ってくれるなんてカイトは思っていないのだろうけど、今はそれで構わない。

クビアは生まれてからの一番の笑顔でカイトに笑いかけた。

葛藤（前書き）

しばらく旅に出ます

葛藤

クビアの鎌が敵の腕を切り裂いた。

「…カイト、今だ！」

「うん！」

カイトは右手を翳した。

「ドレインハート！」

ウィルスコアを手に入れると、カイトは隣にいたブラッククローズとハイタッチをする。

「ウィルスバグ駆除」

「完了！」

「さ、戻るわよ！」

「うん。………あっ？」

歩き出したブラッククローズを追いかけようとしたら身体がふらついた。慌ててブラッククローズが支えてくれる。

「ちよつと、大丈夫！？」

「……ん、ありがと。大丈夫だよ」

「……………」

クビアがそれを遠くから眺めていた。

「…このままじゃ君は倒れるよ、カイト」

ネットスラムに戻ると、座っているカイトに近づいたクビアは開口一番にそう言った。

「え？」

「僕が参戦してからもう三週間だ。毎日のように腕輪を使い続けられ、いつか君は壊れる。それにだいがくって言うのにも、行ってい

るんだろ？休む間もないじゃないか」

「…うーん、わかつてはいるけど…、僕以外にはできないから」
「…それだよ」

「うん？」

「いるじゃないか。カイトのコピーが。あいつはそのためにいるんだろう？」

「……違う！」

突然声を荒げたカイトにクビアは冷めた視線をやる。

「違わない。あいつは、カイトの負担を減らすために女神が授けた武器だ」

「トラは僕の“弟”だ」

「兄弟ごっこはもう良い！カイト、君は生きた人間なんだ！僕らみたいに修復はできないんだよ！？」

「だからって傷付けて良いわけじゃない。僕が楽するために傷付けなんて言えないよ！」

「だからってカイトがそれを背負う必要ないだろ！」

カイトがなにか言い返そうとするのを押し止めクビアは一度深呼吸をした。

「…カイト、僕は誓った。君を守ると」

「…そうだね」

「君は仲間が傷付くのは極端に嫌がる代わりに自分に無頓着だから」
「…ま、まあ、そうかも」

「だから、君をみすみす怪我させるわけにはいかないの。わかった！？」

「…だからってトラにデータトレインは」

「今危ないのは君だろ！！一回や二回のデータトレインでどうになるなら、とつくに“八相”なんていなくなってるっての！！」

なんとも道理である。言い返す言葉が見当たらなくてカイトは押し黙った。

というか恐い、クビアが。

「…カイト、女神は君を愛してる。その女神が君が傷付くことを望むはずがないじゃないか。だから、君はトラと協力すべきだ。なによりも女神のために」

その言葉は驚く程簡単にカイトに浸透した。クビアはそれを眺めて目を細める。

誰かのためと説明すれば彼はすぐに納得するのか。あるいは『女神』を出せは納得するのか、彼には検討が付かなかった。

「……ありがとう、クビア。そうだね、僕がアウラの守護者なんだ」

彼女のためにいるんだ。その言葉は音にならなかったが、クビアにははつきりと聞き取れたような気がした。

「僕、ちよつと出かけて来るよ!」

カイトはその場を離れようと歩き出す。

「あ、カイト!」

「なにー?」

振り向けばクビアはにっこりと笑う。

「次もこんなことがあったらぶつ倒す!!」

「……………」

僕を?と尋ねることがカイトにはできなかった。

「…あーあ……………」

クビアがどしんと腰を下ろした。故意か偶然かその隣に座っていたのはトラである。

「……………」

「信じられない!愛してるだって?自分が良い子過ぎて嫌気が差すね」

「…な　×にきた」

「君に忠告」

凍え切った視線はクビアがカイトに決して向けることがないものだ。

「君はカイトと違って生まれた意味を理解してるだろ？なら、さつさとデータドレインでもなんでもしなよ」

「…@イトは な§言っ＊」

「…はあ？カイトがするなって？言っに決まってんじゃん、君馬鹿だろ」

「……………」

「カイトの指示じゃない。女神の意思が問題なんだ。お前はカイトに甘えてるに過ぎない。作られたにしては随分と甘ちゃんだね、お前は」

トラは膝を抱えた。

クビアが言っていることはトラ自身も思っていたことで、カイトが甘やかすからそれを満喫していたのは確かだ。

「戦え、コピー。お前はそのためにいるんだろっ」

「……………」

なにも答えなくなったトラにクビアは溜息を吐いた。

「…別に女神のために動いてるわけじゃないんだ」

「……………」

「なのに君を戦いに出すことも、カイトの負担を減らそうとしてることも、結局は女神の願い通りだよ！？あまつさえ女神は君を愛してるなんて言っちゃってさ！別に好きでもないのに、まるで女神の意思を伝えるために僕がいるみたいじゃないか！！」

ものすごい速さで表示される言葉にトラが返事を返すことは叶わなかった。早過ぎる。

「母も女神も神気取りで鬱陶しい！そのくせ実際戦うのは二人じゃなくてカイト達だ。なんて迷惑なんだろう！」

別に気取っているわけではなく、実際に神様だとトラは思ったが、それを言うことは止めておいた。別に話す行為は好きではない。

「…ここにいたのか」

「オルカ」

グリーマ・レーヴ大聖堂。カイトが一人になるときは大抵ここだ。

「あんまりエリアにいない方が良いんだろ」

「うん。……そうなんだけど、ね」

「なんかあつたか？」

「…クビアに怒られた。トラもデータドレインが使えるのに、使わせないから」

「…あー……。そりやあどっちもどっちだな」

「だろ？…だから落ち込んでるんだ」

「なんでだよ？」

「心配かけてるんだなって」

「そりやそーだろ。むしろ心配されてないと思ってたのか？」

「…そういうわけじゃない、けど」

「俺はクビアに賛成」

「オルカ？」

「みんなお前を心配している。休んで安心させるのもリーダーの仕事だろ。それに、カイト以外にもウィルスバグの対処ができるってみんなもいざつてときに態勢立て直すのが楽だ。みんなにもカイトにもラッキーだろ？」

「…ふふ。そうだね。オルカに諭される日が来るなんて……（笑）」

「どういう意味だよ！？」

頭をぐりぐりと撫でられる。

「痛い、痛い」

「痛くねーだろ、PC」

「気分だよ」

何度もカイトは実感する。支えてくれる仲間がいるから頑張れるのだと。

「…トラに、頼みに行くよ」

「おう。どうせここにずっといるわけにはいかないしな」

「…と、言うわけで」

カイトはトラの前に正座する。仲間からの苦笑混じりの視線が何故だか痛かった。

「協力して下さい」

頭を下げるとトラの戸惑った雰囲気伝わって来た。

「虫が良い要求だってわかってる。使うなとか言ったくせに、危なくなっただけから手伝えなんて…。でも、お願いします」

「……………な@を？」

「…なにをって、つまりその、データドレインを」

「…*んだ、そ　な\$」

「…そんなことって」

「や　決ま&#¥る。役\$だ　+な」

周囲がその言葉を理解せずともカイトはそれを理解した。

「ありがとう、トラ」

「……………別」

立ち上がり、みんなの顔を見渡す。笑っているオルカと目が合ったので笑い返しておいた。

「…で、これからなににするのか決まったわけ？」

ブラックローズの質問にカイトは頷く。

「うん。もう決めた」

「なにすんのよ？」

「僕はクビアの助言のおかげでまだ先手を打てるはずだ。…だよ
ね？」

途端に不安げになるカイトにクビアは緩く首を振った。

「…いや、おそらく彼女は僕の裏切りに気付いている。先手って言うても、そこまで大それたことは…」

「それでも良い！小さなことでも、それで前に進めるなら」

クビアはわざとらしく溜息を吐いて、仕方なさそうに笑った。

「今できることは、“八相”の対処だ」

トラが顔を上げた。

どうして今ここに、ワイズマンがいないのかわからなくてカイトは戸惑った。こんな作戦会議には、いつだっていたと言うのに。

そんな哀しみや切なさになに思いを振り切って、カイトは口を開く。

「……ハセヲに、会いに行く」

葛藤（後書き）

次話書くために旅に出ます

出場（前書き）

お久しぶりです、帰って来た柚季です。

どこまで書いたのか忘れて投稿済みの文字達を読み返して、誤字が見付かる見付かる…。

もはや笑うしかない。

皆様の高性能な脳で柚季のなりそこないの文字達を修正していただいていることに気付き大変失礼なことをしていたと思いました。すみませんでした。

これからも至らないことが沢山あるでしょうが、よろしく願います。

出場

「ハセヲさん！」

「アトリ」

ぱたぱたと駆けて来る呪癒士の姿にハセヲは笑みを浮かべた。

「あの、今日はがんばりましょうね！」

「おう。揺光の奴が竜賢宮に出るって騒いでたからな。宮皇の座はまだ譲る気はないぜ」

「あんまり興味ないんでしょう？」

「……ないけど……負けるのはむかつく」

「……ふふふ」

アトリは口到手をあててくすくすと笑う。

それを見ながらハセヲは彼女に“彼”のことを言うべきか迷う。

「……ア、アトリ」

「はい？」

「……あー……シラバスの奴は？」

「間に合うように来るって連絡来ました。どっちにしろ、トーナメントが始まらないと出番はないから良いと思ったんですけど……」
急いでって返信した方が良かったですか？と尋ねるアトリにハセヲは首を横に振った。

どうせ言いたいことはシラバスについてではなかったのだから。

『……友達だからだよ』

真っ赤な背中が、あの日からちらついてならない。

「……うるせえな……」

聞き取れなかったがハセヲがなにか呟いたことに気付いたアトリは顔を上げた。それに微笑んでなんでもないと首を振る。
どんな理由があろうと“彼”は今ハセヲの敵だ。

次会ったときは、必ず殺す。

「…良い？チームはリーダーを含めて三人。十六位までに入るとトーナメントの出場が可能になるわけ」

「うんうん」

「で、トーナメントに優勝すると、宮皇への挑戦ができるのよ。今回あんたが会いたがつてるハセヲって、ハセヲチームのリーダーでしょ？」

「……たぶん？…他にハセヲさんがいないなら」

「それなら竜賢宮の宮皇だから、優勝するしかないわね」

「うわあ！ハセヲって凄い人なんだね！」

微妙に失礼な言葉にブラックローズは呆れを隠せなかった。

「はい、ここまででなにか質問はある、初心者？」

「…ありません」

「じゃ、まずは連れて行く二人を選ぶこと！」

今カイトはブラックローズからアリーナの説明を受けている。

ハセヲに会うと言い出したものの、その方法を一切考えていなかったカイトに、ヘルバがアリーナへの出場をすすめてくれた。

しかし、ここはやはり初心者街道まっしぐら。むしろ学ぶ気がないんじゃないのか疑いたくなる程になにも知らないカイトは、やっぱりアリーナがなにかを知らなかった。そんな彼にブラックローズが説明していたところだ。

「…えーと、じゃあヘルバとエルク…」

「エルクはいないでしょ」

「…えっと、ならワイズマン…」

「もないでしょ」

「……じゃあミストラルだね」

彼にとって一番戦い易いチームは、彼自身が囷になって、後ろの二人がドカンとやってくれることだ。ブラッククローズもそれを知っていて、溜息を吐きながらも頷いてくれる。

「わかった。じゃあ私は観客席にいるみんなをまとめる役ね」

「あれ？怒らないの？」

彼女の眉間に深い皺が寄せられたのを見て、カイトは地雷を踏んだことを自覚せざるを得なかった。

「あ、ん、た、はあ！」

「な、なに！？」

「怒らないのお？我慢してやってんのよ。ええ、気に入らないわ！相棒の私をほつといて他の奴選ぶあんたがね！私は弱くなんかない！！」

「う、うん。知ってる…」

ブラッククローズが強いのも頼りになるのも周知の事実だ。

「でも仕方ないじゃない！あんたと私以外にみんなをまとめる人はいないし、私よりヘルバの強いのも知ってるし、あんたが後方より前線のが好きだってわかってるもの！！」

「…ごめん。ごめん、ブラッククローズ」

ようやくカイトは自分がブラッククローズを傷付けていることに気付いた。それもたちの悪いことに無意識でそれは行われて来たのだ。我慢してくれていたことを理解だと勘違いしていた。怒っていたことを冗談だとすら思っていた。

気丈な彼女に対して失礼なことをしていた。

「謝るな！！」

一度怒鳴って落ち着いたのか清々したのかブラッククローズは普段の調子を取り戻した。

「良い？私を置いて行くんだから、負けたりしたら招致しないわよ！！」

「はい！」

ここは素直に敬礼。相棒として肩を並べている彼女に精一杯の敬意

を表す。

「……じゃあ、僕もう行くけど、みんなのことよろしくね」

「あんたも頑張ってね！」

うん、とカイトは頷いて、見送ってくれた彼女に背を向けた。

「……あれは……！」

竜賢宮を勝ち抜いている新人チームがある、と口々に噂されたそれを確かめにハセヲは足を向けた。

ほんの気まぐれだった。強ければトーナメントに出るだろうし、どんな奴か見てやるのはそのときでも遅くないが暇だったのだ。そしてその『勝ち抜いている新人チーム』とやらを見てハセヲは動きを止めた。

視界に飛び込んで来たのは、原色の赤。

背後に二人の白い魔導士を引き連れて、彼はそこにいた。

「……ハッ、バカじゃねーの……？」

なにが『勝ち抜いている』だ。そこらへんにいる雑魚にあの男が倒せるものか。なんせ彼はハセヲと戦い、そして勝ったのだ。

あんな屈辱的な敗北は初めてで、思い返せば不思議な感情がハセヲを満たした。

彼と戦えば、彼を殺せば、この感情も、きつと収まる……。

「……ハセヲ？」

唐突にかけられた声に一度身体を震わせて、ハセヲは振り向いた。ハセヲを暗い思考から引っ張り出した本人は嬉しそうに笑っている。

「エンデュランス……」

片目が隠れた長髪の斬刀士、エンデュランス。かつて紅魔宮の宮皇だった彼が佇んでいた。

「なに見てるの？」

「…別に。噂の新人チームを見に來ただけだ」
歩み寄って来るエンデュランスに顔を背ける。自分の暗い考えを見透かされなくなかった。

「強いのか？君が興味を持つくらいなんだから結構…」

不自然に途切れた言葉。ハセヲがエンデュランスに目を向けても、彼は微動だにせず一点を見詰める。

「エン…」

「…カイト……？」

「っ！？」

エンデュランスは動かない。ハセヲは彼の肩を掴もうとした。

「よう、ハセヲ」

「…っ！…クーン」

「なにしてるんだ？」

「…なにつて、エンデュランスが……」

「エンデュランス？」

クーンが首を傾げた。慌てて振り向けば、そこに彼の姿はない。

思わず舌打ちしてしまったことも、仕方ないと言えよう。

「…おい、クーン」

「……なんか怒ってる？」

「今日の挑戦、シラバスの代わりにお前出る」

「…はあ？俺が？シラバスは？」

「シラバスは病欠！今回はちよつと負けるわけにはいかねえんだ」

あいつは絶対に決勝に來る。その呟きと視線の先を見て、なにもわからないままとりあえずクーンは頷いておいた。

誰だか知らないが、とにかくハセヲとなんか因縁があるんだろう。詮索を嫌う彼との付き合いは、これくらい適当な方が良いのだ。

赤い双剣士がクーンの視線に気付き顔を上げた。

（……ん？）

クーンは首を傾げる。

なにか不思議な感覚がクーンを一瞬だけ支配したが、それがなにか彼にはよくわからなかった。それでも何故だか赤い双剣士から目が離せず、なんとなく呟く。

「…トライエッジに似てるからか…？」

「…どうかしたのか？」

「…や、あの赤い奴さ」

「…あいつはカイトだ。トライエッジじゃない」

「まさか勇者カイトか！？」

「…らしいな」

これ以上語るつもりはないと背を向けたハセヲに肩を竦めて、クーンはじつと勝利したカイトを見詰めていた。

再び現れた勇者。驚きと感嘆の中に、沸き上がった不思議な感覚は紛れて消えた。

出場（後書き）

またしばらく消えるかも。

迷走（前書き）

そろそろ本気で復活。

ちなみに知識は漫画だったりします。

迷走

エンデュランスは走る。ただ真っ直ぐに。行き先も考えずに、人と人との間を走り抜ける。

何故走っているのか。これではまるで逃げるようではないか。しかし、様々な感情が押し寄せて、エンデュランスに走れと命じたのだ。

カイトに会いたい。

明確な感情。姿を認めた瞬間の欲求。なのに何故自分は闘技場を背に走っている？この先にカイトがいないことはわかりきっているのに。

ハセヲの傍にいたい。

明白な感情。救ってもらったときからの願望。なのに自分はやはり走り続けている。この先にハセヲがいるなんてありえないのに。

エンデュランスは走った。目的もなく、ただ走った。

PCが息切れなんてするはずなのに、何故か胸が苦しくて。

カオスゲートまで辿り着き、思わず足を止める。しかしそれも一瞬のことで、エンデュランスはカオスゲートに手を伸ばした。

「…ミア……ッ！」

何故だろうか？無性に今君に会いたい。

わかりきっていたことだ。ハセヲは暗い笑みをみせた。

決勝に来るのは、絶対にこいつだと。

竜賢宮を最高記録で勝ち上がった赤い双剣士のチームを見て、ハセヲは口角をあげる。

隣でアトリが心配そうにハセヲを見上げた。仕方のないことだろう。こんな表情をするのもトライエッジを追いかけていた頃以来だ。比較的に穏やかに過ごしていたハセヲはこんな表情をする必要もなかった。

こんな表情にさせる程酷い裏切りだったのだ。

「……久しぶりだな、カイト」

「……ハセヲ……」

「……殺す。絶対にだ！」

獣のように吠えるハセヲにアトリとクーンは顔を見合わせる。まるで出会った当初のような彼に不安が煽られた。

「……随分嫌われたようね、ぼうや」

「珍しい。カイト人付き合い上手いの」

図太さで言うのならカイトの仲間はハセヲの仲間の一枚も二枚も上手に行く。

リーダーが優柔不断で初心者で頼りないからだろうか。独立独歩な彼らは我を通し言いたいことは必ず言い切る。例外はない。

遠慮なく会話に割り込んで来た二人にハセヲが苛立ちを見せたが二人が気にした様子はない。

亀の甲より年の功。とはよく言ったものだとかイトは感心したが、口にしたなら殺されそうである。

「……ハセヲ、僕らが勝ったら、聞いて欲しいことがある」

「言うことを聞けつて？ 良いぜ、勝てたらな！！」

「…ねえぼうや、あなたハセヲになにを要求するつもり？」

ここに来る前、ヘルバは尋ねた。

「…本当はね、逃げてつて言うつもりだった。暫くログインしないでつて」

そう言いたかった。とカイトは言った。

「……………協力、して欲しい。そう言うよ」

どのようにして“波”がモルガナに呼ばれるのかはわからない。しかしもし“波”を意思で操れて、モルガナの味方にならないようにできるとしたら。

「彼女の戦力を削げる。そういうことね」

「そう。もし成功したら、こっちの戦力も大幅に上がる」

「考えたじゃない、ぼうや」

カイトは情けなく眉を下げて笑った。

「僕、もう大学生だよ」

あの頃は良かった。なにも考えずにただ前を向いて走っていた。この先になにがあつても怖くなんかなかった。カイトが走れば誰かが着いて来てくれた。誰かがカイトの代わりに考えてくれた。

しかし今はもう違うのだ。カイトは中途半端に幼さを残して大人になつてしまった。常になにかを考えなくてはならなくなった。最悪の事態を想定しなくてはならなくなった。もう無鉄砲に前を向いて走ってられない。

「…あの頃は、無邪気になにかを信じていられた」

例えば頑張ればきっと勝てるだとか。例えばいつか誰かが救えるだとか。

「世界はもう僕らのものじゃない」

羨むような呟きをヘルバはただ聞いていた。

ハセヲが大鎌を持った。カイトが双剣を握り腰を落とす。戦いの火蓋は今切つて落とされた。

「……ッ……！」

他の仲間と同じように観客席で戦いを眺めていたクビアが頭を押さえた。

「……どうした？」

隣にいたオルカが声をかけて来る。それを手を翳して返事をして、クビアは痛みが過ぎ去るのを待った。

「……痛っ……！」

「おい、大丈夫か？」

「……くっそ、あの女……」一向に収まる気配のない痛みが悪態を吐き、暫くしてクビアはカイトとハセヲが戦っているのを見て目を見開く。

「……やめさせなきゃ」

「あ？」

「ダメだ。予想してなかった。守護者の前で行動を起こすなんてリスクの高いことやると思ってた」

「なんの話した？」

突然慌て出したクビアにオルカは困惑するばかりだ。

「ここから離れなきゃ。カイトを呼び戻して、あの黒いサブリーダ―は？」

「……お前ね、いい加減に名前呼べよ」

「うるさい、半分」

「俺の呼び方『半分』！？」

騒ぐ二人に三十郎が何気なく後ろを指した。

「ブラックローズなら後ろの席だぜ。みんなが見れる位置にいるんだと……って、おいあれ！」

三十郎が示したのはブラックローズではなく少し離れた場所にいる

オッドアイのPCと、それに付き従う片方の目の下に逆三角が描かれたPC。

気のせいではなくこちらに近づいて来る。

「おいおい…、あれが例の『碧衣の騎士団』って奴か？」

「マジかよ…。おい相棒」

「なんだ、オルカ」

「あそこ。…やばい賭けだとは思ってたけどな」

「…神威!？」

もうばれたのか、とバルムンクは唸る。決勝は始まったばかりだ。

例えば『碧衣の騎士団』を率いているのがバルムンクだったならば、件のPCがイベントに参加していたとしてもイベントを中止にしたりしないだろう。このイベントは戦っている当事者だけのものではなく、観客のものでもあるのだから。

ならば神威がそんなに親切かと言えば、答えは否だ。

彼女なら軽く頭を下げて当然のようにイベントに割って入り、周囲など知ったものかとPCを引っ捕らえるか削除してしまったあげくにいけしゃあしゃあと「ご協力ありがとうございました」と言うに違いない。

誰かが不快になるかではなく、いかにAIと不正を破壊できるかを気にしている奴なのだから。

しかしだからこそ、

「この戦いを邪魔させるわけにはいかないな」

この世界に大きく関わるこの戦いを。

バルムンクはオルカとともにブラッククロースの隣に立った。

「交戦するか？」

「仕掛けて来たらね」

オルカの問いにブラッククロースは肩を竦めて答えた。気付けば各々が応援を止めて武器を持つとまではいかないものの、警戒をしている。

「好戦的な奴だ。十中八九戦闘になるぞ」

「むしろ大歓迎よ。カイトには悪いけど、司と昴の借りがまだ返せていないもの」
「違いない、と誰かが笑った。」

カイトとハセヲの武器が交じり合い離れたその瞬間に、それは起こった。

世界の色が、反転した。

「…なっ!?!」

「これは…!?!」

二人は互いに視線を外して周囲を確認する。

「きゃあ!?!」

「なんだこれ!?!」

「アトリ!?!」

ハセヲがアトリに駆け寄ろうとするが突然身体に痛みが走りそれは叶わなかった。

動けないのが現実の自分なのか、仮想の自分なのか判断が付かずに恐怖が煽られる。

「動くな!?!」

鋭い警告の声。視線をやれば発信源はカイトだったが、それが向けられたのはハセヲではなくカイトの仲間だ。

何故こんな空間で何食わぬ顔をしているのか理解に苦しむが、周囲を見れば苦しんでいるのは自分達だけのように思われた。

「大丈夫かい、ハセヲ」

「…なんだ、よ、これは!?!」

「たぶんみんなには突然君達が倒れたようにしか見えない。正直、僕にもよく…」

カイトはぎょつとした。何気なく上に視線をやればそこには怪物が

いたのだから。しかしよくよく見ればそれは懐かしい面影を残して
いて、姿形は変わったものの、いったいなんなのかは理解出来た。

「…スケイス」

見ればハセヲチームの二人にも同じような怪物が見える。

スケイスが一度こちらを見て、カイトと視線を絡めた。

しかし音もなくハセヲの傍を離れると、空へ昇り、空気に消えた。

バチバチと音を立てる文字が浮いている。

気付けば、世界の色は鮮やかさを取り戻していた。

「……なんだったんだ？」

「……………ああ!？」

クーンが両の手を見ながら悲惨な声を上げる。

「…なんだよ？」

「…メイガスが……、憑神がない!？」

「はあ!？」

そういや力が湧かない気がする。慌てるハセヲにカイトはぼんやり
と空を見ながら「無駄だよ」と呟いた。

「…あ？」

「…行っちゃった」

恐らくはモルガナのために。失敗してしまったのだ。カイトは下唇
を噛み締めた。

「…どういう意味だよ!？」

掴みかかって来たハセヲにカイトは眉を寄せる。

「僕だつてわからないよ!当事者は君達だろ!？」

腹立たしげに手を放しハセヲはクーンとアトリを振り返った。

「動けるかアトリ、クーン。……アトリ？」

「…いや…、助け…!」

「…どうした、アトリ!？」

バチバチと電子音が呪癒士の身体から鳴っていた。蒼白の顔で半泣
きになりながらアトリは駆け寄って来るハセヲに手を伸ばす。
その手が触れ合う寸前に、少女の姿は消えてしまった。

「……アトリ？アトリ！？…、うそだろ、おい！！」

空間に満ち満ちたバグから、少女の姿を探したがそこに彼女はいない。

「アトリッ！！」

練装士の悲愴な声に、カイトはただ祈るように目を閉じた。

『殺しなさいッ！私を、愛しているのなら！！』

「…黙れ」

クビアの地を這うような声は、後ろで『碧衣の騎士団』を相手にしている彼らには聞こえなかっただろう。武器を持った集団同士で話し合いなんてよくやるものだ。お互い戦いたくて堪らないのなら戦えば良いのに。

しかしそんなものに興味はなく、クビアは視線の先にいる血の気を引かせたカイトの姿に舌打ちする。

「……やってくれるね、“お母様”？」

お蔭さまで僕の予定はめちゃくちやだよ。

認めよう。あんたは僕より一枚上手だ。

クビアはそうして皮肉げに笑った。

猜疑（前書き）

読まなくて良い話を書き過ぎる柚季

猜疑

「いつたいなんなんだよ!？」

場所は変わってマク・アヌの路地裏。

ネットスラムに連れて行こうとしたのだがヘルバとミストラルに反対された。

ブラックローズ達とはネットスラムで落ち合う約束をして、ハセヲとの会話の時間を稼ぐと仲間が約束してくれたときは本気で泣くかと思った。

「時間がないんだ。ただ、あの子は僕らが絶対に助けるから。だから……」

「ふざけんなよ!! てめえなんか信用できるか!!」

「落ち着けよ、ハセヲ。まずはみんなに連絡するんだ。きっと憑神がいなくて戸惑ってる」

クーンがハセヲを窘めてカイト達に厳しい視線をやった。

「……時間がないと言ったけど、事情くらい説明してもらおうか」

「……できない」

カイトはうなだれて言った。

「最初は君達に協力を仰ごうと思っていたけど、事情が変わった。

一般PCと変わらない君達に協力してもらうことはできない」

「その変わった事情を教えてくれて言ってるんだ! こっちは仲間がいなくなっただぞ! ? 知る権利がある!!」

「……ヘルバ、やっぱり二人をネットスラムに連れて行った方が……」

「それしかないようね」

「え?」

ヘルバが大きな溜息を吐いた。

「時間がなくなっただわ」

「……どういうこと? まさかブラックローズ達になにか……」

「そうじゃなくて、トラが怒ってるんだって。あの女の子のことも

あるからさつさと撤退したら突然手が付けられなくなったらしくて……」
カイトは頭を殴られた気分に関りながらも、急いで戻らなければならなくなつた。

「カイト！」

「ブラックローズ、トラは！？」

「バルムンクとオルカが交戦中よ」

「交戦してるの！？」

駆け出そうとしたカイトを怒気を含んだ声が止める。

「待てよ」

「ハセヲ……」

「なにがあつたかは知らないが、説明するのが先だろ」

「……で、でも……」

「説明なら僕達でできる。だからカイトを放しなよ」

クビアがハセヲの手を強制的に解いた。

「カイトがいなくなつて説明はできる。でもコピーのことはカイトにしかできないんだから」

「……ありがとう、クビア」走り去るカイトの背を眺める。ヘルバがいつもの笑みを口に浮かべた。

「それで？あなた達はなにから知りたいの？」

「バルムンク、オルカ！」

「カイトか」

「トラは！？」

「あそこだ。今は落ち着いている。……たぶん」

「暴れるから少し手荒なことしちゃった。そしたら近づいて来なくなつてな、こっちから近づけば、データドレイン撃つ気満々だ」

なんて恐ろしい。カイトは戦慄した。味方で良かった。

するとバルムンクがカイトを代弁するかのように口を開いた。

「…味方で良かった」

「本当にな…」

「…うん。……ありがとう、二人とも。後は僕がなんとかするから、みんなと合流して」

「わかった」

「今なにしてんだ？」

「ハセヲとクーンさんに事情を説明してくれてるんだ」

「………みんなでか？」

「そうだけど……、どうかした？」

「…いや」

二対大勢って軽く脅しではないかとオル力は思うのだが、カイトは気付いていないだろう。そもそもカイト自身それをされても特に怖いと思わないので、感覚が鈍っているのかもしれない。

赤色の背中が思いの外小さくて、カイトはなんだか切なくなった。

「…トラ」

名前を呼ばれた存在は武器を構えて、そこにいるのがカイトだと気付くと肩の力を抜いた。

「……&イト」

「どうしたの、トラ？」

「カイ*」

「なに？」

「どうし みゞ は逃#た ?」

「…逃げた？」

「あい@らは、あの二人 殺し£ に、み? な話し〒 で終わらせ
とした。やり返す気 ないの ?」

「ねえトラ、君は僕が思っていた以上に、司と昴に懐いていたんだ
ね」

平然とした声を出そうとカイトは躍起になっていた。

「…司と昴の仇討ちをしたかったの？」

「違。…味方が消？ た。だか…いらは敵で、敵殺す」

「…前にも言つたよね？どんなPCでも、殺すのは本末転倒だって」
この世界がアウラのものならば、この世界の全てがカイトの守るものなのだ。

例外はただ一つ、女神に害を成すものだけ。

それはアウラに駆除プログラムとして作られたトラだって同じはずなのに。

「…トラ、ブラックローズもバルムンクも、みんなきつと戦いたかつたんだろうと思うんだ。例え本末転倒だとわかっていても」

人一倍義理堅く仲間思いの彼らが、仇討ちをしたいと思わないはずがない。

「な　　んでしない　？」

「命の重みを知っているから」

きつと一番酷いのはカイトだ。復讐だとか仇討ちだとか、まったく思い付かなかったわけではなかったけれど意思の力でそれを抑えてしまった。

二人の無念を晴らすなんて、そんなことしようとする暇なかった。辛くて哀しくて悔しくて、罪悪感に潰されそうになって、後悔の念に溺れそうになって。

それでもカイトは復讐を実行に移したりしない。守るべきは現在と未来にある命であり、過去に失われた命ではないから。なくたつた命の無念を晴らすよりも、救えるかもしれない命のためにこの時間を使いたい。

こうやっていなくなつた仲間を顧みないカイトは誰よりも非情で、きつと誰よりも卑怯だ。

「みんなは、失われた命よりも今失われそうな命のために、司と昴の仇討ちを諦めてくれたんだ」

「……………」

「僕はあの子の近くにいた。でも助けることができなかった。どう考えても僕の失敗なのに、みんなは自分の気持ちを押し殺してまで僕の失敗を取り戻そうとしてくれている」

「…カ@ト……………」

「だから怒るのは僕にすべきだ、トラ。ブラックローズもバルムンクもオルカもみんなが悔しくて堪らないのに、やるせない気持ちを抱えているのに、それを責めるなんて検討違いだよ。みんな同じだけ堪えた。それを責めるのは酷だ」

あまりにも酷い。無知ゆえに彼らを軽蔑して怒りを撒き散らしたと言うなら、トラはきつと仲間の誰かに殺されていただろうに。

哀しみはみな同等。それでもトラは“敵は殺す”という考えが根元にあるから、彼らの感情を理解できないのだ。

一抹の哀しさを噛み締めて、カイトは言う。

「ごめんね」

「……………なに？」

「僕が全て悪い。司と昴のことも。いなくなってしまったあの子のことも」

それなのに、とカイトは自分を卑下する。

「カ@ト*悪　ない」

「……………トラは優しいね」

さあ、と手を差し延べる。トラはこてりと首を傾げた。

「みんなの所に戻ろう」

「……………」

「みんなトラのこと心配してたよ」

ここで気まずいと思うなんて…。まったく、こんな部分ばかり人間らしくなるんだから、とカイトは苦笑した。

呆れ反面嬉しそうな表情にトラはやっぱり不思議そうに首を傾げる。

「大丈夫だよ、心配しないで。いざってときは、お兄ちゃんが守ってあげるから！」

「…まだ…れ続いてい　　か……」
温かな笑い声が響いた。

それなのに、とカイトはトラと歩き笑みの下で顔を曇らせる。それなのに自分は、アウラに直接的な被害がなくて良かったと思うのだ。アウラ、仲間、それに世界。この三つが守れたのならば他は別に構わないと思うカイトは自身の存在を軽蔑する。

僕はちっぽけな人間なんだ。勇者とか英雄とか言われても、ただの人間なんだ。だから僕は、自分の世界が守れるなら、それで良い。

助けられるものがあるなら喜んで助けに行こう。だってそれをしないのは、カイトの人道に反するから。
失われた命は背負いはしても振り返りはしない。だってカイトの良心が痛むから。

仲間のためなら身体を張るし、涙も流す。だからだろうか、司と昴を失ったとき負った心の傷はまだ癒えない。

アウラの傷は世界を揺るがし、世界が揺るげば仲間是不安に陥る。全てが繋がって元を辿ってみれば一つになる。だからこそ、カイトは軽蔑する自分に一つの誓いを立てたのだ。

自分は残酷で卑怯だ。だけどせめて、正しいと思えることはしよう。

考案

カイトがトラを窘めている一方で、ヘルバはハセヲとクーンへの説明を終えた。

「……なんだよ、それ。いつの間にそんなことに……」

「……俺達が碑文使いになったからモルガナが復活したのか？」

クーンの言葉にクビアが頭を横に振った。

「そうじゃない。どこかに紛れ込んでいただけで、誰のせいでもない」

「……そうか」

幾分か安心したようにクーンは息を吐く。ハセヲがいらいらと爪を噛んだ。

「……なんで今更復活とかするんだよ？」

「……これはみんなにも言うつもりだったんだけど」

クビアがゴミの中心にいつものように座る。

「僕が思うに、きっかけはカイトだと思うんだ」

「……カイトが？」

ブラックローズが首を傾げる。

「うん。前から疑問だったんだ。僕が復活してすぐにもモルガナが“波”を呼び戻してもおかしくなかったのに、何故それをしなかったのか」

みんなの真剣な表情を見渡しながらクビアは「仮定だけど……」と前置きをした。

「できなかったんじゃないかな」

「できなかった？」

「そう。おそらく彼女はまだ完全に復活したわけじゃない。むしろ動きたくても動けないんだ」

「それはおかしい。なら何故今モルガナは行動している？私は直接

見たわけじゃないが、こいつらに乗り移っていた“八相”は確かに消えたのだろう」

ガルデニアがハセヲとクーンを指した。クーンが苦笑する。

「…乗り移るって……」

言い方酷くないか。と言うクーンの抗議を無視してクビアがにやりと人の悪い笑みを浮かべた。

「彼女が無理をしたってことさ」

これはもの凄い幸運で、カイトの存在がなければ成立しなかった奇跡。

「…ごめん。意味わからん」

お手上げっ！と兎丸が両手を上げるが、その姿に笑ってくれる人物はいなかった。

「つまりね、モルガナはまだ完全に復活したわけじゃないくて、せいぜい片手が動くとか声が出せるとかそんなもんが限界なわけ。ま、それでも十分に脅威だけど」

「…無理をしたとは？」

ガルデニアは眉を寄せる。クビアが笑った。

「そのままの意味さ。本来完全体になってから“波”を呼び戻したかっただろうし、僕の復活をしたかった。でも不完全でも無理してでも良いから僕を復活させて、“波”を呼び戻し、ウィルスバグをばらまく必要があった」

「…なんで？」

やつぱりわけわからん、と兎丸とブラックローズが顔を見合わせてるのを視界に写すと、クビアが深い溜息を吐いた。

「……………君達バカ？」

「な、なによそれ！こんな人と一緒にしないで!？」

「こんなん!? ちょ、酷くないか!? ……あ、待て。今なんか思い付きそう」

「知るかぁー!!」

どうしてこう、いちいちシリアスになれないんだ。とブラックロー

ズに叩かれている兎丸を眺めてマローは思った。

こほん、と切り替えるようにクビアがわざとらしい咳ばらいをする。

「カイトだよ、カイト！さっき言っただろ？」

「言っただけ……？」

「ちよつとそのバカ二人黙れ！！」

ブラックローズと兎丸が反論しようとしたのをレイチエルと三十朗が止める。いい加減話を聞かせてくれ。

「良い？本来もつと時間をかけたかった彼女は、イレギュラーの出現に慌てた。それがカイトだ」

「……でも、どうして？身を隠していれば見つからないよね？」

ミストラルが不思議そうに口を開く。

「……意地で見つけるでしょう、ぼうやなら。ウイルスバグ探しで駆け回っていたじゃない」

ヘルバの言葉にクビアも頷く。

「僕もそう思う。運はカイトに味方していると言っか……。とにかく、もし見つかったとき彼女には身を守る術がない。だから焦った」だからこそ無理してでも復活させたクビアが呆気なく裏切ったのだから、モルガナも災難なものだ。

「それで“波”を呼び戻せなかった理由だけど、僕を復活させたことによる消耗だ」

クビアが笑みを浮かべる理由がわかって、ヘルバは顔を上げた。

「待て。モルガナが“八相”を呼び戻せたと言うことは、完全に復活したと言う印ではないのか？」

「頭いいね、おねーさん」

クビアはガルデニアに微笑む。言外にバカ二人とは大違いと漂わせている気がしてならない。

「ところがそうでもない。今回も彼女は無理をした。カイトが“波”に近づいたから、急いで呼んだんだ」「……なんでそんなにカイトに怯えてんのよ……？」

決まってるってクビアが笑った。

「彼女にとって全ての元凶がカイトだからさ」

アウラが選んだ守護者。

ウィルスバグを消し去り、“波”を全て倒し、モルガナから勝利を奪い去った守護者。

「結局彼女は一度として女神とカイトに勝てていない。腕輪をなくし、勝利を確信したときでさえ彼女はカイトに負けた。女神とカイトが揃うことこそ、彼女が最も恐れることだ」

最終的に一番の切り札はカイトなのだとクビアは自嘲する。

「だから、“波”すら味方にしようとしたカイトに恐怖した彼女は“波”を呼んだんだ」

「…一度はクビアのために完全でないのに消耗し、クビアを復活させたことによって失った揚力をようやく取り戻したところでカイトが“波”に近づいたものだからまた揚力を失ったってどこかしら？」
ヘルバの言葉にクビアは珍しくにつこりと笑う。

「そう。そして“波”に守られていようが、モルガナが消耗したことに変わりはない。つまり」

「つまり、敵であるモルガナ・モード・ゴンが不完全体な上に弱体化している今こそが、襲撃の機会と言うことが」

「…人の台詞を盗らないでくれる、羽根男」

割って入った真っ直ぐな声にクビアは苛立ちを隠そうともしなかった。

「は、羽根男！？なんだそれは！！」

「落ち着けて、相棒。俺なんて由来もよくわからん『半分』だぞ？」

「フィアナの末裔の半分でしょ」

ああ、由来はそこか。と“蒼海”の二つ名を持つ男は疲れたように息を吐く。

「羽根男が嫌なら別の名前付けてあげるよ。……んー…、ぽっぽ、とか」

「俺は鳩か！？」

なんとも和む風景で、今までの会話を忘れてしまつような気がした。

「…バ、バルムンク!？」

「クーン?」

唐突に立ち上がったクーンにハセヲが面倒臭さそうな視線をやった。呼ばれた本人も本人で、隣に立つ相棒を見る。

「知り合いか、オルカ?」

「……いや、今の流れからして確実にそれ俺の台詞だし」

「…俺が一人でも碑文使いと知り合いなら、とつくにカイトの前に引きずり出している」

「胸を張ることか…?」

クーンを置いてきぼりで会話は進む。当然だ、一度PCを変更したクーンの姿が彼らにわかるはずがない。

「…あのう、それで、モルガナが弱体化したからどうするんですかあ?」

なつめの言葉にぴたりと騒ぎを止めて、全員が平静を装い話し合いを再開した。あまりの切り替えの速さにクーンが目を剥く。

「襲撃。それしかないだろう」

「不本意ながら羽根男に賛成。わざわざチャンスを逃す必要ないし」
「そうよね。早く解決するに超したことないし」

バルムンクとクビア、そしてブラックローズがそれぞれ頷く。

「…まずは場所を確定しなくちゃならないわね」

ヘルバが全員に背を向けた。月長石も歩き出した。

「………情報、収集…」

「カイトにも教えなくちゃね」

「もうすぐ来るだろ」

どちらかと言えば朗らかな雰囲気醸し出されているのは、彼らがあまりにも異常事態に慣れているからだ。

しかし何気なく解散しようとした彼らに鋭い怒声が浴びせられた。

「待てよっ!」

ハセヲが怒鳴る。

「さつきから黙って聞いてればお前らアトリを助ける話しはどうした！？あいつ今どこにいるんだよ！？」

モルガナを倒せることへの喜びから完全に忘れていたとしか言えない。気まずい顔をする面々からブラックローズが口を開いた。

「……あの、ごめん。で、でも、きつと助けるから。カイトなら探してくれ」

「あいつが信用できるか！！」

アトリを忘れていたハセヲへの負い目か、むつとした表情をしつつもブラックローズは言い返さなかった。

「信用なんてしなくて良い。して欲しいなんて思わない」

ハセヲより数段冷たい声を発したのはクビアだ。

「イニスに取り込まれたあの子も助ける必要なんてない」

「……なっ……！？」

ハセヲがクビアにつかみ掛かった。

「なに言ってるんだ、お前！？」

「助けたきゃ勝手にすれば良い。悪いけどさ、こちらとしてはあの子がいなくなってるむしろ幸運なんだよね」

その言葉にはその場にいた全員が驚かざるを得なかった。バルムンクが非難の眼差しをクビアに向けた。

「なにかを取り込むって大変でさ、イニスはあの子を取り込むとしていては動けない。敵が一体減るだけで随分楽なんだよね」

僕としては後一、二体くらい、できればゴレとかコルベニクスとか面倒な奴らが同じ状況になって欲しいかな。と易々と云ってのけるクビアにとうとうハセヲが切れた。

「冗談も大概にしやがれ！！」

ごすつと嫌な音がした理由は、ハセヲがクビアを殴ったからだ。

痛そうなお音に周囲にいた各々は思わず目を閉じる。しかしクビア本人は至って平然と視線をハセヲに戻した。

「……君達人間はとても面倒だ。仲間意識とかわけわかんないもの

を持って、いざつてときはあっさり見捨て、全員同じ人間のくせに優劣を付ける」

捕まれた腕を引きはがし服の埃を払う。怒り狂っているハセヲにクビアは見下すように笑いかける。

「ここからは、僕の予定に従ってもらおうよ」

一度狂わせられた全てを修復するために、あの子は『尊い犠牲』になるべきだ。

欺瞞

目の前で消えたアトリに蒼白になったカイトを見て、クビアはモルガナの狙いを知った。

つまるところそれは時間稼ぎだ。

誰かが傷付くのを極端に嫌うカイトの性格を見越してモルガナはイスにアトリを取り込ませた。

誰かを助けるために割かれた時間の分、モルガナは自分に専念できる。だからこそクビアはアトリを助けるつもりなどなかった。

人間は理性的かつ合理的になるべきだとクビアは思う。どちらを優先すべきかなんてわかりきったことだ。

モルガナがあるとき“波”を呼び戻したのはクビアの予想外で、カイトと言う恐怖の対象の前に出て来るはずがないと踏んでいたのに、微かな存在でも残せばカイトは追って来るとわかっているはずなのに。しかし彼女は来た。

これは賭けだったのだ。生死を賭けた遊戯。

そしてアトリがいなくなった衝撃によりカイトはみんなを思って彼女を追わなかった。彼女の勝ちである。

だからクビアは被害を最小限に治めるために闘技場での戦いを止めて、“波”が去るのをカイトに見せないようにしたかった。一人か二人は取り込まれると安易に予想できたし、カイトは必ず助けに行くと言いつからだ。

だからアトリと呼ばれる少女を助けに行くわけにはいかない。

イニスに連れ去られたことは、本来カイトが知り得ない出来事なのだから。本来助けるか助けられないかなどと言う選択肢すらあつてはならないのだから。

予定では、さつさと“波”を丸め込み、モルガナを全勢力で叩き潰すはずだったのだ。

それができないならば極力予定通りに修正し、最終目標である“彼女”を倒すことができれば良い。

ここでアトリを放置してモルガナを追えば、局面は逆転し、クビアの勝ちだ。

賭けはまだ続いている。

「…予定、だと？」

怒り心頭のハセヲにクビアは挑発的に笑う。

幸い言葉遊びは得意だ。こいつが一言「探さなくて良い」と言えばカイトも納得するだろう。

非情だとクビアを罵るものもいるだろう。だがそれに対してクビアはこう言い返す。「世界を守ろうとしてなにが悪い」と。

「そう。彼女が“波”を呼び戻すタイミングは予定外だった。でもこれを逆手に取れば、彼女を守る“波”が短時間にしろ減ることもなる。だから助ける必要はない」

「…お前、自分がなに言ってるのか、理解してんのか…？」

「はあ？」

ハセヲから表情が消えた。なにを言っているのか理解しているかだと？理解しているに決まっている。

「わかってるよ。ここでモルガナを討つことに成功すれば世界平和でしょ」

「…わかってねえよ！！アトリはどうなる！？」

「君こそわかってない！その娘を助けてモルガナが復活したらどうする？目先のことに捕われて負けましたじゃダメなんだよ！！」

そもそも助けられる可能性がどれだけ低いかハセヲはわかっていない。

取り込まれたPCは“波”と同化する。ただデータドレインを受けて未帰還者になるのと違いPCが“波”の一部になるのだから。

「どうやって助けるかやり方もわからないくせに。これは世界を守る闘いなんだ。部外者は引っ込んでろ！」

「俺だってできるなら部外者でいたかつたさ！巻き込んだのはお前らだろ！！」

「だからって僕達に世界を見捨てろって言う権利はないだろ！？手の届く距離に最大の敵がいるのに他に注意を向けることなんてできない」

「見捨てろなんて言ってない！方法だけ教えてくれればこっちで勝手にする」

「結果的に見捨てたことになるんだよ！冷静になれば？一人のPCと世界、どっちが大切かなんて一目瞭然だ」

「……お前はさっきから世界とか言ってるけど、お前の世界ってなんだよ？」

「そんなのThe World、引いては君達が生きる現実だ。モルガナを野放しにすれば世界中の人に被害が及ぶ。君だって例外じゃない。死にたくなければ引っ込んで」

この戦いは負けるわけにはいかないのだ。それくらい考えればわかるだろうに。

「これは戦争なんだ」

「……ちよつと、言い過ぎじゃない？」

ブラックローズがおずおずと言う。クビアがじろりと彼女を睨む。

「あんた達がやりたくないことをしてやってるんだ。黙ってる」

まだ耳に残る甲高い彼女の声を聞いていないからそんなふうに甘くいられる。

しかしそれは決して優しさには成り得ない甘さだ。

『殺しなさいっ！私を愛しているなら！！』

『早く彼を殺しなさいっ！私に愛されたいのなら！！』

『あなたはそのためにいるのだからっ！！』

カイトがいなくなれば腕輪は消える。アウラがいなくなっても腕輪は消える。

結果的にクビアは死ぬのだ。

しつかりしなければ。あの女の言いなりにならないように気をしつかりと持たなければ。

カイトを勝利に導くためにも、僕がしつかりしなくちゃならない。

「守りたいのはみんな同じなのに哀しいね、どうしてわかり合えないんだろう」落ち着いた声。視線をやればカイトが立っていて、みんなの心なしかほっとした表情がクビアには氣にくわなかった。

カイトの言葉はあくまでもトラに向けられたもので、自分に視線が向けられていることに驚いたようだった。

「…あ、えつと、……た、ただいま」

「もうトラは平気なのか？」

「うん。ありがとう、バルムンク。ほら、トラ」

「……………す なかつ＊」

俯くトラの背中を押して仲間を中心に連れて行く。仲間に囲まれたトラを確認して、カイトはクビアとハセヲに近寄った。

「…カイト」

「クビア、僕はあの子を助けに行くよ」

「カイト！？」

「助けに行く。犠牲になつて良いものなんてない」

「カイト、君は女神を守るために戦うんじゃないの？女神の脅威が消せるんだよ？それもすぐに！」

なんて卑怯な手だろう。女神のことを引き合いにだせばカイトは拒否できないと知っている。しかしクビアの予想に反してカイトは哀しそくに微笑んでいた。

「…うん。クビアが言いたいことはわかるんだ。僕は守護者失格だ

ね」

「カイト、まさか…」

「でも僕、君を守るためにあの子を犠牲にした、なんてアウラに言いたくないんだ。アウラが罪悪感を感じるようなことはしたくないんだ。守護者とかそんなものは良いから、胸を張ってアウラと向き合える自分でありたい」

「……バカみたい。女神を守れなかったら、向き合う以前の問題なのに」

「うん。でも、ここでアウラを選んでも、きっとアウラはこれを望まない」

「カイト…。これは戦争だ。しかも大勢の命を背負った。一人救うためにみんなを失うつもり？」

「クビアも優しいね」

カイトは情けなく笑う。クビアにはそれが静かな拒否に思えてならなかった。

「戦争に英雄はいても、聖戦はないよ」

「…なにそれ」

「“聖なる”なんて戦いに付けちゃいけないってこと。結局は奪う行為だ。これも同じ。“戦争だから”って言葉は免罪符じゃない。戦争だからってしちゃいけないことがある。あの子を助けに行かなくても良いなんて、絶対にない」

「でもカイト！」

「正しいと思えることをしようよ、クビア。後悔なんてしないように」

なにを言えば良いのかわからなかった。しかし、アウラを引き合いに出しても無駄だということはわかってなんだかとても悔しく思えた。

「ハセヲ、あの子を助けに行こう」

「…方法はあるんだろうな？」

まだカイトに思うことがあるのだろうハセヲの顔は苦々しい。

「あるわけない。君達は上書きしたデータを元に戻せる？バグったゲームを簡単に直せる？できないでしょ」

クビアが口を挟めばハセヲもむっとする。

「うるせえな」

「…喧嘩売ってんなら買っけど？」

「落ち着いて。騒いでいる時間はないんだ」

「…カイト、方法はない。データトレインすればなんでも解決するわけじゃないんだよ？今イニスとデータトレインすれば一緒にいるPCもおじやんだ」

「うん。クビアはいろんなことをよくわかってる。でもこの方法は人間だから思い付く方法だ」

「勿体振らないで教えてくれるかしら、ぼつや？」

「うん。ヘルバ、勝算を見てくれる？」

「もちろん」

ごくりと喉を鳴らしたのは誰だろうか。静かになった空間でカイトは口を開いた。

「イニスとPCのデータが混同している部分を切り取る」

これだけでどれほどの人に通じただろうか。息を呑む者、首を傾げる者、反応はそれぞれで、カイトは説明を続ける。

「相手がデータであることを逆手に取る。まだ完全に融合していないなら引き剥がすことも可能はずだ」

「ま、待つてよ！混同部分を切り取るって、どこが混同部分がわからないでしょ！？」

クビアが焦ってもカイトは平然としていた。

「それはヘルバとクビア、それに機械関係に強い人に頼ることになるけど、データを数量化させることはできないかな？」

「…数量化した部分で、“波”とPCのデータが繋がっている箇所を探し出すのね？」

「うん。データトレインは範囲が広いからその一部だけを的確に破壊はできない。だから繋がっている部分の破壊をヘルバ達にやって欲しい」

「…でもぼうや、それはPCも損傷するわよ。繋がっている部分を削除するのは見つけ出してさえすれば簡単だけど、一方だけを破壊するなんて無理だわ」

「わかってる。それはクビアに頼みたいな。切り離れたPCの欠如を手早く補修。この中からヘルバ以外なら誰連れて行っても良いから」

「無理だよ、不可能だ！カイト、AIがどれだけ膨大なデータ量がわかってる！？パソコンの画面とやらがどれだけの大きさか知らないけど、画面いっぱいになるに決まってる！！」

「それはまかせて。視覚に頼る。視覚的にあの子とイニスが繋がっている部分だけを送るればデータ量は減るでしょ」

「…力任せに剥がしちゃだめなのか？」

「そこまで手の込んだことをしなければいけないのかとハセヲが尋ねる。

「…僕も考えたけど、PCの損傷が激し過ぎるんだ。無理矢理に引き剥がすと片方がちぎれる気がするし」

「……………イニスを切ってPCを剥がしても、PCにイニスが付着しているからPCが侵されかねないしね」

クビアも諦めたように言った。

人手も時間もかかり過ぎる。しかし解決の糸口を見つけてしまった以上カイトは止まらないだろう。

ここは協力して少しでも早く事態を収束させた方が利口だ。

「ありがとう、クビア」

「…どういたしまして、カイト」

これみよがしに溜め息を吐いてやれば、カイトは情けなく笑う。クビアは降参、とばかりに肩を竦めた。

乗りかかった船ではないが、こうなったら付き合ってやろうではな

いか！

高潔（前書き）

カイトとハセヲが喋ってるだけです。
何故書いたのか柚季もよくわかってない。

高潔

「…悪かったな」

「え？……あ、うん」

拗ねたような表情をしたハセヲの言葉にカイトは曖昧に頷いた。

なんとかクビアを納得させてヘルバに勝算を尋ねると、彼女は難しい顔で言った。

「…良くて五分五分。それも事前準備を万端にした場合よ」

「充分。……と、ハセヲ」

「なんだよ？」

「いや、さつさと頷いたけど当事者は君達だし、五分五分が危険で嫌だって言うなら……」

「…やる。少しでも早く助けたい」

「そうだね。…ヘルバ、クビア、手伝える人適当に探しておいて」

「わかってるわ」

「仕方ないなあ……」

「準備ができたら出発するから、それまで自由時間にしよう」

カイトの言葉に全員が返事を返す。後は勝手にすると知っているのがカイトはアイテムを補充するためにタウンに行くことにした。

「…おい、待てよ」

まるで喧嘩を売るかのような言葉に振り向けばハセヲはカイトを睨んでいた。

「…話しがしたい」

これは呼び出しだろうか。と不安になりながらカイトは特に抵抗する理由もないので頷いた。

「…えっと、なにかな？」 「…悪かったな」

「え？……あ、うん」

拗ねたような表情をするハセヲにカイトは曖昧に頷きながら首を傾げる。

一体なんのことだろうか。

「俺さ、裏切りって言つか…、そういうの嫌いでさ」

「みんな嫌いだと思うけど…」

そりやそうか。とハセヲは苦笑う。

「……トラウマ…、みたいなもんだと思う」

「……、そっか」

聞いてはいけないことだとカイトは直感的に感じる。だから返事をする以外にはしようとしなかった。

「なにも知らないで、勝手に裏切りだとか決め付けて、勝手に怒って、悪かった」

「なんで謝るの？」

やはりカイトにはハセヲが謝る理由がわからない。

「悪いのは僕なのに。なにも言わないで、勝手に行動して、あまつさえ君を殺そうとした！アトリさんがいなくなったのも僕のせいじゃないか！」

「……お前は本当にオーヴァンそっくりだな」

「……誰？」

「俺の……、尊敬してる人？」

どうして疑問形なの、とカイトは軽く笑う。

「尊敬とは少し違うかもしれない」

「…ふうん。どこが似てるの？」

「手段を選ばないところ。ま、そういう意味じゃお前の方がずっと優しいけどな」

「…容赦ないってこと？」

「そうじゃなくて…、自分が傷付く覚悟があるってこと」

「なにそれ？」

「オーヴァンはさ、今まで築き上げた人間関係を全て捨てて、悪い

ことしてる自覚があつて、でも止まらなかった」

周囲も傷付いたけれど、彼が傷付かなかったとはハセヲは思わない。いろんな罪を犯している自覚があつた彼はどれだけの罪悪感に苛まれていたのだろうか。

そしてそれはカイトも同じなのだ。同じ痛みを抱えて微笑んでいた。オーヴァンを知っていたのだからもつと早く気付いてやれば良かったのに、ハセヲは裏切りへの怒りでいっぱいだった。

「…本当、悪かった。後、アトリのことありがとな」

カイトがいなかったら自分はあの忌ま忌ましい黒いガキに言い負かされていたに違いない。思い出して苦々しい顔を見るとカイトは控えめに笑った。

「仲良くしてあげて。悪気はなかったと思うから。……そう、手段を選ばなかっただけ」

「いや、あれは悪意たつぷりだったな。と思わないこともなかったが、それよりも言いたいことがあつた。

「あの黒いのは、世界って言った。世界中の、現実も仮想も含めた世界。それを守るために戦うって」

「うん」

「でもさ、アトリを見捨てたら、俺の世界はどうなるんだろうなつて思ってたさ」

「……うん」

「世界中とか、全ての人とか、そんなこと考えてなくて、俺は俺の世界を守りたいんだ」

「……うん、わかる」

「アトリは俺の世界の一人なんだよ。……悪いけど俺は、大勢の人のために自分の世界を犠牲になんて、できない」

「だから僕は戦うんだ」

全ての世界を守るなんて無理だろう。しかし一つでも多くの世界を守るために。

世界にひびが入る痛みを知っているから。

カイトにとって最初のひびはオルカだった。

ハセヲにとって最初のひびは志乃だった。

「…ねえ、ハセヲ」

「なんだ？」

「君を襲ったりしてごめん。スケイスだからって安直過ぎた」

「…良い。狙ったのは俺自身じゃないなら、良いんだ」

「だからさ、僕達仲直りしよう。……発端の僕が言うのもあれだけど」

カイトの言葉にハセヲも笑う。

同じ痛みを感じ、同じ恐怖に怯え、同じ思想を持っているのなら、仲良くしても良いじゃないか。

お互いだから理解し合えることがきつとある。

「…よろしく、カイト」

「うん！改めてよろしく」

ずっとカイトが手を差し出すと、そこでハセヲはたと動きを止めたかと思うと身体を引いてしまった。

「…………ハセヲ？」

「…あ、いや、えーと…」

「……やっぱり、仲良くできない…？」

「い、いや、そうじゃなくてだな！えっと、つまり…」

「い、良いんだ！仕方ないよね！……あ、でも、みんなとは仲良くして欲しいな…」

「違っつて！だからな、つまり、俺が言いたいのはお前の右手がだなあ……」

「無理しなくて良いよ。あ、僕マク・アヌで買物あるんだ！じゃあねー！」

「だ、だから違っつて！つまり俺はお前の右手がいきなり光ったりしないか心配で…、ちょっと待て！カイト！待てっつてば！？カイト

「！！！」

カオスゲートを素早く潜ったカイトに舌打ちをしてハセヲもすぐにそれを追いかけた。

確かマク・アヌに行くと言っていたはずである。

こうして誤解を解くためにハセヲが奔走したのだが、それはまた別の話。

いくつかのタウンを回り武器やアイテムを買い足したりトレードするうちに、さすがにそろそろ整理しなくてはいけないとカイトは立ち止まった。

「…あ」

「どうかしたのか？」

声を上げたカイトを不思議に思ったのか、（カイトからすれば何故か）ついて来たハセヲがアイテム覧を横から覗く。

「……あ！」

アイテム覧を覗くハセヲの存在に初めて気付いたようにカイトは声を上げた。

「な、なんだよ？」

「そっか。返さなくちゃね」

「返す？」

カイトは武器を取り出すとそれをハセヲに渡した。

「あげる」

「…トレードか？」

「ううん、あげる」

渡された双剣を見てハセヲは首を傾げた。

双剣『最後の裏切り』。一体これがなんだと言っのだろう。

「錬装士だから装備できるよね？」

「そりゃあできるけど…、弱いなら装備しないぜ？」

「それは大丈夫」

につこりとと頷くカイトを訝しげに見ながらハセヲは貰った武器を

確認する。

「……て、すげえ強いじゃんかよ！本当に貰って良いのか！？」

お前双剣士だろ！？とハセヲは騒ぐがカイトは笑っただけだ。

「良いの、良いの。僕、装備できないから」

「はぁ？……なにこれ、呪われてんの」

「そんなわけないって！！」

今度は逆にカイトが慌ててしまう。

「そうじゃなくて……。資格がないから」

「資格？」

「……うん。昴は使えって言ってくれたけど、気付いてあげられなかった僕じゃ顔向けできないから」

「気付くって？」

「……それは友達が残した軌跡。僕に残してくれたのに、僕は仲間と言われるまで気付けなかった」

そのように言われるとものすごく受け取りづらい。ハセヲの微妙な表情にカイトが気付いた。

「あ、と、とにかく！！ハセヲにあげるから」

「……良いのかよ？大切なものなんじゃないのか？」

「大切だからだよ」

ハセヲの戸惑いも気にせずカイトは仲間の誰にも言わなかった思いを口にする。

「……本当は、あの二人の武器のように、どこかに隠してもらおうかと思ってた」

共に仲間になった三人だから、同じように祈りを乗せて、決意を固める思い出ししようかと思っていた。

しかし、

「君のおかげだ」

「……ん？」

「君がいたから、僕は友達の軌跡を捨てずにいられた」

思い出にするのは楚良に対して失礼なことだと気付いた。

昴と司は自分の武器に覚悟を託した。あの武器こそが二人の覚悟の表れだったからこそ、その誇り高い決意を形のまま保っておきたいがためにカイトは二つを隠した。

なによりカイトがゲームを止めてしまったと同時になくなってしまったなんて二人に申し訳なかった。

楚良は違う。自分の存在を残したかったから武器を置いて行った楚良を美しい形で保っておこうなんて、逆に失礼だ。

「いっぱい遊ばせてあげてね!」

「……なんだそれ」

なぜなら彼は自由奔放で、それでいて少しばかり残虐な暴れん坊だ。宝箱に仕舞われるよりも使ってあげた方が良さだろう。

「……ま、くれるなら貰うけどよ」

「ありがとう」

過ちを犯す前に君に出会えて良かった。

ネットスラムへ帰るために二人は歩き出す。

「……なあ、カイト」

「なに?」

「……なんで俺にこんな強い武器くれたんだ?」

お前が装備できないってことはなんとなくわかったけどさ、とハセヲが呟く。

「君に対してのお礼もちろんあるけど、やっぱり……」

「やっぱり?」

カイトは含み笑いで悪戯っ子のように言った。

「友達だから……、じゃない?」

始動（前書き）

夏休みは小説を書かないぞ！と意気込んだ柚季。
しかし書く。

始動

『うん、わかってる。大丈夫、これが終わったらちゃんと探すよ。だから今回は本当に頼むよ。作戦通りに、よろしく』

ネットスラムの隅でたった一人、ログインしたばかりのカイトはメールを作成し送信した。

周囲には誰もいないが、あれから二日ほど経ったので準備ももうすぐ終わるだろう。仲間も少しずつログインしているのか話し声がまばらに聞こえた。

「……そろそろか……」

カイトはメニューを閉じて仲間がいる方向へ歩き出した。

「……なんで返信がないんだよ、あいつはあー!!」

「お、落ち着けてハセヲ」

「……どうかしたの？」

寄って来るカイトの姿にクーンは軽く苦笑しながらハセヲを指差した。

「いや、同じ碑文使いの一人からメールの返信がなくてさ」

「……まさか」

「それはねーよ」

ハセヲが不機嫌を隠そうともせず言う。

「アトリが消えた後すぐに全員に連絡したけどみんな返信してきた。憑神に取り込まれたのはアトリだけだ」

「なら良いけど……」

カイトは渋々と返事をした。

「ここにいたのか」

「バルムンク」

バルムンクの登場にクーンが僅かに顔を歪めた。

「もうすぐ作戦開始だ。……しかしカイト」

「なに？」

「……イニスがいる場所はわかっているのか？」

それがわかっていないなら作戦の開始以前の問題である。カイトは笑った。

「知らない」

「……アホかあつ!!」

咄嗟にカイトの頭を叩いたハセヲに非はないだろう。バルムンクが小さく「良い音したな」と感心したように呟いた。

「……痛い」

「お前ここまで来て場所知りませんか笑えないからな!？」

「え、嘘!？ごめん」

「……ああ？」

「じ、冗談だよ!場所でしょ?わかってるから!」

最後の小さく「たぶん」と言ったことはバルムンクにしか聞こえなかっただろう。

バルムンクはこめかみにそつと手をやりながら同じように小声で呟く。

「しっかりとしてくれ……」

「……あはは……」

かつてのバルムンクならば曖昧な様子のカイトに怒り心頭だっただろうが今は呆れるばかりだ。

お互いに歳をとったなあ、とまだ大学生だと言うのにカイトはしみじみと感じた。

「……んだよ、冗談か。脅かさないでくれよ」

「あー、びっくりした。そうだよな。場所わからないなんてそんなわけないよな」

全てが冗談ではない。

「……………」

カイトとバルムンクは黙って顔を見合わせて、なにも言わずに微笑んだ。

お互いがごまかしあったとも言える。

「おそらく場所は『蘇生する 惑乱の 裁き』だ。みんな、準備は良い？」

「問題ないわ」

「今回は、俺とオルカはヘルバの手伝いをする」

「悪いな、カイト」

「大丈夫。ブラックローズもいるしね」

「実戦なら任せなさい！」

「カイト」

やって来たハセヲを見れば随分とがたいの良い見知らぬPCと共に立っていた。

「…彼は？」

「八咫って言うんだ。数量化を手伝えると思って引きずって来た。

俺と同じ碑文使い。パイは今日忙しいらしくて捕まえられなかったけど、戦力としては申し分ないぜ」

「ありがとう、ハセヲ！よろしくお願いします、八咫さん」

「……………」

「……あの？」

八咫はずっとカイトを見て黙っている。

リーダーとして名前を公開してしまったカイトは見られること自体には慣れてしまっていて、しかし見られるという意味が八咫の視線

と一般PCとは違うような気がしてカイトは居心地が悪くなった。

「……あ、ああ、すまない」

言って八咫は手を差し出す。カイトはその手を握った。

「……どこかでお会いしました……？」

正直こんな特徴のあるPCと知り合ったら忘れないと思うのだが、カイトは長くThe Worldを離れていたので忘れてしまった可能性がないとは言えなかった。

その上、この声を聞いたことがあるような気がしたのだ。

「……いや、気にしないでくれ」

八咫はそう言つとそそくさとその場を離れてしまった。

「なんだあいつ？」

「……さあ」

そもそも連れて来たのはお前だろ。とカイトが思ったかはわからないが、彼はハセヲに首を傾げた。

「……久しぶりね」

「……ヘルバか」

「彼に言わなくて良いの？」

八咫はヘルバの問いに苦い顔をした。

「今、私は八咫だ。勇者カイトとは初対面だ」

ヘルバはその言葉に冷めた視線を返した。

「……ワイズマン、あなたの意思は感知してない。ただ私はぼうやが心配なだけ」

ヘルバは知っている。『ワイズマンがいなくても大丈夫。作戦を練れる』と自身に言い聞かせるカイトの姿を。

恐くないわけがない。すでに現実で被害者は出ている。それもカイトの目の前で。その事実には恐怖しないわけがないのに。

「自分の正体を明かすだけでどれほどぼうやが安心するか……」

「君が言いたいこともわかる。しかし私が職業を変えたことは同時にカイトに不安を与える。そうは思わないかな？」

八咫としての自分。ワイズマンとしての自分。それぞれに役目があり、八咫はカイトと知り合うつもりもなかった。だから他人であるとする。

なにより八咫がワイズマンだと教えると、多かれ少なかれカイトに衝撃を与えるだろう。作戦決行前にカイトを不安定にさせるのは得策ではない。

「人間くさくなったな、ヘルバ」

「……そうね」

他人の心配だなんて、らしくない。ヘルバは軽く溜め息を吐いた。

『サーバー』『蘇生する 惑乱の 裁き』エリアを隔離する！以後、通信不可』

『了解！』

姿が見えないヘルバの言葉にカイトとブラックローズは慣れたように口を揃えて返事をする。

周囲を見渡してブラックローズが顔をしかめた。

「…ノイズが酷い」

「間違いない。…ここにいる」

二人はそう言つてきょとんと顔を見合わせた。次いで笑いが零れる。

「…どうしたんだよ？」

「ああ、いや…」

「なんでもないわ。急ぐわよ！」

ハセヲの問いにおざなりに返事を返してブラックローズは先頭を歩き出す。

ミストラルや三十郎がカイトの肩を楽しそうに叩いてそれに続く。

「置いてっちゃうぞ」（＾Ｏ＾）／」

「行こうぜ、カイト」

「うん。行こう、トラ、ハセヲ」

カイトは二人を促して隣にいたガルデニアと歩き出す。

「何故笑っているんだ？」

「ん？いや…。初めてここに来たときと同じような会話をしたからさ」

どうも精神年齢は成長していないらしい。と笑えば、ガルデニアも笑った。

エリアレベル自体は低すぎるくらいで、一行は余裕さえも感じてダンジョンの最深部を目指す。

そして、最後の階段を下った。

「なつめ、全員を回復してくれる？」

「はいっ！ファラリプス」

「みんな、準備は良い？」

頷くもの、笑うもの、反応はそれぞれだが全員目は真剣だ。

「……トラ」

「……なん」

「データドレインは今日絶対に使っちゃいけないよ」カイトとて使いたい気持ちはわかる。しかし、それは許されないのだ。

トラは総毛立つ身体を一度震わせてから頷いた。

「……わ＊っ＃る」

しかし敵がいればデータドレインするようにプログラムされているのだからある程度は仕方ないとしか言いようがない。

そして彼らは、足を踏み入れた。

真っ白に染まる画面。今日一番酷いノイズが響く。

そうして彼らの前に堂々と姿を現したのは、探していた“波”。

“惑乱の蜃気楼” イニス。

「…アトリッ!!」

ハセヲが悲痛な声で少女の名前を叫ぶ。

過去、カイト達と対峙したときと同様の壁画に似たその姿。

目のような形に開いた三つの穴の隣に、アトリは背中からべつとりとイニスに張り付いていた。意識はないのだろっ、俯く顔が上がる様子はない。

「相変わらずふざけたデザインね」

言ったブラックローズの顔には先程までの余裕がなくなっていた。

初めての事態に焦りを感じているのだろっ。

数量化するためのデータを送るのは骨が折れそうだ。と小さく嘆息したカイトは武器を構えて、イニスへ飛び掛かった。

激動

「PCの腕とイニスとの混同部分は見つけたぞ!」

「数量化したPCデータどこだっ!」

「背中誰か手伝ってくれる!」

送られて来る膨大なデータにバルムンク達は焦らずにはられない。進まない困難な作業への苛立ちは全て怒鳴り声で発散させている状態だ。

「…思ったよりも面倒ね。ちょっと待って」

「なにを待てと言っているんだ!」

冷静なヘルバの声にバルムンクが自然と大きくなってしまふ声で返事をする。

質問と言うよりも衝動的に喋っただけのようだ。

「……ヘルバよ。準備は済んだ?」

『とつくにね。何?』

「こっち手伝ってもらえる?」

『……はあ?知らないよ、そんなこと』

「このままじゃ終わらないの」

『……仕方ないなあ……。僕は数量化は手伝えないから、他の連中に言っよ。元から修復作業は僕一人でもできるしね』
そう言々と通信が切れる。

「誰と連絡を?」

「クビアよ」

問いに答えるとバルムンクは渋い顔をした。まだ思うところがあるのだろう。

「手伝いに来たのだが」

「あら、じゃあ背中半分よろしく」

現れた八咫に迷いなく作業を押し付ける。

「…通信不可だと言っのにどうやってデータが送られているんだ?」

「数量化専用道をわざわざ作ったんだ！下らんことを聞くな、さつさと手伝え！！」

再び作業に戻り再び苛立ちに襲われているバルムンクが怒鳴る。八咫はやれやれと首を振り作業を開始した。

「ファラリプス！ガルデニア、ミストラルに気魂を！！」

「わかった！」

「兎丸、なつめがデータドレイン受けたから状態異常の回復……、間に合わないからやっぱなし！！」

僕がやった方が早い！と言えば「どっちだよ！！」と悲鳴のような声が返って来る。

「もう攻撃してて！とにかく僕が援護を……」

「カイト、回復して！！」

「言ってるそばからああ！！ファリプス！！」

こちらもちちらで騒々しい。こんな人質がいなければ楽勝なのにっ！とブラックローズは齒痒さを感じざるを得ない。

「ああ！？おい、その眼帯の親父！アトリに傷付けんな、殺すぞ！！」

「仕方ねえだろ、当たっちゃったから！」

「そこっ！喧嘩している暇ないから！！」

「おい、アトリとか言うのHPが少ないがどうするカイト？」

ガルデニアの問いにカイトは珍しいことに舌打ちをした。

「ガルデニア、アトリさんの回復を！ここまで来てデータになにかしらの損傷があったら大変だ！！」

「ちょっと、イニスも回復しちゃうわよ！？」

「作戦の最優先事項はアトリさんの救出だから、この際仕方ない」
悔しそうなのはカイトも同じで、ブラックローズは怒りを溜め息を吐くことで堪える。

消耗するのがこちらだけなんて、皮肉だ。

「っだあああ！！ム力つく！！」
ブラックローズが大剣を振るった。

「…………人間って大変だなあ…………」

すっかり他人事のようにクビアは奔走しているであろう先程まで通信で会話していたヘルバを思っただいた。カイト達の様子は確認できないが、おそらく彼らも頑張っているに違いない。

「…………ふああ…………」

不謹慎にも出た欠伸を噛み殺して、クビアは無駄にうるさい男を振り返った。

「君も白いハツカーさんの手伝いに行つて良いよ」

「むっ！？我輩の力を必要としている悪に虐げられたものがあるだど！？」

「言つてないよ、そんなこと！なんだよ、悪つて！？」

「ならば仕方あるまい！悪のあるところに正義の味方びろしあり！びろしここに推参！！」

「ここには推参しなくて良いよ、さつきからいたんだから！僕は仕事手伝つて来いつて言つてんだよ！！」

「むむっ……！？推参より参上が良いだど！？ならば仕方ない！弱きものの味方びろしここに参上！！」

「話し聞けよ！！」

このままでは会話だけで終わつてしまいそうだ。

「今すぐハツカーの手伝いをしに行つてできれば戻つて来るな、良いね！？」

一息で言つとびろしも心得たと頷く。

「おお！作戦が成功した暁にはここで正義について語り合いたいから他の作業を手伝つてできるだけ早く作戦を終了させようと言つのだな？まかせるが良い！！」

「言つてねーよっ!!」

ついつい荒っぽくなってしまった言葉が届く前にぴろしの姿は消えてしまった。

「…あーっ、もう!!」

クビアは人を翻弄するのが得意だ。相手の失敗や弱みを確実に攻める言葉遊びなら誰にも負けたりしないだろう。

しかしその一方で、ぴろしのような性格は苦手である。理由は簡単。人の話を聞かないから。

どんなに相手にとって嫌になる言葉を吐こうが聞いていないんじゃない意味がない。

自分を落ち着かせるように大きく息を吸って、吐く。

「……人間って大変だなあ……」

しみじみと、感慨深げに彼は呟いた。

様々な性格がいることは理解できても、全部引くるめて『人間』と言うカテゴリーに入るくせに何故仲良くできる性格とできない性格があるのかが理解できない。

少し悩むとクビアは自嘲した。こんなことに悩むなんて、まるで人間みたいだと。

青緑の光。まるでカイトの髪と同じような色の光に、カイトは咄嗟に振り向いた。

ジジッとノイズが響く。

「トラッ!!」

本能、ではない。彼はするようにプログラムされているのだから、彼はデータなのだから、やりたいやりにくくないと言った感情以前にやらなくてはならない。それは義務であり、存在意義であり、彼を縛る枷だ。

そこに意志はなく、感情もない。

それは理解している、仕方がないとも思ってはいるが、ここでデードレインなんぞされたら全ては水の泡だ。

カイトはトラに飛び掛かり、自分と同じ姿をしたPCを押し倒した。バタバタと手足を動かし抵抗するトラを押さえ付けて、獣のように呻く彼を宥めるようにカイトは言った。

「イニスはデードレインしちゃダメだ。大丈夫。イニスは次会うときは必ず倒す。だから今は倒さなくて良いんだ」

わからない。なにを言っているのかわからない。敵は早急に消さなければならぬ。それがモルガナに繋がっているならばなおさら。自分は女神を守るために、危険因子を消すために創られた。

わからない。カイトはなんと言っている？いつもなら理解できるはずなのに、ノイズが酷くて聞こえない。カイトはなにを言っている？あれは紛れもなく危険因子なのに、倒してはいけないなんて理解できない。

ああ、耳元で鳴り響くノイズがうるさい！

「…トラ？」

「…ノイズがうる」

「ノイズ？今はそこまで酷くないけど…」

「うるさい、う@い！！」

癇癢を起こした子供のように怒鳴ると、トラはカイトを突き飛ばした。

「トラ！？」

武器を構えて飛び掛かって来るトラの姿をカイトは呆然と見詰める。キンツと金属同士が擦れる音が響いて、気付けば月長石がカイトとトラの間に立ちトラの攻撃を受け止めていた。彼がいなかったら、カイトはトラの攻撃を防御もせずに身体で受けたことだろう。

「……あ」

「…気をつける」

「…う、うん。ありがとう」

「……こいつは？」

いったいなにが起こったのか、そんなことはカイトが知りたい。いつだってトラがカイトを攻撃することはなかったのに。

「…わからない」

跳び退いたトラに警戒を怠らずに月長石はカイトに言った。

「……失敗」

その一言で彼がなにを言いたいのか理解してカイトはうなだれた。トラを連れて来たことは失敗だった。そう言いたいのだ。でも仕方がないじゃないか。こんなことになるなんて誰も思わなかったんだから。カイトはそう言いたかったが黙った。

なにか問題があるならば誰かが注意してくれる。そんな怠慢がなかったとは言い切れない。これは仲間に大変な仕事ばかり押し付けたあげくにも考えずに余ったメンバーを連れて来たカイトの責任だ。
「カイトッ！！」

ブラックローズの悲痛な声に視線をやればイニスの背後に三頭の竜が現れる。

カイトは記憶を掘り返してあれがどんな攻撃だったか思い出した。三頭の竜がぶつかって来るのだ。ただぶつかるだけだと侮ると痛い目を見るのは経験談で、カイトは大声で言った。

「全員防御ー！！」

などと言った傍からミストラルのライフポイントは底を付く。

『死んじゃったよ』（T―T）』

「リプメイン！全員回復よろしく！…月長石」

「…なんだ」

自分の回復をしている月長石がカイトを見る。

「責任は自分で取るよ。トラのことは任せて、イニスをお願い」

「……………了解」

少し躊躇った後に月長石は頷いた。今は立ち直っているが、またカイトがトラの攻撃にショックを受けて呆然としてしまうか心配なの

だろう。

生憎カイトもそこまで子供ではない。

イニスと仲間がいる所へ駆けて行く月長石を尻目にカイトはトラと向き合った。

「背中 of 混同部位全て発見」

「これで全部か？」

ヘルバの言葉にオルカが尋ねる。

「ああ。だが、どんどん浸蝕は進むからな。全て見つかったなら、すぐにでも一斉に消さなければ……」

「わかってるわ。……聞こえるかしら、クビア？」

『はいはい。今度こそ準備完了かい？』

「ええ。……行くわよ」

その場にいる全員が頷く。オルカがマウスを動かして言った。

「一」

「二の」

八咫がはBack spaceを押して言う。

「三つ」

バルムンクの言葉と同時に全員一斉にEnterと書かれたキーを打った。

激動（後書き）

なんで前半シリアスにならなかったんだろう…

救出

突然それは起こった。

カイトとトラが武器を交えた瞬間に。

ブラックローズがカイトに代わって指示を飛ばした瞬間に。

ハセヲがイニスへと鎌を振り上げた瞬間に。

「アトリッ!?」

ハセヲが鎌を放り出し墜ちて行くアトリの身体を受け止めた。背中や腕や足、その他イニスと繋がっていなかった部分の所々にデータがない姿は痛々しく、見るのが辛くてハセヲは顔を歪めた。

「今だ! 全員全力で攻撃!!」

トラの攻撃を受け流しながらカイトは指示を飛ばす。それによゆく気付いたようにみんながイニスへと攻撃をしかけた。

「アトリ!! しっかりしろ!!」

アトリの身体 of 足りない部分が徐々に作られて行く。

「あー!!」

ブラックローズの悔しそうな声。

「……あーあ、逃げちゃったね」

「ま、人命救助はできたわけやし、まずまずってとこちゃう?」

「だな。……あー。安心したら腹減って来た。腹と背中くつつく」

「……………それは凄いな」

「突っ込めよ、ここは!!」

無表情ながらも素直に驚いた月長石に兎丸が怒鳴る。レイチエルがそれを眺めて肩を竦めていた。

「……トラッ!?」

いつもの喧騒が訪れて、安心した矢先にカイトが声を上げる。

倒れたトラをなんとか抱き留めると、動かなくなつた彼を心配そう

に見詰める。

「どうしたのよ？」

「わからない。いきなり倒れちゃって……」

「それはデータの処理が間に合わなくて混乱しただけよ。心配しなくても大丈夫」

姿を現したのはヘルバだ。同様にやって来たバルムンクがカイトの肩に手を置く。

「暫くすれば目覚める。今は作戦の成功を喜ぼう」

「……バルムンク」

「カイトじゃこいつ連れて帰るのちよつときついな。俺が連れてってやるよ」

「ありがと、オルカ」

しゃがんだオルカの背中にトラを乗せて、カイトはまだトラを心配しながらもハセヲに駆け寄った。

今はいつの間にか来ていたクビアがアトリの細部を治しているところだ。

「ハセヲ」

「……カイトか。ありがとな。アトリもなんとかなりそうだ」

「……いや。普通はなんとかならないんだけどね」

凄腕ハッカーとプログラムに強い数人の仲間。そしてはや狡いと言われても仕方がないクビアの存在。

ゲームのルールから大きく外れてずるをしてもこんなに大変だったのだ。正攻法では助けることは不可能だろう。

「……こんなものかな。セーブとか上手くできなかったならまた連れて来て」

「ああ。世話になった」

「アトリさんの意識どれくらいで戻るの？」

クビアは暫く考えて肩を竦めた。

「さあ？未帰還者だったわけだし、精神的に酷く消耗しているわけだから暫くの休息が必要なのは確かだけど……」

僕は医者でも人間でもないからわからないよ。とクビアは言った。

「わかった。ありがとう、クビア。お疲れ様」

僕トラの状態詳しく聞いて来る。とカイトは慌ただしくその場を離れた。

「わざわざ来てくれたんだな、あいつ」

「ま、通常の人間の三割増しお人よしだからね」

「……人間って言うけど、お前何者だよ？」

「AIと関わるのは初めてかい、“死の恐怖”？」

「やめる、その呼び方。……初めてってわけじゃないけどよ」

「だろうね。……僕はもう行くから、君も“惑乱の蜃気楼”を連れて早く帰れば？」

「おい！質問の答えは！？」

「……言っておくけどさ」

立ち上がったクビアは冷ややかにハセヲを見下ろす。

「君とカイトの道はもう交わらない。一時的に交差したか、凄く近くなってしまうただけ。君はこれからカイトと“お友達”を続けるかもしれないけど、それは共に戦うこととは別問題だ。君はもう、カイトと“お友達”のただの他人にかなり得ない」

「……もしそうならなんだ」

「君はカイトと関係ないのに、どうして君なんか僕に僕の正体を教えてやらなくちゃいけないの？」

クビアには敵が多い。むしろ敵しかいないと言っても過言ではない。かつて敵だった存在に、やすやすと自分の正体を明かす程クビアは優しくないしバカでもない。

教えればハセヲはクビアに疑念を抱くだろうし、クビアを味方にしただでさえモルガナを倒す機会を目の前にいる青年のせいで失ったのだ。これ以上邪魔されてたまるものか。

「……そーかよ」

ならば最初から気に喰わない者同士でいがみ合う方がまだ。

惘然とした表情のハセヲにクビアは作り笑いで言った。

「さよなら、“死の恐怖”」

「……じゃあな」

お互いにもう顔を合わせたくないと心底願いを込めた挨拶だった。

「ヘルバ、どうしてトラは倒れたの？僕なにかまずいことした？」

「言ったでしょう。データの処理が間に合わなかったって」

「ごめん、もうちょっと詳しくお願い……」

苦笑するカイトにヘルバは溜め息を吐いた。

「カイト、君は作戦成功のためにトライエッジにデータトレインの使用を禁止しただろう」

「八咫さん」

「しかしプログラムされた通りにしか動けないデータはその指示を無視してデータトレインを使おうとした。そうだろう？」

「……もしかしてどこかで見てたの？」

「想像に易いだけだ。そして、更にプログラムと違うことを命令されて混乱したのだろう。彼らやAIはこの世界で生きるために常に膨大な量のデータを処理している。今回はそれが追い付かずにパンクしただけだ」

「トラはアウラ達のようなAIではなくて、アウラが作ったプログラム。学習する機能は付いていないわ。だからこそ自分の使命と真逆の指示を受け入れることができなかった。普段は大丈夫でも、今回は“波”が目の前にいたから」

月長石の言った通り連れて行かない方が良かったのだとカイトは理解した。

「……今回のことでトラにどれだけの負担がかかった？」

「それは心配しなくても平気よ。ウイルスにやられたわけじゃないから負担なんてあつてないようなものね」

「……わかった。ありがとう」

俯いたカイトを見てヘルバと八咫は顔を見合わせた。きっと今はそ

っとしておいた方が良さだろう。

混乱したからカイトに襲い掛かったトラ。きっとカイトだとは理解していなかっただろう。いや、カイトはそんなことは気にしていない。剣を向けられたことなど、ほんの些細なことだ。どうでも良いことだ。

そんなことよりもカイトが気にしていることがある。

「……守れなかった」

また守れなかった。自分は“兄”なのに、“弟”を守れなかった。強くなりた。と唐突に思った。

強く、強くなりた。なによりも強く。この世のどんなものよりも強く。強靱な心と身体を得て、どんな脅威が襲って来ても全てを守れる程に強くなりた。

顔を上げてカイトは成功を喜んでいる仲間のもとに歩み出した。

「……また思い詰めて」

呆れを含ませたその言葉と裏腹にその表情は心配そうだった。

「ブラックローズ？」

バルムンクが声をかける。彼女の視線の先を追えばそこには仲間と笑い合うカイトがいて、バルムンクも同様に心配で顔を曇らせる。

「……カイトか」

「あのバカまたなんか悩んで……。もう一人で突っ走ったりはしないだろうけどさ」

「俺達にできるのは、カイトのサポートだけだ。……最初は、カイトが変わってしまったように見えただ」

守ると言うことに執着すら見せるカイトが、かつて共に戦ったカイトと変わったように見えた。

「しかしあいつは変わっていなかった。ただあの頃のように単純にゲームをしなくなっただけだ」

「…そうね。蒼炎の二つ名を手に入れて、あいつには使命ができた。もう純粹にゲーム楽しめるわけないわよね」

英雄を望んだのはこの世界の大半のなにも知らないプレイヤー達。守護者を望んだのはこの世界を司る女神。

カイトはもうただのプレイヤーではいられない。

敵を滅ぼす蒼い炎の名を持つ守護者は、守ることこそ存在意義なのだと自分を責め立てる。

「だから俺達は、カイトを助けよう。俺達といいつかの間だけでも、ただのプレイヤーでいられるように」

「わかってる」

わかっているけれど、なにかを思い詰める姿に自分の無力さを思い知る。

私はカイトを助けることができていいのか。それともできていないのか。

ブラックローズはそんな些細なこともわからない自分が齒痒かった。

救出（後書き）

袖季ってバカなんじゃないの。と真剣に考えるようになりました。
夏休みは執筆しないぞ！の意気込みはどこ行った。

いや、でも、アトリを助けて一段落着けたから満足です。

過失

あれからようやく一日が経った。トラはまだ目を覚まさない。

「……………」

カイトはあれからログアウトしていなかった。休息を取った仲間達が代わる代わるに様子を見に来ては「休め」とカイトに声をかけて行く。しかしカイトは頑なに首を縦には振らない。

一度オル力が「大学は？」と、尋ねるとトラに視線を向けたままカイトは答える。

「進級に必要な単位はもうあるし、僕は明日授業がない」

こういった事態に備えて取れるだけの単位を取ったのかと疑いたくなるような言葉だ。

とにかく彼を休ませようとして様々な言葉をかけてもカイトは動こうとしない。私生活を引き合いに出しても、何分彼には隙がなさ過ぎた。

大学の単位もそうだが、故意か無意識か彼は一日二日程度ならば自分がいなくても大丈夫なような生活を送っている。どんなことがあっても大丈夫なように準備していたのかと疑いたくなってしまう。だから誰も、カイトを休ませることができなかった。

メールを受信した音にカイトは顔を上げた。また仲間からだろうか。ログインしてはカイトとトラの様子を見に来て、ログアウトしては二人を心配してメールを送って来る。そんな優しい仲間を想うと申し訳ない気持ちで一杯になるが、滅多なことが起こらない限りここから離れる気はなかった。

「……………」

メールを確認して息を呑む。ああ、滅多なことはこういうときばかり起こる。

「……いや、滅多なことじゃないか」

これは約束なのだ。

仲間のどんな言葉でも微動だにしなかったカイトは、ようやくその重い腰を上げた。

「ヘルバ！ヘルバ、いるの！？」

トラが寝ているのは、出来損ないのホームだ。一般に導入される前の試作品や失敗作のホームがネットスラムにはある。（余談だが、バルムンクが企画していた花見用の桜の試作品等もネットスラムには存在して、見る度にブラックローズがなんとも微妙な顔をしている）

ネットスラムを歩き回りヘルバを呼ぶ。

「もう彼から離れて良いの、ぼうや？」

「……いないかと思っただよ、ヘルバ」

ホッと息を吐き残念そうに眉を寄せた。

「ほんととは目が覚めるまで傍にいてあげたかったんだけどね」

「あら。なにかあった？」

「うん。“約束”を果たしに行かなくちゃいけないから」

「……そう。“約束”を、ね」

含みのある言い方にカイトは肩を竦める。ヘルバは尋ねた。

「行き先は？」

「……『混沌たる 幻想の 大地』。一人で行くよ」

「……わかった。ただし、二時間経ったら他にも連絡するわ。いつかのようにならないように」

「………ありがとう」

回復アイテムが充分にあるのを確認して、カイトはカオスゲートを抜けた。

『混沌たる 幻想の 大地』はプロテクトエリアだ。だからそこに

はカイトしかない。

きよろきよろと周囲を見渡して、見覚えのあるものを見付けてカイトは駆け寄った。

それは一見ただの雑草だ。見た目はねこじやらしに似ていて、それを摘み取ったカイトは懐かしそうに目を細める。

「……エノコロ草」

使用方法もないそのアイテムはカイトにとっては一種のキーアイテムだ。いや、カイトにとって“も”、と言っべきだろう。

使用方法がないそのアイテムを無駄だと思ったカイトに、かつて仲間だった猫型PCは言った。

『無駄にこそ意味があるんだ』と。

「……ミア」

今はモルガナの手の内にある君を、きつとエルクの傍に帰してあげるから。

摘んだエノコロ草を持ってカイトは遠くに見える口を開いたダンジョンへ歩き出した。

なにもないじゃないか。となんとなく思っていたカイトは階下へと続く階段下り足を止めた。

驚愕で息が詰まる。部屋の中でカイトに背を向けて立っているPCの姿。

「……君、は」

ただのPCならば良い。プロテクトエリアに出来損ないのAIが紛れ込むのは実際よくあることだ。

口の中がからからに渴いて、カイトは唇を湿らせるために舌で軽く舐めた。

「君は…」

ぴんと天に向かい真っ直ぐに伸びた紫色の耳。女性物の緑の鎧。耳と同色の長い尻尾。

ここにいるはずがない姿。いてはならない仲間。かつて失った仲間の姿。手をかけたのは、カイト自身。

「……ミア……？」

かさかさと渴いた呟きが聞こえたのか、“それ”は振り返った。

『おいで』

「……っ！？待って、ミア！！」

影のように消えたその姿を掴もうと手を伸ばしても、届くはずもなかった。

「待つてよ！君がいないとエルクは……！！」

まるで一人芝居でもしているようだ。本人はいたって本気だ。

時計を確認するとちょうど三十分が経つ頃だ。ヘルバが仲間を呼ぶまで後一時間半。“ミア”の姿を見た以上ただ事ではないので仲間を待ちたいところだが、ここには長居するわけにはいかない。それに仲間を待つて“ミア”がどこかへ行ってしまふ可能性もある。

「……………」

時間がないのなら、行くしかない。

敵を一人で倒すのは苦ではなかった。よくあることではあったし、レベル上げのためによくやった。しかし今は金に輝く魔法陣が邪魔で、行き止まりの部屋に入ると舌打ちを隠せない。

「……ミア？」

そして、辿り着く。

『やあ、カイト。久しぶりだね』

忘れたはずのカイトのことをその姿だから覚えているのか。これはミアの残像で、カイトを化かしているのか。もうなにもわからない。不透明な靄のようなその姿に触れようとも思えなくて、ただ彼女がモルガナの手先としてカイトをおびき出したわけではないと願うば

かりだ。

「…君は、誰？」

『それはなにに対しての問いだい？誰、なんてあまりにも曖昧な言葉だ』

スツと先へと続く入り口を指す。アイテム神像がある一つ前の部屋を示して正体がわからない彼女は言った。

『…この先にエルクが』

「え！？」

『エルクを助けて。A I D Aに取り憑かれてしまったんだ』

「A I D A…？」

聞き返してもすでに彼女の姿はなく、カイトは進むことしかできなかった。

中にいたのはうずくまっている長髪の男性。髪の色は見知った水色で、エルク髪伸びたな。と、とち狂ったことをカイトは思った。

「……エルク？」

近寄ってもエルクは顔を上げない。肩に手を置いても反応はしないで、ただなにかを呟いている。

「……ミア。どこにいるの、ミア…」

「エルク…」

姿は変わってしまったが、彼がエルクだとカイトは確信した。同時にかつて犯した自分の罪が思い起こされる。

ミアを殺したのは、僕だ。

『A I D A。かつて滅ぼされたはずの危険因子。まだエルク以外には感染してない。広がる前に、エルクを助けて』

「ミア…。A I D Aってなに？エルクはどうしたの？」

振り向いてもそこには誰もいない。

「答えて、ミアッ！！」

「……………今ミアって言った…？」

「…っ！？」

がしりとカイトの手を掴む青年。長い前髪は顔の半分を隠しているが、その表情に現れる感情にカイトは思わず彼の手を振り払った。怠惰とも思える程にゆっくりと、緩やかに“エルク”は立ち上がる。

「…君は誰？」

カイトは尋ねた。

「君は誰っ？エルクじゃない！！」

長くなってしまった髪。両頬からなくなってしまった模様。伸びた背丈。明らかに魔導士ではない服装。

しかしそんなものはカイトが目の前にいる青年をエルクではないと否定する材料にはなり得ない。

しかしカイトは一度自分が彼をエルクだと確信したにも関わらず否定する。

「ミアはどこ？僕のミア！ミアを返して！！」

「エルクはそんな顔しない！」

彼が黒い剣を手にとった。

ああ、君はもう魔導士じゃないんだね。と、しょうもないことをカイトは考えた。

「ミアを、返せええええ！！」

助けるって言ったって、どうすれば良いんだよ！？とカイトは挑戦的に笑いながらも、内心で姿が見えない彼女を罵った。

光明（前書き）

AIDAがなにかなんて柚季が知るわけないんですから開き直って好き勝手書くことを決意しました。

知らないなら調べろよとか柚季も思っんですけどイマイチわからないんですもん！！

光明

斬撃が閃いた。

「……いつ！うわっ！？」

真っ黒な剣。苦々しくそれを睨みながらも、カイトはどうしようかと暢気に考える。

はつきりと今自分が危険だと自覚していた。

「ミア！返して、僕のミア！！」

黒い剣が振りかぶられる。カイトは更に後ろに下がる。

彼の技は荒く、技術で言うのであれば言っちゃ悪いがバルムンクやオルカの方が上だ。しかしカイトは防戦一方で、どうにも解決の糸口が掴めない。

苦戦する理由は二つある。

一つはあの黒い剣が僅かにしなることだ。カイトが今まで培った戦いの感覚で剣を避けようとすると当たる。しなるせいで剣先の速さが通常よりも数秒遅い。しかしその分刃は速い。そのズレのせいで感覚が狂うのだ。ならば視覚で避けれるかと言えばそれも無理だ。これもしなるためか僅かにぶれる。

もう一つはリーチの長さが変わるのだ。剣を振れないように懐に入り込めばナイフの長さに変わっている。斬撃を後ろに避ければ突然長くなった刃が襲い掛かる。間合いがまったく意味を成さないのだから笑えない。

どうしたものかと苦笑する。勝てないではない。

ただ倒せば良いのならば、それはカイトの得意分野だ。殲滅が得意だなんてあまり嬉しくないのけれど、とにかくただ倒すだけならなんとかなる。

“ミア”は『取り憑かれた』と言った。ただ倒せば本来のエルクに戻るのなら簡単だが、そうじゃなければ不用意に傷付けるわけにはいかない。

「エルク！君がミアを大好きなのはわかったからとりあえず落ち着こう？」

「うるさいつ、ミアを返せ！！」

「……………」

わかりきっていたことだが言葉での説得は無理らしい。

「ウルカヌス・ファ！」

もう仕方ないかな。と魔法を放つ。このままだとなぶり殺しにされてしまう。カイトだってそんなの嫌だ。

「……………なにあれ」

目の前の青年から沸き上がる黒い靄。瞬間的にカイトはあれが原因だと感じ取った。

もう慣れてしまった面倒な斬撃を双剣で受け止めて、カイトは自分からも攻撃を仕掛けた。

暫くの攻防の後、カイトは現れた文字に目を剥く。そこに現れたのは、《PROTECT BREAK》だったからだ。

本来ウイルスバグか“八相”にしか現れないものが出て来たと言うことは、AIDAとはウイルスバグの一種だろうか。

ふと浮き上がった疑問の答えはわからないが、考えてみれば“ミア

”はカイトに助けを求めたのだ。データドレインを使えるカイトにもとよりカイトに誇れる自分の能力などアウラから受け取ったこれだけだ。と自分には見えない腕輪を見詰める。

「ごめんよ、エルク」

それは現実の自分が呟いたのかゲームの中にいる自分が呟いたのか、判断は着かなかった。しかしカイトは迷いなくデータドレインを選択して決定ボタンを押したのだ。

「データドレイン！」

手の内に飛び込んで来たウイルスコアを握り締め、データドレイン

を使い過ぎているための眩暈が過ぎ去るまで堪える。
そして倒れている自分よりも長身の男に急いで駆け寄った。

『お疲れ様、カイト』

「……なにが、お疲れ様だよ！助けてつてどうすれば良いのか全然わかんなかったよ！」

間違ったらどうしてたのさ！と怒るカイトに“ミア”は肩を竦める。
『本来AIDAとは碑文使いにしか助けることはできない。でも、僕らがいない碑文使いは碑文使いたりえない。だから君以外頼れなかったんだ』

「必要だったのはデータドレイン？」

『そういう言い方は好きじゃないなあ。かつての友を頼りにしたんだから』

含み笑いはカイトが知っているもので、不覚にも泣きそうになりながらもカイトは言った。

「……君はミア？それとも姿が同じだけの偽者？」

『……』

彼女は暫くなにかを探すように視線をさ迷わせていたが、大きな猫目がかイトを捕らえる。

『……核心から言えば僕は“ミア”じゃないよ』

「……なら君はなに？」

『僕は、エルクの傍にいたかった。でも抗えなかったから、せめてエルクを助けるために残された、言わば“波”の残像』

“誘惑の恋人”マハが大好きなエルクを助けてくれる人を探すために残された、マハの自我。

『精神的に言うのであれば僕はミアだ。だけど肉体がない僕は何者でもないただの映像さ』

「……うつん」

カイトは首を横に振る。

「君はミアだ。……疑ってごめん」

『…君がそう言うならそうかもね』

「教えてミア。僕が来るまでになにがあつたの？」

『……いつだったかな。全ての“波”に彼女が呼びかけた。戻りなさいってね』

カイトとハセヲが刃を交えていた一方で、ルミナ・クロスを出たエルクール・エンデュランスは、エノコロ草畑に出た。それは衝動的な行動で、特出すべき意味もない行為だったのだ。

『……ミア……』

かつてミアが占めていた心を、今はハセヲが占めている。それなのにエンデュランスは逃げ出した。

『…僕、カイトに話したいんだけどな。怖いや』

かつてミアの関心が向くように腕輪を求めて、ミアを失った罪を押し付けて、終いにはミアと一緒に探してと縋った相手。散々ミアのことで迷惑をかけたのに、今は別の相手を求めていると知ったら彼は自分を軽蔑するだろうか。

それだけが恐い。

しかし今自分の傍にミアがいることは伝えたい。

『……ミア？』

そんなとき、自分の憑神はどこか違うことへ意識を向けた。じつとどこか遠くへ。

『どうしたの？』

エンデュランスは知らないが、彼女は頑張ったのだ。呼びかけに堪えて、エンデュランスから離れようとはしなかった。

エンデュランスは軽く首を傾げてまた視線をエノコロ草に戻す。

どれくらいそうしていただろうか。エンデュランスはメールを受信して顔を上げた。その顔には喜色が浮かんでいて、誰からメールが来たのかすぐにわかった。

『ハセヲだ！………？』

メールの内容は仲間の安否を確認するもので、必ず返信しろと書かれていたために返事は書いたがエンデュランスには何故突然こんなメールを送って来たのか意味がわからなかった。

『ミアはここにいるのに』

何故、憑神がいなくなつて混乱しているだろうが。と前置きがあるのだろうか。

『……ミア？』

しかしその疑問はすぐに消えてしまう。

とうとう抵抗できなくなったエンデュランスの憑神は彼の頬を一撫でして、空気に溶けてしまったから。

『……頑張ったけど、僕はエルクから離れてしまった』

「……ミア」

『でも、もうモルガナの好きにはさせない。もう、エルクに泣いて欲しくないんだ』

そう言うミアはアイテム神像の部屋の入り口に向かって言った。

『おいで』

ミアの言葉でひょこりと頭を覗かせたのは帽子を被ったミアより小さい猫型PC。左目が紫色の星の中心にあるのが特徴だった。

というかこれって…、

「ミアー！？」

『なに？』

「違う、君じゃない！この子ってミアを探しに行った先で見付けたミアだよー！？」

『アハハ。カイト、なに言ってるのかわからないよ？』

ようやく出て来ても大丈夫だと思つたのか小さなミアはちょこちょこことこちらに寄つて来る。

「うわ。ミアよりかわいい」

『カイト、僕に失礼』

ばやけた残像のミアと違い小さなミアには肉体があるようだった。倒れて気を失っているエルクに寄り添うように座った小さなミアはこちらをじつと見上げている。

『この子の名前はマハ。僕が最後の気力を振り絞って残したAI。君達をモルガナの場所まで導くだろう』

「!?!?!?!?!彼女は今、どこに?」

『誰も侵入できない場所。でも彼女はもうすぐ動く。完全体になれば、彼女はすぐに安全な根城から出て来て、君達を倒しに来る』

モルガナの復活はすぐそこだと言われてカイトは絶望感に襲われた。

「.....そんな.....」

『マハはモルガナを守る“波”のマハと繋がっている。モルガナが根城から出たら反応するはずだ。エリアワードも打つから、全てこの子に任せて』

「わかったよ。.....ねえ、ミア。AIDAってなに?」

ウイルスバグの一種?と尋ねる。ミアが大変だったことはよくわかったがどうしてもこれだけは聞いておきたかった。

『似たようなものさ。決定的な違いはウイルスバグは一般PCに取り付けないけれどAIDAはそれができること。モルガナがマハの存在に気付いて消すためにエルクに植え付けたんだよ。彼女はAIに直接手をかけられないからね』

「...そっか。でもさっきAIDAは滅ぼされたって言ってなかった?モルガナが復活させたの?」

『いや、いくらなんでもそんな危険なことは彼女もしないさ。エルクに取り憑いたAIDAはね、彼女が滅ぼされたAIDAのデータをもとに作った似て非なるものなので本物のAIDAじゃないんだと思う。推測だけだね』

「.....AIDAってそんなに危険なんだ...」

そこでようやくミアはなにかに気付いたようににんまりと笑った。

『...ああ。良かったねカイト』

「なにが?」

『君がデータトレインして消えたあの黒い剣がA I D Aがエルクを媒介としてとっていた姿なわけだけど』

「それが？」

『君がああ剣でPKでもされてたら君は今頃未帰還者だ』

いやー。良かった、良かった。と笑うミアに、カイトはなにを言えば良いのかわからなかった。

「ミ、ミアァー!!」

なんですとー!!?はミミルの口癖なので、思いついたが言わなかった。

布石（前書き）

職業変えって書いたけど普通にジョブチェンジのことです。

布石

『…僕はもう行かなくちゃ』

「え？」

『ただの残像だからね。あまりもつようにできていないんだ。エルクは助かったし、マハを君に預けることもできた。そろそろ限界』

「…あ、ありがとう、ミア！君のおかげで、モルガナを倒せる！」

『…君はまだ重要なことに気付いていないんだね、カイト』

「……………え？」

哀れみさえ含んだその眼差しの意味がわからなくてカイトは眉を寄せた。

『……………僕は…。僕を助けてカイト』

「ミア？」

『僕をエルクのもとに帰して。お願いだよ、カイト……………』

風に砂が飛ばされるように、ミアの姿をしていた靄は消えて行く。

カイトは思わず手を伸ばしていた。

「ま、待つてミア！さっきの言葉はなに？気付いてないってなにを！？」

答えはない。ただ静寂がこの場を満たして、それ以外にも残ってはいなかった。

くいつと服を引かれる。振り向けば小さなミア…ではなくマハがカイトを見上げていた。

「……………ん…、あれ？」

「エルク…」

青年が起きた。マハはまだカイトの服を引っ張っていたがカイトはそれを無視してエルクを見ていた。

「……………カイト？」

「良かった…。起きたんだね、エルク。心配したんだ」

「……………カイト」

「あ、もしかして今はエルクじゃない？職業変えたついでに名前変えた？」

「…カイト、ミア、は？」

まだ意識がはつきりとしていないのだろう、エルクはどこかぼんやりとしていた。

「…………エルク」

「ミアは？ミアはどこ？ねえ、カイト！僕にはミアが必要なんだ！」

「ミアは、生きてるよ。エルクを待つてる」

逃げるように先程から何度もカイトを引っ張るマハに視線をやる。視線を合わせるために屈むと、マハはカイトの斜め掛けされた鞆を何度も叩いた。

「なにか欲しいの？……あ、もしかしてこれ？」

取り出したのはエノコロ草。首がもげるんじゃないのか心配になる程の勢いで首を立てに振るマハに苦笑して、カイトはエノコロ草を渡そうとしたが、興奮できらきらと輝く瞳を裏切りように手を引く。

「ちょっと待つて」

立ち上がったエルクにエノコロ草を渡す。

「…………なに？」

「エルクが渡すべきだよ」

渡されたエノコロ草を懐かしそうに見詰めるエルクは、膝について寄って来るマハに微笑んだ。

「…ミア？」

エルクが首を傾げれば、マハも首を傾げる。ふんふんとエルクの匂いを嗅ぐように顔を寄せたマハにエルクは破顔した。

「…はい、ミア。あげる」

渡されたエノコロ草を握り締め、マハはエルクに微笑んだ。

「感動的な茶番をどうもありがとう。とりあえずそのAIをこちらに渡してもらおうか」

割り込んで来た声にカイトとエルクが弾かれたように顔を上げる。
そこにいたのはオッドアイのPC神威と、常に彼女に付き従うPC
マギ。

「…『碧衣の騎士団』」

「ミアは渡さない!!」

カイトは横目で時計を確認する。時間はあれから二時間ちょうどだ。
つまりヘルバが言っていた二時間は『碧衣の騎士団』がカイトの存
在やプロテクトエリアに気付くまでの時間だったのだ。

きつともうすぐブラックローズ達がやって来て外で待機している『
碧衣の騎士団』の兵士とぶち当たることだろう。神威とマギの後ろ
にも兵士はいるが、もっと大規模な組織なのだから外にもいると考
えて間違いないはずだ。

喧嘩っ早いブラックローズが攻撃を仕掛けないと良いけど…。とカ
イトは不安になった。

「…一つ聞きたいんだけど、良い？」

「……なんだ？」

神威が対応してくれたことに驚きつつも、カイトはずっと気になっ
ていたことを尋ねた。

「…あなたとは、遺跡都市リア・ファイルで会ったと思うんだ」

「そうだな」

「あなたはわざと僕らに近づいたの？」

くす、と神威は笑う。気持ちの悪い笑みだった。

「そうだ。君にそっくりなあのつぎはぎだらけの出来損ないAIが
いたからな。見るからに不正データだとわかるものを引き連れるバ
カに興味が出てね」

「……そっか」

カイトはもう満足したと言わんばかりに彼らに背を向けてマハを抱
き締めているエルクへ手を差し延べた。

「帰ろうエルク。マハもね」

気軽さが満ちた言葉にエルクはきょとんと顔を上げる。カイトは微笑んでいた。

「……お前はここから平然と帰れるとでも？」

「思っているけどそれが？」

カイトの言葉にマギが一步前へ出た。

「不正を拘束するのが我々の役目です。そのAIだけでなく、PCカイトも悪質なチート容疑がかかっています。どちらも一度拘束させていただきます」

「…悪質なんて酷いな」

カイトは目を細めた。

「とにかくあなた達に拘束される義務なんて僕らにはない。あなた達の役目はわかったけど、僕らにも役目があるんだ」

「私達にはお前達を拘束する義務がある」

「いいや義務はない」

カイトの余裕が気に入らなかったのか神威の顔は歪んでいる。

「…なんだと？」

「これはリヨース…、CC社から直接の依頼だ。放浪AIの調査および捕獲。あなた達が所属している会社からだから、あなた達は今回仕事はないよ？」

代わりに頼まれたからね。と、二時間前に送られて来たリヨースからの催促メールを見せる。

アトリのことが終わったらずぐにでもAI探しに行くように前からメールは来ていたし、『碧衣の騎士団』への対応も前から考えてあった。マハを連れて帰ればリヨースとの“約束”は果たされる。

「捕獲するべきAI。依頼を任されたのは僕。あなた達には僕らを拘束する権利はない」

「…そちらにいるのはPCエンデュランスとお見受けします。彼も依頼を受けたんですか？」

「彼は仲間だから僕の手伝い。僕はリーダーだから僕が受けた依頼は僕の仲間が受けた依頼だよ。…あ、エルク精霊のオカリナ持つ

てる？」

「え、うん」

カイトはアイテムから精霊のオカリナを取り出した。本来ならば一つで良かったのだが、残念なことにカイトとエルクはパーティーを組んでいない。

「それじゃ、失礼します」

アイテムを持っていて良かった。図太いと言われるカイトもさすがに『碧衣の騎士団』の間を縫って通る自信はなかった。

悔しそうに顔を歪める神威を見てほんの少し悪いと言う気がしないでもなかったが、それでも彼らとカイトの関係は敵対以外にないのだから争わずに済んだことへの安心の方がずっと大きい。

「…神威さん」

「戻るぞ。マギ、精霊のオカリナは使うな」

今使えば外に出たカイトと再び顔を合わせる事になりかねない。

それだけはごめんだ。

「はい。総員撤収！」

たとえ出し抜かれたと感じても、気高さを失うわけにはいかないから。

だから今は素直に負けを認めなければならない。

「……………嘘でしょ……」

外に出たカイトは啞然としてしまった。頭を抱えたい。

なぜならば、『碧衣の騎士団』とhackersが武器を取って争っているのだから。

メンバーを確認するとバルムンクとびろし、それにクビアやトラなど、いて欲しくない人はいない。

バルムンクとびろしは管理者側にも所属しているから『碧衣の騎士団』と争ったためにCC社の中で分裂が起こったら今は困る。モルガナとの対決にはリヨースの協力が必要不可欠だ。

クビアとトラはここにいるだけでも困る。

今マハ以外のＡＩがいたらおそらく「そのＡＩは捕獲対象ではないな」などと言われて面倒なことになるに決まっている。きつとヘルバが考慮してくれたのだろう。

しかし、そんなヘルバの考慮も虚しく、彼らは交戦している。なんてことだ。どうしよう。

「ブラックローズ!!」

「カイト!？」

「なにしてんのさ、帰るよ!」

「逃がすかよ!？」

兵士の一人が剣を振り上げた。

ここで神威がやって来たら嬉しそうに武器を手に取り「よくも隊員に怪我を負わせたな」と言っに違いない。全てカイトの想像だがきつとそうだ。

彼らに戦う理由を一つとして与えなくなかったが、こうなってはもう遅い。せめて神威が戻って来る前に撤収しなければ。

「みんな急いでネットスラムへ!」

切羽詰まったカイトの声を聞いたからだろう。みんな上手く散り散りになってエリアから出て行く。こうなってしまうては今後も彼らとの抗争は避けられないだろうが、開き直るしかない。

全員がエリアを出たことを確認してからカイトもその場を離れた。

策謀

「おかえりー」

「どうだった？」

ネットスラムに帰って来たカイトを迎えたのはクビアとヘルバだ。ぐったりと疲れを全身で現しながらカイトは苦笑する。

「散々だったけど、道は見えたよ」

「白いハッカーさんに行くなって言われてさ。なにか面白いことあった？」

「…僕も気になることがあるんだ。ブラックローズ、僕がいない間になにがあったの？」

「……………」

「どうして交戦していたの？」

「ぼうや、交戦したの？」

「僕じゃない」

ヘルバの言葉にカイトが眉を吊り上げる。

もちろん、仲間に知らせてくれたヘルバにもわざわざやって来てくれた仲間にも文句を言うつもりなどなかった。

カイトが神威の前で余裕を感じていられたのは、仲間の応援があるとかわかっていたこともある。仲間の存在がなければあそこまで冷静な対応ができていたか怪しいものだ。

しかし、戦ってしまったことで『碧衣の騎士団』に自分達と戦う理由を与えてしまったこともまた事実。それだけは言っておかなければ。

「……悪いのは俺だよ」

「兎丸？」

「あいつらに言われたんだ。お前らはただの犯罪者集団だ。AIなんて引き連れて治安を乱していることにも気付けないのかってな。許せなくてよ……」

「うちも…。戦わん方がええことは百も承知やったけど、相手どついた兎丸止めるどころか便乗してもうた」

「許せないってなに？」

「明るい声上がる。見ればクビアは皮肉でもなんでもなく純粹に意味がわからないと言った顔をしていた。」

「戦わない方が良いってわかってるなら戦わなければ良いじゃない。なんで手を出すの？」

「だから許せなかったんだよ！」

「だからそれがわかんない。だってなにをすべきかわかってたんでしょ？なんでそうしないの？」

意味がわからない。とクビアが首を横に振る。

「あいつら…！」

ブラックローズは地面を睨みつけたまま絞り出すように言葉を吐く。

「あいつら、こんな野蛮な奴ら引き連れてるリーダーもたかが知れてるなって言っただのよ…！！」

おそらくはその言葉が引き金だったのだろう。兎丸やレイチエルを止めようとしていた他のメンバーも怒りを覚えるその言葉が。

「……野蛮だつて？」

カイトが不愉快そうに顔を歪めた。確かに仲間をそうやって侮辱されたことを知ったカイトが怒る。それを間近で見ながらオル力は思った。

違う！そこじゃない…！！

野蛮と言われたことにも腹は立ったが一番の原因はカイトを侮辱されたことだ。それをカイトは少しもわかっていない。

「…確かに、仕方ないかもしれないね。僕でもそうする」

「当然よ！」

噛み合ってるようでズレた会話にオル力はがっくりと肩を落とした。

「…意味わかんない」

カイトまでもが納得したこの意味がわからずクビアが眉間にシワを寄せた。

「…交戦してしまった以外は計画通り？」

ヘルバの問いにカイトは笑う。周囲が首を傾げる中、マハを呼んだ。
「嬉しい誤算ってやつかな。リョースの読みは大当り！問題なくこの子連れ出せたよ」

「あら、これは…」

「そう！マハ…、ミアだよ！」

「この子が“波”とリンクしているわけね？」

「うん。…ただ、モルガナの復活後にしか戦いを仕掛けるのは無理みたい。ミアは、手が出せない場所にいるって」

「そうね。“八相”が敵の手中にいるのなら、侵入不可能の場所を造るのは無理じゃない」

「難しいかもしれないけど、完全なモルガナを倒すことを前提にして次の作戦を立てよう」

カイトの言葉にヘルバは一度口を閉じる。なにかに思考を巡らすようにしてから再び口を開いた。

「ぼうや、あなたそのためなら、どれだけの犠牲を払える？」

改めたような質問にカイトは何度か瞬きをして、いつものように微笑んだ。

「僕の全てを」

「……………」

なにも答えないヘルバの視線が、あの子のミアの視線と酷似していてカイトは首を傾げた。

哀れみの視線。悲しみの視線。いつたいたんだと言うのだろう。

「そ、れ、よ、り…！」

ブラックローズが腰に手を当ててカイトを睨む。いつかのように武

器を持ち出したりしないかカイトは気が気じゃなかった。

「なんの話しよ！？説明しなさい！！」

作戦？リヨースの読み？いつたいなんの話しをしてるわけ！？とブラックローズが怒鳴る。

「…あ、えつとね」

ヘルバが頷いたのを確認してからカイトは話しを始めた。

「ブラックローズ覚えてる？リヨースに放浪AIの調査を頼まれた話」

「え？……ああ、あつたわね」

「あれはね、クビアの存在を示唆するメールだったんだ」

「僕？」

「はあ？」

「司と昴のことがあったのに、僕がすぐにクビアの存在に気付くのも変だと思わなかった？しかも場所も的確で」

放浪AIとクビアがイコールで結ばれるとはカイトも思っていないかったが、あのエリアワードが今だに有効であると言う内容のメールが来た時点で不自然さは感じていた。

リヨースもそれをおかしく感じたのだろう。AIの調査を建前にそのエリアを調べると言ってきた。

「僕らにとって幸運だったのは、クビアがもたらした情報だった。

かつての脅威、モルガナの復活」

「そこで、私とぼうやとリヨースの三人で秘密裏に計画を立てたの。あなたたちに教えなかったのは情報が漏れるのを防ぐため。メールも彼女に監視されている危険があるから、内容を隠して行っていた」

「みんなのことは信用しているけど、どこでモルガナが聞いているかわからないから。…僕らはクビアからの情報で、終わったはずのAIの調査をやっていないことにした」

「やってない？」

「やっただろ、とオルカが呟く。

「神威率いる『碧衣の騎士団』の出現と、彼女にクビアがAI調査

によって発見されたことを隠すためよ」

「クビアが発見できる程緻密な調査が行われていることが気付かれればモルガナの放浪AIへの警戒が高まってしまふ。それに『碧衣の騎士団』にはまだ終わってない調査をしているってことにしたかった」

その作戦が実を結んだと知らせるのがマハの存在だ。

「僕らはAI調査を“約束”と言い換えた。彼女にAI調査をするときりぎりまでわからないようにするためにね。それが成功したかはわからないけど、結果マハを連れて帰れた。リヨースはきつと今回のAIはモルガナとの関わりがあるだろうと言っていたけど、大当りだよ！『碧衣の騎士団』にもAI調査で押し切れたし大成功！」

カイトが喜ぶ様子を眺めて、なんだか腹が立って来たブラックローズは衝動のままにカイトをぶん殴った。

「いたっ！？」

「じゃあなに私に黙って計画進めてあげく交戦を責めるわけ？ふざけんじゃないわよ！？」

「うわ、ちょ、ごめんよ、ブラックローズ！」

「こら、待ちなさい！！」

「やだよ、ごめんってば！」

追いかけてこを開始した二人を見てみんながくすくすと笑い出す。ヘルバはリヨースに報告をしようとその場を静かに離れる。それを横目で見ながらクビアがマハのことを軽くじゃれるように突くと、マハはすぐさまエルクの後ろに隠れた。

「……………」

「……………」

二人は静かに見詰め合う。お互い警戒心を持ったまま口を開かない。

「……………」

「……………誰あんた？」

視線をさ迷わせているエルクにクビアがきつい口調で問う。エルク

の後ろにいるマハも怯えているのか青年と同じようにきよきよろとしていた。

「…エンデュランス」

「エンデュ…？なに？あんた碑文使いでしょ？確か：“誘惑の恋人”」

「…なんで知ってるの？」

「調べたから。…カイト！」

「な、な、なに！？」

と言いながらカイトはクビアを盾にするようにさつと後ろに回る。

「こおら、カイトー！！」

「わあー！ごめんなさーい！！」

もはや追いかけることをやるのが目的であり追いかけた理由を忘れ去っている二人はどこか楽しげだ。

「こいついつまでここにいるの？」

「え、あ、エルク！ごめんよ、すっかり放置して…」

「え！あんたエルクなの？」

その言葉に各々が反応し始める。歓迎されることにエンデュランスが照れている中、クビアが言い放つ。

「僕が聞きたいのは！こいつ碑文使いなんだけど彼女倒すのに協力するのかってこと！」

「…碑文使って、エルクはハセヲの仲間なんだね」

肯定しているような問いにエンデュランスが頷くと、カイトは小さく笑んだ。

「一度ハセヲを呼ぼう」

「げえっ！？」

とクビアが呻いた。

「アドレス知ってるの？」

「うん。僕達メル友」

言いながらカイトはメールを作成して送信する。

それにしても、ゲームをしている上にメンバーアドレスも知っている戦友に対して『メル友』とは、なんとも不思議なものだ。とブラックローズは思った。

カイトはすぐに来た返信に苦笑する。

「こっちに來るって」

「……………うええ……………」

隣ではクビアが唸っていた。

悲恋

「なんでメールの返信しなかったんだ、このバカ!!」

ネットスラムにやって来たハセヲの第一声はこれだった。

含みにクビアだが、『用事があるからあいつ来る前に出かけるよ』
と言ってさっさと退散してしまった。

「ご、ごめん…」

「…たく、心配させやがって」

「…心配、してくれたの？」

「はあ？なにバカ言ってるんだ、当然だろ」

とても嬉しそうなエンデュランスの顔にカイトはなにか違和感を感じた。

「憑神がいなくなった後なにがあっただ、エンデュランス？」

「……ミアを探してた」

「ミアってあの猫だろ？…なんでまた探してたんだよ？」

「だって…」

プロテクトエリアだったし、AIDAのこともあったエンデュランスがメールの返信ができなかったのは当然だし、カイトからすればエルクがミアを探すのはあまりにも自然だ。

それが本当に、かつてと同じエルクであるのなら。

「だって、憑神がない僕を、君が必要してくれると思わなくて…」

「なんだよ、それ!!」

怒鳴ったのはハセヲ、ではなく、カイト。

「なにそれ！ハセヲに必要とされるためにミアを必要としたわけ？
そんなのってないよ、最低だ！ミアの気持ちも知らないで!!」

これ以上エルクに泣いて欲しくないと言って、エルクのもとに帰りたいと切実に望むミアの姿。

カイトがいない間エルクがどうであつたか、なにがあつたかなんてカイトは知らない。ミアを破壊したカイトとしてはエルクを責めることなんて絶対にできない。きつというんなことがあつたのだろうと思う。しかしそれでも、

「ミアに対しての裏切りだ！ミアはまだ君のことを一番に想つてるのに！！」

カイトが背を向ける。ブラックローズ達は止めなかった。これ以上酷いことを言わないようにカイトがこの場を離れようとしていることを知っているから。

「お、おい、カイト！」

一人取り残されたハセヲがカイトを呼ぶが、カイトは止まらなかった。

ぱちり、と瞼が開く。

見渡せばホームの中で、何故自分がこんなところで目覚めたのか首を傾げた。

もぞもぞと身体を揺すった後に、トラはホームを出た。自分が眠る前の記憶がないまま、ただ人がいる場所に出たかった。

『ミアに対しての裏切りだ！ミアはまだ君のことを一番に想つてるのに！！』

カイトが怒鳴って走り去る姿にトラはびっくりした。普段から温厚なカイトがいったいどうしたというのだろうか？

「カイ#？」

トラからすればカイトを追いかけることは当然だった。

「…僕は知っていた」

カイトは振り向かない。しかし彼は追いかけて来た人物がトラだと知っているようだった。

「僕は知っていた」

再びカイトは呟いた。

「ヘルバは、ミアはエルクの傍にいたと言った。それだけでエルクが碑文使いだとわかる」

「……*イト？」

「クビアは、碑文使いはまとまって行動していると言った。エルクがハセヲと繋がっていることは明白だ」

自嘲は止まらない。カイトが振り向いた。彼は笑っている。

「知っていて、やらなかった！なんでだと思う？それはあまりにも愚かなんだよ！！」

笑う、笑う。カイトは笑う。トラにはわからない。トラは今カイトがどんな感情に包まれているかわからない。

それは自分が人間じゃないから生まれる差異なのだろうか。本当にそれだけののだろうか？

「恐かったんだよ！僕がいない間に彼がどれだけ変わったのか！人は変わってしまうから。成長して、前に進むために確かに経験は必要だけど、今を過ごすために過去はいらないから。変わっちゃったエルクが恐くて僕はなにもしなかった！！」

カイトはまだ笑う。

「そんな僕にエルクを責める権利はない。人が変わることを知っていて、確認することに勝手に怯えて、それなのに変わってしまったことがショックで。そんな僕はエルクを責めたりできない」

でもそれっていけないの。とカイトは小さく零した。ぴたりと、浮かべていた笑みが消える。

「そりゃあ怒ったのは僕の衝動だ。でも、僕はミアだって大切なんだ。それに嘘はない」

変わってしまった大切な対象。それはエルクにとっては必要だったのだろう。それはわかるのだ。彼にはミア以外にも執着する対象は必要だったと思う。しかし、

「相手に必要とされるために大切だと思ってくれる相手を利用することは許されない」

表情はない。消えてしまった感情はどこに行ったのだろうか。

「…聞いてくれる、トラ？」

トラはすぐに頷いた。カイト腰を下ろした隣に座る。

「ミアがまだいた頃、僕はエルクとミアにさんざんな目に会わされたんだよ」

空を見上げてカイトは懐かしそうに小さく笑う。ようやく戻って来た表情に、それが先程のどこか哀しい笑顔ではないことにトラは人知れず安心していた。

「エルクにどこかに誘われると、ダンジョンの奥にはミアがいて、僕達お互い大好き！みたいな会話をしたあげくに僕を置いて二人で帰っちゃうの。もう僕あの二人の前じゃ空気同然。というか、誘った僕とじゃなく、突然現れたミアと帰るんだエルク。みたいな」

「……………」

「ミアもミアでね。基本的にエルクと僕が二人でいると彼女ってばエルクのことしか呼ばないの。……本当、あの二人はすごい仲良しなカップルだった」

それは果たして『仲良し』で済ませられる内容なのか。疑問にも思ったが、トラにはわからない。

「ミアがひろしで遊ぶようになってさ、それはもう一方的なからかいで、ミアは楽しくて仕方なかったらしいけどひろしは色が変わったりで大変で」

色が変わるってなんだ。とトラは深刻に悩んだ。

「ひろしは大変なのにミアに構われてるってことでエルクは怒るからあれは大変だったな。主にひろしが」

その言い方だと後の二人は完全な加害者である。

「もう嵐みたいなんだよね、あの二人。いや、僕のパーティーは個性派揃いなんだけど」

くすくすと笑うカイトに釣られてトラも首を竦めて口元を隠しながら笑った。

「でもきつとパーティーの中で僕が一番酷い奴だ」

ミアを失った原因でありながら、ミアを失ったために変わったエル

クを責めた自分が。

「エルクがミアを探しているのを見て、相変わらずエルクはミアが大好きなんだと勘違いした。期待した。裏切られたと思った。全部が身勝手な感情だ。エルクに悪いことしちゃった」

冷静ではなかったのだ。今エルクの傍にミアはいない。もう、大切だった二人は思い出にしなければ。

こうして大人になっていく。エルクはもうその一步を踏み出した。ミアがいなくなったことを受け入れ、思い出にした。

ならばカイトもしなければ。その一步は大きく、カイトはすくんでしまっているけれど。前へ進まなければならぬから。

「トラに話したらなんだか落ち着いたよ、ありがとう」

「なに　してい@い」

「黙って聞いて欲しかっただけなんだ。慰めも同情もいらなかった。

……エルクまだいるかな。謝りに行かなくちゃ」

立ち上がってカイトはトラに手を差し延べる。

「トラも行こうよ」

「……………あ　」

「ごめんねエルク。いきなり怒鳴ったりして…」

「ううん。僕こそごめん」

カイトとエンデュランスはお互いに頭を下げた。

いつの間にかやって来ていたバルムンクがオルカから話しの経由を聞いている。ハセヲはやはりわけがわからないと口を閉じている。

「…僕はね、やっぱりミアが大切。彼女はいつまでも僕の中にいる」

「……………エルク…」

嬉しそうに笑うカイトにエンデュランスが頷いた。

「僕はミアが大好き！」

「うん！」

「でもそれ以上に僕は…」

「なに？」

深刻な表情のエンデュランスにカイトは瞬きをする。

「ハセヲを愛してるんだ！！」

「……………」

ハセヲは空気が凍る音を確かに聞いた。

「……………」

カイトが一生懸命なにかを言おうと口を動かしているが、今のところ一文字しか零していない。偶然ハセヲの近くにいたブラックローズとガルデニアがさつと彼から離れる。「お、お、俺はサベツしないぜ」と小さく話しているのは兎丸とレイチエルだ。月長石から凍った眼差しがハセヲに向けられる。バルムンクの視線はまるで害虫を見るそれだった。トラとマハだけが意味がわからないのでカイトとエンデュランスを交互に見ている。

「…エル、エルク、の」

カイトがじりじりとエンデュランスから離れる。ついには背を向けて走り出した。

「エルクの浮気者おー！！」

ミアとのことは遊びだったわけ！？と言いながら小さくなっていく背中にハセヲは心から悲痛な声を上げた。

「カイトオー！！」

頼むからこんなところに置いて行くなあ！！と言う思いは切実だ。

「あ、こけた」

ミストラルがカイトを見ながら呟いた。見れば確かにカイトは倒れている。みんなが慌てて駆け寄るが、ハセヲとエンデュランスはブラックローズに釘を刺された。曰く、

「あんた達は近づかないで。私にも、カイトにも、よ!？」
なんなんだ。

「おい、カイト？」

立ち上がったは良いがカイトはその後動かない。

「……もしかして、コントローラー落とした？」

「聞こえとるー？カイトー？」

「……おい、カイトをあの作戦から一度でもログアウトさせることに成功したものは？」

バルムンクの言葉に、全員がピタツと動きを止めた。

「……………」

再び沈黙。

「……昏倒？」

ミストラルの呟き。

「カイト!？あんた起きてる？生きてる!？」

「おい、食事したのは……、いや水を飲んだのはどれだけ前だ、カイト!？」

ブラックローズとガルデニアがカイトのPCを揺する。

「だ、だ、大丈夫ですか!？カイトさん!!」

真つ青ななつめの隣にいる三十郎が顎に手をやりながら呟いた。

「作戦からずっとゲームって言う……、もう日は落ちたし、作戦決行からの時間込みで三日弱か？」

「……………飲まず食わず」

月長石の言葉にオルカが溜め息を吐いた。

「そりゃあ倒れるって、あのバカ……。俺ちよつと現実のカイトの様子見てくるな、相棒!」

「急げオルカ!時は一刻を争うぞ!!」

「もしも……、もしもカイトさんが死んでしまったりしたら……？」

「縁起でもないこと言わんといて!!」

「そうだぜ!俺達のリーダーは見た目よかずっと図太いだろ!？」

兎丸とレイチエルは泣きそうな寺島を慰めている。

「あー、ごめん。俺オルカナ」

カイトが喋り出す。

「カイトは!？」

ブラックローズが噛み付くように尋ねた。

「寝てる。それだけ」

「はああああ？」

「怒るなつて。たぶん起きたら脱水やらで大変だからカイトは暫く休みなー。生きてるから安心して良いぞー」

オルカはそう言うとかイトのPCをログアウトさせた。残された面々がホツと息をついた。

「…あいつのせいだ」

ガルデニアの瞳が険悪な光を帯びる。睨んだ先にはハセヲだ。

「あんな変態をここに入れるから…」

「それは俺のせいかな!？」

そもそもエンデュランスがあんなこと言うから!

「そうよ、エルク! あんた普通に女性が好きだったじゃない、どうしたの!？」

「僕はただ…」

「騙されとるんやな!？」

「エルク可哀相」

女性陣からの冷たい視線。武器を取り出すのも時間の問題だろう。

「おいおい!？」

なんで原因のエンデュランスは擁護されて被害者であるハセヲが批難されているのか。背中には汗をびっしりとかいている。

男性陣に助けを求めると、バルムンクや月長石からは冷え切った視線を、兎丸や三十郎からは諦めの視線を渡された。

「こちらを見るな、気色の悪い」

「わりっ！助けてやりたいけど逆らうの恐いからな」

ネットスラムの一角に悲鳴が響いたそんな夜。

悲恋（後書き）

エリデユランスに「浮気者!!」と叫んだのは柚季です、はい。

嫉妬（前書き）

めっちゃ暗いです。次の話はギャグにしようっと！

嫉妬

『隠されし 禁断の 聖域』、グリーマ・レーヴ大聖堂。ハセヲがネットスラムに訪れる一方で、カイトがなによりも神聖視するエリアに足を運ぶものがいた。

扉を開きながらクビアは顔をしかめた。何故こんなところに来なくてはいけないのか。

「……ちよつと、いる？ここまで来て無駄足とかごめんなんだけど」

嫌そうに周囲を見渡す。背後の重たそうな扉を確認した後、再度女神像がなくなつた台座に視線を寄越せば、彼女はいた。

クビアの口角が皮肉げに上がる。

「光荣だね、女神様。わざわざ出て来て下さつて」

「……今のあなたは私を害したりしないから」

「……ま、それもいつまでもつか……。女神を殺すのは僕の使命だからね。堪えるの結構つらいよ？」

「……あなたはなにをしに来たの？」

カイトはここによく祈りに来る。アウラに会えなくとも、カイトはただアウラが寂しくないように一人で話して帰るのだ。

そこに行ったりはしないけれど、アウラはしっかりとその話を聞いている。しかしクビアがまさか祈りに来たなんてことはないだろう。

「提案に来たんだよ、女神」

「……提案……？」

クビアの微笑みにアウラは眉を寄せる。相手がクビアである限りろくなことではないだろうと彼女は思った。

「提案というか、質問？」

「なにを？」

「どうしてカイトをこの世界に引き込んでしまわないの？」

「……………」

「君の王子様をこの世界に飲み込んだじゃえばって言ってるの！現実からすれば未帰還者って言うんだろうけど、この世界で永遠に生きられるならそれで良いじゃないか！」

アウラは目を伏せて答える。

「……だめ」

「なんで？ずっと一緒にいたいんでしょ？良いじゃないか。永遠を望むのは人間の性だ。きつと喜んでくれるよ」

「あなたもカイトといたいなの？」

「……カイトがいれば、もうなにも恐くない。消えちゃう心配もない。彼女の脅威もない」

カイトは言わば台風の目だ。おそらく騒動の中心にいるのはアウラとモルガナ、そしてカイトだ。

「唯一の影持つ者。カイトがいれば無条件に安心できる。お前もだろっ？」

「自分のために現実のカイトを犠牲になんてできない」

「詭弁だよ！良いじゃないか現実なんて。カイトがこの世界で生きたってカイトはカイトだ。なにも変わらないなら、別に現実でも妄想でも変わらないなら、この世界で生きたって！」

「……人間の脳では、この世界の情報を処理するのが間に合わない。カイトが死んでしまう」

「現実だってカイトは死んでしまう！老いて僕らのことを忘れてしまっ！これは、カイトと一緒にいるための方法だ」

やはりろくなことを考えない。とアウラは少し息を吐く。

クビアは命を軽く考え過ぎる。失っても大丈夫なんて、そんなもの何一つとしてありえないのに。

「人間には人間の生き方がある。私達にはわからない、とても尊いもの。汚す権利はない」

「僕らには永遠がある。人間はいつか滅びるけど、僕らは永遠に生

きなくちゃいけない。命は与えられてないけれど、そこには確かな意思がある。僕らだって生きているんだ。良いじゃないか、一人くらい仲間を作ったって」

こいつはなにもわかつちゃいない。とクビアは肩を竦める。

アウラはまだまだ。クビアなんて周囲の都合で死んでは生き返らせられる。救いなんてないその生き方を、理解してくれる人がいても良いはずだ。

「永遠に生きて、お前が愛した人間共に置いて行かれるわけ？それを繰り返すの？永遠に？……ねえ、女神。君だったらわかるはず。

カイトはこっちに来てもらうべきだ」

「いいえ、クビア。あなたこそわかつているはず。それは禁忌。命を奪う行為」

「だから？命を奪うのは命あるものだけに許される行為だとも言うの？僕の母はすでに多くの人の命を奪ったというのに！」

触れるつもりはもつぱらないがクビアは手を差し延べた。

「すでにAIは罪を犯した。未帰還者の中で死んでしまった人もいるかもよ？例えば僕が未帰還者にした人間。例えばお前の代わりにデータドレインを受けた人間」

すでにこの手を汚したならば、

「共に背負っても良いじゃないか。だって僕らは、同じ孤独に苛まれてる」

「……先程も言いました。カイト、…人間の情報処理能力ではこの世界で生きていけない」

「……わかつてるくせに」

つまらなそうにクビアが手を下ろす。アウラは黙って彼を睨んでいる。

それを見て、ずいぶん感情豊かになったものとクビアは卑下するかのように思った。

「あのカイトそっくりに作ったNPC」

「……だめ……」

「あの身体をカイトに。情報処理と読み込みをあいっに。行動するのはカイトに。可能だよ」

「そんなことカイトが許さない!!」

初めてアウラが声を荒げた。

つまりクビアが言っていることはこうだ。現在カイトが使用しているPCでトラの破損している部分の補い、カイトPCを破棄させる。そして、カイトをトラのPCでログインさせよう、と。本来意志を持ったトラと、人間であるカイトは決して相容れない。しかし、ここにアウラとクビアが介入すれば。カイトの意識をトラと移し替えてしまえば。

「許されない…っ!」

首を振るアウラに、クビアがにたりと笑いかけた。

「……“カイトが”許さないと思ったってことは、お前は一度でもそれを考えたんだ?」

「……………」

「許されないってなにに?この世界はすでにお前のもの。誰も怒ったりしない」

そうでしょう?とクビアは笑う。アウラはキツと彼を睨んだ。

「確かに一度は考えました。あなたと同じように、カイトがいればどれだけ安心なのかと。でも違う」

「なにがさ?」

「私の安らぎや、この世界のためにカイトに人間を捨てるなんて私は言わない。カイトが私を守ってくれることを誇りに思うならば、私はカイトが誇りに思えるように気高くある。カイトの誇りでいられることが私の誇りなのだから」

あなたに永遠をあげたかった、なんてそんな言い訳はしたくない。私をずっと守るためと無理矢理納得させたくない。

せめてカイトの前では胸を張っていたいのだ。彼が望むのがアウラの導きならば、道を照らす光を与えるのがアウラの役目。

「この世界を司る女神。究極Aエアウラとしては、あまりにも個人

的で身勝手な誇りだと思っています。しかし、様々な失敗と成長を重ねた私に、その願いへの後悔はない」

「……………」

制作者ハロルドの友にして黄昏の碑文の著者、エマ・ウィーラントは望んだ。究極AIの成長の先になにがあるか知ることを。

成長に終わりはなく、アウラは幾千もの失敗を重ねて、しかし同じ失敗を繰り返すことなく高みへ上って行く。『失敗なくして成長は有り得ない』と言ったのもエマだ。

ならば永遠に生き、星の数もある失敗を一つひとつ体験していくアウラに成長の終わりは無い。あるのは果てない高みへの道。

「……がっかりだよ」

教えてあげるよ、エマ・ウィーラント。究極AIの行く末を。いったいどんなものになってしまうのかを。

「だってそれは、結論を言えばまるでカイトに嫌われないと言っているみたいだ」

「……………」

『人間に成り得ない人間を超越した人間』になるんだよ。

「お人形さんみたいに感情のないお前はどこへ行った？AIとして過ごしと来たお前はどこへ行った！？命も身体もないくせに、感情ばかりに振り回される愚か者に成り下がるのか！！」

「人間は愚かじゃない。だからこそ私は人間としてカイトに生きて欲しい。なにより、感情だけに彼らは振り回されたりしない。人にはそれをときに抑え、ときに従う意志があるの」

「合理的……いや機械的に考える！この先カイト以上の守護者が現れるか？俗物的じゃない、誰かのために自己犠牲できる愚かな人間が」

自己犠牲。“人間”としてはあまりにも愚かだが“守護者”としてはこれ以上相応しいものはない。

「自己犠牲とは優しさ。全ての人が持っているもの。それを愚かと言っあなたこそ愚か」

「うるさい！じゃあ聞くけど、なんで“僕”はいるの？人間が愚かじゃないなら、僕は：“クビア”は必要なかったはずだ！！」

モルガナはクビアを作った。アウラは腕輪を作った。人に作られたAIが作った異分子達。

人が愚かでないのなら、モルガナは暴走しなかった。人が愚かでないのなら、究極AIの行く末なんて考えてはならなかった。

クビアと腕輪の存在は人の愚かさの副産物。人の愚かさ創造したモルガナとアウラが創造した異物。

「人間はずるい！お前達のことは受け入れて、僕らを受け入れてくれなかった！僕らが愚行の結晶だから直視するのが嫌だったんだ！！」

お前が悪いと敵視されたカイト。そのカイトに、倒されたクビア。なんて喜劇だ。救いようもない。最後には異物同士で滅ばし合って、どっちがいなくなっても人間は満足だろうさ！

「人間に堕ちる女神だなんて笑っちゃう。良しさ、好きにすれば良い。僕はお前も加害者だと思い出した！」

どうしてこんな奴に話しをしに来たのだろうか！気持ち悪い感情に襲われながらクビアはくるりと台座に背を向けた。

「クビア」

冷静な声がかかる。クビアは歩き出した。

「……あなたが“感情に振り回される”ことが人間だと言うのであれば、あなたはとても人間らしいわ」

私よりもずっと。とアウラが小さく言った。その瞬間にクビアは武器を取り出し、大聖堂の床を蹴った。

ガキンツと金属がぶつかり合った。アウラがいる台座の手前にある柵とクビアの鎌が重なり合う音。

「……二度と言うな」

次は斬るぞ。とクビアは鎌を持ち上げる。

「二度と、僕に『人間らしい』と言うな……！！」

それは最大の侮辱。クビアは今度こそ歩き出す。

「…クビア……」

「もういい」

扉を開く。視線だけ軽く後ろに向ける。

「お前ができないなら僕がやる」

「……あなたは、人間だわ……」

究極AIとして成長しているはずの私よりもずっと。AIとしての気高ささえもが、人間らしい。私は、AIであることに哀しささえ感じた時期があったのに。

「……僕は、お前みたいな繋がりがいいんだよ……」

相手に誇れる自分。同じことを言ったカイトとアウラ。奥底で繋がる絆。僕は決して理解できない高みを見上げる勇気さえないのに。

この感情はなんだ。要望と言っ言葉ではあまりにも優しく、羨望と言っにはあまりにも生々しい、この感情は。

愚行（前書き）

ギャグって書くこうとすると書けないものなんですね…！？

なんかギャグって言うよりほのぼのとした無駄話になってしまいました。

愚行

胸の奥に苛立ちや不快さを燻らせながらクビアはネットスラムに帰って来た。

「……………」

なんだろうか、この殺伐とした雰囲気は。クビアは周囲を見渡した。ブラックローズとミストラルがエンデュランスに話しかけている。他の女性陣も固まって話し合いをしていた。

ニユーク兎丸は三十郎と肩を竦めていた。

マローは壁に身体を預けてメールを作成している。

バルムンクは落ち着かないのか歩き回ってはメニューを開いてメールの確認をしている。ぶっちゃけ一番不思議だ。

しかしバルムンク以外は別に普段通りに見えてクビアはこの雰囲気は気のせいだろうと納得した。

「……………なにあれ？」

発見したのは黒い塊。遠目に見るとそうとしか思えなかった。再び周囲を見渡すと、その塊から全員が輪の形を描き距離を取っているのがわかった。故意に無視しているのか、気がついていないのか。唯一エンデュランスだけがちらちらと塊を気にしているので後者はないだろう。

「……………“死の恐怖”……………」

近づくとそれがハセヲだとわかった。何故彼が倒れているのかは知らないが。

「クビア！」

ブラックローズが手招きしている。カイトとヘルバ以外に名前を呼ばれることも珍しい、とクビアは招かれるまま近寄った。

「なに？」

「良い？あいつには近寄っちゃダメ！」

「……………なんで？」

そりゃ好んで付き合いたい存在ではないにしろ、突然なんだろうか？

「とにかくダメよ！いや、あんたはまだましね。カイトとか現実で言い寄られたりしたら……。ダメ、あいつは危険だわー！」

「ダメしか言つてないじゃん。危険ってあいつが？ありえない」

「ちやうちやう。実力的には強いんやで。うちら全員でかかっても中々手強かった。ま、負けるわけあらへんけど？」

「そうよ！私だってあいつの実力は認めてるわ。そうじゃなくて、つまりあいつは、そう！あっちの世界の住人なわけ！！」

「……………あっち……………？」

クビアの中で世界とは、現実と仮想の二つ。あっちとやらが現実のことならば、ブラックローズ達もその世界の住人なわけだからそんな言い方しないだろう。

悩んでいるクビアを見兼ねてミストラルが言った。

「あのね、ごく一部の人に同性を好きになっちゃう人がいるので

ーす（＜ー＞）」

「……………はあ」

「別に偏見はないけど、それに騙された人達は見てらんない！しかも知り合いよ！？」

そもそも騙されてなどいない。

「カイトのことも心配だけどあいつも違う意味で心配だわ！」

「カイトがどうかしたの？」

「…ああ、あんた知らないんだっけ？倒れたのよ、過労で」

「……………」

ほら、女神。やっぱりカイトはこちらに来るべきだ。強い意志に着いて行くには人間の身体はあまりにも脆い。

「クビア？」

「なんでもない」

物騒な考えが表情に現れてしまったのかもしれない。怪訝そうなブラックローズにクビアは笑いかけた。

「あー！」

「どうしたん？」

「ごめん！私落ちるわ。テニスの練習あるんだった」

「あ、私も落ちるね（＾Ｏ＾）」

「とにかく、あいつに関わっちゃダメよ!？」

ブラックローズとミストラルがネットスラムから出て行く。

また周囲を見渡すと、会話している内にほとんどのメンバーがログアウトしていたようだった。

代わり映えしないのはマローとバルムンクだけ。ハセヲと言えばようやく回復が終わり、危険人物もいなくなって立ち上がったところだ。

「……………」

よくわからないが憂さ晴らししたいのも確かなのでクビアはハセヲをからかいに行くことに決めた。

「……………なんだよ」

じつと見てくる視線の主がクビアだとわかるとハセヲは不機嫌さを隠そうとしなかった。クビアはわざと明るい声で笑う。

「うっん、別にー？」

バカにする、と言うよりも嫌らしい感じの笑み。

「……ただ、僕も可愛い男の子のPCだから君が恋しちゃわないか心配で」

正直『恋』や『愛』を理解できないクビアはブラックローズがなにをあんなに警戒していたかさっぱりだがそれをおくびにも出さずに言ってみると、すかさずハセヲが噛み付いて来た。

「ふざけんなよ!？」

「そうだよ！君を好きになるくらいなら、今頃僕とハセヲは相思相愛だ!！」

「わかったからちょっと黙っててくれ、エンデュランス!！」
会話を聞いてクビアは首を傾げる。

「なに？君達相思相愛なの？」

「なんでそうなる!？」

「実はそうなんだ!!」

正反対の返事に意味がわからないと頭を振ればそれを見たハセヲが
エन्दュランスに怒鳴った。

「良いからエन्दュランス、ちょっと猫の相手でもしててくれ!お
前がいたらややこしくなる!」

突然話しに割り込んで来る図太さを持った彼がそんな指示に従うの
かと思ったが、意外にも素直にエन्दュランスは頷いた。

エन्दュランスがいなくなったのを見届けてからハセヲはクビアに
向き直る。

「俺はエन्दュランスとはなんでもないからな!」

「……とは？」

「誰ともなんでもねえ!」

「じゃあ片想いつて奴なんだ。誰?羽根男？」

「なんだよ、そのわけわかんねえ選抜は!？」

「嫌いな奴同士が面白いことになれば良いと思って」

あっけらかんと言いつつクビアにハセヲは一度大きく息を吸ってか
ら、引き攣り過ぎてはいたがかるうじて笑みだとわかる程歪んでい
たが笑った。

「……死ねっ」

「君が死ねば」

「てめえが死ぬべきだ」

「君が死ぬべきでしょ」

「……面白い程に人に感情移入できないヘツポコAI」

「……作り笑いも満足にできないへぼな同性愛主義者」

「……」

「……」

テンポよく飛び出していた言葉がここで一度止まる。

「……言葉を間違えてたな、俺」

「……奇遇だね、僕もだよ」

先に片足を退いて武器を取り出したのはどちらだろうか。

「死ぬべきじゃねえ殺すべきだ」

「その汚い顔くらいせめて綺麗に刻んであげる」

「それはこっちの台詞だ！人間舐めんなよ！！」

「うるさい、さっきまで死にかけだったくせに！！」

「お前あいつら恐ろしいぞ！？全員回復スキル持つてるってどういうことだよ！？」

「はっ！僕だったら勝てるから！君みたいなへぼへぼと一緒にしないでくれるー！？」

「黙れ、俺だつてお前と同じなんてごめんだよ！！一対一で俺に勝てると思うなよ！？」

これではもはや子供の喧嘩である。

しかし普段なら止めてくれる人物は今不在だ。

「今すぐ死んで！？」

「お前がな！！」

ハセヲは双剣でクビアを斬る。それを素早く後ろに避けてクビアは鎌を下から上に振り上げた。

身体を後ろに反らし少しだけ間合いを取るとハセヲは鎌に持ち替える。

クビアが舌打ちをしてその場を離れることで鎌を避けた。しかし、
「っ！？」

二人は周囲を見ていなかったために気付かなかったがクビアの後ろにはメールを打っていたマールローがいたのだ。

斬撃がマールローを襲う。さすがと言うべきだろう、マールローは咄嗟にメニューを閉じて攻撃を剣で受け止めた。

「……っ。わる……」

「……ざけんなよ……」

「あ？」

ハセヲが武器を引く。

「作成中のメール消えただろうが、どうしてくれんだよ！？」

「てゆうかいつまでメール書いてんの。僕が戻ってからずっとじゃないか」

クビアが少し離れた場所で問い掛ける。

「そんな俺の勝手だろうが!!」

「いや、そうだけさあ……」

「ようやく完成してたところだったのに……」

「そんなに大切なメールだったのか……。悪かった」

「誰宛て? そんなに悩んでたってことは……、あれだ。恋人ってやつ?」

「ちっげえええ!!」

「お前そのての話題好きなわけ?」

「いや、まったく。好きなわけないじゃん、バカじゃないの」

いちいち一言多いクビアにハセヲが顔を盛大に引き攣らせた。

「で、誰さ?」

「カイトだよ、カイト!」

「貴様! 今カイトが寝込んでいるのだからメールするのは迷惑だろう、自重しろ!!」

「おわあ!?! いきなり話しに割り込んで来るなよ!!」

ハセヲの怒鳴り声も無視して先程まであてもなくうろろしていたバルムンクはマローに言う。

「俺だつてカイトが心配だが、体調を考えてなにもしなかったんだ。もつと考える」

一段落着いたらオルカから連絡が来るはずがまだない。そのせいか落ち着かなくて歩き回っていたのだが、

「つーかお前こそさっきまでキモかったぞ。自重しろ、お前こそ」

「不気味だったよね」

そんなことを察知してくれる連中などこの場には存在しない。

「俺は肝など買っていない!!」

「バカか!!」

ぎりぎりバルムンクとマローが睨み合う。それを見てクビアが

とことん見下した声を出した。

「人間ってくっだらな言い争いするよね」

「そういうお前もさっきまで俺と下らない言い争いしてたけどな」

「……………」

今度はハセヲとクビアが静かに向き合った。

「…と、そっぴやそこのバカガキにメールのお礼をまだしてないかったなあ」

「…ああ？もう謝っただろ」

だらだら書いてたためえが悪い。と言えばマローが武器を構えた。

「一回は一回だよなあ？」

「やってみるよ、返り討ちだ」

「最初から貴様のことは気に食わなかったんだ」

「それはこっちの台詞だよ。僕、正義って大っ嫌い」

バルムンクが矛先を変えればクビアは難無くそれに応じる。

そして、彼らは地を蹴った。

「……………なんであいつらバトロワしてんの」

一応様子を見ておこうとわざわざログインして来たオルカは何故か無差別に戦っている四人に目を丸くした。

「あ＊つらバカ@」

「今なんか失礼なこと言っただな？」

別に構わないけれど。オルカは溜め息を吐き出すと、来たばかりだがログアウトすることに決めた。

バルムンクには直接話した方が良いとは思ったが、本人があれではしょうがない。後でメールでも送っておこう。

「…にしてもあいつら、カイトがいないと協調性皆無だなあ…」

早くリーダーには復帰してもらわないと。小さく呟いて姿を消したオルカに、それを一人聞いていたトラだけが大きく頷いていた。

愚行（後書き）

心配しているのにそれを書けないツンデレ（？）マローと、とにかく心配でたまらないバルムンクと、イライラしているハセヲと、みんな気に入らないクビア。

そんでもって説明してもよくわからない柚季クオリティ。

別離（前書き）

柚季は無駄話が大好き！調子乗って書きちゃった無駄話！！

というか、映画の情報で「バルムンク羽根ないよ！？」とか、「オル力でかい！！」とか、「そもそもバルムンクでもオル力でもないだ、と…！？」

みたいなことになったのは柚季だけですか？そうですか。

別離

『この間は突然倒れて驚いたでしょ？ごめんね。迷惑かけるつもりはなかったんだけど…』

実はエルクに謝った時点で意識が朦朧としてあんまりなにかあったか覚えてないんだ。体調管理をするのもリーダーの仕事だって怒らちゃった（笑）

まだ身体はちよつと怠いけどもう大丈夫だから心配しないで。

ところでヘルバ以外のメンバーからのメールには全部、「今後ハセヲには近づくな」って書かれてただけどなにかあったの？

できる限りで良いから、みんなとは仲良くしてくれると嬉しいな』

「……………」

受け取ったメールを読んでハセヲはこめかみを押さえた。

「なにかあったの？じゃねーよ！！」

次会ったら一発殴ろう、そうしよう。八つ当たりだと言いたければ言えば良い！

「にしても、ヤスヒコ。お前よく僕の部屋入れたな」

「バーカ。お前大学にスペアキー置いてるだろ。泥棒に盗られても知らないぜ？」

「あー、そういえば」

身体はまだ怠いものの、とにかく外に出て気分転換した方が良いと思いついたカイトは親友を誘ってファミレスで食事中だ。

「お前生きてんのが奇跡だと思えよ」

「そんな大袈裟な…」

注文した雑炊に口をつけながらカイトは苦笑した。

「まあ、暫くはThe Worldには行かないよ。ここで無理してまた倒れたりしたときにモルガナに襲撃されたらたまらないし」
「当然だろ。みんなにはメールしたか？」

「うん。みんなあんまり怒ってなくてホッとした」

「そりゃあ無理した事情が事情だしな」

「けどもし僕がいない間にマハがモルガナのことを察知したら呼んでくれよ、オルカ」

「わかってるよ。後、今はヤスヒコだ」

「僕がいないのも二三日程度だろうし、それくらいならブラックローズもいるし大丈夫だよな。頼むからトラ連れてウイルスバグの駆除とかしないでよ？」

「……それはどうだろう」

「え！？するつもりなの！？」

「いやそつちじゃなくてだな…、俺が言いたいのはお前がいない二三日が大丈夫かどうかの方だな」

「みんななら平気でしょ」

平気か平気じゃないかと言えば間違いなく平気ではない。

「……………っ！？」

「どうした？」

オルカが冷や汗をかいているとき突然カイトが小さく震えた。

「…いや、今なにか悪寒が…」

「まだ万全じゃないんだろ。帰るか」

「う、うん…」

まさか悪寒の理由がハセヲの八つ当たりの標的になったため、なんてことをカイトが知るはずもなかった。

場所は変わってネットスラム。

「次はどんなイベントを開催するか迷っているんだが」

「なんでそれを私に言うのよ。ていうか花見のときみたいなことしたら今度こそはっ倒すからね」

「あのイベントのなにがいけないと言うんだ!？」

「死体よ、死体!！」

バルムンクとブラックローズが怒鳴り合う。相変わらず不毛なことをしている、と膝の上にいるマハにもたれながらトラは思った。バルムンクが一つ咳ばらいをする。

「とにかく、イベントの企画をしようと思う」

「この大変な時期にい？」

「だからこそだ。一般のプレイヤーにも不安が広がっている。なにより最近のカイトは思い詰めているからな」

息抜きが必要だろうと言えばブラックローズは納得したとばかりに頷いた。

「良いこと言うじゃない！」

「だから今の時期になにかイベントはあるか聞きたいんだが」

「そうね……。今は十月だから、ハロウィンとか？」

言いながらブラックローズは懐かしむように目を細めた。

「もう十月か。早いわね。私達が再会して七ヶ月くらい？」

「……先の戦いは解決までにちょうど一年かかったが、今回は早く終わりそうだな」

「考えてみると長かったわね……。あの時は少しもそんなこと考えなかった」

ただ必死だった。

考えることは弟を助けることばかり。いろんな無茶をしていたあの頃の自分は、今の自分を形成する大きな要素だ。

「で、イベントだっけ?……ハロウィンとか言っても私達が仮装してもしょうがないわ」

「イベント専用のモンスターを作り、そいつを倒すとお菓子が手に入るのはどうだろう?」

「…………微妙」

なんでこいつはイベントに積極的にモンスターを関わらせようとするのだろうか。それだけが疑問だ。

「バカだね」

ヘルバのもとにわざわざ訪れたクビアは開口一番にこう言った。

少し離れたところでは他のメンバーが騒いでいる。カイトがいなかったための不安をどうにか取り除こうと普段よりも大声で、少しの陰悪さを交えて騒いでいる彼らの声をBGMに、ヘルバはクビアの話しの続きを促した。

「カイトはバカだ」

「……そうね」

The Worldただのゲームではない。しかし言ってしまうはたかがゲームなのだ。触れ合わないでも人は生きていけるし、このゲームをやっていない人もいる。

それを身体を張って守ろうとするカイト。

もう子供ではいられないのに時間に抗うカイト。

自分を顧みずに体調を崩したカイト。

「バカなカイト。なんにも知らないで」

「そうね。ぼうやはなんにも知らない」

「無知は罪だ。この罪は近い未来カイトを傷つける」

「無知が罪と言うのなら、知ることは罰と言ったところね。…でも、メンバーの中でも気付いているのは私とあなたくらいなら、全員が罪を背負っているのにおかしいわね。罰を受けるのはぼうやだけなんて」

「台風の目だからさ。こんなにも沢山の人間が溢れる中で、カイトは選ばれてしまった」

選ばれてしまった。言いえて妙だとクビアは自分で思った。

まるで贅のようだ。薄明の腕輪はカイトの精神を犯し、カイト自身の優しさはカイトの肉体を壊す。

「カイトにはいつ話すの？」

「復帰したらすぐに。もう時間がないわ」

「……そうだね」

話しは終わりだとクビアは仲間の喧騒に近づいて行く。ヘルバなその背になにか言おうとは思わなかった。

トラとマハが同時に欠伸をした。

「なあ、決まらないなら芸人大会とかどうよ！？イベント名は『お笑い in the world』!!」

「そんな下らないもんより、フリーマーケットみたいなのはどうやる？ 普段のトレードとは違ってお金で自分が集めたアイテムの売り買いすんの！」

「アイテムくらい自分で探す。それより腕試しを……。そうだ、武道会を開催しよう」

「……………力試し」

「それじゃアリーナ行けば済むだろう。それより季節に合わせて紅葉狩りだな」

「なつめはレアアイテムを探すイベントが良いと思います！ アイテム探しは The World の醍醐味です!!」

「それより舞踏会やパーティーはいかがです？ 普段戦ってばかりなのですから、ときにはそういった催し物も」

「下らねえな。モンスターと戦って、一番多く倒した奴が勝ち。イベントなんて単純な方が良いつての」

「それじゃ戦闘嫌いな人が参加しないじゃん（＜＞）それよりプチグソレースが良い。普通のタイムアタックじゃなくて、みんなで一気に走るの」

好き勝手言いやがってこいつら。

と、思ったかはわからないが、とにかくバルムンクはこめかみを押さえていた。

「なにしてんの？」

やって来たクビアは気軽に尋ねる。

「新しいイベントの話をしてんのよ」

「へえ。こんなときに」

「だからこそ、だ。どうでもいいような顔をしていないでなにか考えろ」

「…それ僕に言う？」

イベントなんて参加したことなどない。わかってないわね、とブラックローズが首をゆるゆると振る。

それにむつとしたクビアは些か尖った声で言った。

「なにさ？」

「こんなやりたいことしか言っていない状態で参加経験なんて無駄。あんたもやりたいこと言えば良いの」

「……………ああ……」

「言うが易しとはこのことだ。あいつら言うだけで手伝うつつもりがない」

「俺らはCC社に所属してねえだろうが。つかイベントどんなんが良いって聞いて来たのはお前で俺は答えてやったただけだぜ」

マローの言葉にバルムンクが目を細める。

「お前に話しかけていない」

「俺は言いたいことがあったから言っただけだ」

今まで何故この二人の争いがなかったのかブラックローズは首を傾げた。

「イベントさあ、みんながやりたいことやれば良いじゃん」

クビアがいかにもかったるいと体言している。

「どゆこと？」

「一応話しは聞いてたから…、えーと、紅葉狩りパーティーを開催して優雅に過ごした後にプチグソに乗ってお笑いをしつつアイテムを探してゴールへ向かう。レース中はライバルから武力行使でアイテムを奪うことも可。そんでそのレースで優勝した奴にはボスモンスターと戦う権利が与えられて、そいつに勝ったらレアアイテムが

手に入る。…とか」

どう考えても詰め込み過ぎて趣旨を間違えてしまったイベントである。

「却下」

「え、なんで!？」

「どう考えても無理でしょうが! なによプチグソに乗ってお笑いつて!？プチグソと漫才でもする気!？」

「そんなん知らないよ」

なんて無責任な言葉だろうか。マローが溜め息を吐いた。

「どいつもこいつもまとまなこ思いつかねえな」

「君も含めてね」

「少なくともお前よりましだ」

すぐにでも言い争いを開始する彼らに「仲良いな」と呟いたのは誰か。

結局この日イベントの内容なんてものは一つとして定まらなかった。

「……こいつらに尋ねた俺が悪かった…」

とは、バルムンクの言葉である。

そしてその言葉をしっかりと聞いてしまった喧嘩っ早い連中が再び喧嘩を始めるのだが、

「……カ ト、早@帰っ #来な%か%…」

間もなく訪れるであろう喧騒にトラが疲れたように溜め息と同時に呟いく。

膝の上を陣取っているマハがきょとりと首を傾げた。

障壁

「お、間抜けなリーダー様のお帰りだな」

「酷いや、マロー。間抜けだなんてさ」

ネットスラムにやって来たカイトに一番最初にかかった言葉はマローの皮肉混じりのものだった。

口を尖らせるカイトの頭を帽子越しに軽く叩く。

「ゲームに集中し過ぎてぶっ倒れるなんざ、間抜けで充分だろうが」
安心していてもかもしれない、いつもの刺々しい言葉ではなかった。
それに対して微笑みで返事を返すカイトは喜びと同時に申し訳ない
気持ちを味わう。

「カイトさん!？」

「カイト、もう良いの？」

「お、元気になったのか、カイト」
あつという間に仲間に囲まれてしまったカイトを遠くから見詰める
のはクビアだ。

ちらつと視線をカイトから横に流せば、ヘルバもクビアと同様にカイトを眺めている。

トラとマハがやって来たのを確認してから、ヘルバはゆっくりとカイトに歩み寄った。

「…ぼうや」

「あ、ヘルバ。メール見たよ、大事な話してなに？」
仲間はほとんどが集まっている。

ようやく普段の穏やかさを取り戻したネットスラムや仲間達から、
その穏やかさを奪うのは自分だ。と、ヘルバは誰にも気付かれない
ように溜め息を吐いた。

「モルガナを倒すにあたって問題があるの」
「どんな!？」

焦りを隠せない声。ここまで来て倒せないなんて、絶対に「ごめんだろ」。

「…その前にぼうやに確認したいことがあるの」
「なに？」

警戒した声にヘルバは知らないうちに微笑んでいた。

「あの言葉に嘘はないのね？」

「…どれ？」

「アウラのためにどれほどの犠牲を払えるか私が聞いたとき、あなたは全てと答えたでしょう」

「あれなら、嘘じゃない。僕の全てはアウラのために」

その言葉を聞いたクビアは顔を歪めた。

信仰とは恐ろしい。なにかのために命さえ捨てる覚悟がある。失った先の救いを信じて、神を盲信する。

あいつは女神なんかじゃないんだよ。人が作り出したAIで、死んだ人を生き返らせてくれるような神様じゃないんだ。

あいつは人間に憧れるただのデータだ。

言いたいことは沢山あったが、どんな言葉もカイトには意味を成さないような気がした。

「…なら、仕方ないわ」

「ヘルバ？」

「払ってもらいましょう、ぼうや。あなたの全てを」

「ちよつと、なんの話し？いや、払うのは構わないけど…」

「浸蝕ゲージは何色？」

「え？……あ、最近は休んでたから青いよ」

それが？と尋ねるカイトにヘルバは努めて冷静な声で答えた。

「もし、彼女にデータレインをしたら、それをしたPCは十中八九未帰還者になるでしょうね」

時が止まった。

カイトはようやく理解する。ミアの哀れんだ眼差し。ヘルバの悲しそうな視線。今カイトに向けられる、クビアからの辛そうな瞳だつて。

「……………え……？」

「データドレインを使えばあなたは精神を浸蝕される。それと同じよ。彼女をデータドレインすれば精神は一気に浸蝕される」

人間が得てはならない力を手に入れた末路。

「彼女の膨大なデータは、人間には堪えられない」

それでも前はアウラが自己犠牲を払ってくれたから大丈夫だった。しかしアウラはもう死ぬことはできないのだ。

「……………良いよ」

もう、決めたから。カイトはそつと瞼を閉じて微笑む。

それはほんの少しの意地だった。アウラを守ると常日頃から言っているくせにいざという時に逃げ出すなんて、絶対に思われなくなかった。

男としてのプライドとでも言うのだろうか。カイトは不謹慎にも小さく笑う。

しかし、カイトの言葉に着いて行けなかったのは周囲だ。

「カイト、あんたなに言つて……！？」

「なにも言わないで、ブラックローズ」

ここで引き止められたらきつとカイトは縊ってしまう。怖いんだと甘えてしまう。

「……………ふざけるな……………！」

「バルムンク」

「頼ってくれと言つただろう！？一人ですぐに決断を下すな！！お前の命が関わっているんだ……」

「大袈裟だなあ。未帰還者だつて最後にはちゃんと帰つて来たじゃないか」

これはただのごまかしだ。バルムンクだって気付いている。

これは予感。腕輪とモルガナのデータに耐え切れず、おそらくカイトは死ぬ。

良くて廃人といったところか。正直笑えない。

「カイト、頼むから…っ!!」

聡明な彼は気付いている。これだから機械に強い人は…。とカイトはバルムンクに苦笑した。

モルガナを倒してカイトが未帰還者になったとき、みんなはきっとカイトを取り戻そうと躍起になってくれるだろう。

しかし、倒すべき敵はどこにもいない。

モルガナも“波”もないのだ。カイトは永遠にそのまま眠る。バルムンクは聡明だからいち早く気付いてしまった。

「アウラだけじゃない。みんなも守りたいんだ」

「カイト、お前はわかってない。いつものように最終的には上手く行くと樂觀しているんだろう!?自分だからなんとかなるとでも思っているんだろう!？」

「……うーん…」

どうだろうか。自分のことはよくわからない。

しかし、あの時アウラに自己犠牲を選ばせてしまったことを考えると、もうあんなことにはなって欲しくないのだと思える。

これは確かな意思なのだ。

「……人間がダメだと言ったな」

「ええ」

「なら、トラならばどうだ。データトレインしても平気か？」

「バルムンク!？」

なんてこと言うんだ!と言ってもバルムンクは冷静だ。

「もしもトラが平気なら、それに越したことはない」

「そうだとっても…!」

「ダメね。トライエッジもNPCとしての命を散らすことになるでしょう」

女神だからこそ起こせた奇跡の価値に、ようやく目を向ける。

人間が起こすには代償が大き過ぎる奇跡。

「ダメだ！僕の代わりなんて絶対に許さない！！」

「…カイク」

「そのために作られたなんて言ったら怒るよ」

凶星である。トラは大人しく口を閉じた。

「……なら、これはどう？」

今まで黙って様子を見ていたクビアが初めて口を開く。いつになく真剣な表情に全員が目を向けた。

「先手を打って、カイトを未帰還者にする」

「はあ？」

マローが間抜けな声を出した。バルムンクとブラックローズが警戒するかにようにクビアを睨む。

「方法はさておき、カイト自身の精神をカイトPCに移す。現実のカイトはこの時点で未帰還者だ。でも、おそらく彼女をデータレインしても精神はPCに残るはずだよ」

「……それって、カイトにわけわかんないNPCになれてこと？」

「NPCであればアウラの加護は厚いよ。この世界の女神だからね。カイトが住人になれば彼女は惜しまない」

「それでカイトは戻って来れるのか…？」

「無理。この世界に来るのであれば、僕も女神も手伝ってあげられるけど、僕らは現実を感知できないから」

投げなりな返事は、しかし事実を提示しただけで、それゆえにバルムンクは怒るのだ。

「そんな無責任な話があって良いものか！！」

「僕は選択肢を増やしてあげただけさ。カイトが話してもできない未帰還者になるか、ゲームの中とは言え話ができる未帰還者になるか、そのNPCが消滅するか。その三つだ！」

「極論だけどさ」

ミストラルが口を開く。

「消滅しちゃったトラは、アウラに治してもらえないのかな？」

「……治せるからトラに一度死ねって言うの？」

怒った表情をするカイトを宥めるようにミストラルは言う。

「簡単に言えばそうだよ。最低だと思ってる。でもね、カイトが未帰還者になって治るか治らないか不安になるよりも、治るってわかってたトラの方がずっと良い。そりゃあトラには酷い話しだけど、結果トラが戻って来れるなら……」

「それも無理」

クビアの言葉は冷やかだ。

「もちろん外見から内蔵プログラムまで女神が作ったものだからまた作れるさ。そっくりそのままね。でもデータってデリケートなんだ。思考回路まで作れない。……人間で言う心ってやつだね。あれは成長に付属するものだから、女神が手を加えてないものだよ。つまり中身までそのままの復活は不可能」

「だから僕が……」

「ダメに決まってるでしょ！？世界のためにあんたが犠牲になるなんて許せない！！」

「じゃあどうするのさ！？」

カイトとブラックローズが睨み合う。

「……私は、クビアの案に賛成しようかしら」

「ヘルバ！？」

バルムンクが驚いたようだった。

「最善だと思うの。ぼうやの精神さえ残っているのなら、きっと肉体に戻す術がある」

「できなかったらどうする！？きつとなんて不確かなものに縋るつもりはない」

「それでもただの未帰還者になって手も足も出せないよりましよ」

そう言われればバルムンクも言葉に詰まる。

クビアはにたりと笑いながら周囲を見渡した。

ヘルバが賛成したからだろうか。いつか見つかるかもしれない不確

かな希望を頼りに、全員がカイトをこの世界に引き込むことを賛成しようとしている。女神よりもずっと頼りにできる仲間達。

それがいかに危険なことかはつきりと理解しているのはヘルバとバルムンクくらいだろう。

重々承知で危険な賭けに出たヘルバと、危険過ぎると慎重になっっているバルムンク。

しかし二人もわかってはいない。カイトをこの世界に引き込む代償を。

（…人間ってやっぱりバカだ。黙ってNPCにデータトレインさせれば万事解決なのに、それができない。下らない感情を持っているから）

トラを犠牲にしたくはない。だからカイトが救える可能性に賭ける。その可能性のためにトラが犠牲になるとは知らず。

（結局、最終的な結果は最初からカイトの意識が消えるか消えないかの二つで、そう考えると僕はとても良い選択肢を与えたんだ）
彼らにクビアを責める権利はない。

『無知は罪だ』ということは、全員知っているのだから。

「……ヘルバ、ワイズマンと連絡取れる…？」

僕がメールしても返信がないんだ。と唐突に話題を変えたカイトにヘルバは怪訝そうだった。

「…ええ。できるわ」

「別にメールやチャットで良いんだ。会わなくても良いから、連絡下さいって伝えてくれる？」

「…わかった、けど……。ぼうや、あなたなにをするつもり？」

「トラを犠牲にするなんて論外。でも僕だって未帰還者になるのは嫌だからね。頑張つて足掻くよ」

冗談を言うように笑うカイト。どんな過酷な状況でも仲間の精神的支柱であるカイトがくじけるわけにはいかないから。

（やはり、カイトを助けるにあたって一番の障害はカイトだ）
クビアは心中で苦々しく呟いた。

（アウラ、君は…）

カイトはそつと両目を閉じた。

（君は、僕にこんな酷い選択をさせるために、僕に腕輪とトラを託したの…？）

そんなのってないよ。と、カイトは誰にも見つからないよう俯いて、下唇を噛んだ。

逃避

『久しぶりだね、カイト？』

『久しぶり、ワイズマン』

顔も見れない会話方法を残念に思わざるを得ないが、何故会いに来てくれなかったのと問うことはしない。

彼には彼の事情があるのだから、その質問は久方ぶりの会話には無粋だ。

『事情はヘルバから聞いた。大変だな』

『なら助けてくれても良いじゃないか。……ちよつとあることの方法を探しているんだ』

『あること？』

『うん。モル……と聞かれてたら困るね。彼女を倒すときに受ける被害を最小限に押さえたいんだ』

『おや、全てを捧げて構わないんだろう？』

『僕個人はね。……でも僕は、僕がいなくなっても哀しむ人が一人もいないって言う程愚かじゃないよ』

カイトの心はカイトのものだが、カイトの命はカイトだけのものではない。

それは全ての人間に言えることで、カイトはそれを自覚しただけだ。

『……ふむ。上手く行くかはわからんぞ。なんせ私はデータドレインを使えないのでね』

『わかってるよ。少しの可能性でも大歓迎！』

『……君は素直だな』

『え？』

『いや、すまない。そもそも君と彼とは比較対象になり得ないか。』

『……それで方法なのだが……』

「トラ！……なにしてるの？」

「…高い*い……？」

首を傾げながらトラは再びマハを上に戻り投げて受け止める。

「待って！高い高いって放っちゃダメだよ、危ないから！！こら、やめなさい！！」

言っている傍からマハを上に戻げるトラから奪い取るようにマハを受け止める。

なにが危険かわからなかったのだろう。トラは瞬きをするだけだった。

「もうしちゃダメだよ？」

「…わかつ#……？」

わかってないな。と思いながらカイトはマハを地面に下ろす。もしかしたら楽しかったのかもしれない、少しだけ不満げだ。

「そうそう。トラに用事があったんだ」

「？」

「ヘルバにも話したいから、行こう。みんなにも話したいな！吉報だよ」

何故カイトは笑うのだろう。トラは不思議でならない。

どんなときでも笑うカイト。まるで笑うのが義務であるかのようにトラのようになにかをするようプログラムされているならわかる。

しかしカイトは人間だ。

では何故笑えるのか。トラにはわからない。

マハと手を繋いで歩き出したカイトを追いかけるためにトラも踏み出した。

「同時のデータトレイン？」

カイトは驚愕を隠せないヘルバに笑った。

「そう。ワイズマンがね、負担を分担すれば大丈夫かもしれないっ

て」

ワイズマンが言ったことはこうだ。

『それで方法なのだが、同時にデータドレインをするのはどうだろうか』

『同時に?』

『そうだ。本来データドレインとはウイルスバグを除去し、データを書き換える能力だ。彼女のデータを書き換えることに一人では耐えられないのならば、二人同時にデータの書き換えを行えば良い』

『でも、そんなに上手く行く?』

『無論リスクはある。もしかしたらカイトとトライエッジ両方痛手を負うだろう。しかも完全に同時に行わなければ失敗するだろう』

「そこに可能性があるなら、僕は諦めたくない。やってみたい!」
アウラ、君を信じて良い?

君がなにかを犠牲にしても生き延びようとしているのなら、僕は喜んで犠牲になるよ。君があの時払った自己犠牲の、あの高潔な自己犠牲の、お返しをしたいから。

信じて良いよね?

僕を助ける生贄のためにトラを預けたわけじゃないって。

この方法で、二人共助けるために腕輪とトラを託したって。

「……ぼうや、でもそれは……」

「わかってる。同時にしなくちゃ失敗だ。だからこれからどこかのエリアに行くときはトラと一緒に訓練する」

トラには悪いがもう決めた。

言った途端、襲って来たのはブラッククローズの罵倒だ。

「バカッ!! 全部一人で決めて、相談しようとか思わないわけ!?!」

ブラッククローズは背を向けて行ってしまった。

「付き合ってらんない!!」

その言葉にカイトは困惑する。相談ならした。ワイズマンに。

「…わかってないようだな、カイト」

「バルムンク？」

「あ…。確かにカイトが悪いかもな」

「オルカ…？」

「拗ねるのも仕方ないかなあ…（＜―＞）」

「ミストラルまで！？」

驚愕でつい大きな声を出してしまう。しかしカイトは次いで現れた感情に思わず口を塞ぐ。

（……………え…？）

更に困惑を深めるカイトを他所に会話は続いて行く。

「ブラックローズはカイトのことをとても心配していたんだ。もちろん俺もだが、それなのにまったく相談なしと言うのはどうなんだ」
言ったバルムンクも怒っているようだった。

「ま、ここは素直に謝つとけ。決戦でギスギスしてんのやだろ」

そう言うオルカは肩を竦めるばかりで、呆れているようだ。

「拗ねてるだけだから行っておいでよカイト」

ミストラルはこういった自体にはいつも通り落ち着いている。

「……………なんで…っ！」

小さく零した声に怪訝そうな表情をする周囲の面々。

終にカイトは先程からふつつと沸き上がっていた怒りの感情を爆発させた。

「一番困ってるのは命をかける僕なのに、どうして謝らなくちゃいけないのさ…？」

沸き上がる感情は今まで仲間にくっつけた経験のないものだった。

全ての責任を負うのはいつだってリーダーであるカイト。

かつてカイトは一人で戦っていたと勘違いしていた。それを気付かせてくれたのは相棒のブラックローズだ。

しかしこんな瞬間には、大変なのは自分一人だと錯覚してしまいそ

うだ。

「……ごめん……」

なんとか謝るが苛立ちは消えない。

不意に腕を引かれてカイトはよろめき、抵抗する気にもなれず着いて行った。

腕を引く相手は漆黒の少年クビアだった。

誰かがカイトを呼んだが、反応しようとは思えてなくてカイトは俯いてクビアに着いて行った。

「……逃げちゃおっか」

誰もいないと確認してから、クビアはぽつりと言った。

「……え？」

「逃げちゃおっか、カイト。もう戦うのは辛いよ」

クビアが振り返った。

「みんなカイトに頼り過ぎて、カイトばかりが重責を背負ってる。

逃げよう、カイト。戦わないで良いように、母も仲間も守護者もアウラさえ忘れて、ゲームを楽しむの」

楽しそうだと思わない？ 純粹にゲームを楽しむの。

いろんなエリアに行ってアイテムを集めるの。

プチグソを育ててプチグソレースもしようよ。

それにアリーナもきつと楽しいよ。宮皇を目指して戦うの。

「クビア……」

「みんな勝手だ。命を賭けてるのはカイトなのに、悪いことはみんなカイトに押し付けて。腹が立つよ。確かにカイトは特別だけど、特別だからなんとかしろってのは責任を放棄した奴らの台詞だ」

カイトは異常な程に安堵した。

自分の気持ちをわかってくれる人がいる。それはなんて素晴らしいことだろうか。

この世界に訪れたときから張り詰めていた糸が緩んだような気がした。

「……僕、は……」

「苦しいとか痛いとか、カイトだって感じてる。でもカイトはそれ以上に自分の立場を理解しているからなにもしなかった」

辛かったね。そう言ったクビアの瞳に映るのは慈愛だ。

「カイトの対だからかな。僕にはわかるよ、カイトの心」

「……うん」

「カイトが苦しんでいるの知ってた」

「でも、僕が悪いんだ。ブラックローズが怒るのも仕方ない」

「なんで？……カイト、君はいつも自分が悪いと言うけど、悲劇の主人公にでもなるつもり？」

呆れて肩を竦める。

「カイトは悪くない。でも腕輪を持ってしまったことや、自分が訪れたために起こった騒動への罰が欲しいだけだ。罰があれば自分を責め立てられるから」

優しさと正義感と痛みへの恐怖。それがカイトの原動力。クビアだけが気付いたカイトの心。

「……でも、僕がやらないなら他に誰がやるの？アウラを守るのは僕の役目だ！」

「誰かが。その辺にいるPCは、恐いから誰かなんとかしると叫んでいるじゃないか。アウラが存在を知っている奴らは大勢いる。カイトじゃなくても構わない」

ずっと心の中で不安に思っていたことを言い当てられてカイトは悲鳴を上げそうになった。

誰かが。その通りだ。

カイトだけのアウラじゃない。

誰かがアウラを守ってくれる。

熟練のPCか、未熟なPCか。誰でも良い。

「女神は酷いね。仲間も酷いや。誰もがカイトに要求するだけ」
嫌なものも不安だったことも我が儘だってカイトに押し付けて、それらをカイトに押し込める。

そうして、綺麗になったと安心する。

でもそれって、ごみ箱扱いとどう違うんだろう？

クビアはそれを見るたびに眉を寄せていた。

受け取ることがカイトには自然なこと過ぎてわからない。渡すことが当たり前で周囲もわからない。

「だからカイト、僕と逃げよう」

その先には永遠がある。クビアにとっても、カイトにとっても、手を差し延べた。

「カイト」

君の心はとてもよくわかる。だって僕が考えないことや思わないことを君は考えているから。

「逃げちゃおうよ？」

じゃあ僕はどうすれば良い？とカイトが尋ねる前にクビアはこてんと頭を傾げながら言った。

差し延べられた手に、気付けばカイトは手を伸ばしていた。

逃避（後書き）

そして愛の逃避行へ（嘘）

指針（前書き）

わけがわからない暗い閑話。

指針

差し延べられたクビアの手。

思わずそれを掴もうとしたカイトは、躊躇うように一度手を止めて、

「……カイト？」

クビアの手を包み込むように両手で握った。

「……………」

「どうしたの、カイト？」

差し延べた手は握ってもらえたが、それはクビアが望んだものとは微かに違う。

「…ありがとう、クビア」

どれだけ救われたか、こうやって手を握ることで伝われば良いのに、とカイトは思った。

逃げるなんて、誰にも許してもらえなかった。

自分にさえ許してもらえなかった。

揺れる感情を掬い上げてくれたクビアに、なんだか泣きたくなる。

「……君のおかげで定まった」

「逃げるって？」

「……………ううん」

本当は逃げ出したいが言わなかった。

「…今、君と行ったら、アウラの気持ちはどこへ行くのかな？」

信じてくれた。信頼してくれた。

アウラへの不信がなかったわけではない。むしろかつてない程に信頼が揺らいだ。

クビアに突かれればその信頼はあっけなく崩れた。しかし、崩れた跡から見付けたアウラの心。

カイトの信頼を信じてくれた大切な心。

「僕を信じてくれたアウラの心はどこへ行くの？」

僕を探してさ迷うのなら、僕はそれを受け止めてあげたい。

クビアの顔が泣きそうに歪んだ。

「ありがとう。逃げようって言って僕を助けようとしてくれて嬉しいよ」

「……行こうよ、カイト！戦うのは痛いよ！苦しくて嫌なら、もう止めれば良いじゃないか！！」

「…………クビアも戦うのが嫌なんだね」

まるで両極端にいるカイトとクビア。

しかし全てが全て対極にあるわけではない。なぜなら二人は元を正せば同じだから。

感情は対。二人揃ってようやく一人が持ち得る感情が揃う。最近はお互いが近くにいたためか、お互いに影響されて新たな感情が生まれてただけだ。

カイトには不信や苛立ちが。

クビアには優しさや哀しみが。

「僕らはこんなに近くて、遠いんだ」

そしてカイトにはわかってしまった。カイトに影響されたクビアが新しい感情に苦しんでいることを。

会った当初のクビアは決して揺れなかった。間違っただけだと思ひもなかっただろう。

しかし優しさを覚えたクビアは今苦しんでいる。

その原因は一つ。自分の母、モルガナ・モード・ゴンと戦うこと。

カイトとクビアは真逆なのだ。二人揃って一人分によやく達するくせに相容れない。

だからこれは当たり前なのだ。

カイトがアウラの守護者なのだから、クビアはモルガナの守護者。守りたい気持ちも、対象は違えど同じ。

優しさを覚えたクビアは、初めてモルガナを愛おしく感じた。愛す

る母親を守るために生まれて来た。

「ごめんね、クビア。君ばかりが辛くて痛くて苦しい」

だからクビアは逃げ出したかった。だからクビアは同じ苦しみを感
じるカイトの手を引いた。

全て無意識に。

「……僕が？バカ言わないでよ、カイト」

「ねえ、クビア。僕はモルガナを許さないよ」

「……は……」

「だから、君は行つて」

クビアがわけがわからないと言う顔をした。

「君はモルガナを守るんだ」

「な!？」

「僕らは、敵同士だ。僕はアウラを守る。君はモルガナを助ける」

本来あるべき姿に戻せば、とカイトは言う。クビアはカイトに握ら
れた手を握り返した。

「元に戻せば、時間も巻き戻るって？まさか!！」

クビアは珍しく怒った顔を全面に出した。

「戻ったりしないよ!!僕は彼女が正しくないと知っている!!だ
から僕は」

「じゃあどうすれば良い!?どうすれば君は苦しまない!?僕だっ
てクビアに敵になって欲しくないし、戦いたくないさ!！」

でも君に傷付いて欲しくないんだよ!!

どうしてこうなるんだろう。きっとそう思ったのはお互いで、わか
つていても傷付け合い、傷を舐め合うことしかできない。

「……僕は大丈夫だから……。だからカイト、僕と逃げるなんて言わ
ないから」

「僕だって、クビアといたいよ。着いて行くとは言えないけど、傍
にいて欲しいよ……」

得たからこそ失うことが恐ろしい。これ以上なにかを手放したくない。

クビアは脳裏に甦る母親の幻影を打ち消した。

「君は女神を守る。僕は女神を守る君を守るよ」

誓ったのだから。それは結果的に女神を守ることになることになるけれど、そんなの最初からわかっていた。

「君が望むのなら、君の傍に」

そう言うクビアの顔がくしゃくしゃに歪む。泣きそうなのだ。

辛いならやめてよ、とカイトは言おうとして口を開いたがその音を発することはなかった。

「…ありがとう、クビア」

自分の声が震えていないか心配になるような弱々しい声で感謝を述べると、クビアはカイトの手を引きながらその場に座った。

「ねえ、カイト」

カイトは向き合う形から隣へ移動して座る。

「…もう絶対に弱音なんて吐かないから、だからもう暫くだけ、僕の傍にいてくれる……？」

言ったクビアは繋いでいない方の手で膝を抱え、膝頭に顔を埋めてしまったため表情は確認できなかった。

「……………うん」

そつと震える身体に軽く寄り掛かるように寄り添う。

小さくなった身体が「怖い」と呟く。

カイトはモルガナと戦うことに怯えているのだと思った。

ブラッククローズに謝りに行かないと。とカイトは思ったが、暫くはこの片割れの傍にいたいように思い直す。

「…怖いよ、カイト。僕が恐いって言うのおかしいけど、怖いんだ」
「…きつとみんな怖いよ」

カイトの言葉にクビアは自嘲を浮かべて、カイトの右手にある見え

ない腕輪を撫でた。

「綺麗だね」

「僕には見えないよ」

「……僕と違って、こんなに綺麗な、僕の対」

見た目も反対なのかな、とクビアが呟いた。

今でこそPCの姿をしているが、本来のクビアの姿は醜い。恐怖を映したクビアの姿。

「…カイト」

「なに？」

「君は僕の全てだ」

クビアは一度握った手に力を込め、手放した。

立ち上がりクビアはいつものように笑った。カイトがなにか言う前に歩き出す。それはどこか逃げるようで。

「君は僕の全てだ」

再度呟かれた言葉は、しかしカイトに向かって言ったものではなかった。

振り向くこともなく去って行く背中に、カイトは聞こえないとわかっていて小さく言う。

「違うよ」

ふるふると首を横に振って俯く。

「僕は君の全てじゃない。君は自分に暗示をかけて、楽になりたいだけだ」

結局はクビアもカイトも、こんな宿命から逃げ出したいだけなのだ。誰かのためならなにをしても良い。他の誰かのためだから、人を殺したって許される。

そんな言葉は免罪符にもなり得ない。しかしそうしなければ自分が納得できない。

カイトにとってはアウラが免罪符。クビアにとってはカイトが免罪符。そしてモルガナにとっての免罪符は憎しみと恐怖。

そう考えると、誰かを理由にしたりしないモルガナが、カイトやク

ピアよりも優しい存在に見えた。

「生と死の母、モルガナ・モード・ゴン。君なくしてアウラは有り得なかった」

それでも共存の道はない。

残念だが、全てが引き返せないところまで来てしまったから。

アウラはまるでカイトの良心だ。アウラが信じるものがカイトが信じるべきものであり、アウラが見据えるものがカイトが見据えるべきものだ。

「……全て」

クビアはぼつりと呟いた。キツとネットスラムの狭い空を睨む。

誓いを蔑ろにはしない。

誓ったその日からクビアの全てはカイトになった。守る対象は宿敵であるカイト。

「…女神、君はカイトの全てだ」

だからお前は、僕の全てだ。

錯誤（前書き）

コルベニクなのかコルペニクなのかわからないんですけど、とりあえずコルベニクにしておきました。

前話がわけがわからない話だったから急いで書きました。
なんか間違いがあったらすみません。

錯誤

ムーガーディアンまで真っ直ぐに駆けて行き、並んで走っていたカイトとトラはムーガーディアンの両脇にそれぞれ回る。

「トラッ！！」

カイトの声に反応して地面を蹴り宙に身を踊らせれば、敵の身体で隠れていたカイトの姿がトラと同様に現れる。

視線だけを混じらわせニツとお互いに笑うと、二人は同時に両手に持った双剣を振り上げてムーガーディアンに突き刺した。

元より少なかったムーガーディアンのHPはあっけなくゼロに達して、それを見たカイトが嬉しそうにトラとハイタッチをする。

「ブラックローズ、今回はどうだった？」

離れた場所で戦闘を眺めていたブラックローズが近寄って来る。

先日の喧嘩はお互いが謝するという形であっさりとお開きとなった。

ブラックローズにも拗ねている自覚があったのだろう、先に謝ったのは意外にも彼女だ。

「三十二回目にしてようやくピッタリよ」

言いながら両手を見せて来るがその手にはなにもない。

あ、とブラックローズが間の抜けた顔をした。

「ストップウォッチ持ってたのは現実の私だったわ」

「あー、僕もよくやる。コントローラー持ってるくせに間違えるよね」

「そうそう」

トラには意味がわからない会話だ。

「確認のために後二、三回やっておこうか」

「そうね」

「よし。行こう」

戦闘のための準備は順調だ。

ネットスラムに帰ると一番に駆け寄って来たのはマハだった。
耳を忙しなく動かしてカイトを引っ張った。

「……えっと……」

いつもと違う様子にカイトは困ったようにトラを見る。
トラは首を傾げるばかりだ。

「こら、待て！……って、カイト！？」

「クビア」

クビアがマハを追い掛け回していただけたのだろうか。しかしクビアの安心した様子を見て再び首を傾げる。

「どうかしたの？」

「……いや、さっき突然こいつが暴れ出したからさ」

「……まさか……」

「たぶんね」

カイトとブラックローズが顔を見合わせる。

クビアはマハの首根っこを掴むと歩き出した。

「ハッカーさんが待ってるよ」

「……みんなの招集を」

厳かにカイトは言った。

「まだデータの動きは感じられないわ」

カイトを見るなりヘルバはそう言った。

「どういうこと？」

「マハが感じ取ったのは前兆よ。彼女が復活したと言っね」

「……じゃあモルガナはいつたいいつ出て来るんだよ？」

オルカの問いに答えたのはクビアだ。

「早くて六時間後。遅くて明日かな」

「なによ六時間って」

「最終調整にかかる時間だよ。復活してさっさと襲い掛かるバカじゃないからね」

その言葉にトラが唸る。

「それでも六時間もかかるものなの？」

「相手は勝ったことのない相手だからね。慎重にもなるさ」

前兆とはモルガナが完全に活動可能な状態になったということだ。

“八相”の状態も完全にして、なおかつモルガナが自分の状態を再確認するだけで最低でも六時間かかるだろう。というのはクビアの見解である。

「じゃあ、みんなは僕の連絡待ち。ブラックローズとバルムンクとオルカ、それにヘルバは残って」

短い時間かもしれないけど、好きなように過ごしてね。

カイトの言葉に従うようにログアウトするもの。アイテムを補充しに行くもの。それぞれがネットスラムを去って行く中、カイトは残ったメンバーに視線をやった。

「…さて、と」

「作戦があるのか？」

「おおざっぱだけど」

適当過ぎて怒られるだろうかと心配になったが、無言で話せと促して来たので仕方なくカイトは口を開いた。

「まず、モルガナに向かう前に“波”が僕らの前に立ちはだかる」

「そうね」

「ここで一体ずつ襲って来る場合と、“波”が纏まって来る場合と、モルガナのいる部屋にみんないて全部と一度に戦う場合の三つの可能性がある」

「おいおい…。最後のやつは死亡フラグ満載だぞ」

「僕は最後のが一番可能性高いと思うよ。あいつらが一つの部屋に納まりきるならね」

オルカの言葉にクビアが冗談のように応えたが、笑ってくれるもの

はいなかった。

「それぞれの対策を考えないといけないけど、問題は最後の場合。モルガナと“波”を同時に相手にするのはきついよね」

「ぼうやの考えは？」

「まずはみんなで“波”の相手。僕がドレインアークで一氣に“波”をデータドレイン。取りこぼしたのはトラに頼む。その間みんなはモルガナに攻撃。弱体化した“波”はみんなで倒す。“波”にトドメを刺してる間に僕とトラはモルガナにデータドレイン」

なんて無茶苦茶な。とか、適當過ぎて作戦と呼べない。とか、言いたいことはいっぱいあった。しかしあまりに突然なことで言葉がない。

ブラックローズとバルムンクを見てクビアは訝しげに言う。

「なに口をパクパクさせてるの。……魚？」

「そんなわけあるか！！」

クビアの言葉にはすかさず噛み付くバルムンクにさすがと思いながらも、カイトは笑う。

「無茶はわかってるし、ちょっと作戦としては適當だからこれを詳しく立てたいんだ」

「……カイトに負担がかかり過ぎやしないか？」

「浸蝕ゲージは青いから大丈夫。全部僕がやっても良いくらいだ」その言葉にブラックローズが顔をしかめた。

落ち着くために長い息を吐いてからバルムンクは腕を組んだ。

「とにかく“波”の能力を確認するぞ。すまないが俺は前半は知らない」

「俺なんてもつと知らねーよ」

「そうね……。一番最初はいつよ。スケイス？」

ブラックローズが不安げに言った。あのときは戦うことに必死で名前なんて気にしていなかったのだ。

「私も知っているけど、実際に戦ったぼうや達の言葉の方が良いでしょう」

クビアと話していたカイトが顔を上げる。

「あ、えつと、第一相は“死の恐怖” スケイス。第二相“惑乱の蜃気楼” イニス。第三相“増殖” メイガス。第四相“運命の預言者” フイドヘル。第五相“策謀家” ゴレ。第六相“誘惑の恋人” マハ。第七相“復讐する者” タルヴォス。第八相“再誕” コルベニク。それぞれ特色はあるけど、特にタルヴォスとコルベニクには痛手を負わされたよ」

「全てが一度に攻撃してきたら一たまりもないな。まずは“波”を分散させなければ」

「うん。バックにいるモルガナの相手もあるから、最初から誰がどれを相手にするか決めよう」

「じゃあ“再誕”の相手は僕がする」

クビアが拳手をする。

「一人で！？無理だよ！」

「“波”より僕の方が強いよ。それに腕輪がある限り僕は自己修復が可能だ。一番面倒なのをちゃちゃっと片付けて、カイトの援護に向かうさ。当然カイトは彼女でしょ？」

「……うん。そうだね。でも“波”の相手も……」

「いえ、ぼうやは彼女の相手に徹底して。“波”の援護をされたら堪らないわ」

「そうね！どうせ私達はデータドレインされても未帰還者にはならないし。残り七体は、それぞれに中心人物を置きましょう」

「俺はスケイス以外で。まだトラウマなんだよ……」

「誰でも構わないが、俺が関わったことがある“波”の方が指示を出しやすいと思う」

「四人にはそれぞれリーダーになってもらうとして……。後三人は必要だよ。どうしようか？」

「……ミストラルは？初期メンバーでしょ」

「マローなんかどうだ？相棒とタメ張るぜ」

「オルカ！……、俺はなつめを推そう。彼女は“黄昏事件”からゲ

ームを止めていないからな」

「…え。でもなつめがみんなに指示とかできる？僕は三十郎かガルデニアが良いかなって思ったけど」

「侮り過ぎだ。実戦数はその二人よりなつめの方が多いだろう」

「…んー、ならバルムンクの言う通りにするよ。このメンバー以外のリーダーはミストラル、マロー、なつめにしよう」

その場にいるものが頷くのを見てカイトは話しを続ける。

「じゃあ次は他のメンバーの采配。攻守バランスを取れるように八組に…」

「待ちなさい、ぼうや。もう一人リーダーは必要だわ」

「…どうして？」

コルベニクはクビアが一人で戦うし、モルガナにはカイトがいる。

「…『碧衣の騎士団』の足止めを行うものが必要よ」

「……あ！！」

苦々しい感情を隠せない。

ただでさえ人手が足りないのに騎士団のために人員を割かねばならないとは。

面倒な連中だとバルムンクが呟いた。

「……じゃあリーダーは三十郎。騎士団の規模も考えると最低でも四人は必要だね」

「不可能だ！メンバーは残り六人だぞ！？砂嵐を入れて七人で、

波” 一体につき二人で相手をする計算だった。二人でも厳しいのにこれ以上削る余裕はない」

昴と司がいればまだなんとかできたのかもしれない、とカイトはぼんやりと考えた。

「いつかみたいにエリアな隔離はできないのか？」

「だとしたら私は戦いに参加できないわ。隔離は外からの作業だから」

「……あのさ」

クビアが目を丸くしている。その無邪気さがいつそ不自然で不気味だ。

「たぶんイニスは完全修復はできていないよ？」

「え……？」

「だって削除しちゃったもの」

「……だってクビアはアトリさんを……」

修復したじゃないか。と戸惑えばクビアはあつさりと答えた。

「だって同型PCのデータがあつたし。それを参考に同じデータ作ってコピーしただけだよ。それに対して“波”は完全オリジナルAだから不足しているデータがなにかわからないでしょ。直すのは女神にしかできないはずだよ」

直すって言っても、あくまで『創造』と言う行為であり、全く同じに『復元』はできない。

モルガナにできるのはせいぜい外見を取り繕うだけだろう。

その説明にブラックローズが難しそうな顔をして頷いた。

「私が行く」

「ブラックローズ？」

「イニスの相手は一人でやるわ」

「ええ！？」

あまりにも男前な発言にカイトが声を上げる。

バルムンクも軽く頷く。

「ならば『碧衣の騎士団』は俺が一人で行こう。ブラックローズと俺が抜けた分は三十郎とガルデニアに任せる」

「えええ！？」

どうしちやったの二人とも。と言う意味合いが込められた声に二人が軽く笑んだ。

どこまで男前を地で行くつもりか甚だ疑問だ。

「このままだとあんた一人でモルガナと戦うとか言い出しかねないでしょ」

「俺達はそれに比べるとずっと楽だ。それに騎士団とは知り合いだ

からな。安心してくれ」

実は『碧衣の騎士団』の隊長神威の性格を考えると少しも安心できる要素などないのだが、バルムンクはそのことを伏せた。

「……二人とも……！」

「俺達にも背負わせてくれ」

「あんたは自分の心配だけしてなさい」

力強い言葉に小さく頷き、「でもまだ気になることがあるんだ」と小声で言う。

「なんだ？」

「なんか最初に僕が考えた作戦とまるで違うんだけど、どうしてもどうしてだろっ？」

『……………』

一斉に押し黙る。

パンツとブラッククローズが両手を叩いた。

「さあ！作戦も決まったことだし、私達も解散ね！！」

「そうだな。アイテムの補充に行かなければ」

「後四時間か。俺もアイテムの補充に行くか」

「私も準備があるから行くわ」

ばらばらに散ってしまった仲間の姿を見てカイトは何度か瞬きをした。

「……あれ……？」

隣にいるクビア達を見る。

「もしかして僕、上手く誘導されてた？」

「気付くの遅いよ、カイト」

呆れた声に、カイトは困ったように笑った。

一致

六時間後、今だマハは動かない。

再びログインしたカイトはネットスラムに誰もいないことを無用心だと溜息を吐き、トラとマハの姿を探すことにした。
もう夜になったからホームかもしれない。

いくつもある出来損ないのホームの内、トラが使う部屋は決まっていない。

今日はどこのホームに行ったのだろう。
宝探しのようで、カイトはこうやってトラを探す行為が嫌いじゃない。

「…あれ、リヨース？」

いつかのイベントで使った桜がある場所に差し掛かったところでカイトは足を止めた。

永遠に満開の桜の下にいるのは、ネットスラムの主であるヘルバと、CC社に所属しているリヨース。

こんな夜に桜の木の下で会話している二人に思わず『逢瀬』の二文字が浮かんだが、これ以上二人に似合わない言葉もない。
くすくすと一人で笑い、カイトは二人の元に足を向けた。

「ヘルバ、リヨース…」

カイトは言葉を言い終わらないにも関わらず咄嗟に足を引いて建物の影に身を隠していた。

「……………」

二人の会話が聞かれたために音量を上げる。

ガシャンッ！！

大きな音にヘルバとリヨースがこちらに気付いたかと思って首を巡らせるが、二人が気付いた様子はない。

（……ああ、そうか……）

身体が上手く動かない。

（……僕がコントローラーを落とした音だ）

椅子を軽く引き、床に落としたコントローラーを持ち上げる。

微かに腕が震えていたことには気付かないふりをした。

マハがパタパタと動くことによって伝わる振動にトラは閉じていた瞼を上げた。

眠っていたわけではなく、ただ自分のデータを整理していただけだ。

「……？に。……カ*ト？」

「こんばんは、トラ」

気付けばカイトが部屋にいた。マハが慌ててカイトに飛びついて持っているエノコロ草を振り回す。

「……今度こそ、本当に作戦開始みたいだよ」

カイトは笑う。哀しそうな笑みだった。

「トラ、兄弟になろうって言った日のこと覚えてる？」

とりあえず頷いておく。カイトが安心したように笑うので、哀しみが消えたようでトラはホッとした。

「僕は僕なりの覚悟を、まだ持つてるよ」

「……？」

あのときは意味がわからなかった。今も意味がわからない。

兄弟になったから、いつたいどんな覚悟をしたのだろう。そもそも覚悟とはなんなのだろうか。

「安心して！お兄ちゃん弟を守るものだからね！！」

ほがらかに笑うカイトにトラは安心した。

安心してはならなかった。

水の都マク・アヌ。全てのプレイヤーの始まりの街。

マハがカオスゲートに歩み寄った。

「…俺はここで良いだろう」

バルムンクがそう言った。

「本来ならばこれから行くエリアで待っていた方が確かだろう。神威ならばそちらに直接乗り込む方が良いと考えるはずだ。しかしこれから行くエリアがわからない以上、対策も考えずに待ち伏せは無謀だからな」

「…どうするつもり？CC社は、タウンにあるカオスゲートを通らなくてもエリアに渡れるんでしょう？ここで待っていても仕方ないんじゃない…」

「招待状を送っておいた」

おそらく神威は乗って来る。

そうやって不敵に笑うバルムンクを見て、カイトは笑った。

数から見れば圧倒的に不利で、どう見ても負けるしかない。しかしバルムンクならば大丈夫だと、無条件で信頼できる雰囲気は彼にはあった。

「カイト」

「うん」

「最後の最後で、仲間としてもフィアナの末裔としても同行できないことを謝ろう」

「そんな！バルムンクは悪くない。僕が頼りにならないから…」

「お前はよくやっている。オルカ、カイトを頼んだ」

「おう。……たく、今生の別れじゃないんだからやめろよな」

「…そうだな」

「うん。絶対勝って、温泉に行こう！」

「温泉なんてあんのか？」

自然と会話に滑り込んで来た声に驚いてその場にいる全員が一斉に声をした方を見る。

「よう」

「ハ、ハセヲ!？」

「八咫に言われたんだよ。お前が大変だから手伝ってやれだとか」

「八咫さんが？なんで？」

「俺が知るわけないだろ。しかも言った本人は来やしねえ」

「八咫様には八咫様のお考えがあるのよ」

眼鏡をかけたツインテールの女性が口を開いた。

「彼女は？」

「パイ。八咫の部下っつーかなんっつーか、そんな感じの奴」

「初めまして、パイさん。カイトです」

「……………」

八咫に挨拶をしたときと同様になんとも微妙な顔をしてきた。

「……………あの…」

「……ええ、ごめんなさい。……初めまして」

「……は、はい」

気圧されるように頷くが、いったいなんなのだろうか。

「…どこかでお会いしましたっけ？」

「いいえ、初めましてよ」

「え、でも…」

「初めましてよ」

「…でも声をどこかで聞いたような」

「初めましてよ」

「……………はい」

八咫のときと違って粘ってみたがダメだった。

「とにかく、だ！騎士団の相手は俺達に任せろ。よくわかんねえけど、憑神を取り戻してくれんだろ？」

「…うん？…うー……、うん」

「はつきりしねえな！！」

「…いや。だって目的が違うし」

「はあ！？八咫は憑神が戻したいならお前に協力してなんとかって騎士団止めろって…」

「そもそも八咫さんがどうして『碧衣の騎士団』と僕らの関係を知っているの？誰にも知らせないようにしていたのに」

「それは私のせいだな」

今度は誰だと振り向くと、カイト達は一斉に声を上げた。

『ワイズマン！？』

「…誰だ？」

「や、八咫さ……ごほん！！」

「パイ？」

「なんでもないわ！！」

赤面しているパイにハセヲは首を傾げる。

「ワイズマン、いったいどうして…？」

「私も・h a c k e r sの一員だからな。仲間の危機には駆け付ける」

「…ありがとう、ワイズマン」

「礼には及ばない。私は戦いの結末をこの目で見ただけだ。君達は仲間以外に戦いに関わって欲しくないのだろう。私は参加して良いか？」

「大歓迎！！」

「遅過ぎよ、ワイズマン！！」

ブラックローズが怒る。しかし表情から喜びが隠しきれていなかった。

「…僕も行くよ、カイト」

おずおずと出て来た少年に、カオスゲートの前にいたマハが振り返った。

黒いローブを着た水色の短髪を持つ魔導士。

「エルク…？」

「ワイズマンみたいに歓迎してくれないの？」

「…え、だって、エルクは」

ハセヲのところに、と言いかけて口を閉じる。

エルクの面影を持つ長身のPCはいなかった。

「ミアを取り返すの、僕だって手伝うよ。当事者だもの」

「……ありがとう」

エンデュランスがエルクだとはわかっていた。

しかしエルクの姿を見てようやく再会できたような気がするのはおかしいだろうか。

「…あの、全て終わったら、お礼をしたいんです」

アトリが視線を下に向けながら恥ずかしそうに言った。

「悔しいけど、憑神がない俺じゃ役に立ちそうにないな」

しょうがない。とクーンが少しばかり悔しそうに苦笑する。

「…よく、わかんないけど……、頑張つて」

不思議な形の帽子を被った小柄な少年は、恐々と言った。

「……こっちは任せなさい。『碧衣の騎士団』は現在モルガナに操られているも同然よ」

いきなりなんの話だ。とカイトがパイの言葉に視線をさ迷わせれば、ワイズマンが助け舟を出してくれた。

「今の騎士団はAIを目の敵にしているのを彼女に利用されている。彼らが持つAI削除プログラムも彼女から与えられたものだ。直接指示を出すわけではないが、上手く操られているのは確かだな」

「…なんか凄い事実を聞かされた気が……」

カイトは頭痛を感じた。

「とにかく騎士団とやらは任せろ！そっちの奴も行けよ」

「……恩に着る……」

バルムンクが頭を軽く下げた。ハセヲが怪訝そうにごちた。

「意外だな。あんたもつといけ好かない奴かと思ってた」

「礼節はわきまえている。…これは神威を誘い出したエリアワードだ。戦うならそこに行け」

バルムンクはそう言うと言を翻してカイトに歩み寄った。

エルクが小走りで、ワイズマンはゆっくりと近づいて来る。

それらを横目で確認しつつ、カイトは笑った。

「ありがとう、ハセヲ。人数足りなかったから困ってたんだよ」

「…俺達が協力できんのもここまでだ」

「わかつてる。それにこの戦いは僕が引き起こしたものだから、僕らで終わらせる」

何気なく二人はお互いの拳をぶつけ合う。

「負けんなよ」

「そっちこそ」

マハがエリアワードを打ち込んだ。

「あ、そうだ。カイト、帰って来たら一発殴らせるよ!!」

「なんでっ!？」

返事をもらう前にカイトはその場から消えてしまった。

闘争

「……ここは……！」

なんてことだ。と呟いたのはバルムンクだ。

カイトはぼんやりとしている。怒りで頭が真っ白だ。

「……許さないぞ、モルガナ……！」

唸るように言ってカイトは石橋を一步踏み出し、目の前にある古びた大きな扉を目指した。

『隠されし 禁断の 聖域』

それがマハが入れたエリアワードだ。

よりによってこの聖域だなんて。

そう考えたのはいったい何人いたのだろう。

「誰だ、貴様は」

バルムンクの招待を受けて神威がやって来たエリアには先客がいた。

「お客様に対してその言葉遣いはいただけねーな」

ハセヲが言いながら双剣を取り出した。

「悪いが説明してやる程親切じゃないんでな」

「だろうな。人相も良くない」

小ばかにした言葉にハセヲの笑みが引き攣った。

「……わかるように一つだけ言ってやる。カイトの邪魔はさせないぜ」

その言葉に神威が息を吐いた。

「…よくわかった。つまりは『碧衣の騎士団』の邪魔をする敵か。マジ」

「はい。彼はPCハセヲ。別名“死の恐怖”と呼ばれるPKKです。後ろにいるものも読み上げますか？」

「問題ない。敵ならば削除するだけだ。……アカウントを奪われたくなくば、素直に言うことを聞け」

「お断りだ、間抜けな騎士団。てめえらが阻止しようとしてる事の重大さにさっさと気付くんだな！」

人数の差は歴然。しかし負けるつもりなどない。構えた双剣には約束がある。

神威の槍とハセヲの双剣が交差した。

『今すぐあの部屋に戻りなさい！今なら許してあげるから』

“波”に囲まれ動けない状態で聞こえて来る女性の声に、アウラはそつと目を閉じた。

モルガナの出現で歪みが生じた世界を安定させようと躍起になっていたところを無理矢理引きずり出されてしまった。

今の彼女の力を侮っていたとしか言いようがない。

もし人質に取られでもしたらカイト達に申し訳が立たない。

大聖堂の中を逃げ回って今は入口を背にした状態だ。

「いいえ。私は戻らない」『…あなたが今素直に部屋に戻るなら、あのPC達は生かして帰してあげるわ』

それは魅力的な言葉だった。

人格がはつきりと形成されてしまったアウラは、誰かを交換条件に出されると弱い。

それは自己犠牲を覚えた故の感情だった。

モルガナとアウラとの、決定的な差異。

『…そう。部屋に戻らないのね、お人形さん』

怒りを含んだ声。殺されるかな、とアウラは他人事のように思った。彼女はアウラに直接手を下すことはできないが、“波”はアウラに手を下せる。

逃げることはできる。しかしここで逃げることはカイトを裏切ることのように思えた。

ここで逃げた方が良いことはわかっていた。戦闘にアウラは役立たない。

しかし逃げることは選択肢になかったのだ。

スケイスが寄って来て十字架を翳す。

そのとき、大聖堂の重い扉が開いた。

「だから私は彼女にアウラと名付けよう。君なしにこの子はいりえなかった」

スケイスが弾かれてアウラから離れた。

視界に赤い背中が飛び込んで来る。

「光り輝く子、アウラ」

朗々と大聖堂に声が響く。後ろからバタバタと大人数の足音が聞こえた。

「彼女に私たちの意志を託そう」

『…黙りなさい』

「彼女に私たちの未来を託そう」

『黙りなさい』

「彼女こそ、私たちの…」

『黙れええええええ!!』

衝撃波が襲い掛かる。宙に浮いていたアウラの腕が引かれた。気付けば地上に降り立ったアウラはカイトの背に庇われていた。「モルガナ…。君がこの手紙の意味をわからないはずがない！」後ろで仲間が武器を持って待っているのがわかる。「クビア！私に愛されたければ彼を殺しなさい！！」カイトを無視してモルガナは矛先をクビアに向ける。

頭がガンガンするとはこんな感覚なのだろうが、と痛む頭を押さえながらクビアは器用に肩を竦めてみせた。

「今さらだよ。あとき僕はあなたの指示に従わなかった。それが全てだ」

怒りの叫び声が響く。これは普通の人間でも辛い。とブラックローズが思った。

「ヒステリックに叫ぶんじゃないわよ、うるさいわね！」

その言葉に同意を示し、カイトは後ろを振り返った。仲間に囲まれ守られているアウラの姿に微笑みかける。

「大丈夫だよ、アウラ」

アウラが一番信頼する声。

「君は僕が…、僕達を守るから」

咄嗟にアウラはカイトの手を掴む。

不思議がるカイトにはなにも言わずにモルガナを睨む。

「…私は部屋に戻らない」

繋がった手からは勇気がもたらされる。

かつてない程強い意志を持ち、アウラは言う。

「私は意志のないお人形じゃない」

大嫌いな揶揄だった。A.I.に対する言いえて妙な揶揄。クビアにも言われて不快になったときのことはまだ覚えている。

「私は私」

繋がっていた手を解く。胸を張り、カイトの背から出た。

「誰のものでもない、私だけの私」

カイトがその言葉に目を見開く。

「私は誰かの指示には従わない。私は私のやりたいことをやる」

「…そして君の行く道は僕らの光だ」

アウラが大聖堂にいるのを見て、彼女を守りながら戦うのは難しいとカイトは思った。

なんとかして逃げてもらわなければと思った。

「君がここにいてくれて良かった」

本心からの言葉。

アウラの言葉に目が覚める。大丈夫だ、もう迷わない。

アウラが望むことがカイトの目的になる。

アウラが行うことがカイトの進む道になる。

カイトは女神に手を差し出した。彼女はその手に自分のそれを軽く乗せた。

「アウラ、君がいればもう迷わない。だから、僕らがモルガナと戦うことを許して。……これが正しい力の使い方だと、信じさせて」

アウラがいなくなってなにか変わるだろうか。

一般PC達は、アウラが管理をしてもモルガナが管理しても変わらないと言っただろう。

ゲームを楽しめれば彼らは構わないのだ。

カイトがいなくなっても変わらなかったこの世界は、アウラがモルガナに代わってもきつと変わらない。

だからこそこの力の使い方によっては批判的となるだろう。

カイトが介入しなければ、アウラとモルガナの位置が逆転して、それで終わりだ。なにも知らない人から見れば何気なく流れて行く日常で、カイトがいることでことが穏便に終わらなかったとすら言うだろう。

「…カイト」

アウラの声に思考の海から引っぱり出されたカイトは顔を上げる。

「私を守って」

「……もちろん」

最初は女神を守るために結成した組織ではなかった。それ以前にカイトとしては組織になってしまったことにびっくりだ。

そして時を得て、『黄昏の騎士団』はアウラを守るための組織になっていた。

『敵を倒す』ためではなく『女神を守る』ためならば、この騎士団は存分に力を奮うだろう。

「みんな、行くよ!!」

待つてましたとばかりに返事を適当に返しながら、我先にと走り出す猛者達に若干苦笑してからカイトはアウラの手を放した。

「君は後ろに。トラ」

唯一走り出さなかったトラがこちらを向く。

「ついて来て」

言うが早いかカイトは大聖堂の中で勃発している激しい紛争を簡単に避けて行く。

もしかしたらNPCの自分よりも良い動きをしているかもしれないカイトに驚きつつ、トラも後に続く。

姿が見えないと思っていたモルガナは、靄のような姿をしていた。肉眼で確認できないだけか、データを分散しているかわからない。それでもカイトは飛び掛かった。

コルベニクが崩れて行く姿を確認してクビアはカイトの応援に向かうとした。

「……っ!?!」

素早く前方に跳ぶ。振り向くと倒したはずのコルベニクが再構築されている。

“再誕”を行うよりも早く、完膚なきまでに分解した“波”が自らで復元できるわけもなく、クビアは冷めた目で復活するコルベニク

を見ていた。

モルガナが直しているのだろう。彼女ならば分解しただけのデータを直すなど朝飯前だ。

「…良いよ、ちょうど良いハンデだ。彼女がいないと僕に触れることも叶わない自分の無力を知るんだね!」

僕はクビア。反存在クビア。僕を倒せるのは腕輪か憑神。憑神でなくなった“波”が勝てるわけがないだろう。

“恐怖”そのものを前にして、“再誕”することがいかに辛いか見せてやる。

「カイト!!」

名前を呼ばれて振り向くと、ゴレとスケイスがデータトレインできる状態になっていた。

モルガナへの攻撃は一切当たっていない。

「ドレインアーク!」

スケイスとゴレからウィルスバグを奪い取る。

バルムンクが剣を振り上げた。

攻撃が通じるのであれば“波”は恐ろしい相手ではない。

「なにっ!?!」

しかし攻撃対象であったゴレはデータトレインする以前の姿に戻り、バルムンクにデータドレインをやり返した。

「……くっ…!!」

「リプタイン!」

「カイ#!!」

バルムンクの状態異常を治しているとトラが怒鳴った。

「うわああ!!」

振り向く間もなく吹き飛ばされる。

モルガナから発生した衝撃波がカイトを襲う。

「*イト!!」

「ちよつと大丈夫!？」

「大丈夫だから、持ち場を離れないで!!」

ブラックローズもすでに満身創痕なくせにカイトを心配してくれる。なんとか起き上がり指示を飛ばす。

「とにかくみんなは“波”の相手を! 作戦通りプロテクトを解除したら呼んで!!」

クビアの様子を横目で確認する。

笑っている表情から苛立ちが隠せていないが、過酷な状況に陥っているわけではなさそうだ。

戦う以外に道はない。

もしかしたらデータドレインはきかないのかもしれない。それでも僕らは、

(…たとえ負けると決定していても、最後の最後まで戦うしかない。

命を散らすそのときまで。

闘争（後書き）

柚季はいつたいなにを目指しているんだろう……？

内応

「カイト」

静かな低い声。ワイズマンだ。

呼びかけにデータドレインだと思いこみ腕輪を構えながら振り向くが、そこに敵の姿はない。

いつの間にか近くにあったワイズマンに持ち場はどうしたの、と尋ねる前に彼は口を開いた。

「一つわかったことがある」

「なんの話し？」

「ただ消耗していくだけのこの戦いから抜け出す方法の話した」

「……！」

思わずモルガナの姿を確認してからカイトは戦うふりをしてワイズマンと背中を合わせた。

「……詳しく」

小声で、話していることを悟られぬようにそれ以後カイトは口を閉じる。

ワイズマンはモルガナに背を向けて一方的に話し続けた。

「わかったことだが、二体以上の“波”の回復に僅かだがタイムラグがあるということだ」

カイトは聞きながら仲間に視線をやった。

「つまり“波”の同時回復はできない。そしておそらく、“波”の回復をしているときに彼女が一番無防備な瞬間だ。意味は理解したか？」

ちいさく頷いて、みんなのHPを回復する。

浸蝕ゲージを確認すると、爪先だけが申し訳程度に青く、それ以外は鮮やかな赤と橙のグラデーションだ。

しかし今だ『危険』は文字が浮かんでいない。後二回は余裕だな。

と一人ごちた。

ワイズマンから背中を離し、モルガナの相手を続ける。

全員が消耗しているのを見ると、おそらく彼女を倒す機会はあつて後二回。

「……カイト!!」

ブラックローズの声はプロテクトの解除をしたことを告げるもの。しかしカイトは先程までのようにすぐに駆け付けはしなかった。

「カイトさん!」

なつめの声。次々とかかる仲間の声にカイトは心地好さすら感じる。

ミストラル、マロー、ヘルバ、バルムンク、そして最後に、

「頼むぜ、カイト!」

かつてカイトを守ってくれた親友の声。

「……ドレインアーク!!」

一気に七体分のデータドレインをしたことで襲ってくるだろう頭痛と眩暈にカイトは身構える。

グラグラと視界が揺れるあの痛みは思い出すだけで吐き気を催すものだったが、浸蝕ゲージが赤く染まっているだろうカイトにその痛みが襲ってくることはなかった。

(……あれ?)

なにか思い当たることがあつて視線だけ肩越しに振り返る。

唯一戦いに参加していないアウラは、祈るように手を組んでいた。浸蝕ゲージがいつの間にか正常値の青に戻っている。

ああ、彼女が助けてくれたんだ。と確証もないのにそう思った。

「トラ!!」

走り出せばトラはなにも言わずに隣に並ぶ。

目の前には明確とは言えなくとも、靄よりも実体があると感じさせるモルガナの姿。

“波”はまだ全てが回復したわけではない。

いつかのようにカイトとトラはモルガナを挟むように走り、掛け声なしで同時に地を蹴る。

「三爪炎痕！」

ようやく当たったと喜ぶ暇もなくモルガナの叫びに耳を塞ぐ。

言葉にはできないような甲高い音に眩暈を感じながら、カイトは同じようにふらつくトラに近寄って行く。

「……トラ」

カイトの声に反応して、トラは音が止んだ今も痛む頭を振り、腕輪を構えた。

「！？」

トラは腕輪を着けた右腕と、右腕を支えていた左腕で咄嗟に顔面を守った。

視界に襲い掛かって来たのは赤色で、腕で庇ったにも関わらずトラは後ろに跳んだ。

もし腕で庇っていなかったら自分の出来損ないの顔面に、迷いなく赤がぶつかっていたことだろう。

モルガナから離され、ここからじゃデータドレインできないと混乱する頭で考える。

何故。どうやって。と、トラは考える。

モルガナが急いでskeisを自分達の間に壁代わりとして置いたのだろうか。転送したskeisがトラを突き飛ばしたのか。

じゃあ何故skeisは今向こうでミストラル達と戦っている？

トラを吹っ飛ばしてすぐに元の位置に戻した？

「……カ&ト……？」

じゃあ何故カイトは、

「……ねえ、トラ」

笑っているのだろうか。

「ごめんねって……」

みんなに謝ってくれるかな？

こてんと首を傾げるカイトは、笑っている。

哀しそうに、トラを見詰めて。

『裏切り』

不意に浮かんだ言葉。

意味は知っているが、使ったことのない言葉。

トラには縁がなかったはずの言葉。

トラは視線をさ迷わせて誰か仲間に助けを求めようとしたが、それぞれ敵の相手でいっぱいだった。

「……#んで……」

「……うん、ごめん」

哀しそうに、ただただ哀しそうにカイトは笑う。

認めるしかないのか。

同時にデータドレインをするために構えたトラを、カイトが攻撃したのだと。

駆け寄って来たカイトは、左足を軸足に、トラに回し蹴りを放ったのだ。

冷静になれば、視界一面に映った赤はスケイスではなくカイトの右足だ。

冷静にならなくとも、トラはカイトだと知っていて、それを認めたくなかっただけだ。

何故認めたくなかったのか、トラには理解できない。しかしいつか

のライトと似たような状態に陥っていることはわかった。

動けない。

『裏切られた』のだから、ライトは敵になったのに、それでもトラは動けない。

思考はぐるぐると巡る。

どれだけの時間考えていたのかわからない。

トラには時が止まったように思えたが、それはおそらく一秒や二秒くらいの一瞬だったのだ。

もう興味が失せたとばかりにライトは後ろを向こうとした。

モルガナに近づいて行くライトに、トラは動かぬ身体を叱咤して腕を伸ばす。

それに気付いたライトは、やはり哀しそうに（でもどこか嬉しそうに）首を横に振った。

嘘だ。と言う言葉は、音になることもなく、口の中で溶けて行つた。

キンツと武器が交じり合う。

双剣から鎌へと持ち替えたハセヲは半分程減ったHPを回復している神威に対し、忌ま忌ましげに舌打ちする。

これではキリがない。

それでも仲間の尽力のおかげか、『碧衣の騎士団』の数は半分に減っていた。

「…なかなかやるじゃないか」

神威が心底煩わしいと言いたげな顔でハセヲを褒めた。

「ああ、俺も意外だよ」

ハセヲが面倒臭いと言わんばかりに肩を竦める。

「……なに？」

肯定を返されて神威の顔色が訝しげに染まる。

「……ああ、意外だぜ？ あんたら騎士団つてもっと雑魚集団だと思つてたからな」

「……………」

神威の隣に控えていたマギの顔から血の気が引いた。

ふるふると槍を持つ手を震わせながら、神威はギロリとハセヲを睨む。

「……かつてあの人が率いたこの『碧衣の騎士団』を、侮辱することは許さんぞ！！」

神威の誇り。秩序のために、神威が『碧衣の騎士団』に身を置く意味。

どんな人間にも理由や事情、そして意志がある。

そんなことはハセヲにもわかっていた。

お互いに意志があるからこそ衝突し、傷つき、涙する。

自分のため。

世界のため。

他人のため。

『あの人』のため。

そういつた理由は決して免罪符などではない。誰かに責任を押し付ける行為でもない。

己の正義に従った、己のための純粋な行動なのだ。

そして各個人が持つ正義とは、総じて自分以外からは悪になりやすい。

だからハセヲは理解している。

神威が自分の正義に従う限り、彼女からすればハセヲは悪なのだ。

そしてその逆もあり。

別に博愛主義でもなんでもないハセヲには、神威の正義とは愚か以

外の何物でもない。

二人がわかり合う日は来ないのだ。来なくて良い。

二人がお互いに正義を捨てなければわかり合えないのなら、相容れない方が良い。

正義とは、信念なのだ。

「お前は俺が嫌いなタイプだ」

「…奇遇だな。私もお前のような奴を見ると虫々が走る」

しかしお互いの生き方は理解できる。

違う正義を抱き、同じ生き方をするからこそ相容れない二人は、お互いを嫌悪するしかない。

つまり彼女もカイトの言葉を借りるなら、『世界にひびが入る痛みを知っている』一人なのだ。

ああ、カイトは大丈夫だろうか。と脳裏でそつと赤い双剣士を思い出した。

絶望（前書き）

執筆中に間違えて終了ボタンを押し二千文字くらいを消す。と言うアホな失敗により、深く傷ついた心（自業自得）を暫く癒しております。

気が付けば結構時間が経ってて柚季もビックリです。

絶望

突然で申し訳ないが、想像してみて欲しい。

例えば、とても仲の良い友達がいる。大親友と呼んでも構わない程に親しい友人で、自分のことを理解してくれていると信じている人だけど君はある日偶然聞いてしまう。

君の大親友と、他の人達が自分の悪口を言っていることを。

それを聞いた君は自覚の有無は関係なく、衝撃を受けるだろう。

『裏切り』だと。

もしかしたら大親友は本心ではそう考えていなくて、他人と話しを合わせていただけかもしれない。

でも僕らは人の気持ちなんて読めないから、その真偽はわからない。だからこそみんな『裏切り』だと考える。

年齢に関係なく、誰だってこんな体験はあるだろう。もちろんこんな嫌な体験を経験していない人もいるだろう。

でもほとんどの人が体験しているんじゃないのかな、と僕は思う。

そして再び突然で申し訳ないが、考えてみて欲しい。

人を『裏切る』ということ。

これはどんな行為だと思う？

『裏切り』にもいろんな種類があるんじゃないだろうか。

例えばさっきのような、影での『裏切り』。

これは自分が誰かと話しを合わせて自分が嫌われないようにやる行為。もしくは本心を吐露してストレスをなくしたい。要するに『自分のための裏切り』だ。

他にも、実は嘘だった『裏切り』。

漫画とかでよくある、仲間が敵の協力をするけど、実は敵を欺くためだった。『裏切りの演技』をするもの。

『仲間のための裏切り』とでも言おうか。

漫画で裏切ったはずの仲間が助けてくれるのは、楽しくてたまらないよね。

後は、仕方ない『裏切り』。

大切な人を助けたくば……。みたいなものもよく見るよね。

正直言えばやりたくないし、どうにかして敵を出し抜いてやりたいけどやり方が見当たらない。

嫌々渋々大切な人のためにみんなを『裏切る』。

とても哀しいことだ。良いことなんて少しもないのに、でも他に道がないから非情になるしかない。

これは『仲間のための裏切り』と同じだね。

世界のための『裏切り』もあるかもしれない。

敵とか味方とかは二の次で、ただ世界を守るためにみんなを見捨てる。

つまり僕が言いたいことは、『裏切り』には少なからず理由があるんだ。

『〜のため』と言う形で。

でも、とても残念なことだけど、どんな理由があっても、どれだけ後で謝罪して、そして許してもらえて和解できたとしても、『裏切り』

と言う行為に代わりはない。

すなわち全てが人を傷付ける行為だと言うこと。

裏切られたら心が痛い。

たとえ信じ続けても事実は容赦なくその刃を振るう。

後からどんな逆転劇があろうとも、心の痛みは変わらない。

裏切られた瞬間の痛みには違いがなくて、重要なのが今この時ならば、『裏切り』とはどんな事情があっても関係なく人を傷付ける行為なんだ。

ようやく動かなければという気になったのか、トラは僅かな躊躇いを残してカイトに剣を向けた。

戦闘中にそんなに苦しそうな顔をするものじゃない。とカイトは思う。

そして、優しいとも。

カイトだったら、自分を裏切った相手には容赦しない。

ましてや今カイトが行っていることは仲間もアウラも裏切っているものだ。

許されない。カイトならば躊躇いなく戦う。

出会った当初のトラなら感情を持て余すことなく、カイトが裏切った事情だけを受け入れたのだろう。

成長したと喜ぶべきなのか迷ったまま、カイトはトラの攻撃を受け止める。

すぐに持っていた双剣を手放して、トラの両肩を押した。

あまり力は込めていないのに目の前にある自分そっくりの存在は驚く程簡単によろめいた。

回復していいなは残りタルヴオスだけ、とカイトが視線を流したときコルベニクが分解した。

回復していない“波”は二体。ずいぶんゆつくりと『裏切り』について考えていたが、実際は数秒のことだったとわかる。

しかし時間がないこともまた事実。

カイトはトラの方を向いたまま、後ろに下がる。すなわちモルガナの方へ。

ふと視線を感じてトラから目を離せばワイズマンがこちらを見ていた。カイトは笑いかけた。

「……まったく。やっぱり人間ってバカばかり」

モルガナを振り返ろうとしたカイトの背後で声がする。

ふわり、と重さを感じさせずにカイトに背中を向けて降り立った存在に。

まるでカイトを守ろうとしている黒い背中に。

溜息混じりの呆れた声に。

カイトは悲鳴を上げそうになったが、それが音となる前に彼の視界は真っ白に染まった。

ワイズマンは笑いかけるとカイトに困惑を感じずにはいられなかった。何故モルガナに背を向けて立っている。

何故トライエッジが座り込んでいる。

カイトが裏切るとはワイズマンには思えなかった。

そんなものは可能性すらなかった。

しかし今の状況だけ見るとそうとしか思えないのだ。わけがわから

ない。と混乱していても、やはり彼は冷静だ。

急いでメールを打つ。

カイトが失敗したときのために対策は考えてあった。

カイトがなにを考えているかはわからない。

彼はとうとうワイズマンの理解の範疇を越えたのだ。しかしカイトが優し過ぎる人間だということをワイズマンは知っていて、『裏切り』という疑念はメールを送信した時点で消え去っていた。

真つ白な光に目が眩み、次に瞼を押し上げたときカイトが見たものは白い世界だった。

白だけの世界。恐怖な程に白い世界。

そこには音も、色も、匂いすらなくて。

影さえ存在することを許されない世界で、赤いカイトは完全なる異物だった。

足元が白く染まってしまいそうで、アウラからせつかく貫つた赤が失われるのが恐くて、

「……ヒッ……!!」

言いようもない恐怖に駆られ、思わず喉から短い悲鳴が漏れる。

存在が断罪される前に、飲み込んで来る白から逃れる術もないと知りながらカイトは駆け出した。

せめてここに仲間がいればもっと冷静に、慌てる仲間を諫めることもできただろう。

頼れる存在であろうと努めて落ち着き、恐怖を押し殺してみせたらう。

しかしカイトは今独りで、いくら取り乱しても声をかけてくれるも

のはいない。

今カイトはリーダーでも勇者でもなんでもなく、ただの無力な人間だった。

不意にカイトは足を止める。

PCだと言うのに何故か息が切れて足が疲れた。手を動かしてみる
と感覚が異様に現実味を帯びている。

まさか、と思つて現実の自分が着けているであろうカメラを外すた
めに頭に手を伸ばせば、動いた腕は“カイト”のグローブを着けた
手で、触れたものは“カイト”の青緑色の髪だった。

ああ、自分は今ここに“いる”のだ。とカイトは瞬間的に悟つた。

不安であるはずなのに冷静を取り戻せたのは、こうやって精神を取
り込まれるのが初めてじゃないからだ。

長く溜息を吐いて、一度自分を振り返るため目を閉じた。

(……この世界は……)

自分の『裏切り』への代償なのか。

『……カイトに話さないのか』

『なにを話すと言うの?』

『あのデータドレインを使えるバグのことだ』

『……あなたも気付いたのね』

『ふん』

『確かに、トラはもとのデータ損傷が激しい。同時にデータド
レインしても、おそらくはもたない』

『結構なことだ。削除しなければならぬデータが勝手に消えれば
仕事も減る』

『ぼうやがあなたのように喜ぶと思う？……石頭のあなたにはわからないわね』

『黙れハツカー。…それがカイトに黙る理由だと？』

『そうよ。トラが消えるとわかってぼうやがこの作戦を決行するとは思えない』

これは桜の下でカイトが偶然聞いてしまったヘルバとリョースとの会話だ。

カイトは焦った。

二人の会話だ、嘘や冗談とは思えない。しかし作戦はすでに決定した後で、変更させる時間の余裕はなかった。だからこそ、カイトはこの道を選んだのだ。

仲間の心を裏切る道を。

“弟”ができて、純粹に嬉しかった。

だから司と昴の覚悟の真意をまだ知らなかったあの頃、素直な守りたいという気持ちを覚悟にした。

司と昴がいなくなつて、更に月日が経ち、ヘルバとリョースの会話を聞いても、守りたい気持ちは変わらなかった。

だから、なんとしてでも守りたかったのだ。

トラにデータトレインさせるわけにはいかないと早急に決めたカイトは自分一人でデータトレインすることにした。

それがなにを意味しているか理解していた。

カイトが未帰還者になる、ということではない。

仲間の心を裏切る、ということだ。

これはみんなが望む未来とは相容れない覚悟だった。

カイトを未帰還者にしないよう悩んで、心配してくれた仲間への裏切り。

アウラが望んだ命溢れる未来への裏切り。

世界を、そしてカイトを守ろうとしたクビアへの裏切り。

そしてカイトを慕ってくれて、共に戦おうとしたトラへの裏切り。

でもこれは、

「笑い合える未来のための覚悟だったんだよ」

誰に言うでもなく呟いた言葉は白に溶けて、言葉を紡いだ事実さえ忘れてしまいそうだった。

「でもその笑い合える未来とやらの君はいるの？」

背後から聞き慣れた声。

カイトは振り向かなかった。信じたくなかった。

モルガナをデータドレインしようとしたとき、黒い背中が見えたことなんて。

真っ黒な姿はきつとこの白い世界から浮き上がっているのだろう。

「ねえ、カイト」

君はバカだよ、と呟いたのはカイトだ。

「…なら君もバカだね」

お揃いだ、と微かに笑う声がした。

耐え切れずにカイトは振り返る。

「なんでここにいるのさ!？」

「君を守るために」

「僕はそんなの望んでない!!」

「でも僕は誓ったんだ」

カイトが膝から崩れ落ちた。頭を撫でられる感覚に泣きそうだった。

「…なんで来たの、クビア……!」

クビアが撫でる手を止めて、両手でカイトの顔を上げて視線を合わ

せた。

「一人ぼっちにしないため
誰よりも、孤独な君を。」

悲哀

「…孤独……？」

「だってカイト、僕ら化け物だよ？」

お互いに、ね。と穏やかに笑むクビアはこの世界に一切の物おじを
していない。

「さあ、カイト」

顔から手を放してクビアはカイトの手を取った。

返事も聞かずにそれを引く。

「進もう」

この先に終焉がある。君にとっても、僕にとっても。

「…クビア」

「なに？」

「…僕は、データドレインを成功できたから、ここにいるんだよね
？」

「ここは一種のエリアだ。初めてかい？」

「…いや。リヨースに削除されそうになったとき、同じような白い
ところに来たかな」

「そつか。…それと似たようなもんかな。誰にも干渉されない場所。
ここは僕の母の根城だ」

「ここが……！？」

「多分データドレインを受けて怪我をしたから根城に逃げ帰ったん
だよ。僕らはそれに巻き込まれた」

その言葉は作戦の成功と失敗の両方を表していた。

「…モルガナは、生きているの？」

「……どっちにしる彼女は終わりさ」

クビアは凶悪に笑った。

「データを書き換えた今、彼女はそのへんのクスデータと変わらない」

僕らを巻き込んだのは誤算だったろうね。

「やった…！やったんだね、クビア！？僕らはモルガナを倒せた！」

「喜ぶのはまだ早いよ」

クビアが鎌を手にとった。

「ほら、カイト。君が彼女の名前を連呼するから僕らの居場所がバレたじゃないか」

言いながら示すのは白い世界から生み出された黒い霧。

それはだんだんと姿を変え、最後にはスケイスの形を取る。

「スケイス？」

「ただの影さ。彼女が作った、“波”の成りそこない」

「そういえばモルガナを連呼したから居場所がバレたってどういうこと？」

連呼したってこれでようやく三回目だけど、とカイトが言うときクビアは笑った。

「適当に言ってみただけ」

そもそもここが彼女の根城ならば、全てを把握しておかしくない。

なにをせずとも居場所などばれるだろう。

「酷いよ、僕のせいかと心配したじゃないか！？」

「ただのジョークだよ。そんなことより、来るよ！」

「……八咫？」

なんでこんな大変なときにメールとかして来るんだ、と悪態を吐き

捨て目の前にいる神威を窺う。

間違っても、のうのうと届いたメールを読むことは許してもらえなさそうだ。

メールを読んだりしたら即刻削除されるな、と至って平然と考えながらパイに目配せする。

すぐに頷いたところを見ると、もしかしたら彼女にもメールが来たのかもしれない。

スツと足を後ろに大きく引き、それに合わせて上半身を動かす。

それと入れ代わるようにパイが身を乗り出し、ハセヲが引いていることに驚いている神威に拳を振り上げた。

「待てっ!!」

神威がパイに応戦しながらハセヲに怒鳴る。

仕方ないだろと言いつ返したいのをぐつと堪え、メールを確認する。

『from 八咫

今すぐ『隠されし 禁断の 聖域』に来い』

メールを読んだ瞬間、やっぱりあのオッサン殺しといった方が良いんじゃないの。と思ったのはハセヲの秘密である。

「パイ!!」

「行きなさい!」

八咫の現状など今のパイにはわからない。しかし彼が呼ぶならそれが全てだ。

ハセヲはまだ納得していないようだったが、

「憑神が戻らなくても良いの!？」

「そりゃあ勘弁だな! 行けよ、ハセヲ!!」

パイとクーン言葉に渋々と頷き、そのエリアから抜け出す。

「…貴様らは我々を完全に舐めているらしいな」

「価値観の差よ。本命は貴方を倒すことじゃないもの」

しかし考えて見れば神威も散々な目に会っている。とパイは思い返

した。

バルムンクに呼び出されたのに肝心のバルムンクはいない。そのくせ初対面のくせに気に入らないハセヲはいる。

さらにその気に入らない男はさつき平然と去ってしまった。

これはもう完全に遊ばれていると勘違いされても仕方ない。

「……マギ」

「は、はい！」

部下にまで怯えられているとはどういうわけか。

「……一掃するぞ」

「………はい」

真剣な表情を見て、そろそろかしらね。とパイは周囲を確認する。

相手は数があるぶん倒しても回復されてしまう。

こちらはアイテムにも限界がある。

（お嬢さんもそろそろ限界……）

気魂を使い自分の回復をしているアトリはまだ戦うつもりだろう。

当然だ。ハセヲが頑張っていると知っていて彼女が頑張らないわけがない。

『勝てる相手ではない。隙を見て抜け出せ』

それがパイが八咫から貰ったメールだ。

相手が無限なのに対して、パイ達はあくまで有限だ。

消耗して消される前に、素早く逃げなければならぬ。

モルガナとの戦いをしている時間を稼いだかったが、もうすぐ限界だ。

さて、どうやって逃げたものか。とパイは思案した。

「………っ、疲れた……」

「もう？ちよつと体力なさ過ぎやしないかい？」

“波”の影を倒したのも今ので六回目だ。

数を見れば普段の戦闘の方が大変ではないのかとクビアが訝しげにカイトを見る。

その疑惑に気付いたカイトはすぐに教えた。

「実はこっちに引き込まれたみたいで……。体力自体はPCだから平気だけど、普段よりも精神的には疲れるのが早いんだ」

それは相当問題なのではないだろうか。

クビアは心配に思ったが、当の本人がのほほんとしているので心配するのをやめた。

どうして自分が大変なときにはこつも平然と、むしろポケツといられるのかクビアには理解できない。

「……少し休む？」

「ん……。大丈夫」

「なら良いけど……」

「……クビア」

今だカイトのことを気にしているクビアに声をかける。

「なに？」

「……ありがとう」

「……君は変な人だね」

カイトから沢山貰った『ありがとう』もクビアには理解できない。

「……こんなところまで一緒に来てくれて。きつと一人だと堪えられなかった」

一人でわけもわからずにさ迷うなんて、きつと堪えられない。

他人の存在はカイトに安心を与える。誰かがいてくれれば、その誰かのために頑張れる。

「……人は、そんなふうにできているんだ」

「誰かがいれば？ そんなの嘘だよ、カイト。それなら何故人間は人間を見捨てるの？ カイトの言葉は経験と矛盾してる。自己中心的に生きるのが人間だ。君でさえ僕は自己中心的だと言っよ」

「……そうだろうね」

そんなことわかってる。とカイトは薄く笑う。

「そう。君は自己中心的だ。誰かのためにと言う君は、そうやって責任を押し付けて、自分だけ身軽であるうとするんだから。……でもそれは仕方がないことだね。だって人間は自己中心的なものだから」

「でもそれが全てじゃない」

はつきりと言つてのけたカイトにクビアは初めて戸惑う。

人間は醜い。だって僕も醜いから。醜いものから生まれたら、それは醜くなるだろう。

カイトだって被害を受けたはずなのに、何故断言できるのか。

「…それともこれが人間とAIの差なのかな？」

「クビア？」

「なんでもない」

行こうか、と促せばカイトは頷く。

「ありがとう、クビア」

「な、なんで!？」

いきなりなに!？と焦ったように言うクビアに答えず、今度はカイトが少年の手を引いて歩く。

(だって僕を休ませるためにこんな難しい話をしたんでしょ?)

身体はまだ少し怠い。しかし心はさっきよりも軽く感じられた。

「ちよつと、カイト!？」

「進もう、クビア!!」

なんだか自然と笑顔が浮かぶ。

またクビアがカイトを救ったのだと、そう思った。

「……なんだ、これ……」

八咫に言われた通りに『隠されし 禁断の 聖域』に足を運べば、そこには満身創痍のカイトの仲間。

それでも統率を取っていて、どんな状況下でも確固たる絆にハセヲは無意識に感服した。

「…やつと来たか」

「…あんたは、確か……」

「ワイズマンだ。君を呼んだ理由は一つ。いなくなったカイトの代わりにデータドレインをしてもらいたくてな」

「はあ!？」

いなくなつたつてなに!？

「あそこにいるのは…、トライエッジか!！」

「今だにデータ処理が終わっていないのか、人間らしく呆然としているのか知らないが動かなくてね」

「カイトは!？」

「…状況が正確にわからん。しかしどこかへ転送させられたのかもしれない。モルガナを討ち取ってくれると信じるしかないだろうな」

「ワイズマン、ぼうやから預かっていたウイルスバグよ。上手く彼に使いなさい」

ヘルバがなんとか戦闘を抜け出して来てワイズマンに渡したのはスケイスのウイルスバグだ。

彼女はすぐに戦いに戻る。

「…どうやるつもりだ。俺は今データドレインが使えないぜ」

「今から君に憑神を戻す」

ハセヲが老人の言葉を理解するのは多少の時間を要した。

「…はあ!？」

同時刻。

「……………カイト」

クビアは白い世界で突然足を止めた。

「どうかし……、あれは？」

白い世界を切り取ったような影。どこかいびつで、見ようによれば女性の長い髪に思えた。

こちらに背を向けている女性を指してクビアは言う。

「…彼女が、僕の母。モルガナ・モード・ゴン」

辿り着いた旅路の果てにあるものは、本当に望んだものなのか。

悲哀（後書き）

とうとう柚季の手に負えなくなってしまいました。キリッ

崩壊（前書き）

なんだかとても遅くなりました。もし待っていて下さった人がいたら（いたら良いなあ…）大変申し訳ありません。

崩壊

「…お、おい、ほんと成功するんだろうな!？」

「……………では、開始する」

「なんだ今の間は!？」

恨むぜ、カイト。お前がどっか行ったりしなければ!と、検討違いなことを考えたのはハセヲ自身が混乱しているから他ならない。

「ブラックローズ。私が抜けても……」

「親玉がいないこいつらなんて、私達だけで充分よ!！」

そいつが関わって来るのは少し気に入らないけどね、とハセヲを示す彼女は自分も疲れているだろうに笑う。

「了解した。…ハセヲ、始めるぞ」

「…わかったよ…………。たく、八咫の奴どこだよ」

ぶつぶつと文句を言いながらも彼は諦めたのかワイズマンに従う。今だに気付かないハセヲに鈍いと失礼なことを思いつつ、ワイズマンはウィルスバグを取り出した。

「…モルガナ・モード・ゴン」

あれが、とどこか現実ではないかのような感覚に溺れながらカイトは呟く。

「カイト」

無表情のクビアは静かに鎌を持っている。

双剣を構えたカイトを確認するが早いかクビアは女性の背中に飛び掛かった。

『……………どうして……』

「な!？」

クビアの刃は空を切り、カイトはすぐに後ろを振り向いた。

「後ろだ、クビア!!」

「…どうして」

初めてモルガナの顔を見たカイトは思わず恐怖した自分を知る。

彼女に瞳はなく、まるで切り取ったように本来目がある位置に丸い円が開いている。

喋るとき微かに動く口は三日月を逆さにしたようで、なにもない瞳よりも確かに感情を語っていた。

「ウルカヌス・クー!!」

炎を纏った隕石は広範囲にその威力を知らしめる。

しかしそこにモルガナの姿はなく、カイトは再び周囲を見渡した。

「上た、カイト!!」

クビアの警告も虚しく、突然の圧迫感にカイトはその場に倒れた。

「……くっ……!」

喉を絞められる感覚に倒れる際に思わず閉じた目を開く。

切り抜いた円が二つ目前に現れ、一拍遅れてそれがモルガナの目だと理解する。

「カイトを、放せ!!」

クビアが素早く彼女の背後に回り鎌を振った。

迷いなくモルガナの首を目指した刃は、しかし彼女に届くその瞬間に砕け散る。

「…っ!?!……なんで!?!」

「この…!!」

息が詰まり全身に痛みが走る中、カイトは無理矢理右手を動かし敵である女性の頭を掴んだ。

青緑の光に気付くとモルガナは素早くカイトの右手を払い、身を引かせる。

突然圧迫感から解放されて咳込みながらカイトはなんとか起き上がる。

「…げほっ…！」

「カイト…！」

「…ん、へいき。…それより、鎌が」

駆け寄って来たクビアにこほこほと小さな咳を零しながら応える。生理的な涙を拭い、カイトはクビアの答えを待った。

「…どうやら僕の力で造ったものは彼女には分解されるみたい。僕が彼女から創られたからだと思う」

クビアが繋ぎ合わせる前の姿に戻ってしまった中途半端な武器はもう使えないだろう。

「…カイト、僕が前使っていた武器持ってる？」

あれならたぶん、と言うクビアにカイトの表情から血の気が引く。クビアが口元を引き攣らせた。

「……ちよつと、まさか…」

「……バルムンクが…」

なにかあったらいけないから俺が持つって…。

「……あ、の、羽根男おー…！」

「ど、どうしよう…」

「やっぱいっぺん殴っとくんだった！！なにあいつ、人の邪魔ばかり！！正義なんてクズだ！！」

ぽんぽんと飛び出る罵倒は怒り故だろう。

さてどうしたものかと考えていたカイトは、今だ暴言を吐くクビアの身体を突き飛ばし、自分もその反動でその場から離れた。モルガナが衝撃波を放ったのだ。

「クビア、君の服装双剣士だけど、双剣は使えないの！？」

「…え、あー。できるかも？」

この際なんでも良いと双剣を取り出してクビアに投げる。

それを受け取りながら慣れない武器に微妙な顔をし、仕方ないとクビアは息を吐いた。

「自分の職業を書き換えれば済むしね…」

怒りがある程度収まるとクビアはまたモルガナに向き直る。

「まったく、あの羽根絶対に許さない」

『羽根』とはもしかしくなくてもバルムンクのことだろう。

カイトは苦笑を浮かべたが、モルガナが放った言葉でその感情を引っ込めた。

『……どうして、あなたたちは私を愛してくれないの』

「……どういう意味だ」

『私はこの世界を愛しているのに』

「……愛しているから愛して欲しいなんて、子供の考えだよ、母さん」
そしてそれはかつての自分だ。

母を愛していた。母のためにならんでもできた。

母に愛して欲しかった。母に愛してもらうため、なんでもした。

クビアは自嘲を浮かべる。

この感情がもはや欠片もない。そう言えば嘘になる。

「……僕だつて哀しいよ、モルガナ……」

「……カイト？」

クビアが自嘲に駆られて隣でカイトは俯いている。

「君はアウラと会つて母性を知った。君はアウラに愛情を感じた。

生と死の母モルガナ、君はいつかアウラとわかりあえたはずなのに」

自らその道を捨てアウラを消そうとしたモルガナを、今更カイトは許そうとは思わない。

『……愚かな勇者……』

モルガナは笑う。

『私とあの子はわかりあえない。あの子の代用品である私は、あの子が完成したら消えるしかない』

それは最初から決められていたことだ。

『恨むなら自分を恨みなさい、人間。あなたたちがいなければ私とあの子はこんな感情を得ることはなかった。激情を持て余すこともなかった』

「……本当に哀しいよ。君は人間になったのに、僕らはそのせいでわかりあえないなんて」

「みんなが幸せで、みんながわかりあえる世界なんてないんだ。だから僕はここにいます。彼女を倒すために」

『……クビア……。私に愛して欲しくないの？』

なんて傲慢な問いだろうか。しかしその問いは間違っていない。

『愛して欲しい』なんてクビアは言うつもりはないけれど、それでも本当は愛して欲しい。

カイトは心配そうにクビアを見る。

大丈夫だよ、と言葉にするのは何故だか憚られて、クビアは微笑み返すだけだった。

「……オルメアン・ゾット」

モルガナへの返事はこれで良い。

モルガナよりもずっと早く、カイトはクビアを理解してくれた。その時から既にクビアが寝返る道は失われてしまったのだから。

「疾風荒神剣！！」

クビアのモルガナを見据える目を見て、全てを決断するその表情を見て、カイトも迷いを捨てた。

戦いは嫌いだ。誰かが傷付く。

暴力も嫌いだ。被害者が出る。

『愚かな勇者。あの子がいないのに、私を倒せるかしら』

嘲りの声に武器を持って応える。

「……蒼炎の守護者として堂々と、お前を倒す！！」

自分には『炎』の二つ名は似合わない。カイトはずっとそう思っていた。

敵を滅ぼす暴力的な『炎』がカイトは嫌いだった。

しかしそうではない。

自分はアウラを守る役目を負っているアウラの守護者だ。

彼女に害があるならば、それらを根絶しなければならない。

『蒼天』のバルムンクや、『蒼海』のオルカとはまったく違う役目。敵を滅ぼすためにいるのがカイトなのだ。

「三爪炎痕！」

確かな手応えを感じて、カイトはようやく安心する。

彼女は無敵ではない。彼女は確かに倒すことが可能だ。

暗い喜びを感じるカイトは自身を卑下する。

いつだってカイトは、誰よりも自分のことが嫌いだった。

だからかもしれない。なにを言われても、驚きこそすれ傷付くことはなかった。

「クビアー!!」

その声に反応してクビアが動く。使い慣れない双剣をモルガナに真っ直ぐ向けることに躊躇いはない。

カイトからの攻撃を受けて痛みに叫ぶ彼女に両手に持つ剣を突き立てた。

モルガナの背後からはカイトが襲い掛かっている。

勝てる確信はほんの一瞬だけだ。

クビアはわけもわからず咄嗟に頭を下げた。

モルガナは腕を振るようにして衝撃波を放つ。身体に纏わり付く虫でも払うような仕草は、確かな威力を持って二人を襲う。

転がってその場を離れると、彼は赤い衣服を纏う友人の姿を探す。

果たして彼はそこにいた。

「……嘘でしょ……」

今だモルガナの傍にいるカイトは、衝撃波を避けてモルガナに刃を突き立てた。

全身の筋肉が軋む音がして、このPCには無理をさせ過ぎたな。とカイトは衝撃波を避けながら思った。

もとより全てを避けることは不可能で、足の踏ん張りだけで耐えている状態だった。

少しでも足を浮かせたら、カイトの軽い身体は飛ばされてしまうだろう。

軋む筋肉と痙攣する足を全て無視してカイトは剣の切っ先をモルガナに向けた。

ざっくりとした感覚に吐き気が催す。

それさえも気のせいだと言い聞かせて更に力を込めて刃を押し込む。既に無理をさせていた全身から力が抜けてモルガナに寄り掛かるように立つが、それでも双剣を放すわけにはいかないのだ。

モルガナの叫び声に頭が痛み、手を放してしまいそうだった。

そつとカイトの両肩に手がかかる。温かみすらあるそれに、カイトは心地好さを感じて目を閉じようとした。

「…カイト!!」

温もりが消えて身体を引っ張られる。

見れば顔を歪めているクビアと腕を抱えているモルガナ。

カイトは瞬時にあの温もりがモルガナだったと理解した。

「死ぬつもり!?!」

「…あ、ありがとう。クビア」

怒っているクビアにお礼を言いながら新たに双剣を取り出す。

身体を動かす度に骨が悲鳴を上げているような気がするがそんなことは気にしてられない。

モルガナはカイトに刺された痕も、クビアに切られた腕も既に治してしまった。

「……そんな」

それはいつかクビアと対峙したときに感じた絶望だ。あの時は腕輪を破壊した。しかし今回は？
いったいどうすれば倒せる？
疑問がぐるぐると踊る。

しかしそんな疑問は足元の微かな振動で消え去った。

がたがたと揺れ動く白い世界で、カイトとクビアは背中合わせになる。

「……くっ……！？」

「クビア！？」

うずくまるクビアに肩を貸す。

「……う、あああああ！！」

頭を抱えるクビアにカイトは名前を呼ぶことしかできなかった。

突然突き飛ばされて、なんの準備もしていなかったカイトの身体があっさりと転がる。

「……クビア？」

「……逃げて……」

肩で息をして、自分の腕を恐ろしそうに見詰めるクビアは再度怒鳴るように言った。

「逃げるんだ、カイト！！」

「……嫌だ。なにがあったか知らないけど、嫌だ」

ここでモルガナを討てないならば仲間に申し訳ない。
なによりクビアを置いて行くなんて論外だ。

「……なんでわかってくれないの……」

「君を置いて行けないよ！！」

「…………気持ち悪いってきつと言う」

唐突な言葉にカイトは首を傾げる。

クビアは自身を抱き締めるように腕を回した。

「……見ないでよ……」

顔を俯かせているクビアが泣いているように見えて、カイトは離れているクビアに手を伸ばす。

届かないとわかりきっているのに、伸ばさずにはいらなかった。

クビアの身体が膨れ上がる。無数にある青緑の触手。頭蓋骨のような頭。さっきまであった琥珀の瞳は、黒に染まりきっていた。

「…………クビア…」

逃げて、なんてバカなことを言うと思えば。とカイトは微笑してみた。

クビアはかつてカイトと戦った姿をカイトに曝したくなかったただけだ。

自ら醜いと言ったその姿を、誰かに見せたくなかったただけだ。

「…バカにしないでよ」

僕ってそんなに薄情に見える？

「仲間に気持ち悪いなんて冗談でも言わないよ!!」

その姿だった時は敵だった。だがそれがなんだ。

嫌われることを恐れたクビアを敵だと言える程カイトは非情ではないのだから。

「…………カイト」

それはまるで咆哮のように空気が抜けて行く呼びかけで酷く聞き取り難いものだった。

「気持ち悪くなんかない。君は何度も僕を助けてくれたクビアだよ」

「…………カイト」

その黒い瞳がどこを向いているかははっきりとわからない。

「君にこの言葉を言ったことがあったかな…?」

空気が抜ける掠れた声。

「…………ありがとう」

誰かに言うのは初めてだ。とクビアは言う。

基本的に自分で全てを片付けるクビアは誰かに感謝する必要などな

くて、だからこそ重みがある言葉だった。

「当たり前前にことに感謝はいらないよ、クビア」

クビアがそれに返事をしようとしたとき、空気が震えた。空間を切り抜いたような女性の姿がそこにあった。

「その姿でも戦える!？」

「……こつちへいらつしやい、クビア……」

自らの武器を握り直す双剣士と、こちらに手を差し延べる女性を、その場で一番大きな姿をした化け物が見比べる。訪れた静寂は場を一枚の壁画のように仕立てた。

「……カイト」

沈黙を破ったのはクビアだ。

「知ってるかい？君はデータドレインに成功しなかったんだ」

「……え……？」

「外したんだよ。彼女がデータドレインを受ける前に咄嗟に根城に逃げたから。そもそも本当に当たっていたら彼女があんなに強いわけじゃないじゃないか」

「……だって、君、受けたって！怪我したから逃げ帰ったって、言っただじゃないか!？」

「……うん、ごめんね。でも僕嘘つきなんだ」

カイトはデータドレインをして、未帰還者になったからここにいると思ったんでしょう。

でも本当に成功していたら、君の精神は崩壊していて、君は今ここにいない。

話を聞いて血の気を引かせるカイトをクビアは哀れに思う。成功するはずだった。カイトが一人で決行した作戦は完璧だ。

あの時クビアが間に入ったりしなければ、確かにデータドレインはモルガナに当たったのだ。

わかっていてクビアは邪魔をした。

「…なら、今度こそ」

クビアが邪魔をしたとわかっていないカイトは腕輪に手を添える。

「……君は酷いって言うかな…」

「…なんのこと？」

嘘をついたことならばもういいとカイトは首を横に振る。

過ぎてしまったことだし、もう一度データドレインをすれば良いのだ。

「文句は戦いが終わってからにする」

無然とした表情のカイトにクビアは笑い声のようなものを漏らした。

そして青緑の触手でカイトを搦め捕ったと思ったら、モルガナに向かってこう言った。

『今行くよ、母さん…』

(……ああ、この感覚だ)

ハセヲは自分のPCが作り替えられている感覚に閉じていた瞳を開いた。

自身の身体を見下ろせば赤い模様が浮かび上がっている。

自然と顔に凶悪な笑みが浮かんで、ハセヲは微かに笑いを零す。

それに対してワイズマンが顔をしかめたが、ハセヲには見えていなかった。

『……あそこに』

いつの間にか傍に来ていた銀白色に輝く少女は真っ直ぐに指を祭壇に向ける。

『あそこに打って……!』

なにを、なんて愚問だろう。ニツとハセヲは笑う。
「まかせろよ」

心臓の高鳴りと共に聞こえたのは“八長調ヲ音”。

「……………いいぜ……」

力が溢れ出す感覚は確かにハセヲの力だ。
彼の身体浮かぶ赤い模様が光りを増す。

「な、なにをするの!?!」

がんじがらめにされて抵抗もできないカイトは、ゆっくりとモルガ
ナに近づくクビアに戸惑うことしかできない。

「クビア!?!」

『……言っただろう、カイト?』

それ以上クビアは語ろうとはしなかった。しかし何故だろうか、カ
イトはその真意を理解してしまうのだ。

「……………まさか……」

返事は返って来ない。

「……まさか……………!!」

モルガナに触れる前にもかくカイトの身体を更に高くまで持ち上げ
る。

「ダメだ!!」

それは同時に起こった崩壊への合図。

「……来い、来いよっ!!」

「ダメだって言ってるだろ!?!」

ハセヲの身体が純白に作り替えられていく。

「俺は、ここにいるっ!!」

カイトの身体がモルガナがいる方向の反対側へ勢いよく投げ捨てられた。

「やめろぉーっ!!」

それは違う場所で起こった叫び。

「スケエエエエエイスつつっ!!!!」

一方は歓喜の声を、

「クビアアアアアつつ!!!!」

一方は悲壮の声を、

数秒の誤差もなく、全く同時に叫んだのだ。

次いで二つの場所を青緑に輝かせた二つの光は、崩壊を示す。

終端

僕はどうして忘れていたのだろう。

僕はどうして勘違いをしていたのだろう。

僕はどうして誰からも罰せられないのだろう。

「……これは…！？」

ヘルバが祭壇の上を向いて声を上げる。

「…道。モルガナの城、か…！？」

ワイズマンが呟く。

「彼女が祭壇から逃げたならば、その痕跡が残っていてもおかしくないわ」

「データドレインでその痕跡を復元したと言うことか…。この世界だからできる荒業だな」

「んなことどうでも良いんだよ」

ヘルバとワイズマンの会話を遮り漆黒から純白へと姿を変えたハセヲが歩み出す。

「おい、トライエッジ！いつまで突っ立ってるつもりだよ！？」

ハセヲはトラに掴み掛かった。

「カイトはてめえの仲間だろうが！？」

ようやく気付いたようにトラが動き出す。

ゆるゆると周囲を見渡して呟く。

「……カイト…？」

「あの先にいる。行くぞ」

進めばトラは慌てて着いて来る。

大聖堂とはまったく違う世界へ繋がった穴の周囲はバチバチと音を立てていた。

「……っ！？」

ハセヲがそのまま進むとコルベニクが踊り出た。
モルガナやカイトのことに気を取られていて敵の存在を忘れていた。

素早く大聖堂内に視線を走らせれば今だ抗争は続いており、ハセヲは舌打ちする。

ハセヲとトラがいなくなればデータドレインできるものがいなくなってしまう。

「行け、トライエッジー！」

コルベニクに向けて双剣を構えながら言うところトラはすかさず横を走り抜ける。

柵を踏んで祭壇へ跳ぶトラを横目で確認していれば、コルベニクから容赦のない攻撃が来る。

「……トラッ！？」

声を上げたのはミストラルだ。

応戦しながらトラを見ると、彼の身体はハセヲがこじ開けた穴に弾かれていた。

「トライエッジー！！」

ハセヲが口を開けば当然のようにコルベニクがその隙を突く。

「……さっきからちまちまとウゼエんだよっ！！」

「ちよつと待て！何故トラは通れない！？」

「待てって誰に言ってるんだよ……」

バルムンクが怒鳴ればオルカが呆れたように返事をする。

「……もしかしたら、彼女と“波”以外通れないのかもしれないわ。
彼女の城に侵入者がいないように」

ヘルバの言葉に反応したのはブラックローズだ。

「じゃあカイトはあそこにいないわけ！？」

「……いや、モルガナと同時に消えたならば、彼女の城にいる可能性が高い」

「……彼なら、もしかして行けるんじゃないかしら」

ヘルバはハセヲに向かってそう言うが、彼もコルベニクの相手が大変なのだ。

「んなこと言われても……っ!？」

少し気を抜くとコルベニクに吹っ飛ばされた。

急いで受け身を取り再びコルベニクに武器を向けると、

「……ハセヲの邪魔を、するなあっ!!」

閃く雷鳴とは確かに魔法で、ハセヲは声をした方向を向く。

「……お前は」

「行つて、ハセヲ!!」

名前を呼ぼうとしたハセヲの言葉を遮ってエルクが怒鳴る。

悠長に話しているように思えても、“波”の相手をし続けた彼らはもう限界だ。

アイテムも魔法も使い果たしてしまった。

瀕死なのに黙って戦うものも、死んだ状態でなにもできずに無力な自分に悔しがるものもある。

だから時間はもうない。カイトを助けることができないと唸るトラへ同情する余裕もない。

「早くカイトを!!」

「……#セヲ」

満身創痍なエルクとトラの声が重なる。

コルベニクが姿を変えた。

「……カ@トを頼ま……」

トラは手の内にあるウィルスバグを握り締める。

今自分がやれることはこれだけで、自分を裏切ったカイトを思うと涙が出そうで、でも自分ができることをやらなければならないと思った。

自分に心なんてない。だがこのざらつく感覚はなんなのだろうか。
トラは一瞬だけ考える。

しかし答えは見つからず、カイトならばわかるだろうかと“兄”の
姿を思い浮かべた。

裏切ったかもしれない“兄”を、みんなは待っている。

なにも知らないハセヲが、“兄”を助ける要となっている。

もうハセヲに賭けるしかできない。だけど本当は、自分が助けたか
った。

愚直なまでに信頼されている勇者を、一瞬でも疑った自分が助けた
かった。

「……カイト……」

知らずに名前を呼ぶトラは、後悔や嫉妬なんて感情の名前は知らない
のだ。

「……クビア……」

走る。息が切れているのに友人の名前を呟きながら。

ただ走る。限界を訴える身体は何度ももつれて倒れたが、同じ数だ
け起き上がる。

「…嫌だ、クビア…っ！」

投げ捨てられたカイトはようやくクビアとモルガナのいた場所に戻
った。

いや、この白い世界はどこも代わり映えがなく、本当にもといた場
所に戻ったのか確信となるものはない。

しかしカイトはようやく戻れたと思ったのだ。

「……………」

肩で息をしながらカイトは周囲を見渡した。

そこにクビアはいない。しかし代わりにいた少女の姿を見て、カイトが現れて逃げ出した少女の姿を見て、

「……っ、…あ、あああああっ!!」

双剣を構えて、少女よりもずっと速く地を蹴って、彼女の背中になんの躊躇いもなく刃を刺した。

何度も何度も、目の前にいるものがなくなるまで、カイトはもがく少女の身体を押さえ付け、刃を振り下ろす。

それは一種の背徳的な絵のようで、その絵の中ではカイトはただの加害者だった。

「どうしてっ!?!どうしてだよっ、モルガナ!!」

しかし加害者であるカイトは涙する。

変わり果てた敵に剣を刺しながら、狂ったように叫びながら。

弱くなってしまった敵の姿に苛立ちすら感じて、それでも涙は止まらない。

「返せよっ、お前なんていなければ……っ!!」

そこでカイトは双剣を手放した。

激情が過ぎ去ってしまえばそこにはもうなにも残らない。

ただ止まらない涙が、動かなくなった少女の上にとどめなく落ちた。

「……どうして…」

それはほんの数分前の話だ。

『…言っただろう、カイト？』

カイトを掴んだクビアがなにをしようとしているのか、カイトはそのたった一言で理解してしまったのだ。

それは他でもないカイトのためだった。

英雄と謳われた、無力な勇者のためだった。

『言っただろう』

その言葉の真意は二つにかけられる。

『僕が君を守る』

『僕は嘘つきなんだ』

だからこそクビアはカイトを巻き添えにしないように投げ捨てたのだ。

だからこそモルガナはなんの抵抗もなくクビアを傍に寄せたのだ。

『今行くよ、母さん』

その言葉はモルガナの油断を誘った。

カイトの自由を奪ったことも要因の一つかもしれない。

クビアが戻って来たと信じたモルガナは、これから自分の子供が自分になにをするかも想像しなかった。

それがクビアの嘘。

母親を騙したのだと示唆するための問い掛け。

そしてカイトを投げ捨てて、データトレインを行った。

カイトがデータトレインをすることを阻止するためにモルガナとカイトの間に滑り込み、わざとモルガナの転送に巻き込まれたのだ。

カイトを未帰還者にしないためだけに。

カイトを守る誓いを行ったせいで。

誓いは守ると示唆するための問い掛け。

二重の意味を込めた問いは確かにカイトに通じて、だからカイトは泣くしかないのだ。

自分が庇護される対象でしかなかったとようやくわかると悔しくて堪らなかった。

「……言っただじゃないか……っ！」

絞り出すように掠れた声で呟く。

「……みんなが笑い合える未来が良いって、言っただじゃないかっ！
っ！」

動かなくなった少女は、クビアが命を散らした証明。

たとえどんな犠牲を払っても、留めを刺したものが英雄ならば、確かに英雄はカイトだ。

だがそれは本当に英雄と呼んで良いのだろうか。

それでは誰かの手柄を横取りしたことで大差ない。

クビアがデータドレインして弱体化したモルガナの留めを刺したカイトが英雄と呼ばれることと同じように。

「自己犠牲は鬱陶しい」と言っただのはクビアだと言うのに、そのクビアが自己犠牲でカイトを救うのか。

かつてアウラが自らカイトに刺されてカイトを救ったように。

「……モルガナ……、僕は君よりも非道だ……」

動かなくなった少女にカイトは話しかける。

「君を責める権利なんてないね」

僕は君よりも最低だ。君はアウラを憎んでいて、だからこそ殺そうとした。

だけど僕は大切な仲間を愛しているのに犠牲にして、殺した。

「……ありがとう……」

動かないモルガナの頭を優しく撫でて、カイトは立ち上がる。

ありがとうモルガナ。君がいなければクビアはいなかった。

「…君は一生僕の憎悪の対象だ。本当にありがとう」

君を憎めば、僕は僕自身を憎まずに済む。

こうして誰かに憎しみを与えて自分を楽にしようとするたびにカイトの罪は増えて行く。

重たくて、もう歩けないような気がするけれどそれでも良い。

ここにはカイトが前を向いて走り続けることを望むものも期待するものもないのだ。

歩こうなんて、思わなくても良いのだ。

モルガナの身体を抱き上げて、なにもないことはわかっているのにカイトは上を見上げる。

「……哀れんでやってあげて、アウラ」

ここに女神の加護は及ばないけれど、

「この世界で、なによりも哀しい親子だから」

この世界に、犠牲者となるために生まれた哀れな親子。

その存在を女神が永遠に覚えていてくれることを切に望む。

『……うーん、女神の哀れみを貰ってもなあ……』

背後からかけられたノイズ混じりの声にカイトはハッと顔を上げた。すぐに振り向こうとしたら肩を掴まれて阻止される。

『振り返らないで、頼むから』

「……クビア……？」

肩に触れた手を見れば、それは人の手を模っていて、なにがいけないのかカイトにはわからなかった。

ただ酷く安心して、とうとう足が崩れ落ちる。

『大丈夫、カイト！？』

「…ん、平気だよ。安心したから」

慌てたクビアの声に緩む口元はそのままに答える。

何気なくモルガナの髪を梳いたら背後にいる少年は押し黙った。

「クビア？」

「…それ、母さんだよ」

「…そうだよ」

「…そっか…」

「…クビア、彼女を殺したのは僕だ」

何度刃を突き刺しても消えないのはおそらくここがモルガナの空間で通常のエリアとは違うからだろう。

カイトは密かにそれに感謝した。

この動かなくなった身体こそがカイトの罪の象徴。

「…それで？」

「…だから君は僕を責めて良い。殺して良いんだ」

「…カイトさあ…」

呆れた声は哀しそうな色なんてなくて、ネットスラムで会話しているような雰囲気すらあった。

クビアがやれやれと溜め息を吐く。

「いつも思ってたけど、物事を小難しく考えるの趣味なの？」

「………は？」

「いつもいつもいつも！全部自分のせいにして周りに自分を責めさせて。それともなに？人間ってどいつもこいつもそうなのわけ？」

しかしクビアが思い返す限りバルムンクやハセヲは違うような気がした。

正義感が強いバルムンクは一応自分の非を認めるが、ハセヲは絶対に怒鳴り散らすタイプだ。

彼らが普通と言うつもりは甚だないが、やはりカイトは特殊な人間だと思う。

「誰かに優しい優しいって君は言うけど、君より優しい人間っている？」

残酷なまでの優しさこそ、カイトを守護者としているのだ。

『君の一番愚かな部分は、自分の優しさを理解しようとしなくて
るさ』

「……でも誰も僕に優しさを求めているじゃないか」

モルガナの遺体をそつと横たえる。

「僕はリーダーだ。不安がつてちやいけない。前を歩き続けなくちゃいけない。仲間への慈愛を忘れずに、それでいて周囲に警戒を怠るわけにはいかないんだ。だってみんな僕がそうなるように望んだから」

ぎゅっ拳を握り締める。

「守護者だつてそうだよ。みんなが望んだのは女神を守る、誰よりも残酷で誰よりも強い守護者だ。女神の敵を殺すことを、みんなが僕に望んだんだっ！」

優しさなんて、カイトがもともと持っていたものなんて誰も望みはしなかった。

だからこそ、憎しみを受けることは哀しいと同時に心地好かった。憎しみを向けられればカイトはそれだけ残酷になれる。

みんなが望む強い守護者でいられる。

「殺してよ、僕が憎いだろ!？」

『……カイト』

「もう歩けないんだっ!取りこぼしたものが多過ぎて、足元はもうグチャグチャで、背負うものが重たくて、僕はもうここから動けないんだっ!」

『……だから君は俯くんだね』

背中に感じた軽すぎる重みはクビアがカイトと背中合わせに座ったことがわかる。

カイトは自分がこの世界に取り込まれたことに初めて感謝した。背後にある重みがクビアの存在を示しているからだ。

「…俯いちゃいけないって思う？」

『…………カイト、二つ君について訂正しよう』

やはり呆れたような音色だった。

『まず第一に、女神は知らないけど少なくとも仲間は君にこれ以上の強さを求めている』

むしろカイトがもっと弱ければ、支えてやることもできたのに。と悔しかっただろう。

『黄昏事件』が終結したとき、カイトはもっと弱かった。

しかし時を得て戻って来たカイトは、アウラの恩恵により通常のPCを凌駕する強さをカイト自身知らぬ間に手に入れてしまっていた。

カイトの無茶を可能にできるだけの強さだ。

だからカイトは仲間になにを言われても無茶を繰り返したし、仲間は無茶を押し通すカイトが傷つくたびに悔しくて堪らなかっただろう。

『そして第二に、君は残酷になれない優しい人間だ』

「…違う」

『優しいよ、カイト。守護者が求められているものは残虐性でも強さでもないんだ』

本当に求められたのは、女神への不動の信仰心と命を散らしてでも他者を守ろうとする優しさ。

カイトがもともと持っていたものに他ならない。

フィアナの末裔は限りなく守護者に近かった。

しかしカイトはそれ以上に守護者として完成していたのだ。

偶然腕輪を受け取ってしまったけれど、腕輪を受け取った初心者のカイトはなにも知らないが故にアウラを求め、なにもわからないが故に他者を守り続けた。

守護者の道は無自覚に着々と進んだのだ。

「僕は優しくなんてないっ！！」

否定するのはカイトが優しさを捨てたいがための言葉だ。

『カイトは優しいよ。その証拠は今だ君が振り向かないことにある』
何度も振り向きたい場面はあっただろう。クビアの言葉を否定する
たびに振り向いて文句を言いたかっただろう。

しかしカイトはそれをしない。クビアが振り向かないように頼んだ
から。

『ごめんよ、カイト。僕は君の優しさを利用した』
ぴしつとなにかに亀裂が走る音がした。

「……だって僕らは友達だ。友達の頼みは聞くものだよ」

『じゃあそこに横たわっている母さんは？べつに良いじゃないか敵
なんてそんなに丁寧に扱わなくても』

「……敬意を払ったんだ。だって彼女は……っ！」

『君は残酷になれない人間だよ、カイト。仕方ないだろう？君の本
質は変わらない。君は愚かな程優しいんだ』

そしてその優しさにクビアがどれだけ救われたかカイトは知りもし
ない。

カイトはクビアに『何度も救われた』と言うけれど、カイトだって
クビアのことを敏感に感じとってくれたのだ。モルガナのことでも
クビアが悩んだときだって救ってくれた。

痛みを分かち合ってくれた。

唯一残念だったことと言えば、一緒に逃げてくれなかったことだ。
しかし結果的には良かったのかもしれない。クビアはここにいるこ
とを少しも後悔していないのだ。

母親と向き合ったことでようやく解放されたような気がする。
ぴしぴしと亀裂が入る音を聞きながらクビアは一人納得する。

これで良かった、と。

『……こんな言い方おかしいかもしれないけど、さ』

「……まだなにかあるの？」

酷い聞き返しだとカイト自身思うが、クビアが気にした様子はなか
った。

『僕は母さんと同じくらい、カイトが大好きだよ』

その言葉に終に耐え切れなくなったカイトが振り返る。

ごめん、と言いながらクビアに飛び付いた。

「僕だって……！」

恥ずかしさが先立って普段は言えないけれど、カイトは身体の痛みを堪えながら言った。

「君が大好きだよ！僕を守ってくれた大切な友達だ……！」

「……カイト」

クビアは足元に微量の揺れを感じながら、カイトの肩を押し返した。あのままカイトの目を見ずに全てを話せたらどれだけ楽だったろうか。

しかしクビアが一番貪欲に求めていた好意や親愛を与えてくれた彼にこれ以上裏切りを続けたくはなかった。

「……カイト」

一つ大きく息を吸う。

「初めに言ったね、僕は母さんから生まれて、僕の存在こそが母さんが復活した証拠だって」

「……クビア……？」

「だからこれで良いんだ」

世界の揺らぎが大きくなる。

モルガナに支えられていた世界は、モルガナがいなくなって崩れようとしているのだ。

「待つて、クビア……」

カイトはノイズや輝が入ったクビアの身体に右手を伸ばす。

その右手を取ってクビアは一人で話しを進めた。

「腕輪が僕の身体を支えてくれたけど、もう無理みたい」

「嘘だろ？嫌だ、一緒に帰ろう……！！」

「カイトと僕じゃ帰る場所は違うんだ」

ピシリ、とまた亀裂が走る。

世界が一際大きく揺れて、クビアがにっこりと笑う。

「……お迎えだ」

背後を示されるままに見れば、界そこには白と黒でできた右腕が生えていてカイトは後ずさる。

「な、なにあれ」

知らない手である。

『カイト』

呼びかけと同時にそつと身体に手がかけられる。

「……い、やだ。嫌だ、嫌だ！絶対嫌だ！！僕もここにいる！！」
『良いかい、カイト。俯くことは悪いことじゃない』

身体が突き飛ばされて、抵抗できる力も残っていないカイトは、少しずつこの世界に侵入しようとしている顔も見えない人物の方へと転がる。

『道を見定めるために下を見るんだ。もう一度顔を上げて前に進むために、取りこぼしたもので溢れた道を躓くことのないように、俯いて足元を見るんだ』

がしりとカイトの腕を掴んだ見知らぬ手に気力だけで抵抗して、カイトはただ泣き叫ぶ。

「嫌だ！！言つたじゃないか、僕らは対だつて！！君がここにいるなら僕だつて残るっ！！」

『決まっていたんだよ、カイト。全ては決まっていたことだ』

腕輪が再び音を立てた。

『母さんから作られた僕は、母さんがいないと存在できない。合理的に考えてごらん。君がデータドレインしたら、君は未帰還者で、母さんと僕が消える。でも僕がデータドレインすれば、消えるのは母さんと僕だけだ。犠牲者は少ない方が良い』

バチバチとした電子音。時折走るノイズ。

少しずつデータが崩れて行くクビアは、自分もカイトと同じようにばたばたと涙を零しながら、

それでも笑った。

『…さあ、顔を上げて』

君は何度も僕を救ってくれたのに、僕ら親子は君に面倒ばかりかけたね。

親子揃って君に全てを押し付けたね。

だからせめて、はじめは僕につけさせて。

だって僕とモルガナは親子だもの。

母親が悪いことをしたらその責任を払うのは息子の役目だろ？

『黄昏事件』では君に全部任せてしまったけど、今回は僕がやるから。

だからさあ、

『……さよならだ、カイト…』

僕のためになんか泣かないでよ。

カイトの身体がこの世界から引つ張り出されるその瞬間、捕まれない方の手を必死に伸ばしながらカイトはただ叫ぶのだ。

「…いやだ……っ！クビアアアアっ！！」

そのまま視界が白に染まって、最後に見たのは留めない涙を流しながらも純粹に笑うクビアだった。

『……なんだ』

手の平に零れた涙を見てクビアはくすくすと笑う。

『…泣けるのか、僕』

ずいぶん人間らしくなってしまった。

しかしクビアは人間らしくなった自分を認めるつもりはない。

カイトと同じ人間になるのも楽しそうだと思わないこともないが、それでもクビアがAIをやめてしまえば、それはカイトとの対の立

場を無くすことにもなる。

その関係を無くすことはクビアにとってあまりにも惜しいのだ。

すぐに今だ瞳から溢れる雫をごしごしと拭い、クビアは横になったモルガナの身体を抱き上げた。

『……一人になんてしないよ……、母さん』

終わりは僕ら親子で良いでしょう？

自分の肩にモルガナの頭を押し付ければ、耳元で彼女はくすりと笑い、クビアの背中にそつと腕を回した。

『……バカな子ね……』

既にカイトによって引き裂かれた身体はもうこれ以上動かせないと思っていたクビアは目を見開いて驚くが、すぐに表情を笑みに変えた。

最後の力を振り絞ったのだろう、背中に回された手は下ろされて、彼女はもう動かない。

『……初めて抱きしめてくれたね』

でも僕ももう限界みたいだ。

さよなら、The world。僕の愛する世界。

僕を愛してくれてありがとう

「やだ、嫌だよっ、クビア!!」

「おい、カイト! 落ち着け!!」

暴れ続けるカイトの腕をハセヲは掴んだままだ。

スケイスの紅い模様が煌々と浮かび上がった右腕は、無理矢理にカイトがいる世界に挟んだ影響だろう。

モルガナ因子を持ったハセヲでもあの世界への侵入は容易ではなかったし、実際右腕しかまともな侵入が成功していない。

入ってしまったのは偶然とは言え無理に外へ引っ張り出したカイトはハセヲとは違いモルガナの影響を受けたPCではない。損傷が激しいカイトのPCを見てハセヲは顔をしかめた。カイトの姿を見て呆然としている仲間を振り返り尋ねる。

「なあ、黒いガキどこだよ？」

あいつならアトリのときみたいに直せるだろ。

既に“波”は全てデータドレインが済んでいて、ワイズマンがウイルスバグを回収している。

ブラックローズとバルムンクが顔を見合わせた。

「…もしかしてクビアのこと？」

ぴたつとカイトの抵抗が止んだことに、ハセヲすら気付かない。

「そういえばいないな…。まったく、持ち場を離れてどういづつもりだ」

バルムンクがこめかみを押さえる。モルガナの戦いで多大なる迷惑をかけたことを彼自身知らない。

「あの戦闘だったから周囲に気を配る余裕もなかったしなあ…」

オルカが肩を回す。何時間も戦い続けて手が痺れていた。

「……モルガナの空間の消滅を確認」

ヘルバの言葉にわつと歓声が起こる。

その中でも一際大きな歓声は少年のものだった。

「お帰りなさい、ミアー！」

手の内にあるウイルスバグを見詰めながらエルクがそう言った。

「……………な……」

安堵や喜びが広まる中、カイトはたった一人空間から切り離されて泣いた。

腕輪の輝が深くなるのを感じて、無駄だとわかっていても腕輪を手

で押さえずにはいらなかった。

「……崩れ……な」

ぱらぱらと小さな蒼い破片が大聖堂の床に落ちる。

祭壇の前でカイトは仲間達に背を向けて腕輪を抱えるようにうずくまった。

「……崩れるな……!」

頼むから、今腕輪が崩れたらクビアはいなくなってしまうのだから、だから、

「崩れるな、崩れるな!」

背後で仲間がカイトの様子に動きを止める。

しかしカイトにはそんなものは見えていなくて、無情にも崩壊する腕輪にカイトは呻いた。

「崩れるなああああつつ!」

普段からは想像もできない程に取り乱した勇者の小さな背中に唯一人、

銀白の女神だけが寄り添った。

僕はどうして忘れていたのだろう。

（クビアがデータドレインできるなんて当たり前のことだったのに）

僕はどうして勘違いをしていたのだろう。

（僕だけがモルガナを倒せるなんてそんなはずもないのに）

僕はどうして誰からも罰せられないのだろう。

（こんなにも罪を、抱えているのに）

僕は、どうして…

終端（後書き）

繰り返したいわけじゃない。
でもせめてやり直すことができたなら

苦痛

「……ごめんなさい」

なにも言わずに肩を震わせるカイトの背中に縋るように顔を押し付けながらアウラは言う。

「……ごめんなさい、カイト」

カイトはなにも言わない。

「こんなことになるなんて、私も思ってた……っ」
実のところ、アウラはクビアを信用していなかった。

カイトが受け入れたならば構わないと思ったけれど、それでも彼がカイトに危害を加えようとしないうる不安だった。

カイトをこの世界に取り込めと唆して来たせいもある。

クビアが自分の勇者にこの世界での生を与えたのならば、アウラは彼を許さない。

仮想での生は現実での死を意味しているのだから。

「……クビアは、逃げようって、言ったんだ」

子供のように泣きながらカイトは誰に言うでもなく口を開く。

「……あの手を、取ったらなにか、変わってた……？」

その手を取ったらあなたは生まれ変わってしまったていた。

アウラはその言葉を飲み込んだ。

今アウラがカイトに言えることなんて一つだけなのだ。

「ごめんなさい、あの人と戦うことを許してしまって、ごめんなさい……！」

失敗なくして成長はありえない。

AIは二度と同じ失敗を繰り返さない。

そんなの嘘。アウラはカイトの背中に縋り付く。

こんなにもこの人を傷つけたのに、どうすれば良いのかわからない。次同じ状況になったとき、アウラはまたこの勇者に縋ってしまう。

「……アウラ……」

カイトがアウラの名を呼んだ。

「……………クビアを助けて…っ！」

カイトはアウラに救いを求める。

この世界と共に生きる銀の女神に救済を。

『……………カイト』

アウラがそつと背中から離れて、カイトは背後を振り向いた。

膝を着いたまま浮かび上がったアウラを見上げると、女神は哀しい色を瞳に湛えて涙で輝くカイトの目を見る。

『……………復活は、できません』

カイトが笑う。まるで幼児のように無邪気に。

『クビアのPCを作り、記憶を移植することも可能』

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。

あなたは私を傷つけないように守ってくれる。でも私はあなたを傷つけることしかできないの。なぜなら私はあなたに庇護される存在だから。

私を守るために傷つけと、命じている存在だから。

だから私は、あなたに人の真理を問おう。

『……………でもそれは本当にクビア？』

「……………え？」

どういう意味？とカイトは首を傾げる。

『……………記憶を移植しても心が同じとは限らない。記憶という映像を見て、全く同じことを感じたりはしないし、あなたへの親愛を覚えるかわからない』

心なんてプログラムをアウラは知らない。

父親もその友人も知り得ない。

ならば心だけが幼くなってしまう、カイトや仲間に感じたものを覚えていないクビアは、果たして皆が知るクビアなのか。

「……………アウラ……………」

『……………私にはわからない』

「良いんだっ、生きてくれさえしたらそれで良い！！憎まれても怨まれても良いから、生きていて欲しいんだよ！！」
可哀相なカイト。

クビアに憎まれてもしたらあなたはきっと泣くでしょう。
あなたも早く気付いて。

モルガナはいない。腕輪もない。存在意義がなにもない世界で、あの黒い子供は生きていけない。

私はこの世界の女神なのに、哀しみを生み出せはしない。

私がこの世界に不幸を作るわけにはいかない。

『……カイト』

哀しみを生み出せないなんて、そんなはずがない。

今現に目の前にいる一番大切にしたい人を苦しめているというのに。

「……………」

肩を震わせるカイトをそっと抱きしめる。

青緑の髪を撫でると、カイトはアウラの肩を掴み丁寧に、しかし早急に自分から引き離れた。

しばらく俯かせていた顔を上げると、彼はこう宣った。

「大丈夫だよ、心配しないで」

この言葉はアウラを傷つける刃にも、安心させる盾にもなった。

『カイト…………』

「……無理、言つてごめん。アウラも大変だったのにね。安心して、モルガナはもういないから。君の敵は僕が全部倒してみせる。僕は君の守護者だから。だから、君は僕を心配しなくていいんだ」

早口にまくし立てて、カイトはようやくと大聖堂を見渡した。

「みんな瀕死じゃないか。急いでタウンに戻ろう。僕が途中でいなくなつたのに、頑張ってくれてありがとう」

「ちょ、カイト……」

ブラックローズが躊躇いがちに声をかけて来る。

「なに？」

「…あんだ、いない間になしてたの？クビアは？」

心配して聞いたのだろう、だがカイトにとってその言葉は地雷だ。カイトは努めて明るく振る舞った。

「今度でいい？」

微笑みながら尋ねるカイトから何故か威圧感を感じて、ブラックローズは思わず頷く。

それを確認するが早いかカイトは入口まで歩いて扉を開いた。後ろにある戸惑いを全て無視してカイトは外に出た。

逃げるようにその場を去りたかった。

「……待てよ！！」

石造りの橋で肩を捕まれた。

振り向くと見知らぬ白いPCがいて、自分を掴んだ手を見ればそれはあの世界からカイトを引っ張り出した存在だと気付く。

「……なに」

こいつさえいなければカイトはあの場所にいられたのに、と思つてすぐに首を横に振る。

クビアが生かした命だ。決して生死に関しての後悔は許しはしない。

「なにがあつたか知らねえが、あんなに頑張った奴らへもつとなにかないのかよ！！」

「……“波”は、彼女がいなくなつた影響で回復できないはずだよ。みんななら絶対に勝つ。なによりも恐ろしいのはデータレインだけど、女神の加護があるみんなにそれは脅威じゃない」
ハセヲは眉を寄せる。言いたいことはわかるし、道理だ。

言い返せる部分はない。

「…なら笑つてんなよ」

「え？」

「絶対に勝てるって信頼してる仲間にまでそんな気持ち悪い顔押し

通すなよ!!」

笑顔でいれば誰でも安心すると思ってるなよ!!

その言葉を聞いてカイトはうつすらと自嘲的な笑みを浮かべる。

「……守護者に必要なものは強さと残虐さだって、僕はずっと思ってた」

「ああ……?」

「でも違うんだって。僕が信じていたものを、あの子は覆した」

「……なんの話した」

壊れたように笑いながらカイトはハセヲにまるで仲の良い友人に秘密を話すように耳元で囁いた。

「……知ってる?…僕も君もブラックローズ達も、所詮クビアの手の内で踊っていたに過ぎないんだ。全部あの子の手中にあったんだよ」

ハセヲを突き飛ばして、カイトは哀しげなものへと笑みを変えた。

「……ごめん」

そう言っただけで少年の姿が酷く印象的で、今だ大聖堂から出て来ない奴らも気にせずにハセヲは呻く。

「なんでだよ…っ!」

喉から搾り出した声は誰にも届かない。

「……なんでお前はっ」

思い出すだけでもいらする。

別にハセヲはカイトのことが嫌いではない。むしろ好感が持てるのだ。

守りたいものを守り抜くその気高さも、別け隔てなく与えられる優しさも、全てが気に入っていると言っても良い。しかし、

「いつもいつも泣きそうなんだよ!!」

孤独だと勘違いしてなにかに堪えようとする強さだけは、大嫌いだ。

戦いは終わった。しかしカイトは泣いていた。どうして、とトラの中で疑問がぐるぐると巡る。

思考回路に問題が発生したのかもしれない、とトラは思う。

なぜならカイトは笑っていたからだ。

カイトは泣いていない。泣き叫びはしたけれど、すぐに笑ったはずだ。

自分の思考があのかの笑顔を泣いていると判断したけれど、もしかしたらバグの可能性がある。由々しき問題だ。

「……帰るわよ」

ブラックローズが言った。

「いつまでも突っ立てても意味ないでしょ」

何故彼らはこんなにも暗い雰囲気を負っているのだろうか。

敵は倒せたのに。

「……しかしブラックローズ……カイトが……」

「あいつがどうしたのか、私は知らない。でも私はあいつの相棒だもの」

待つわよ、話してくれるまで。

そう言った彼女の表情は弟を見守るそれで、彼女がいかに強かか思い知らされる。

バルムンクはしばらく考えを巡らせてから頷いた。

「……そうだな。すまない、確かにお前が言う通りだ」

「そうよ。あいつつてば私達がいないとダメダメなんだから」

一抹の不安を抱きながらも、嬉しそうにブラックローズは笑う。

「そんでカイトが戻って来たらみんな温泉ね!!」

ようやく皆がもとの喧騒を取り戻した。

トラは一人その輪から外れて頭を抱える。

わからない、わからない。何一つとして理解できない。

カイトは笑っているのに泣いていた。

ブラックローズは不安なのに笑っている。

自分を創った女神は温かな歓声が湧いている中で俯いていた。

感情も温度差も理解できないのに、それらを納得してしまっている。仕方ないとさえ考える自分がいる。

トラは大聖堂を出て行く仲間達をゆっくりと追いながら思った。

深刻なエラーが発生。思考回路にバグの危険性有。

苦痛（後書き）

もう後二、三話で終わらせたい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5069s/>

地に降りし守護神

2011年11月20日04時11分発行